鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　30

平成25年度発掘調査報告

（第２分冊）

玉　縄　城　跡

上杉定正邸跡

新善光寺跡

若宮大路周辺遺跡群

米　町　遺　跡

田楽辻子周辺遺跡

平成26年３月

鎌倉市教育委員会

米町遺跡（大町二丁目2311番５）第３面出土　アワビ集積状況

田楽辻子周辺遺跡（浄明寺二丁目569番10）２面全景（南から）

ご　あ　い　さ　つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成17、18、20、21、24年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として13ヶ所の調査成果を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成26年3月31日

鎌倉市教育委員会

例　　言

1　本書は平成25年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。

2　本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第１分冊に掲載した表のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総　目　次

（第２分冊）

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅰ
例言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅱ
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅲ

８　玉縄城跡（No.63）植木字植谷戸192番４外地点
第一章　調査地点の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第二章　調査の経過と土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第三章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

９　上杉定正邸跡（No.188）扇ガ谷二丁目195番２
第一章　遺跡概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

10　新善光寺跡（No.279）材木座四丁目579番４地点
第一章　遺跡の概観　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
第二章　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第三章　検出遺構と出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
第四章　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130

11　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目364番17
第一章　遺跡の位置と歴史的環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・149
第二章　調査の方法と経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・152
第三章　基本土層　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
第四章　発見された遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
第五章　調査成果のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・172

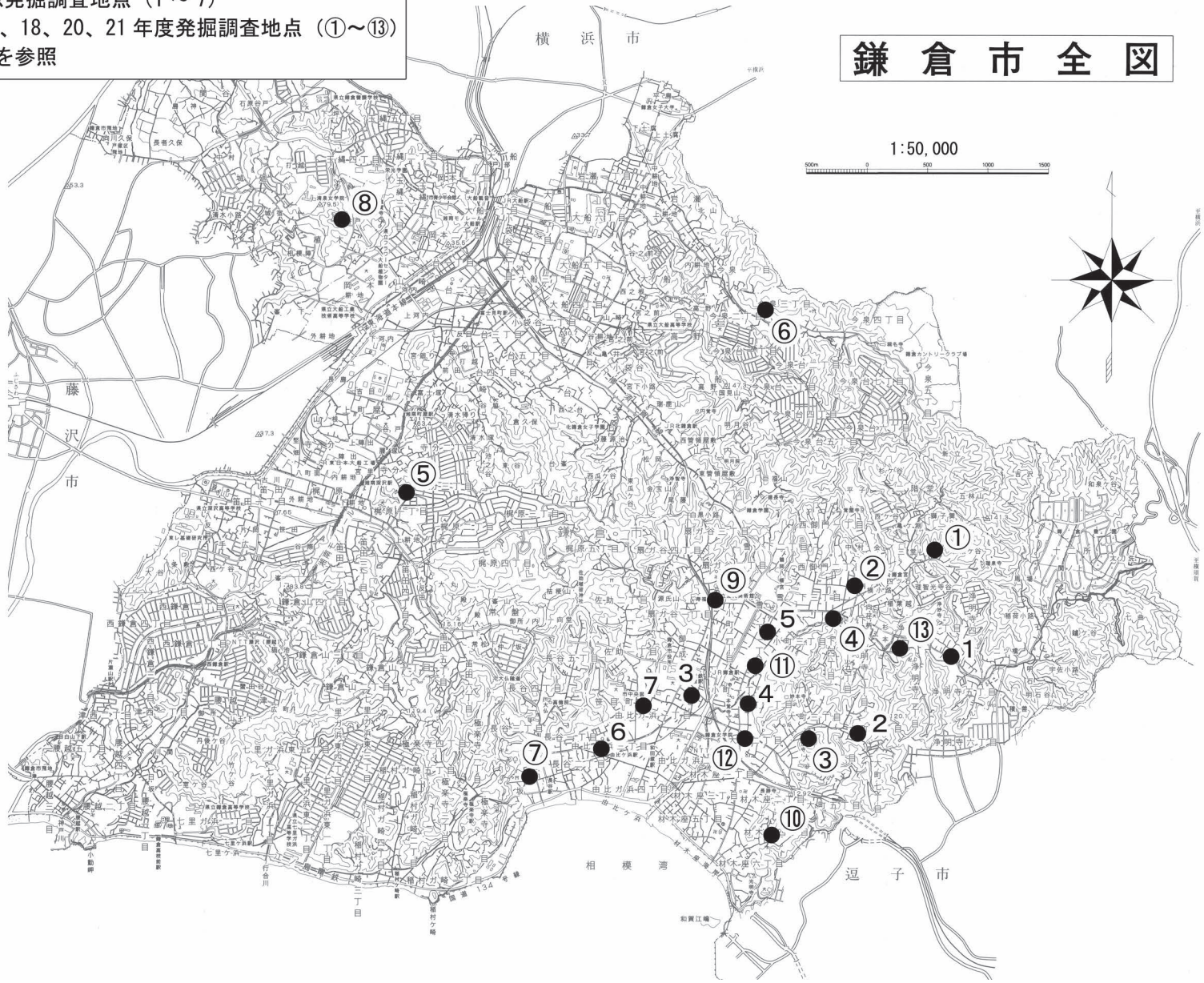
12　米町遺跡（No.245）大町二丁目2311番５
第一章　遺跡の位置と歴史的環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・185
第二章　調査の方法と経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・187
第三章　基本土層　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
第四章　発見された遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・192
第五章　調査成果のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・213

13　田楽辻子周辺遺跡（No.33）浄明寺二丁目569番10

第一章　調査地点の概観　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 267
第二章　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 276
第三章　検出された遺構と出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 281
第四章　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 339

平成 25 年度の緊急発掘調査地点（1 ～ 7）
本書掲載の平成 17、18、20、21 年度発掘調査地点（①～⑬）
※遺跡名は一覧表を参照

鎌倉市全図



玉縄城跡（№.63）

植木字植谷戸 192 番 4 外地点

例　言

1．本報は玉縄城跡、植木字植谷戸192番4外（206番- 5 、207番1他）地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が、平成20年（2008）4月14日～同年5月16日にかけて実施したもので調査面積は76㎡である。

3．調査の体制は以下の通りである。

発掘調査

調査担当者　福田　誠　鈴木弘太（鎌倉市教育委員会文化財課嘱託）

調　査　員　本城　裕　栂岡渓音　鍛冶屋勝二　松原康子

作　業　員　浅香文保　佐野吉男　田口康雄　渡辺輝彦（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

資料整理作業

調査担当者　福田　誠（鎌倉市教育委員会文化財課嘱託）

調　査　員　石元道子　森谷十実（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）

4．現地での遺構写真撮影及び資料整理時の遺物写真撮影は福田が行った。

5．出土品、及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

6．本遺跡の略号は「TNJ0801」である。

目　次

本　文　目　次

第一章　調査地点の歴史的環境 …… 4

第二章　調査の経過と土層 …… 11

第１節　調査の経過
第２節　土層

第三章　検出された遺構と遺物 …… 12

第１節　Ⅰ・Ⅱ区、第１面の遺構と遺物
第２節　Ⅱ区、第２面の遺構と遺物

第四章　まとめ …… 12

遺物観察表

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図 …… 4
図２　調査地点と周辺の遺跡 …… 5
図３　調査区の位置とグリッド設定 …… 8
図４　Ⅰ区・Ⅱ区の調査区壁の土層 …… 9
図５　全測図と遺構のエレベーション …… 10
図６　出土遺物 …… 14
図７　落ち込みの位置と七曲坂 …… 15

図　版　目　次

図版１　出土遺物１ …… 16
図版２　出土遺物２ …… 17
図版３　遺構１ …… 18
図版４　遺構２ …… 19

図１　調査地点位置図

第一章　調査地点の歴史的環境

位置と歴史的環境

調査地は鎌倉市植木字植谷戸207番１他２筆に所在する。JR大船駅西方に位置する山崎跨線橋から北に延びる県道阿久和・鎌倉線、龍宝寺隧道の200ｍ先、玉縄城七曲坂の出口に位置している。

周囲は玉縄城本丸から東に延びる２筋の尾根が作る幅約50ｍ、奥行き200ｍ程の小さな谷戸の地形で、玉縄城太鼓櫓脇から東側に下ってくる七曲坂が中央に位置する。調査地はこの谷戸の出口部、玉縄城中心部から見て南東方向に位置している。

遺跡名にある玉縄城の城郭範囲は、字城廻・字植木の範囲と関谷・打越谷・植木谷・相模陣に囲まれた丘陵になる。本丸は城山と呼ばれる丘陵中央部方形の土塁で囲まれた部分と考えられ、現在清泉女学院校地となっている。本丸を囲む土塁の東側、標高80ｍの一段高くなっているところを諏訪壇と呼び、かつて城の鎮守諏訪神社があった。

「御厩曲輪」「太鼓やぐら」「えんしょうぐら」「ふくろもち曲輪」「円光寺曲輪」「くいちがい曲輪」「お花畑」「花見堂曲輪」「出丸」「まりけ場曲輪」等の名が残されている。

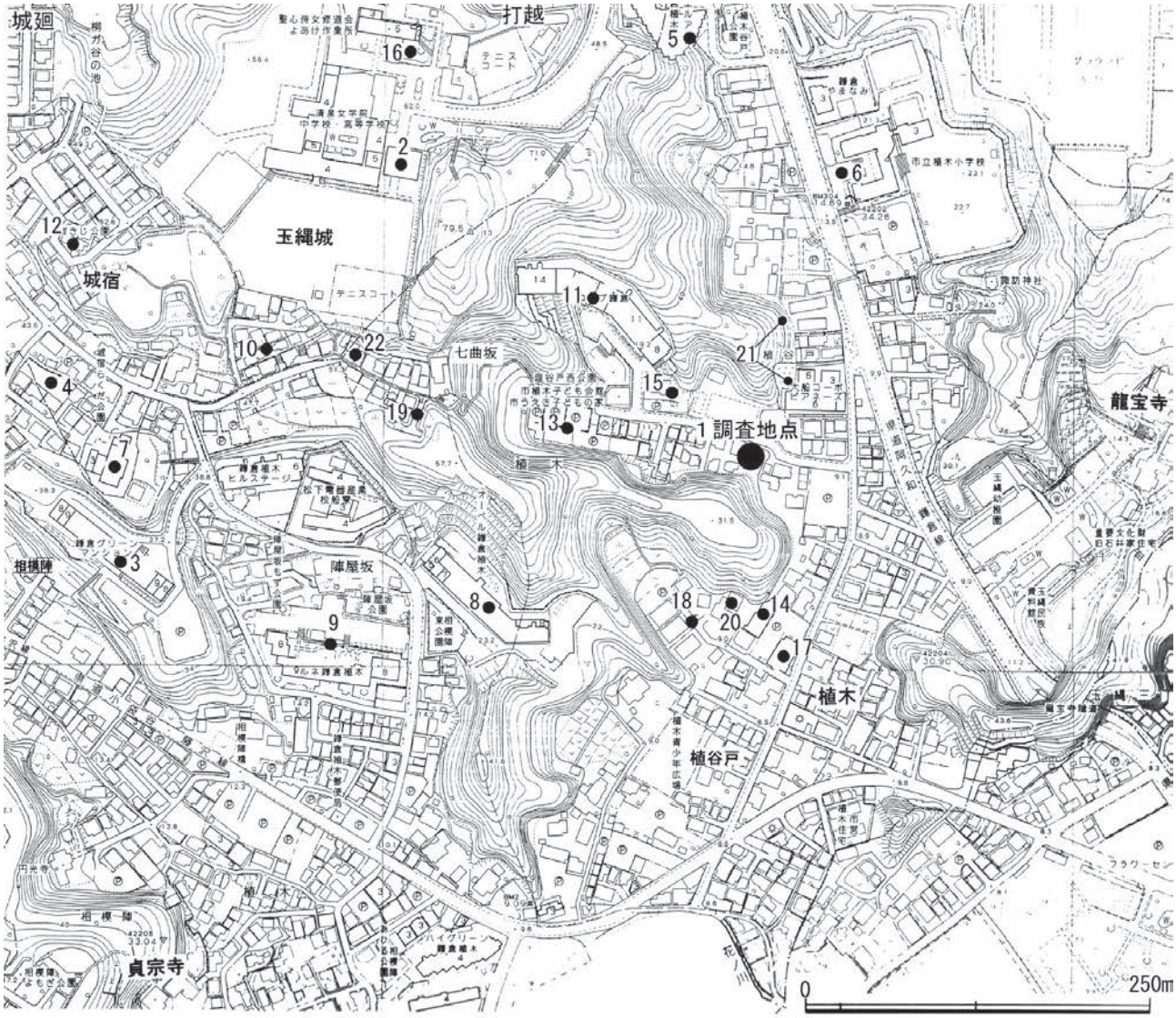


図２　調査地点と周囲の遺跡

	遺跡名	地番	発掘年	報告書名
1	玉縄城跡(No63)	鎌倉市植木字植谷戸192番４外他２筆	2008年４月	本報「玉縄城跡」(2014年３月)
2	〃	鎌倉市城廻字打越200番１	1978年７月	未報告(清泉女学院図書館用地)
3	〃	鎌倉市植木字相模陣436番１	1978年10月	未報告　トレンチ調査　植木ハイツ(グリーンマンション)用地
4	〃	鎌倉市城廻字城宿467番	1980年６月	『鎌倉考古』№２(1980年７月)、№４(1980年11月)
5	〃	鎌倉市城廻字打越165番	1)次1980年3月･2)次1981年3月	『鎌倉考古学研究所調査報告第３集』「相模玉縄城-城廻字打越165番地点の発掘調査」(1986年５月)
7	〃	鎌倉市植木字植谷戸１番	1983年11月	神奈川県埋蔵文化財調査報告26(1984年３月)
9	〃	鎌倉市城廻字城宿340番１	1987年５月	神奈川県埋蔵文化財調査報告31-未掲載分(1989年３月)
10	〃	鎌倉市植木字相模陣374番外	1987年７月	神奈川県埋蔵文化財調査報告31(1989年３月)『玉縄城発掘調査報告書』植木字相模陣374番地他地点(1994年３月)
11	〃	鎌倉市植木字相模陣370番	1989年８月	神奈川県埋蔵文化財調査報告33(1991年３月)
17	〃	鎌倉市城廻字打越329番１外	1998年９月	神奈川県埋蔵文化財調査報告43(2000年12月)『東国歴史考古学研究所紀要第１集』(1998年２月)
18	〃	鎌倉市植木字植谷戸６番１外	1999年３月	神奈川県埋蔵文化財調査報告43(2000年12月)『東国歴史考古学研究所報第３号』(1999年)
19	〃	鎌倉市城廻字城宿357番２・15	1999年７月	神奈川県埋蔵文化財調査報告43(2000年12月)『玉縄城発掘調査報告書』(2000年８月)
21	〃	鎌倉市植木字植谷戸213番外	2000年２月	神奈川県埋蔵文化財調査報告43(2000年12月)
22	〃	鎌倉市植木179番１他４筆	2000年５月	神奈川県埋蔵文化財調査報告44(2002年１月)
24	〃	鎌倉市植木字植谷戸70番１外	2001年５月	神奈川県埋蔵文化財調査報告45(2003年３月)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20-1』「玉縄城跡」(2004年３月)
25	〃	鎌倉市城廻字打越200番	2001年６月	神奈川県埋蔵文化財調査報告45(2003年３月)
26	〃	鎌倉市植木字植谷戸78番２外５筆	2001年８月	神奈川県埋蔵文化財調査報告45(2003年３月)
28	〃	鎌倉市植木字植谷戸198番の一部	2001年９月	神奈川県埋蔵文化財調査報告45(2003年３月)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20-1』「玉縄城跡」(2004年３月)
29	〃	鎌倉市植木字相模陣425番３外	2002年７月	神奈川県埋蔵文化財調査報告46(2004年３月)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21-2』「玉縄城跡」(2005年３月)
32	〃	鎌倉市植木字植谷戸188番	2006年２月	神奈川県埋蔵文化財調査報告51(2007年３月)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29』「玉縄城跡」(2013年３月)
33	〃	鎌倉市植木43番１外	2007年５月	神奈川県埋蔵文化財調査報告54(2009年２月)『かながわ考古学財団調査報告230』「植谷戸やぐら群」(2009年10月)
34	〃	鎌倉市植木字植谷戸48番６	2007年９月	神奈川県埋蔵文化財調査報告54(2009年２月)

図２　調査地点と周辺の遺跡

本丸は城山と呼ばれる方形の土塁（約120ｍ四方）で囲まれた部分。現在清泉女学院校地となっている。

小田原城の北条宗家は初代北条長氏（北条早雲）－２代氏綱－３代氏康－４代氏政－５代氏直と存続するが、天正18年（1590年）４月、豊臣秀吉により小田原城が包囲され、７月５日、氏直は城を出て将兵の助命を乞い降伏した。４代氏政と弟氏照は７月11日に切腹。13日に秀吉が小田原城に入り、北条氏の旧領関東を徳川家康に与えた。５代氏直は家康の娘婿（督姫）だった為、助命され北条宗家は河内狭山藩主として幕末まで続くことになる。

墓所は、寛文12年（1672）に北条氏規の子孫で狭山藩北条家５代当主氏治によって、北条早雲の命日に当たる８月15日に建立された供養塔が箱根町金湯山早雲寺の境内にある。

小田原北条宗家に対して玉縄城主は玉縄北条家と呼ばれた。

・初代城主、氏時（? ～ 1531．1542）

早雲の子。氏綱の弟。「玉縄殿」とも、没年は享禄４年（1531）「二伝寺位牌」と天文11年（1542）「北条系図」の二つある。開基の寺は二伝寺・円光寺・日蓮宗久成寺（くじょうじ）がある。

・２代、為昌（ためまさ）（1520 ～ 1542）

氏綱の子。「快元僧都記」に頻繁に登場。鶴岡八幡宮再興に係る。城主の時期は享禄４年（1531）～天文11年（1542）

・３代、綱成（1515 ～ 87）

為昌の養子。黄絹に「八幡」と印した背旗を用いていたことから「地黄八幡」と呼ばれる。開基の寺は大長寺・龍宝寺・天獄院・慈眼寺。城主の時期は天文11年（1542）頃～元亀３年（1572）

・４代、氏繁（1536 ～ 78）

綱成の子。永禄４年（1561）上杉景虎に攻められるが、不在の城主綱成に代わりこれを防戦した。城主の時期は元亀３年（1572）～元亀６年（1578）

・５代、氏舜（うじきよ）（15?? ～ 15??）

氏繁の子。氏勝の兄。生没年不詳。城主の時期は元亀６年（1578）～天正８年（1580）頃か。

・６代、氏勝（1559 ～ 1611）氏繁の子

天正８年（1580）～ 10年（1582）頃に家督を継承か。最後の城主。

天正18年（1590）４月21日、開城。この後、助命され家康に従い下総岩富１万石の藩主となる。城主の時期は天正８・10年頃～天正18年（1590）４月21日。氏重（氏勝の養子）は２代岩富藩主の時に下野富田に転封。大坂冬の陣では東軍に属し、岡崎城守備。伏見城番、後に遠江久野、下総関宿、駿河田中を経て掛川３万石を領する。男子がいないため無嗣断絶（むしだんぜつ）。氏重の義兄・北条繁広（氏勝の実弟でその養子）の家系が旗本として存続した。

玉縄城の変遷

永正９年（1512）10月北条早雲（伊勢新九郎長氏）が、三浦義同（よしあつ）（道寸）への備えのため築城。（寛永水野家譜）

永正15年（1518）三浦氏への援軍、江戸城の上杉修理大夫朝興（ともおき）と戦い打ち破る。（北条五代記）

大永６年（1526）12月15日氏時は、安房の里見実堯（さねたか）の鎌倉乱入を戸部川で防戦。（玉縄首塚碑銘）

この戦いに参戦した大船の甘粕氏・渡内の福原氏の子孫が文政８年（1825）に建立。戦死者35人の首を葬り首塚を築いた。

天文10年（1541）氏康、家督を継ぐ。翌年、建長寺・円覚寺・東慶寺らの所領安堵・公事免除。

天文17年(1548)12月氏康、荏柄社再興のため関所を寄進し関銭をこれに充てる。

永禄4年(1561) 3月上杉景虎に小田原城と共に攻められるが防戦。(異本小田原記)

永禄12年(1569) 武田信玄の小田原攻めの時に玉縄城出城大谷氏の砦陥落。(小田原記他)

天正17年(1589)10月豊臣秀吉の小田原攻め。北条氏勝は山中城の援軍に赴くが、山中城の陥落に伴い玉縄城に戻り籠城。(関八州古戦録)

天正18年(1590) 4月21日城主北条氏勝、徳川家康の大将本多忠勝に降伏、開城。(関八州古戦録)この後、水野織部正忠守が預かり守備。(寛永水野家譜)

近世の玉縄

元和5年(1619) 廃城。(円光寺伝) この後、松平正綱が玉縄領を預かり、城南の地に陣屋を建てる。(新編相模国風土記) 鎌倉郡の所領は、渡内村・関谷村・岡本村・植木村・城廻村・山谷新田で、いずれも玉縄に近接していた。

慶安元年(1648) 6月正綱の没後、正綱の子正信が継ぐ。

元禄3年(1690) 4月正信隠居、正久が継ぐ。

元禄11年(1698) 3月正久、三河吉良へ領地替え、更に同16年に上総大多喜へ領地替えとなり、玉縄を去る。これに伴い玉縄藩は廃され天領となる。

正徳元年(1711) 植木村と城廻村の一部が新井白石の知行200石となる。

享保11年(1726) 龍宝寺境内の石窟には白石の石碑がある。室鳩巣の撰文(相模風土記)だが現在、碑文は風化して読めない。

寛政4年(1792) 老中松平定信は、相模・伊豆等の海浜警備に伴い玉縄城の再興を計画するが実現していない。

周辺の神社仏閣と文化財

首塚　里見氏の玉縄城攻撃に際し、城を守るために戦死した、渡内福原氏、大船甘粕氏の一族35名の首を埋葬した塚。毎年8/19に塚供養と川施餓鬼が行われ灯籠流しが柏尾川(戸部川)で行われている。

龍宝寺　北条綱成創建。氏勝が天正3年(1575)に現在の地に移す。綱成、氏繁、氏勝の位牌を安置。背後の山腹に墓所。

旧石井家住宅(龍宝寺境内)　元禄期に建てられた農家を移築したもので国の重要文化財に指定されている。石井家は後北条氏に属した地侍。後北条氏滅亡後帰農し、関谷村の名主を代々務めた。

玉縄民俗資料館(龍宝寺境内)　2011年1月、「玉縄ふるさと館」としてリニューアルオープン。旧石井家住宅に隣接し、旧石井家や周辺の旧家に残されていた家具や農具を集め展示。玉縄城に関する遺物や資料、縄文時代の遺物を展示。

諏訪神社　かつては本丸諏訪壇にあった城の鎮守。廃城後移されている。

七曲坂　玉縄城東方の通路。植谷戸の一角。入口部分に長屋門(小坂邸)。坂を登り切った右手が「太鼓櫓」左手が「えんしょうぐら」えんしょうとは火薬の焔硝がなまったとも云われている。

相模陣(陣屋坂)　江戸になってから通された道。

久成寺坂(ふわん坂)　周囲に平場が見られる。

久成寺　足利11代将軍義澄に仕えた梅田秀長が永正17年(1520) 屋敷を寄進。境内には長尾城跡(戸塚区長尾台)から移された長尾景弘、定景、景茂の供養塔がある。定景は実朝を暗殺した公暁を討ち、宝治合戦(1247)では、定景の子景茂が三浦泰村に付き命運を共にした。長尾景虎(上杉謙信)の祖。

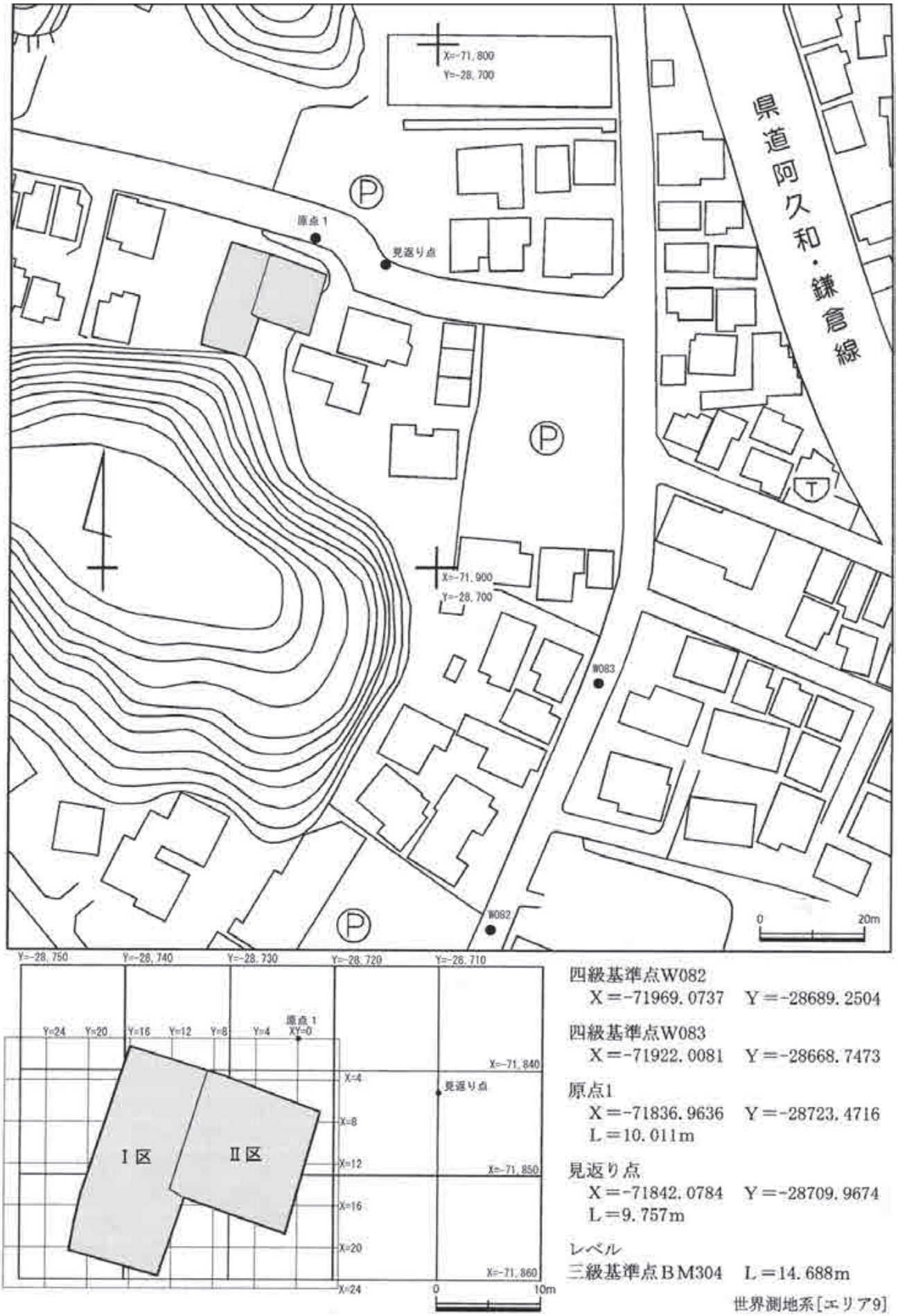


図３　調査区の位置とグリッド設定

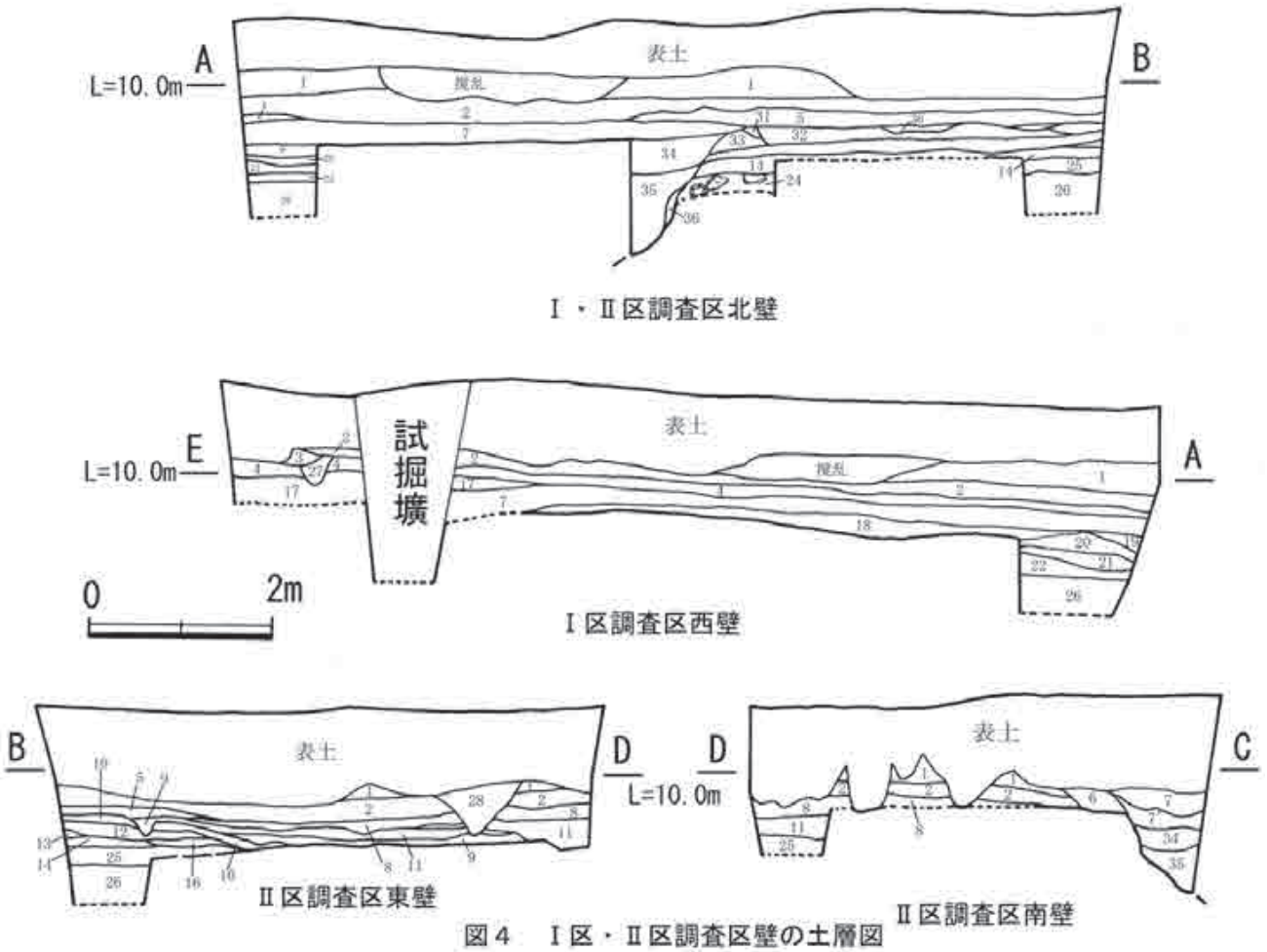


図４　Ⅰ区・Ⅱ区調査区壁の土層図

1. 茶灰色砂質土層
2. 茶灰色砂質土層　1より砂が多い
3. 淡茶灰色砂質土層　1～3cm大の土丹を多く含む
4. 茶灰色弱粘質土層
5. 淡茶褐色粘質土層　土丹粒・砂を含む
6. 淡茶灰色粘質土層
7. 茶褐色粘質土層　土丹粒を含む
7'. 茶褐色粘質土層
8. 黄褐色砂質土層　1cm大の土丹粒多く含む
9. 茶灰色粘質土層
10. 暗灰色粘質土層
11. 青灰色粘質土層
12. 明茶灰色粘質土層
13. 茶褐色粘質土層　炭化物・木片含む
14. 暗灰色粘質土層
15. 灰褐色粘質土層
16. 明茶灰色粘質土層
17. 暗青灰色粘質土層　少し炭が混じる
18. 暗青灰色弱粘質土層
19. 青灰色粘質土層
20. 青灰色砂質土層
21. 暗灰色弱粘質土層
22. 青灰色粗砂土層
23. 淡茶灰色弱粘質土層　腐植土が多く混じる
24. 黒灰色粘質土層　人頭大の土丹を多く含む
25. 暗青灰色粘質土層　土丹粒・茶褐色粘質土含む
26. 黒灰色土層　中世地山
27. 茶灰色弱粘質土　pit１覆土
28. 茶灰色弱粘質土　pit２覆土
29. 灰褐色砂質土　溝２の覆土
30. 茶褐色粘質土層　粒の粗い土丹粒を含む溝３覆土
31. 茶褐色粘質土層　溝３覆土
32. 黒灰色～暗茶灰色粘質土層　溝３覆土
34. 青灰色弱粘質土層　落ち込み埋め戻しの精良土
35. 暗茶灰色弱粘質土層　落ち込み内堆積土
36. 暗茶灰色弱粘質土層　落ち込み内堆積土　土丹含む

図４　Ⅰ区・Ⅱ区の調査区壁の土層

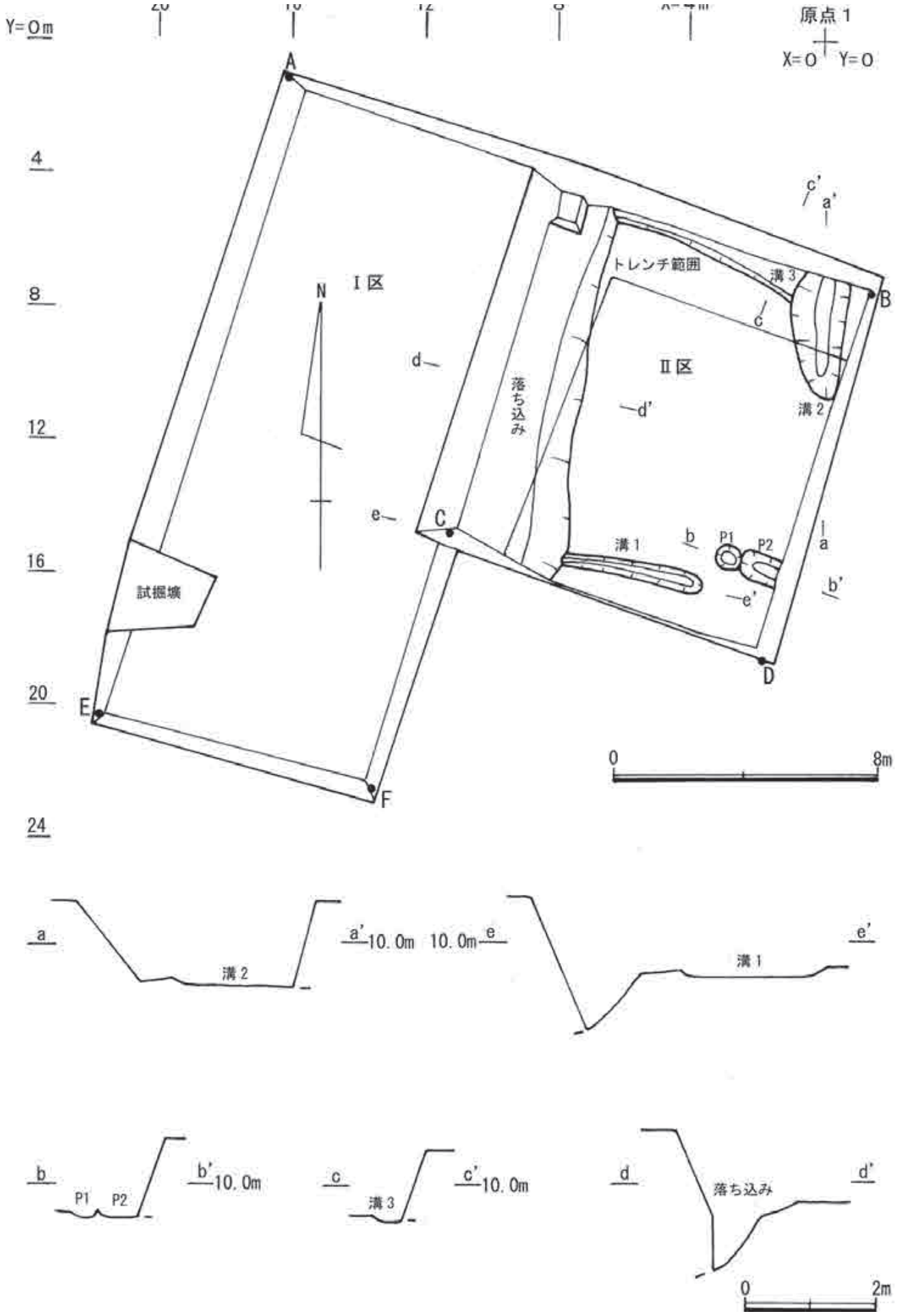


図５　全測図と遺構のエレベーション

第二章　調査の経過と土層

第１節　調査の経過

調査に先行して、鎌倉市教育委員会によって行われた試掘調査の結果を基に、本調査は専用住宅建設によって掘削、削平が行われる敷地内の建物建築部分の76㎡に対して行われた。

掘り上げた土は場内処理するため、調査地をⅠ区（40㎡）・Ⅱ区（36㎡）に分けて調査を行った。

表土層は、遺構埋没深度まで重機を使用して掘り下げることとし、掘削作業には調査員が立ち会い、重機が掘り下げる深さと掘削時に出土する遺物に対処した。

測量は鎌倉市４級基準点（日本測地系）Ｗ082(X=-71969.0081 Y=-28689.2504)、Ｗ083(X=-71922.0081 Y=28668.7473)を用いた後、世界測地系座標変換Web版（TKY2JGD）を用いて世界測地系に変換し用いた。水準は、鎌倉市３級基準点ＢＭ304(L=14.688ｍ)から移動した仮ＢＭ（10.011ｍ）を使用した。

以下、調査日誌の抜粋。

４月14日　調査開始。Ⅰ区表土掘削立ち会い。
　15日　機材搬入。
　17日　調査区内にトレンチを設定、第１面を検出確認。
　23日　測量原点及びレベル移動。
　　第１面の精査を行い、遺構が検出されなかったので地形測量を行う。
　25日　第１面の全景写真撮影。
　　Ⅰ区北壁・西壁の土層断面作図と写真撮影。
　30日　Ⅰ区埋め戻し。Ⅱ区表土掘削立ち会い。
５月１日　Ⅱ区調査開始。調査区壁を精査。
　７日　降雨のために壁が崩れる。復旧、排水作業。
　　第１面精査。検出遺構の掘り下げと平面図作成。
　８日　Ⅱ区東壁と北壁沿いにトレンチを設定、下層の精査を行う。
　　Ⅱ区北西隅で落ち込みを検出する。
　９日　検出した落ち込みの掘り下げ。
　　Ⅱ区北壁・東壁のセクション作図・写真撮影。
　12日　落ち込みを完掘。全景写真撮影。
　　落ち込みの平面図作図。南壁のセクション作図。
　　台風に備え養生をする。
　15日　台風の風雨のためⅡ区西壁が崩落する。
　　落ち込み内の崩落土の除去。平面図作図。
　16日　撤収準備。
　20日　機材搬出。調査を終了する。

第２節　土層

現地表から遺構面までの間（約100～120㎝）はすべて近代の造成による盛土。市道に接している北側と南側部分は道路面とほぼ同じ深さで遺構面（第１面）を検出した。

ベースとなる基盤層は黒灰色土層。この中世の基盤層から遺物は出土していない。

調査により明らかにされた第１・２面は、土丹粒混じりの茶灰色砂質土・茶灰色弱粘質土・茶褐色粘質土である。

Ⅱ区２面から掘り込まれた落ち込み内の土は、柔らかい暗茶灰色弱粘質土から成り、青灰色弱粘質土で埋め戻されていた。

第三章　検出された遺構と遺物

第１節　Ⅰ・Ⅱ区、第１面の遺構と遺物（図５・図６）

検出した遺構と遺物

遺構は確認されなかった。検出した第１面は茶灰色砂質土からなり、北壁と西壁のセクションで確認すると、１面から掘り込まれた撹乱が確認された。

Ⅰ・Ⅱ区１面から、瀬戸鉄釉天目茶碗、捏鉢、常滑甕、砥石（図６- １～ 11、17、18）が出土している。

第２節　Ⅱ区、第２面の遺構と遺物（図５、図６）

検出した遺構と遺物

ａ．柱穴１・２(図6-12)

第２面では２穴の柱穴を検出した。検出した柱穴の深さが比較的浅く、規格性が見いだせない。柱穴２から灰釉瀬戸折腰皿（古瀬戸後期第Ⅲ期、15世紀第２四半期）が出土。

ｂ．溝１・２・３

溝１は、Ⅱ区の南壁に沿って東西方向に検出した長さ220cm、幅30cm程の遺構である。

溝２は、Ⅱ区の東壁に沿って南北方向に検出した長さ200cm、幅80cm程の遺構である。溝３を切っている。

溝３は、Ⅱ区の北壁に沿って東西方向に検出した長さ600cm。幅約20 ～ 40cmの溝で落ち込みと溝２に接している。溝１とは約10ｍ離れているがほぼ並行している。関わりがあるか詳細は不明。

溝１・３から、小片のため図示していないが、轆轤成形のかわらけ大がそれぞれ１点ずつ出土している。

ｃ．落ち込み

Ⅱ区の西壁に沿って南北に延びる遺構である。Ⅰ区に跨がっていると考えられるが、Ⅰ区では基礎工事の掘削深度を越えるため掘り下げていない。検出できた幅120 ～ 140cm、最深部は地表から250cm、南北に長さ約12ｍ分を検出した。Ⅱ区の西辺とほぼ平行に掘り込まれ、谷入口平坦部と谷内を区画した溝や濠とも考えられる。Ⅱ区の西辺とほぼ平行に掘り込まれ、谷入口平坦部と谷内を区画した溝とも考えられるが、委細不明。また落ち込み内の堆積土は、柔らかい暗茶灰色弱粘質土から成ることから、緩やかな水流もしくは停滞した水溜まり（濠や池）といったものが考えられる。現況から水を流した時にどちらに流れるかは不明である。

轆轤成形のかわらけ（図６-13 ～ 15）と、漆器碗（図６-16）が出土している。

第四章まとめ

発掘調査地は、玉縄城から見て南東方向、城山と呼ばれる方形の土塁（約120ｍ四方）に囲まれた玉縄城本丸大手から、東側に下る七曲坂の下、東西方向に延びる谷戸の出口に位置している。東側正面には玉縄城主３代綱成創建、６代氏勝が天正３年（1575）に現在の地に移した龍宝寺がある。

遺物観察表及び出土遺物点数

観察表（図６・図版１、２）

遺構名		No.	遺物名	口径	底径	器高	備考
１区 １面	掘削中	1	瀬戸 天目茶碗	－	(4.4)	－	内外面鉄釉 体部外面下部は篦削り
		2	瀬戸 天目茶碗	－	－	－	内外面鉄釉
		3	瀬戸　碗	－	(4.2)	－	灰白色の釉外面下部と高台は篦削り
		4	瀬戸　瓶子か	－	－	－	外面灰釉
		5	瀬戸・美濃 擂鉢	－	－	－	口縁部小片
		6	瀬戸　捏鉢	－	－	－	口縁部小片
		7	常滑　甕	－	－	－	体部片
		8	常滑　甕	－	－	－	体部片
		9	肥前　皿	－	－	－	白色釉に鉄絵
		10	土製品	－	－	－	土器質　小片のため器形不明
		11	砥石	残長 8.1	残幅 3.3	厚さ 1.3	中砥　暗灰色
２区 ２面	Ｐ２	12	瀬戸 灰釉小皿	(12.0)	－	－	灰釉ツケガケ　瀬戸折腰皿 （古瀬戸後期第Ⅲ期、15 世紀第２四半期）
	落ち込み 北西隅深掘り	13	かわらけ 小	－	(3.8)	－	轆轤成形
	おち込み	14	かわらけ 大	－	－	－	轆轤成形　体部片
	おち込み 北西隅深掘り	15	かわらけ 大	－	(8.0)	－	轆轤成形　底部片
	おち込み 北西隅深掘り	16	漆器　椀	－	(5.4)	－	外面黒色漆　内面赤色漆　高台　変形著しい
２区 １面	掘削中	17	瀬戸・美濃 擂鉢	－	(15.8)	－	鉄釉　轆轤輪積み成形　底部糸切痕　3.9㎝幅に９本の卸目
		18	肥前 染付碗	－	－	－	高台部から体部にかけて染付の条線

出土遺物点数

出土地	遺物No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	
種別	種類											欠番			合計
かわらけ	ロクロ大	9							1	1			16	2	29
	ロクロ小		2												2
	白かわらけ												1	1	2
国産陶器	瀬戸	4		1				1					1		7
	常滑	4					2								6
	擦り常滑	1													1
	その他	2													2
土製品	その他	1					2	1			1			1	6
瓦質製品	瓦					1	1								2
石製品	砥石	1													1
	硯					1									1
	その他	1												2	3
漆製品	椀						1								1
木製品	その他												1		1
自然遺物	人骨										1				1
近世遺物	肥前	3			2	1	3								9
合計		26	2	1	2	3	9	2	1	1	2	0	19	6	74

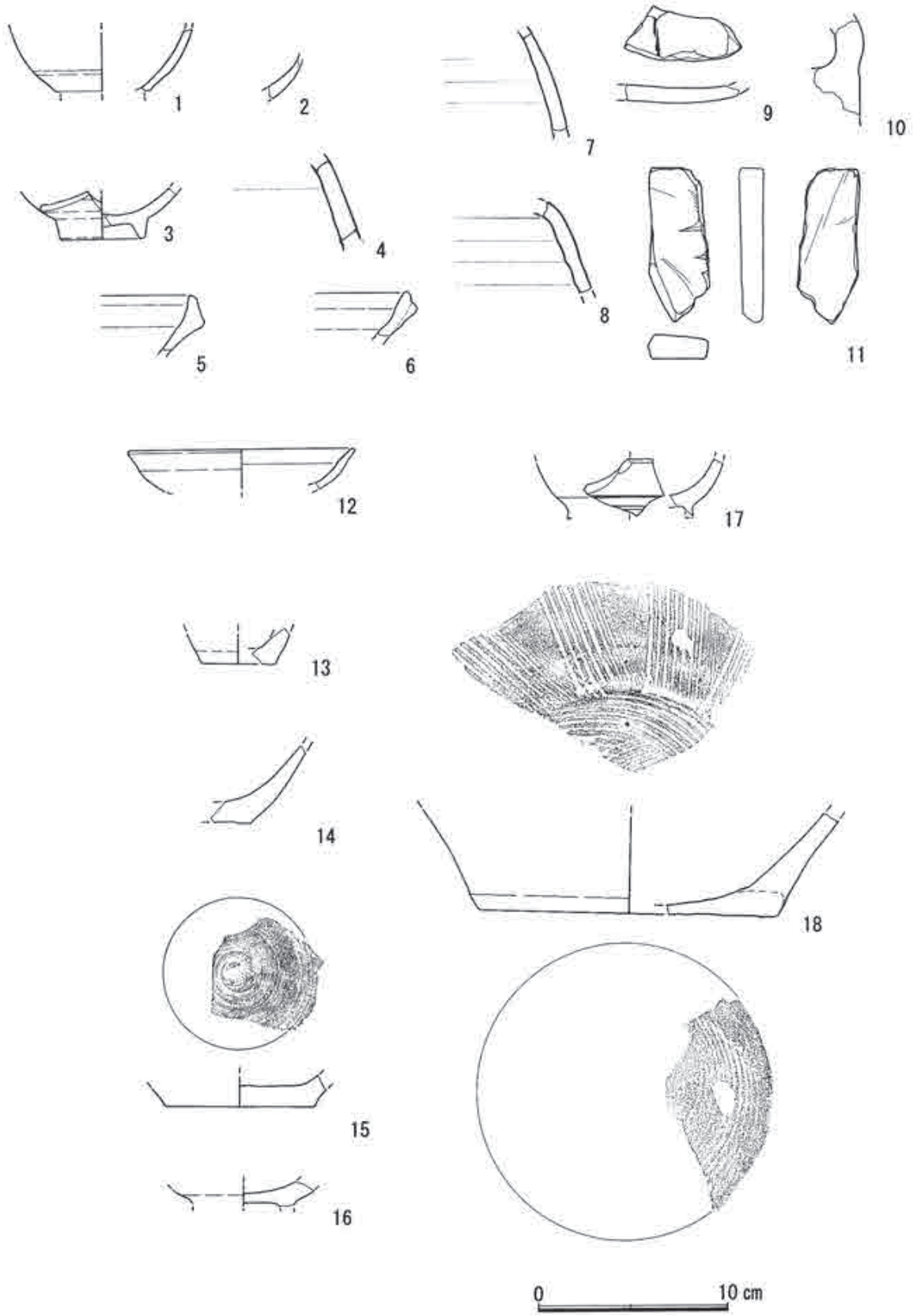


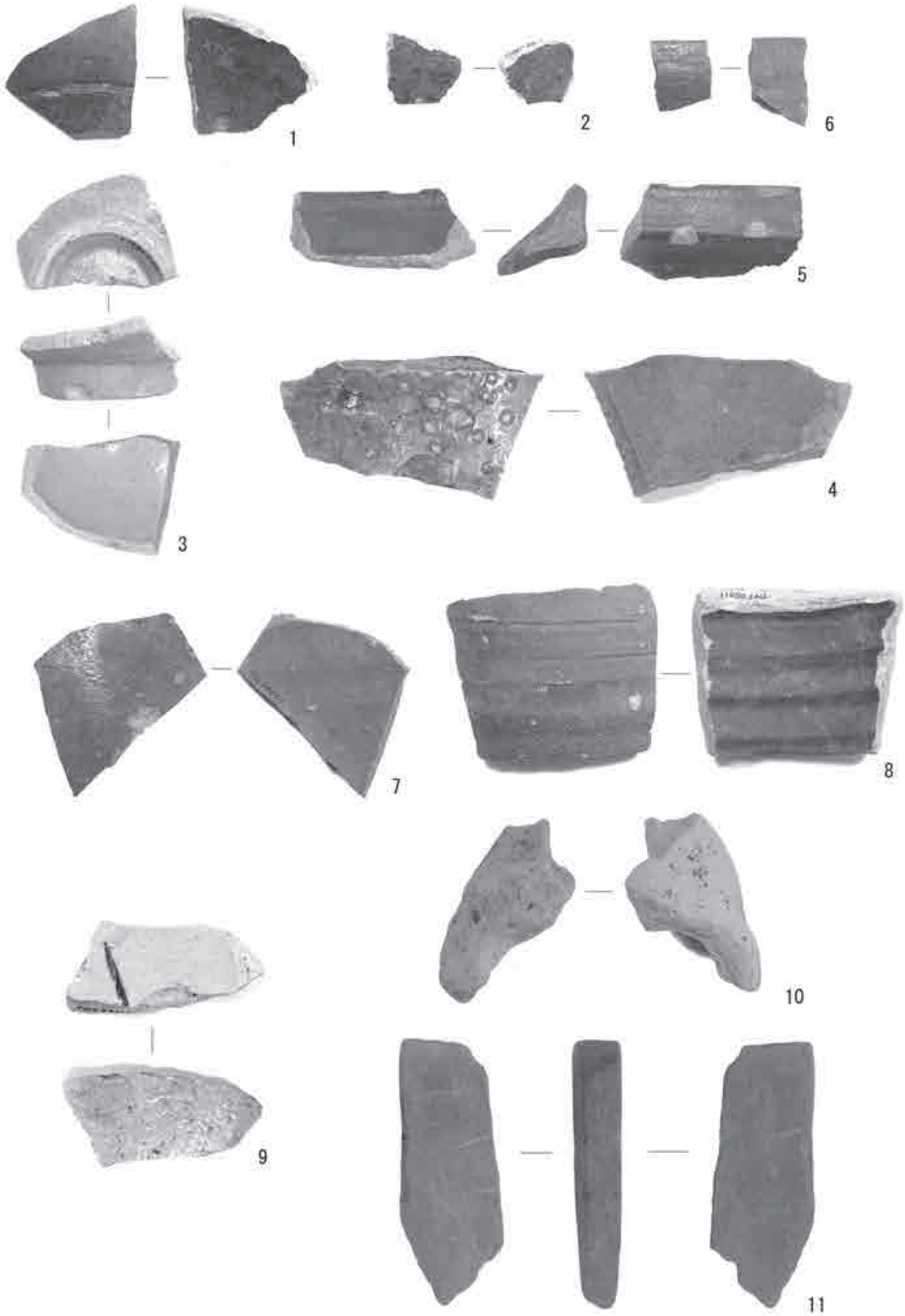
図６　出土遺物

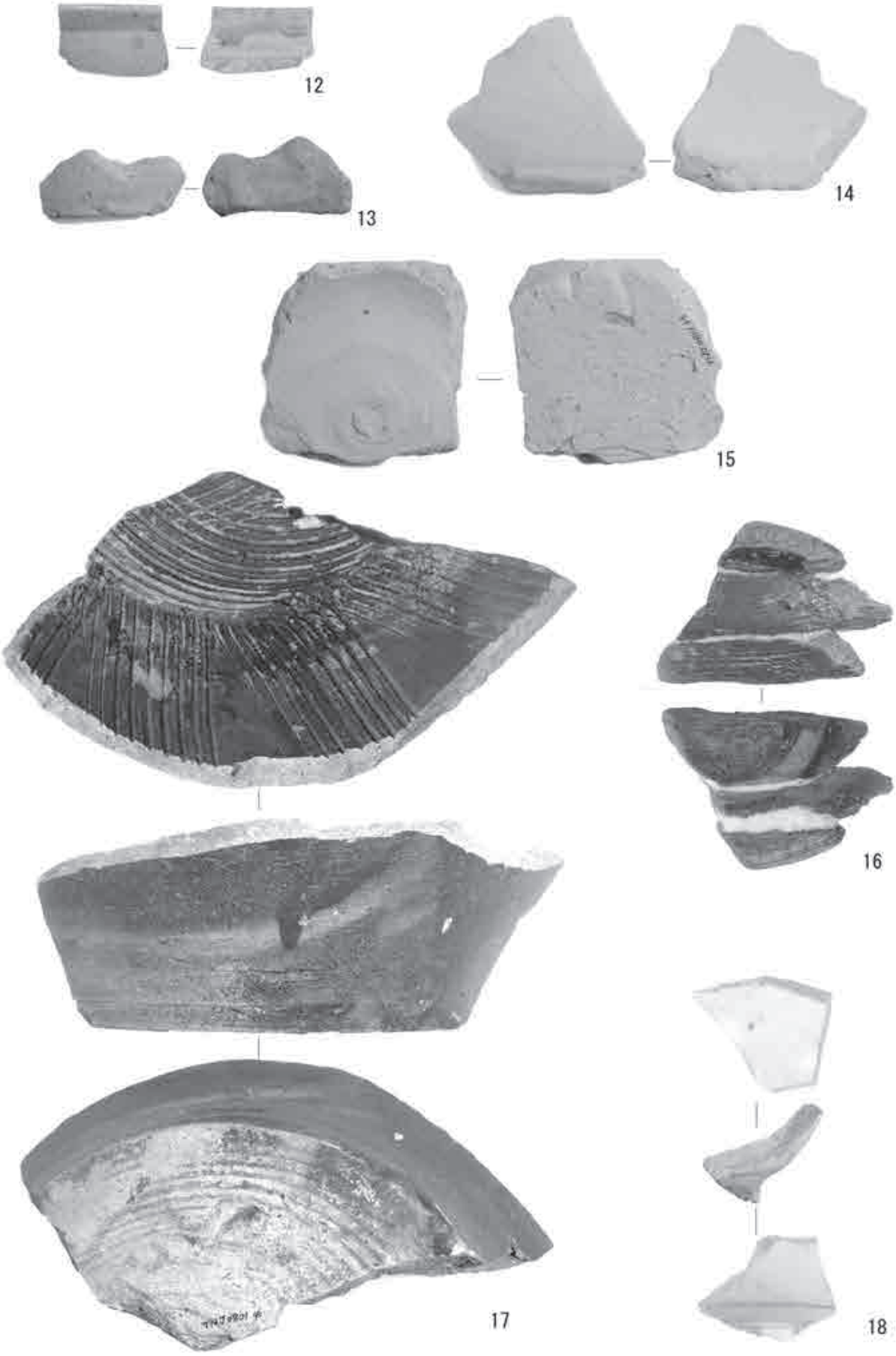
今回の調査で注目すべき遺構は、２区で確認した落ち込みである。確認した長さは東西12ｍ、幅120～140cm以上、遺構面からの深さ120cm以上の推定断面Ｖ字形の遺構である。１区が掘削深度の制限があるために調査することが出来なかったが、形状は薬研状の溝か濠になる遺構である。

調査地点は七曲坂に至る谷戸の入口、北と南に尾根が張り出している。確認した落ち込みは、ちょうどそれぞれの尾根の先端部を結ぶように一直線に延びていると思われる。これが七曲坂を経て城の大手に至る道筋の防御に関わる濠等の遺構ならば、玉縄城防御に重要な位置を占めていたと考えられる。七曲殿とも称された北条氏繁の室が住んだとも云われ(『風土記稿』)、『市史考古編』219頁には防御の推論が提示され興味深い。掘削の時期は不明だが、埋土(土層34)に精良土を用い、土層中から遺物が出土しないことは、短期間に埋め戻された結果と見ることができる。落ち込みが埋め立てられた時期は、元和５年(1619)、廃城(円光寺伝)により玉縄城が機能を失った頃と考えられる。

図７　落ち込みの位置と七曲坂

図版１




12
13
14
15
16
17
18

図版３

１．調査地から七曲坂を望む（東から）

２．Ⅰ区西壁（東から）

３．Ⅰ区全景（東から）

４．Ⅰ区北西隅トレンチ（東から）

５．谷入口北側の尾根先端部（南から）

６．Ⅰ区１面全景（南から）

１．Ⅱ区２面落ち込み北壁セクション（南から）

２．Ⅱ区２面落ち込み（南から）

３．Ⅱ区２面北壁と落ち込みトレンチ（南から）

４．Ⅱ区２面全景（南から）

５．Ⅱ区２面南壁（北から）

６．Ⅱ区２面全景（北から）

７．Ⅱ区２面落ち込み南壁セクション（北から）

上杉定正邸跡（No.188）

扇ガ谷二丁目 195 番 2

例　言

1．本報は、「上杉定正邸跡(№188)」内、扇ガ谷二丁目195番2における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成21（2009）年2月13日～同年4月10日にかけて行い、調査面積は24㎡を対象とした。

3．発掘調査体制は以下の通りである。

調査担当者：山口正紀（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）

調　査　員：伊丹まどか・小野夏菜・須佐仁和・栂岡ケイト・本城　裕（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）

作　業　員：赤坂　進・牛島道夫・佐野吉男・平尾　幹（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

4．現地での写真撮影は山口・須佐が行った。

5．本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下の通りである。

整理参加者：山口・岡田慶子・平井里永子・須佐直子（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）、
松吉大樹（特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所）

遺物洗浄・注記：埋蔵文化財発掘調査支援協同組合

遺物接合・分類：山口・岡田・平井　　遺物実測：岡田・須佐・山口　　遺物図版作成：岡田・山口

遺構図版・観察表・写真図版作成・遺物写真撮影：山口

原稿執筆：第１章―第２節　松吉大樹　　第１章―第１・３節、第２章～第４章　山口　　編集：山口

6．本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7．本調査に係る出土品の注記は、遺跡名を「US0822」と略記した。

8．本報告書の遺構・遺物挿図、表の指示は次の通りである。

挿図縮尺　各図に縮尺を表記している。

遺構図版　水糸高は海抜・標高値を示す。

遺物図版　釉薬の範囲は•‐•‐•で示す。また、遺物にみられる油煤痕は黒く塗りつぶし表現している。

遺物観察表　( ) は復元数値、[　] は遺存数値を示す。

写真図版　出土遺物は基本約1/2、大きさにより1/1、1/3に縮小している。

9．本報記載の「泥岩」は凝灰質泥岩、「伊豆石」は安山岩を示す。

10．整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。

瀬戸：藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

常滑：愛知県　2012『愛知県史別編窯業３中世・近世常滑系』

火鉢：河野眞知郎　1993「中世鎌倉火鉢考―東国との関連において―」
『考古論叢 神奈河　第２集』神奈川考古学会

11．現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。(順不同、敬称略)

大三輪龍哉・古田土俊一（浄光明寺）、宇都洋平（藤沢市教育委員会）、高橋慎一朗（東京大学史料編纂所）、長澤保嵩・田畑衣里（(株) 斉藤建設）、太田美知子、岡田優子、押木弘巳、汐見一夫、原廣志、馬淵和雄（鎌倉市教育委員会）、宮田　眞・滝澤晶子（(株) 博通）、鍋島昌代（(財) かながわ考古学財団）、（社）鎌倉市シルバー人材センター

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡概観 …… 25

第１節　遺跡の位置と地形
第２節　歴史的環境
第３節　周辺遺跡の調査成果

第二章　調査の概要 …… 31

第１節　調査の経緯と経過
第２節　調査における測量方法
第３節　堆積土層

第三章　検出遺構と出土遺物 …… 39

第１節　１面の遺構と遺物
第２節　２面の遺構と遺物
第３節　３面の遺構と遺物
第４節　４a・b面の遺構と遺物
第５節　５面の遺構と遺物
第６節　６面の遺構と遺物
第７節　７面の遺構と遺物
第８節　８面の遺構と遺物
第９節　８面下トレンチの遺物

第四章　まとめ …… 74

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺遺跡 ……26
図２　調査区と建築範囲 ……31
図３　国土座標位置図 ……32
図４　国土座標とグリッド配置図 ……33
図５　調査区土層堆積図 ……35
図６　１面全測図 ……39
図７　試掘坑出土遺物 ……40
図８　１面溝２・遺構外出土遺物 ……40
図９　２面全測図 ……41
図10　２面道路状遺構、溝１・２ ……42
図11　３面全測図 ……43
図12　３面溝１ ……44
図13　３面土坑・柱穴 ……44
図14　３面各遺構・遺構外出土遺物 ……46
図15　４a面全測図 ……47
図16　４a面土坑 ……48
図17　４b面全測図 ……50
図18　４b面溝１ ……50
図19　４b面土坑２ ……51
図20　４a・b面各遺構出土遺物 ……52
図21　４a・b面遺構外出土遺物 ……53
図22　５面全測図 ……54
図23　５面方形土坑１・２・４ ……55
図24　５面各遺構 ……55
図25　５面各遺構出土遺物 ……56
図26　５面遺構外出土遺物 ……57
図27　６面全測図 ……58
図28　６面方形土坑１ ……59
図29　６面土坑・柱穴 ……60
図30　６面各遺構外出土遺物 ……60
図31　６面遺構外出土遺物 ……61
図32　７面全測図 ……63
図33　７面溝１～３ ……63
図34　７面Ｐ３・５ ……64
図35　７面溝１出土遺物 ……65
図36　７面各遺構出土遺物 ……66
図37　７面木器層中出土遺物（１）……66
図38　７面木器層中出土遺物（２）……67
図39　８面全測図 ……69
図40　８面各遺構 ……69
図41　８面各遺構出土遺物 ……70
図42　８面遺構外出土遺物 ……70
図43　８面下トレンチ ……71
図44　８面下トレンチ出土遺物（１）……72
図45　８面下トレンチ出土遺物（２）……73

表　目　次

表１　周辺の遺跡名称 ……30
表２　１面遺構計測表 ……40
表３　３面遺構計測表 ……45
表４　４a面遺構計測表 ……49
表５　４b面遺構計測表 ……51
表６　５面遺構計測表 ……57
表７　６面遺構計測表 ……62
表８　７面遺構計測表 ……68
表９　８面遺構計測表 ……71
表10 遺物観察表（１）……77
表11 遺物観察表（２）……78
表12 遺物観察表（３）……79
表13 遺物観察表（４）……80
表14 遺物観察表（５）……81
表15 遺物観察表（６）……82
表16 遺物観察表（７）……83
表17 遺物観察表（８）……84
表18 層位別出土遺物一覧表 ……85

図　版　目　次

図版１ ……86
１．調査地点近景（英勝寺方面から）
２．調査地点敷地裏（西から）
３．１面全景（東から）
４．１面全景（西から）
５．１面溝１南北土層堆積状況（東から）
６．１面溝２南北土層堆積状況（東から）
７．道路状遺構の西方面（東から）
図版２ ……87
１．２面全景（東から）
２．２面道路状遺構（西から）
３．３面全景（東から）
４．３面全景（西から）
５．３面溝１（東から）
６．３面溝１土層堆積状況（東から）
７．３面土坑５内出土墨書木札（南から）
図版３ ……88
１．４a面全景（東から）
２．４a面全景（西から）
３．４b面全景（東から）
４．４b面全景（西から）
５．４b面溝１（東から）
６．４b面溝１（西から）
図版４ ……89
１．５面全景（東から）
２．５面方形土坑１・２（東から）
３．５面方形土坑３（東から）
４．５面南側部分（東から）
５．５面囲炉裏１（北から）
６．５面囲炉裏１（西から）
７．５面囲炉裏１東側壁板（西から）
８．５面囲炉裏１内出土
火葬骨を含むかわらけ（北から）
図版５ ……90
１．６面全景（東から）
２．６面全景（西から）
３．６面方形土坑１（北から）
４．６面方形土坑１内出土 犬頭骨
５．７面全景南側（東から）
６．７面全景東側（南から）
図版６ ……91
１．７面全景（南東から）
２．７面北側全景（東から）
３．７面溝１（南から）
４．７面溝１杭列（東から）
５．７面溝２・３（東から）
６．７面溝３（西から）
図版７ ……92
１．７面溝２（西から）
２．７面溝２杭列（南から）
３．７面Ｐ５出土かわらけ（東から）
４．８面全景（東から）
５．８面全景（西から）
６．８面西部遺構検出状況（南から）
図版８ ……93
１．８面下トレンチ（北から）
２．調査区東壁土層堆積状況（西から）
３．調査区南壁土層堆積状況（北から）
４．調査区西壁土層堆積状況（東から）
図版９ ……94
試掘坑、１・３面出土遺物
図版10 ……95
４a・b面出土遺物
図版11 ……96
４b・５面出土遺物
図版12 ……97
５・６面出土遺物
図版13 ……98
６・７面出土遺物
図版14 ……99
７面出土遺物
図版15 …… 100
７・８面出土遺物
図版16 …… 101
８面・８面下トレンチ出土遺物
図版17 …… 102
８面下トレンチ出土遺物・自然遺物

第一章　遺跡概観

第１節　遺跡の位置と地形

本遺跡名称である「上杉定正邸跡」は、神奈川県遺跡台帳鎌倉市№188に登録されている。寿福寺辺りから北側を扇ガ谷といい、現在の大字名となっている。谷戸を形成する丘陵の間には小谷戸が樹枝状に入り組んでおり、泉ヶ谷、藤ヶ谷、御前ヶ谷、智岸寺ヶ谷、勝縁寺ヶ谷、法泉寺ヶ谷、清涼寺ヶ谷、会下ヶ谷、梅ヶ谷、山王堂ヶ谷などの名称が残っている。扇ガ谷入口は標高13ｍ前後であり、岩船地蔵付近は標高14ｍと比高差はない低地となっており、周囲の丘陵頂部は標高60ｍ前後となっている。現在までに各支谷は切岸等によってその拡がりをみせる。また、中央を縦断するようにJR横須賀線が通っており、線路沿いに源氏山を源流とする扇川が流れている。扇ガ谷には武蔵大路という道が通っていて西の仮粧坂と東に亀ヶ谷坂という切通しと繋がっている。寿福寺前を通る今小路と八幡宮方面から東西に延びる窟小路にも繋がっており、鎌倉との往来を要する道であったことは違いない。本調査地点は、JR鎌倉駅より北に600ｍほどの位置、扇ガ谷入口付近、扇ガ谷二丁目195番2に所在する。

第２節　歴史的環境

本調査地点は、JR横須賀線寿福寺踏切の東側（護国寺側）にあり、眼前には扇川が流れ、「扇谷」と呼称される地域に位置している。その地名は、『新編相模国風土記稿』によれば飯盛山の麓にある「扇ノ井」に由来するとあるが、『吾妻鏡』には「左典厩之亀谷御旧跡」などとあるように、「亀谷」が総称で「扇谷」の名はみられない（註１）。また『新編鎌倉志』では当地の位置を「亀谷坂を越て、南の方、西北は海蔵寺、東南は華光院、上杉定政の旧宅、英勝寺の地を扇谷と云、亀谷の内なり」とある。『吾妻鏡』には見られないが、元徳元年（1329）以前に書かれたものと考えられている金沢貞顕の書状には「去夜亥刻計ニ、扇谷の右馬権助家時門前より火いてき候て、亀谷の少路へやけ出候て、土左入道宿所やけ候て、浄光明寺西頬まてやけて候」とあることから、鎌倉期には「扇谷」という地名が称されていたことが分かっている（註２）。また、この記事に記載されている「右馬権助家時」などの人名が『浄光明寺敷地絵図』にも同様に載っていることから、少なくとも鎌倉末期から南北朝期にかけての「扇谷」は浄光明寺周辺の地域を指すことが考えられよう（註３）。他に『太平記』巻十「鎌倉兵火事付長崎父子武勇事」に「天狗堂ト扇ガ谷ニ軍有ト覚テ」とあり、新田義貞が鎌倉に攻め込んだ際に当地で合戦があったことや、同じく巻十「亀寿殿令落信濃事付左近大夫偽落奥州事」には「相模守殿ノ妾二位殿ノ御局ノ扇ノ谷ニ御坐ケル処へ参リタリケレバ」と見え、北条高時の妾である二位殿の居所が当地にあり、諏訪盛高が高時の子亀寿を抱いて信濃へ落ちていったことが記されていることから、北条得宗家にとっても縁のある地域であった（註４）。近世の編纂物であるが『南山巡狩録』には、文和元年（1352）閏二月、新田義貞の子義宗・義興兄弟らが上野に挙兵し鎌倉に進行した際、これに与同した石塔義慶・三浦高通らが、「鎌倉の扇ケ谷」に寄合い、相談した話を伝えている例がある（註５）。都市鎌倉の中からその外に繋がる武蔵大路・今小路が地域内を通っていることから、北側の境界に位置する重要な地域であったとの意識が強かったのかもしれない。

本遺跡名称である「上杉定正邸跡」は、本調査地点近くにある大正十一年（1922）三月に鎌倉青年団によって建てられた『扇谷上杉管領屋敷跡』の碑文があり、これらは恐らく先述した『新編鎌倉志』の記事に基づいていると思われる。上杉氏は藤原氏勧修寺の流れで、重房が丹波国何鹿郡上杉荘（現京都府綾部市上杉）を領したことから上杉氏を名乗ると伝える。重房は建長四年（1252）四月に宗尊親王に従って

図１　調査地点と周辺遺跡

鎌倉に下向。重房の娘は足利頼氏に、重房の孫娘（清子）は足利貞氏にそれぞれ嫁ぐなど源姓足利氏との姻戚関係を結ぶことによって、南北朝から室町を通じ繁栄していくようになった（註６）。足利氏による京都・鎌倉の二頭体制下において、関東管領として鎌倉公方を扶け執政していくようになると、鎌倉公方と京都将軍の抗争に、関東管領職を巡る上杉氏一門の争いが絡み、上杉氏一門はそれぞれ、山内・犬懸・宅間・庁鼻・小山田など名乗り分家していく。扇谷上杉氏もその一つである（註７）。扇谷上杉氏の成立は、上杉持朝の三十三回忌に際して作られた法語である「広感院殿旭嶺大禅定門三十三回忌陞座」（註８）に、上杉顕定について「其家号扇谷」とあり、また『上杉系図』（註９）でも「扇谷」と注記されていることから、扇谷上杉を号するようになるのは、上杉顕定からと考えられる。上杉顕定は、永和六年（1380）四月に30歳で死去しているが、逆算すると観応二年の生まれと推定できる。応安三年（1370）に「扇谷建徳寺」を建立しているが詳細については不明。『鎌倉大草紙』には「上杉弾正少弼氏定扇谷より出向て爰を先途と防戦ける」とあり、上杉禅秀の乱に際して、顕定の子である上杉氏定が当地から出陣し化粧坂で戦っていることから、氏定の頃には屋敷は存在していたのであろう（註10）。氏定は海蔵寺の開基としても伝えられ、永享の乱では氏定の子である上杉持朝の臣、海老名上野介が「扇谷海蔵寺」で自害している（註11）。上杉定正以前からの「扇谷」と上杉氏の関係が伺われよう。上杉定正は家臣の太田道灌らの尽力によって江戸城・河越城などを増改築するなど、扇谷上杉の家名を高めるが、すでに鎌倉公方も古河へ移っていたので、基本的な拠点は相模国糟屋（現神奈川県伊勢原市）にあったようである。しかし『梅花無尽蔵』（註12）によると、文明十八年（1486）十月廿三日に禅僧万里集九が上杉定正に招かれ江戸城から鎌倉に入り「雪下・扇谷」に来ていることから、まだ鎌倉にも屋敷地は存在していたと推測される。

「扇谷」地域は他に、「権現堂福禅寺」などの寺院も存在していたようであるが、詳細については不明である（註13）。東京都目黒区にある円融寺木造仁王立像には「仏所相州鎌倉扇谷住権大僧都大蔵法眼作之訖」という永禄二年七月付の墨書銘があり、仏像製作の工房が存在していた（註14）。『快元僧都記』天文五年（1536）三月一日条には「神宮寺扇谷内匠助造之」と見え、また同八年（1539）十月条にも「従去月廿八日，扇谷今小路番匠主計助，荒神之宮修補之」とあることから、「番匠」などの建築工の存在も確認できる（註15）。鎌倉極楽寺蔵の木造叡尊座像には、明暦二年（1656）六月廿四日の日付が書かれた修理銘札が納入されており、「仏師扇谷住摩尼多　靱負法橋守延　奉修覆者也」とある（註16）。また鎌倉円応寺にある、木造初江王座像にも木札墨書が納入されているが、こちらは「天和三年（1683）四月日再興」として「仏工鎌倉扇谷住後藤勘弥」の名が見えることから、近世に至っても「扇谷」では仏師が活躍していた（註17）。

「扇谷」の名は鎌倉期以降、史料上に多く散見されるが、地域定義の広さなどにより、その具体的な場所を比定することがなかなか出来ないのが現状である。ゆえに本調査地点のような発掘調査に伴う情報が、大いに重要となってくることは言うまでもない。

【註】

（註１）『吾妻鏡』治承四年十月七日条。

（註２）「（元徳元年ヵ）十一月十一日付 崇顕金沢貞顕書状」（「金沢文庫文書」『鎌倉遺文』30775号文書）。

（註３）大三輪龍彦編『浄光明寺敷地絵図の研究』（新人物往来社、2005）。

（註４）後藤丹治・釜田喜三郎校注『太平記 一』（日本古典文学大系34、岩波書店、1960）。

（註５）『改定史籍集覧』（通記類 第４、臨川書店、1983）。

（註６）上杉氏についての研究は、渡辺世祐『関東中心 足利時代之研究』（改定版、新人物往来社、1995。初版雄山閣、

1926）など枚挙に暇がない。
（註7） 扇谷上杉氏についての研究は枚挙に暇がないが、湯山学『関東上杉氏の研究』（湯山学中世史論集１、岩田書院、2009）。
黒田基樹編『扇谷上杉氏』（シリーズ・中世関東武士の研究 第五巻、戎光祥出版、2012）に詳しい。
（註8） 「玉隠和尚語録」（『北区史 資料編古代中世２』三編五二号）。
（註9） 『続群書類従』（第六輯下 系図部）。
（註10）『改定史籍集覧』（通記類 第５、臨川書店、1983）。
（註11）「永享記」（『続群書類従』第二十輯上）。
（註12）玉村竹二編『五山文学新集』（第六巻、東京大学出版会、1972）
（註13）「武州文書」（『神奈川県史資料編３下』6435号文書）。
（註14）「円融寺」『東京都の地名』（日本歴史地名大系13、平凡社、2002）。
（註15）『群書類従』（第二十五輯 雑部）。
（註16）「木造叡尊座像願文」（『鎌倉遺文』51833号文書）。
（註17）「木造初江王座像願文」（『鎌倉遺文』51489号文書）。

第３節　周辺遺跡の調査成果

本遺跡名称にもある上杉定正邸跡（№188）内の調査は、本地点が初めてとなる。多くの小谷戸を含む扇ガ谷内での発掘調査はあまり実施されていないが、現在までに極めて良好な遺跡が確認されていることが明らかになっている。扇ガ谷内には多くの廃寺や歴史が資料として残っており、それらを由来とする遺跡名称が付けられている。図１－№101華光院跡やぐらは本調査地点の裏手にあり、平成11年にやぐら調査が実施されている。「三界」と墨書されたかわらけなどが出土しており、14世紀末～15世紀前半頃と報告されている。扇ガ谷内の平地部では№194武蔵大路周辺遺跡や№182法泉寺跡などの発掘調査が見られる。

№194武蔵大路周辺遺跡－１地点では、14世紀代を通して二時期の遺構群が確認され、礎石建物、溝、池状遺構など北と南側を分けて寺院と町屋の生活域が発見されている。2地点では13世紀後半以降に建てられた基壇建物が検出されており、寺院関連施設もしくは屋敷地の一画に建てられた要素があり、近世面までの土地利用の変化がみられる。3地点では、13世紀後半～15世紀前半に亘る5期の遺構群が確認され、基壇、建物跡、塀、道路状遺構、溝など様々な遺構が検出され、2地点と同様に寺院の境内或いはその周縁に展開する町屋的な生活域のような成果が得られている。5地点では現在の扇川に近接する位置で、中世後半期の切石による扇川の護岸もしくは屋敷の石垣と道路跡、中世前半期の板壁建物等が発見されている。やや丘陵上に立地する№182法泉寺跡－１地点では13世紀半ば～14世紀後半の５期に亘る遺構面が確認され、谷戸開発による地業による流れが指摘されている。西隣の2地点では切石を積んだ石積み遺構が現在の道路と並行して発見されている。さらに、西に奥深く入った№183清涼寺跡－１地点でも4時期に亘る造り替えが確認されている。切石を6段積みした溝や道路が発見され、それらの廃絶後の様相も含め、13世紀後半～15世紀代の遺物が出土している。№299海蔵寺旧境内遺跡－１地点では、14世紀中頃～後半に比定される泥岩を用いた石積遺構が検出されており、寺院跡と指摘されている。このように、扇ガ谷内では切石を使った遺構が多くみられ、現在の扇川に関係しつつ、主に寺院関連の遺跡が残る土地ということが明らかになってきている。

＜調査地点一覧概要＞

図1には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は以下に表記する。調査地点番号は、その遺跡内における調査年月の古い順から番号を付し、そのため図の範囲外にある地点番号が欠如している場合や同一番号が重複している。また、発掘調査を対象としているため、確認（試掘）調査を含めていないことを前提とした。

華光院跡やぐら群（№.101）

1：2000年12月調査。汐見一夫・田畑衣理　2003「華光院跡やぐら群（No.101）　扇ガ谷二丁目191番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19　平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

法泉寺跡（№.182）

1：2004年7月調査。伊丹まどか　2008「法泉寺跡（№.182）扇ガ谷四丁目518番12地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24 平成19年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

2：2010年3月調査。未報告―扇ガ谷四丁目518番8

清涼寺跡（№.183）

1：2005年7月調査。伊丹まどか　2012「清涼寺跡（№.183）　扇ヶ谷4-556-4外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28　平成23年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

2：2012年11月調査。未報告―扇ガ谷四丁目570番1

亀谷山王堂跡（№.185）

1：2000年12月調査。伊丹まどか・石元道子・川又隆央　2002「亀谷山王堂跡（No.185）　扇ガ谷四丁目327番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

智岸寺跡（№.186）

1：１1988年3月調査。未報告―扇ガ谷四丁目380番1

多宝寺跡（№.187）

1：1970年3月調査。松尾宣方　1976『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会　－扇ガ谷二丁目268番3地点

2：1974年3月調査。松尾宣方　1983「16. 多宝律寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』鎌倉市教育委員会　－扇ガ谷二丁目268番3地点

3：1977年3月調査。三上次男ほか　1977『多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書』多宝律寺遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会　－扇ガ谷二丁目268番3地点

4：1989年8月調査。菊川英政　1998『多宝寺跡―扇ヶ谷2丁目250番1・4地点―』多宝寺跡発掘調査団

5：1991年7月調査。菊川英政　1993「5. 多宝寺跡（№.187）　扇ヶ谷二丁目250番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9　平成4年度発掘調査報告（第3分冊）』鎌倉市教育委員会

6：2001年1月調査。汐見一夫　2003「多宝寺跡（№.187）　扇ヶ谷二丁目238番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19　平成14年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

武蔵大路周辺遺跡（№.194）

1：1989年1月調査。大河内勉　2000「― 扇ヶ谷二丁目382番1地点 ―」『武蔵大路周辺遺跡発掘調査報告書』武蔵大路周辺遺跡発掘調査団

2：2000年3月調査。宗臺秀明・宗臺富貴子　2001「武蔵大路周辺遺跡（No.194）　扇ガ谷三丁目397地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

3：2000年8月調査。瀬田哲夫　2002「武蔵大路周辺遺跡（No.194）　扇ガ谷二丁目298番イ」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調

査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

4：2004年3月調査。滝沢晶子　2005『武蔵大路周辺遺跡発掘調査報告書』株式会社 博通

5：2012年5月調査。未報告―扇ガ谷二丁目297番1　斎木秀雄　2013「武蔵大路周辺遺跡の発掘調査」『第23回鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉教育委員会

浄光明寺旧境内遺跡（№206）

1：1987年6月調査。未報告－扇ガ谷二丁目12番1

海蔵寺旧境内遺跡（№299）

1：1998年3月調査。野本賢二・岡陽一郎　2000「海蔵寺旧境内遺跡（№299）　扇ガ谷四丁目632番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16　平成11年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

寿福寺旧境内遺跡（№371）

1：2008年7月調査。山口正紀　2010「鎌倉・英勝寺山門基壇改修工事に伴う出土遺物」『かまくら考古　第4号』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所

表1　周辺の遺跡名称（神奈川県遺跡台帳）

N0.	遺跡名称	N0.	遺跡名称	N0.	遺跡名称	N0.	遺跡名称
87	鎌倉城	113	化粧坂下やぐら	181	勝緑寺跡	201	今小路西遺跡
100	松源寺谷やぐら群	115	真光寺跡やぐら群	189	華光院跡	202	いわや堂遺跡
102	いわや堂やぐら	116	清涼寺谷やぐら群	190	東林寺跡	204	松岩寺跡
106	智岸寺やぐら群	118	無量寺谷やぐら群	191	松源寺跡	256	巨福呂坂周辺遺跡
108	浄光明寺やぐら群	119	法性寺谷やぐら	195	興善寺跡	278	北条時房・顕時邸跡
109	清水谷やぐら	171	尾藤景綱邸跡	196	無量寺跡	295	無量寺谷南やぐら
110	勝緑寺やぐら群	174	安国寺跡	197	法性寺跡	330	尾藤谷やぐら群
111	法泉寺谷やぐら群	175	保寧寺跡	198	清水寺跡	374	宝蓮寺跡
						397	建長寺旧境内遺跡

第二章　調査の概要

第１節　調査の経緯と経過

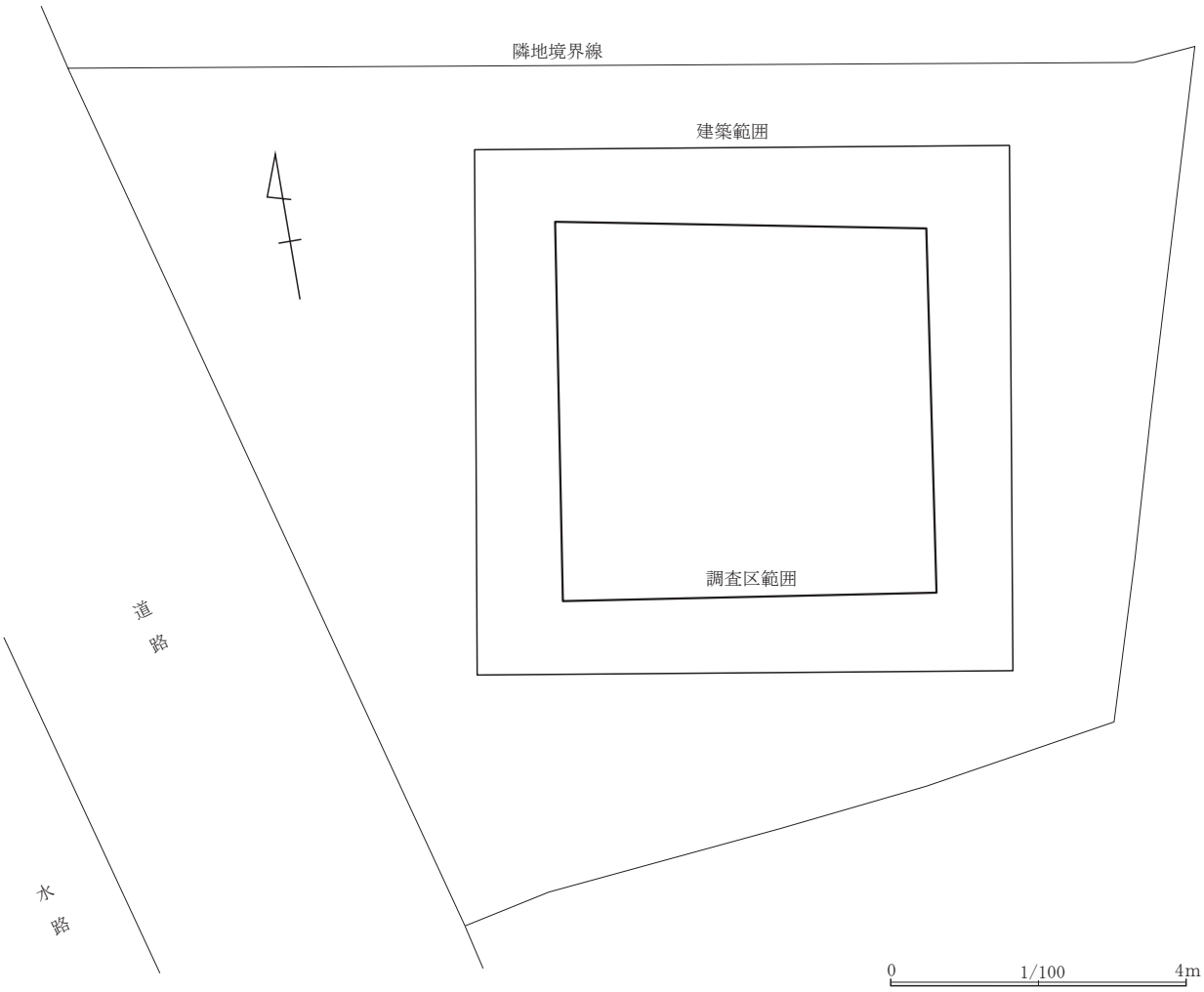


図２　調査区と建築範囲

本調査は、個人専用住宅建設に伴う柱状改良工事を原因とし、事前の記録保存を目的として鎌倉市教育委員会が実施した。建設計画では、49㎡の建築範囲内に地表下4.5mまで柱状改良工事を行う申請があり、平成20年9月17日に遺跡確認（試掘）調査を建築予定範囲内６㎡を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。その結果、地表下54～180cmまでに3時期以上の遺構面を確認したため、事前の記録保存の必要があると判断し、発掘調査の実施に至った。調査区は鎌倉市教育委員会文化財課の判断で隣地境界線から安全な距離をとり、建築範囲内25㎡を対象として設定した（図2）。

平成21年2月13日に担当者立会いの下、重機による表土掘削を行い、確認調査の結果を参考に地表下50cmほどで中世遺構面を確認した。その後、湧水などの影響による危険性などを踏まえ、人力による作業で調査を進行し、測量・写真撮影などの記録保存を行った。また、掘削残土は敷地内で処理していたが、5面調査途中に以降の残土量や地表からの深さを想定した結果、調査範囲を狭めていき、平成21年4月10日に現地での全調査工程を終了した。

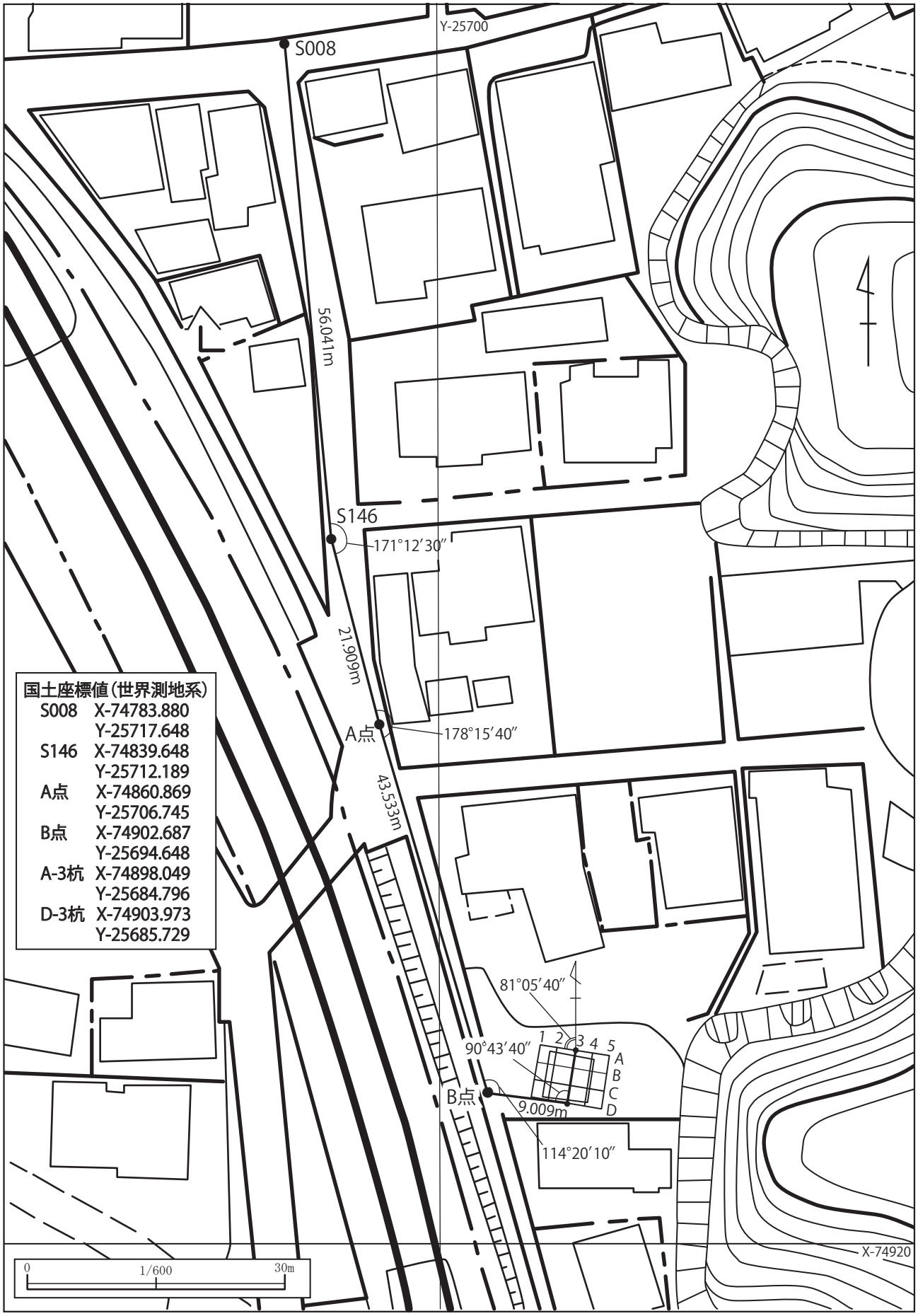

Y-25700
S008
56.041m
S146
171°12′30″
21.909m
A点
178°15′40″
43.533m
国土座標値（世界測地系）
S008 X-74783.880
Y-25717.648
S146 X-74839.648
Y-25712.189
A点 X-74860.869
Y-25706.745
B点 X-74902.687
Y-25694.648
A-3杭 X-74898.049
Y-25684.796
D-3杭 X-74903.973
Y-25685.729
81°05′40″
90°43′40″
1 2 3 4 5
A
B
C
D
B点
9.009m
114°20′10″
X-74920
0
1/600
30m

図３　国土座標位置図

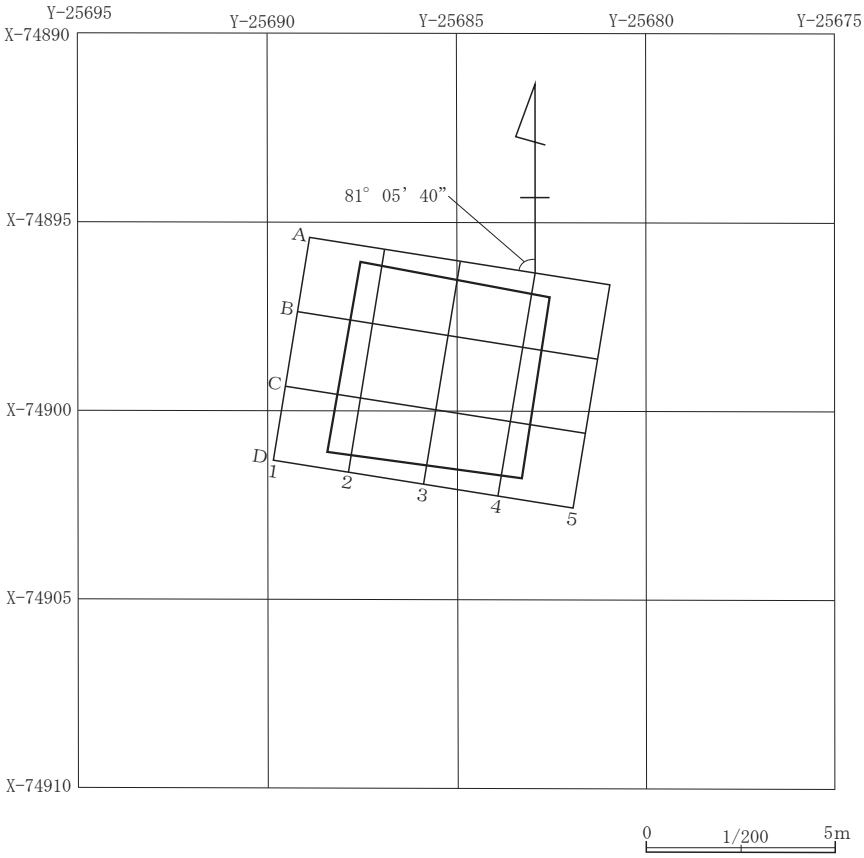


図４　国土座標とグリッド配置図

以下、作業経過を抜粋した。

2月13日（金）　重機による表土掘削。

2月16日（月）　機材搬入。

2月17日（火）　調査区に測量用の任意グリッドを設定。鎌倉市三級基準点及び4級基準点より標高値と国土座標値を測量杭に移動。

2月19日（木）　1面全景・個別写真撮影。全測図実測。

2月24日（火）　2面全景・個別写真撮影。全測図実測。

3月 5日（木）　3面全景・個別写真撮影。全測図実測。

3月11日（水）　4a面全景・個別写真撮影。全測図実測。

3月13日（金）　4b面全景・個別写真撮影。全測図実測。

3月19日（木）　5面全景・個別写真撮影。全測図実測。

3月26日（木）　6面全景・個別写真撮影。全測図実測。

4月 1日（水）　7面全景・個別写真撮影。全測図実測。

4月 2日（木）　7面溝1の延長を確認するため北壁部分にトレンチ掘削実施。

4月 6日（月）　8面全景・個別写真撮影。全測図実測。東・西・南壁の土層堆積写真撮影。調査区南西部を深掘り。

4月 7日（火）　8面下トレンチ写真撮影。全測図実測。東・西・南壁の土層堆積実測。

4月 8日（水）　東・西・南壁の土層堆積実測。

4月10日（金）　現地調査終了。機材撤収。

第２節　調査における測量方法

本発掘調査における測量は、調査区に沿った任意の２ｍ方眼軸を設けたため、国土座標上の方眼軸とは不一致である。測量開始に先行して調査区南にＤ－３杭、北にＡ－３杭を調査測量基準点として設定した（図3）。調査地西側を南北に走る道路に設置してある鎌倉市４級基準点S008とS146を用いて、調査測量基準点に国土座標上の数値を移動した。南北軸線には北方からアルファベットＡ～Ｄ、東西軸線には西方から算用数字の１～５を付してグリッド設定を行った。グリッド東西軸線は真北からＮ－81°05′40″－Ｗの傾きを測る。

国土座標値は、現地調査時において日本測地系（座標系AREA9）を用いて測量を行った。整理作業段階において国土地理院ホームページに設置されている座標変換ソフト『web版TKY2JGD』により世界測地系第Ⅸ系の座標数値へ変換したものを図３に記し、調査区・任意グリッドと国土座標軸の詳しい位置関係は図４に示した。標高値は、調査地点より南に400ｍほどの位置、鎌倉市扇ガ谷一丁目71－４番地先に設置してある鎌倉市三級基準点№53213＝標高8.378ｍを基に移設した。なお、図１・３で提示した地図は鎌倉市が所有する都市基本計画図（2004年発行）を使用している。

第３節　堆積土層

調査区東・西・南壁の土層観察を行い、図５に示した。調査段階での現地表は標高12.20ｍを測り、表土とした現代の盛土が10cm、厚い部分で30cmほど堆積していた。1面確認まで表土と中世遺物包含層が40～60㎝堆積しており、その下に22～36層の多種な土壌によって構成される1面が拡がる。北側は道路状遺構の堆積層であり、やや弱い部分もあるが全体に泥岩を固めて構築された弱粘質土層である。2面は道路状遺構以外の堆積層が粘質土になり、主に37層が拡がっていた。64～70層の上面が3面となり、北西部にやや強く版築された層が拡がるのを確認した。4b面は74～76・78～82層などの複数の堆積層から構成され、それらの直上に72層などが部分的に拡がって地業されているのが4a面となる。両面は10cmほどの間隔がある。南側は3面溝1に削平されているので両面とも遺構の拡がりなど詳細は不明である。5面は95層とした暗青灰色泥岩層が調査区内に拡がりをみせる。5面より10cmほど掘り下げると101層である30～50cm大の泥岩を多量に含む暗青灰色泥岩層が堆積していた。101層を中心とするその上面が６面になる。101層は最大70cmの厚さを確認し、6面以下より東・南壁に沿って調査区を縮小した中で、101層を除去すると102層とする木器層が調査区範囲内で確認できた。102層は木端・木片が主体で、木製品も多量に含む黒褐色粘質土である。その102層が10cmほどの厚さで7面である104層の直上に堆積していた。7面を構成する104層は、泥岩粒少量、炭化物・貝砂・かわらけ粒を僅かに含む暗茶褐色粘質土で、中世基盤層の直上に堆積する。8面は泥岩粒を微量に含む107層である中世基盤層上にある。以下、調査区南東部のトレンチにより土層を観察した結果、奈良・平安時代の遺物を含む土層を確認した。109層から中世以前の層位であり、111･112は砂質土となり、地表下3.3ｍ、標高9.00ｍで112層である混入物の含まない灰褐色砂質土までの堆積を確認した。

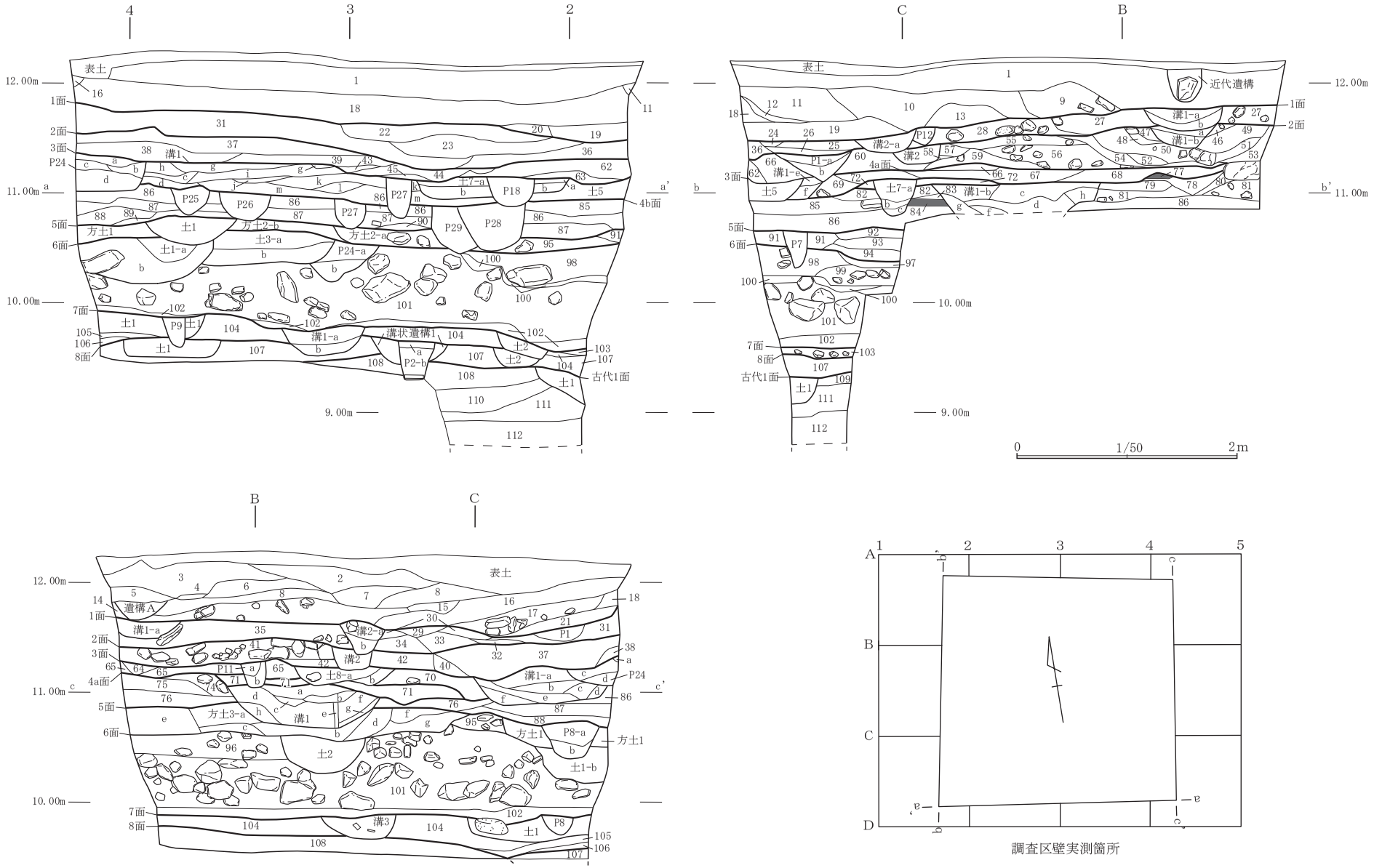

表土
近代遺構
遺構A
溝1
溝1-a
溝1-b
溝1-e
溝2
溝2-a
溝3
溝状遺構1
方土1
方土2-a
方土2-b
方土3-a
土1
土1-a
土1-b
土2
土5
土7-a
土8-a
P1
P1-a
P2-b
P7
P8
P8-a
P9
P11
P12
P18
P24
P24-a
P25
P26
P27
P28
P29
1面
2面
3面
4a面
4b面
5面
6面
7面
8面
古代1面
12.00m
11.00m
10.00m
9.00m
0
1/50
2m
調査区壁実測箇所

図５　調査区土層堆積図

土層説明（図５）

1．茶褐色土：泥岩（20cm）含み、泥岩粒多量。締まり若干あり。
2．茶褐色土:泥岩(7 ～ 10cm)多く、泥岩粒少量。締まりややあり。
3．茶褐色土：泥岩粒多く、かわらけ粒少量。締まり若干あり。
4．茶褐色土：泥岩粒少量。締まりややあり。
5．茶褐色土：泥岩（1 ～ 3cm）・泥岩粒中量、かわらけ片少量。締まりややあり。
6．茶褐色土:泥岩(5 ～ 7cm)多く、炭化物少量。締まりややあり。
7．茶褐色土：泥岩（5cm）含み、泥岩粒中量、かわらけ粒少量。締まり若干あり。
8．茶褐色土：泥岩粒中量、かわらけ粒微量。締まりややあり。
9．茶褐色土：泥岩（10 ～ 20cm）・泥岩粒多量、かわらけ粒微量。締まりあり。
10. 茶褐色土：泥岩粒多く、かわらけ粒少量。締まりややあり。
11. 茶褐色土：泥岩粒多い。締まりあり。
12. 茶褐色土：泥岩粒中量、炭化物少量。締まりなし。
13. 茶褐色弱粘質土：泥岩（1 ～ 3cm）・泥岩粒少量、炭化物微量。締まりなし。
14. 茶褐色土：泥岩（5 ～ 15cm）多量。締まりあり。
15. 茶褐色土：泥岩粒・かわらけ粒少量。締まり若干あり。
16. 茶褐色土：泥岩粒多量、かわらけ中量、締まりややあり。
17. 茶褐色土：泥岩（10 ～ 20cm）・泥岩粒多量。締まりあり。
18. 茶褐色土：泥岩粒中量、かわらけ粒微量。締まりややあり。
19. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物中量、かわらけ粒少量。締まり若干あり。
20. 茶褐色弱粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒多量、小石少量。締まりあり。
21. 茶褐色土：泥岩粒・炭化物少量。締まりなし。
22. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物少量、かわらけ粒微量、粗砂多く、締まり若干あり。
23. 茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物中量、粗砂わずかに含み、締まりややあり。
24. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量、小石微量、締まりややあり。
25. 暗褐色弱粘質土：泥岩層。泥岩（5 ～ 7cm）・泥岩粒多量、小石少量。締まりあり。
26. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒中量、かわらけ粒少量。締まりなし。
27. 暗褐色弱粘質土：泥岩（5 ～ 10cm）・泥岩粒多く、かわらけ粒少量。締まりあり。
28. 茶褐色弱粘質土：泥岩（15 ～ 20cm）・泥岩粒多量、炭化物・かわらけ粒少量、小石微量。締まり若干あり。
29. 茶褐色土：泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒わずかに含む。締まり若干あり。
30. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1cm）・泥岩粒中量、かわらけ粒少量。締まりややあり。
31. 茶灰色粘質土：泥岩粒・炭化物少量。締まりややあり。
32. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒微量。締まり若干あり。
33. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、炭化物・かわらけ粒少量。締まりややあり。
34. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒多く、泥岩（1 ～ 3cm）少量、かわらけ粒わずかに含む。締まり若干あり。
35. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒多量、炭化物・かわらけ粒少量。締まり若干あり。
36. 茶灰色粘質土：炭化物中量、泥岩粒・かわらけ粒微量。粘性強く、締まりややあり。
37. 黄茶褐色粘質土：泥岩（3cm）・泥岩粒中量、炭化物多量、かわらけ片粒少量。締まりなし。
38. 黄茶褐色粘質土:泥岩粒・炭化物中量、かわらけ粒・褐鉄粒少量。締まり若干あり。
39. 茶灰色粘質土：泥岩粒・炭化物多く、黄茶褐色粘土ブロック多量。締まり若干あり。
40. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1cm）・泥岩粒多く、かわらけ片・炭化物少量。締まり若干あり。
41. 茶褐色弱粘質土：泥岩（15 ～ 20cm）・泥岩粒多量、炭化物・かわらけ粒微量。締まりややあり。
42. 暗褐色弱粘質土:泥岩粒中量、かわらけ粒少量。締まりややあり。
43. 茶灰色粘質土：泥岩粒・かわらけ粒少量。締まり若干あり。
44. 茶灰色粘質土：泥岩粒・炭化物多く、かわらけ片少量、締まりあり。
45. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒微量。締まりなし。
46. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量。締まりなし。
47. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量。締まりややあり。
48. 暗褐色粘質土:泥岩(15cm)含み、泥岩粒少量。粘性非常に強い。締まりややあり。
49. 暗褐色弱粘質土：泥岩（5 ～ 10cm）多量。締まりややあり。
50. 暗褐色弱粘質土：泥岩（10 ～ 20cm）多く、泥岩粒多量。締まりあり。
51. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多く、締まりあり。
52. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物少量。締まりなし。
53. 暗褐色弱粘質土：泥岩（10cm）・泥岩粒多量。締まりあり。
54. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量。締まりややあり。
55. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量。締まりなし。
56. 茶褐色弱粘質土：泥岩（10 ～ 15cm）・泥岩粒多量、粗砂多い。締まりややあり。
57. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒少量、炭化物ごく微量。締まりなし。
58. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物微量。締まりなし。
59. 暗褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物多く、かわらけ粒少量、暗褐色粘土ブロック多く混じる。締まり若干あり。
60. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒多く、炭化物少量、かわらけ片微量、細砂利多く混じる。締まりややあり。
61. 青灰色弱粘質土：泥岩粒・炭化物中量、かわらけ粒少量。締まり若干あり。
62. 茶褐色粘質土：木片若干含む。締まりなし。
63. 茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物多量。締まりなし。
64. 暗青灰色粘質土:泥岩粒・炭化物多量、細砂利少量。締まりなし。
65. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1cm）・泥岩粒多く、かわらけ片・炭化物少量。締まり若干あり。
66. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物・木片微量。粘性強く、締まりややあり。
67. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1 ～ 5cm）・泥岩粒多く、炭化物・かわらけ粒少量。締まりあり。
68. 暗褐色弱粘質土：泥岩（3cm）・泥岩粒・炭化物多く、かわらけ片粒微量、細砂少量。締まりややあり。
69. 暗褐色砂質土:泥岩粒多く、かわらけ粒微量。締まりややあり。
70. 茶褐色弱粘質土：泥岩（13cm）含み、泥岩粒中量、かわらけ片少量。締まりあり。
71. 暗褐色粘土：泥岩粒微量、炭化物少量。締まりなし。
72. 暗褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物少量。締まりあり。
73. 暗褐色弱粘質土：泥岩（3cm）・泥岩粒少量、炭化物微量。締まりややあり。
74. 暗青灰色粘質土：泥岩（10 ～ 15cm）含み、泥岩粒少量、細砂利多量。締まりなし。

75. 暗青灰色粘質土：泥岩粒・細砂利多量、かわらけ粒少量、締まりなし。
76. 暗茶褐色粘質土：泥岩（5 ～ 10cm）・泥岩粒中量、かわらけ片・木片少量、粗砂多く含む。締まりなし。
77. 炭化物層
78. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物多量。締まりなし。
79. 暗褐色弱粘質土：泥岩（5 ～ 7cm）多量。締まりあり。
80. 暗褐色弱粘質土：泥岩（5 ～ 7cm）中量。締まり若干あり。
81. 暗褐色弱粘質土：泥岩（7 ～ 10cm）中量、泥岩粒多く、炭化物少量。締まりなし。
82. 暗褐色弱粘質土：泥岩（10 ～ 15cm）・泥岩粒多く、炭化物・かわらけ粒少量。締まり若干あり。
83. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒多く、炭化物・かわらけ粒少量。締まり若干あり。
84. 炭化物層
85. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1 ～ 3cm）・泥岩粒多量、炭化物微量。締まりあり。
86. 暗茶褐色粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒多く、炭化物少量、粗砂若干含む。締まりあり。
87. 暗青灰色弱粘質土：泥岩（1 ～ 5cm）・泥岩粒多量、かわらけ粒少量、炭化物わずかに含む。締まりあり。
88. 暗茶褐色粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒中量。締まりややあり。
89. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒・木片微量。締まりあり。
90. 暗青灰色砂質土：泥岩粒・貝砂多く、木端少量。粘性あり。締まりややあり。
91. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒・木端少量。締まりなし。
92. 暗青灰色砂質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒多量。粘性若干あり。締まりあり。
93. 暗青灰色砂質土：泥岩（5 ～ 7cm）多量。締まりあり。
94. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量。粘性強く、締まり非常に強い。
95. 暗青灰色泥岩層：泥岩（5 ～ 10cm）中量、炭化物微量。締まりあり。
96. 暗青灰色粘質土：泥岩（10 ～ 30cm）多量。締まりあり。
97. 暗青灰色泥岩層：泥岩（3 ～ 5cm）・粗砂多量に混じる。締まりあり。
98. 暗青灰色泥岩層：泥岩（5 ～ 15cm）多量、暗茶褐色粘土ブロック多く混じる。締まりあり。
99. 暗青灰色粘質土：泥岩（5 ～ 15cm）多く、木端微量。締まりややあり。
100. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量。締まりややあり。
101. 青灰色泥岩層：泥岩（30 ～ 50cm）多量。締まり若干あり。
102. 黒褐色粘質土：泥岩粒・貝片少量、木端・木片・木製品多量。締まりあり。
103. 黒褐色粘質土：泥岩（7 ～ 10cm）・泥岩粒少量、木片・木端多量。締まりなし。
104. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・貝砂・かわらけ粒わずかに含む。締まり非常に強い。
105. 黒褐色粘質土：泥岩粒微量。締まりあり。
106. 青灰色粘質土：泥岩粒多量、粗砂少量。締まり若干あり。
107. 黒褐色粘質土：泥岩粒微量。締まり若干あり。
108. 灰褐色粘質土：泥岩粒少量。締まりあり。
109. 黒褐色粘質土：泥岩粒少量。締まりあり。
110. 灰褐色粘質土：泥岩粒少量。締まり非常に強い。
111. 灰褐色砂質土：黒褐色粘土ブロック多く混じる。締まり非常に強い。
112. 灰褐色砂質土：混入物なし。粘性・締まり共にあり。

遺構土層説明（図５）

近代遺構. 茶褐色土：泥岩（20cm）含み、泥岩粒多量。締まり若干あり。
遺構A. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、炭化物微量。締まりなし。
1面溝1－a. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物微量。締まり若干あり。
1面溝1－b. 暗褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物・かわらけ片粒少量。締まりなし。
1面溝2－a. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、かわらけ粒少量、小石微量。締まりややあり。
1面溝2－b. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、かわらけ粒少量、砂利ごく微量。締まりなし。
1面Ｐ12. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒中量、かわらけ粒少量、締まりややあり。
2面溝1－a. 茶褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物微量。締まり若干あり。
2面溝1－b. 暗褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物・かわらけ片粒少量。締まりなし。
2面溝2. 茶褐色粘質土：泥岩粒・かわらけ片少量、粗砂多く含む。締まりなし。
2面Ｐ1－a. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1cm）・泥岩粒中量、炭化物・かわらけ粒少量、粗砂多く、締まり若干あり。
2面Ｐ1－b. 茶灰色粘質土：泥岩粒少量、炭化物多く含む。粘性強く、締まりややあり。
3面溝1－a. 暗褐色粘質土：泥岩粒・木端少量。締まりややあり。
3面溝1－b. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、木端・かわらけ粒中量、細砂多く含む。締まりなし。
3面溝1－c. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物少量、粗砂多量。締まりなし。
3面溝1－d. 暗褐色粘質土：泥岩（1 ～ 3cm）少量、木端混じる。締まりややあり。
3面溝1－e. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物中量、粗砂多く、締まりなし。
3面溝1－f. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、泥岩（3cm）微量。締まり若干あり。
3面溝1－g. 茶褐色粘土：混入物なし。締まりなし。
3面溝1－h. 茶灰色粘質土：泥岩粒・炭化物・黄茶褐色砂ブロック少量。締まり若干あり。
3面溝1－i. 茶灰色粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・かわらけ片少量、泥岩粒・炭化物・黄茶褐色砂ブロック多く含む。締まり若干あり。
3面溝1－j. 暗褐色粘質土：泥岩（1 ～ 3cm）・かわらけ片少量。締まりややあり。
3面溝1－k. 暗褐色粘質土：泥岩（3cm）・泥岩粒・かわらけ粒少量、炭化物多く、細砂多量。締まりややあり。
3面溝1－l. 暗褐色粘質土：泥岩（7cm）含み、かわらけ片粒中量、炭化物多く、木片少量。締まりややあり。
3面溝1－m. 暗褐色弱粘質土：泥岩（1 ～ 3cm）・泥岩粒多量、炭化物微量。締まりあり。
3面土坑5. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物中量、粗砂多く、締まりなし。
3面土坑7－a. 暗褐色粘質土：泥岩粒微量、炭化物・木端多く、締まり若干あり。
3面土坑7－b. 暗褐色粘質土：泥岩粒少量、木片・炭化物微量、粗砂多量。締まりなし。

3面土坑8－a．暗褐色弱粘質土:泥岩（5 ～ 13cm）少量、泥岩粒中量、かわらけ粒微量。締まりややあり。
3面土坑8－b．暗褐色弱粘質土：泥岩粒・木片少量、炭化物微量。締まりややあり。
3面Ｐ 11－a．暗褐色弱粘質土：泥岩粒・かわらけ片少量、木端わずかに含む。締まりなし。
3面Ｐ 11－b．暗褐色粘質土:泥岩粒・小石・茶褐色粘土ブロック少量。締まりなし。
3面Ｐ 18．暗褐色粘質土：泥岩粒多く、かわらけ粒・粗砂少量。締まりなし。
3面Ｐ 24－a．茶灰色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・黄茶褐色粘土ブロック多く含む。締まりなし。
3面Ｐ 24－b．茶灰色粘質土：泥岩粒・炭化物・かわらけ粒少量。締まりなし。
3面Ｐ 24－c．茶灰色粘質土:泥岩粒・かわらけ粒少量、炭化物中量、細砂多量。締まりややあり。
3面Ｐ 24－d．茶褐色粘質土：泥岩粒・炭化物少量。締まりなし。
3面Ｐ 27．暗褐色粘質土：泥岩粒・かわらけ片粒少量、粗砂多く、木端・小石微量。締まりなし。
4a面土坑7－a．暗褐色粘質土：泥岩粒中量、かわらけ片粒多く、締まりなし。
4a面土坑7－b．暗褐色粘質土：泥岩粒・木片少量、炭化物・かわらけ片多く、玉石多量。締まりなし。
4a面土坑7－c．暗褐色粘質土:泥岩粒少量、炭化物多量、木端微量。締まりなし。
4b面溝1－a．暗褐色粘質土：泥岩粒多量、粗砂多く、木片少量。締まりなし。
4b面溝1－b．暗褐色粘質土:泥岩粒・炭化物・かわらけ粒・木片少量。締まりなし。
4b面溝1－c．暗褐色粘質土：泥岩（3cm）・泥岩粒中量、細砂多量、かわらけ粒少量。締まりなし。
4b面溝1－d．暗褐色粘質土:泥岩粒中量、木片・木端少量、細砂多量。締まりなし。
4b面溝1－e．暗褐色粘質土：泥岩粒多量。板材の痕跡。
4b面溝1－f．暗褐色粘質土:泥岩粒少量、粗砂多量。締まり若干あり。
4b面溝1－g．暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物・かわらけ片少量、細砂多く含む。締まりややあり。
4b面溝1－h．暗褐色粘質土：泥岩（10 ～ 20cm）・泥岩粒多量、炭化物少量。締まりあり。
4b面Ｐ 25．暗褐色弱粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒多量、炭化物少量。締まり若干あり。
4b面Ｐ 26．暗褐色弱粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒多量、かわらけ粒少量、炭化物わずかに含み、締まりあり。
4b面Ｐ 27．暗褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物多量、粗砂多く、かわらけ粒微量。締まりなし。
4b面Ｐ 28．暗褐色粘質土：泥岩粒・木片・細砂利少量、炭化物多量。締まりなし。
4b面Ｐ 29．暗褐色粘質土：泥岩（7 ～ 10cm）・泥岩粒多く、炭化物中量、木端少量。締まりなし。
5面方形土坑1．暗茶褐色粘質土:泥岩（5cm）・小石少量、泥岩粒多く、粗砂多量。締まりややあり。
5面方形土坑2－a．暗青灰色粘質土：泥岩粒少量、炭化物多く、木片含む。締まりなし。
5面方形土坑2－b．暗茶褐色粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒少量、木片・木端多量、茶褐色粘土ブロック多く混じる。締まりなし。
5面方形土坑3－a．暗茶褐色粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒中量。締まり若干あり。
5面方形土坑3－b．暗茶褐色粘質土:泥岩（1 ～ 3cm）少量、貝粒中量、木端わずかに含む。締まりなし。
5面方形土坑3－c．暗茶褐色粘質土:泥岩粒少量。締まり若干あり。
5面方形土坑3－d．暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量、木片・木端多く、茶褐色粘土ブロック多量。締まりなし。
5面方形土坑3－e．暗青灰色砂質土：泥岩粒多量、小石・炭化物少量。締まりややあり。
5面方形土坑3－f．暗茶褐色粘質土：泥岩（1 ～ 5cm）・泥岩粒多く、炭化物少量。締まりあり。
5面方形土坑3－g．暗茶褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物多く、締まり若干あり。
5面土坑1．暗茶褐色粘質土:泥岩（3 ～ 7cm）・泥岩粒多量、木片少量。締まりなし。
5面Ｐ 7．暗茶褐色粘質土：泥岩（5 ～ 10cm）多量、炭化物少量。締まりなし。
5面Ｐ 8－a．明茶褐色粘質土：炭化物・木片多く含む。締まりなし。
5面Ｐ 8－b．暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量、木端わずかに含む。締まりややあり。
6面土坑1－a．暗青灰色粘質土：泥岩（1 ～ 3cm）・泥岩粒中量、かわらけ粒少量。締まりなし。
6面土坑1－b．暗青灰色粘質土：泥岩（5 ～ 10cm）・泥岩粒多く、かわらけ片わずかに含む。締まり若干あり。
6面土坑2．暗茶褐色粘質土：貝粒多量。締まりなし。
6面土坑3－a．暗青灰色粘質土:泥岩（3 ～ 5cm）少量、泥岩粒中量、粗砂多量。締まりややあり。
6面土坑3－b．暗茶褐色粘質土:泥岩（7 ～ 10cm）少量、泥岩粒多く、かわらけ粒微量。締まりややあり。
6面Ｐ 24－a．暗茶褐色粘質土：泥岩粒・かわらけ片・細砂少量、炭化物多量。締まりなし。
6面Ｐ 24－b．暗茶褐色粘質土:泥岩粒・かわらけ片少量、細砂多量。締まり若干あり。
7面溝1－a．暗茶褐色粘質土：泥岩粒少量、貝片・かわらけ粒・粗砂・木片多量。締まりなし。
7面溝1－b．暗茶褐色粘質土：泥岩（3 ～ 5cm）・泥岩粒少量、木片・木端多量、茶褐色粘土ブロック多く混じる。締まりなし。
7面溝3．暗茶褐色粘質土:木片・貝片多く、泥岩粒少量。締まりなし。
7面土坑1．灰褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物微量。締まりなし。
7面土坑2．暗茶褐色粘質土:泥岩粒・炭化物・木端少量。締まりなし。
7面Ｐ 8．黒褐色粘質土：泥岩粒・貝砂・炭化物少量。締まりなし。
7面Ｐ 9．暗茶褐色粘質土：炭化物・かわらけ片少量。締まり非常に弱い。
8面溝状遺構1．黒褐色粘質土：泥岩粒・貝砂少量、炭化物・木端・木片中量、細砂若干含む。締まりなし。
8面土坑1．黒褐色粘質土：泥岩粒中量、炭化物・木片少量。締まりなし。
8面土坑2．黒褐色粘質土：泥岩粒・細砂・炭化物少量。締まり若干あり。
8面Ｐ 2－a．青灰色砂質土：炭化物中量、貝砂・木端少量。粘性あり。締まりなし。
8面Ｐ 2－b．黒褐色粘質土：泥岩粒少量、細砂多量。締まりなし。
古代1面土坑1．黒褐色粘質土：泥岩粒・貝片・かわらけ粒微量。締まり若干あり。

第三章　検出遺構と出土遺物

本調査では9時期に亘る遺構面と古代の遺物を確認した。遺構総数は道路状遺構2、溝9条、溝状遺構1条、囲炉裏1基、方形土坑5基、土坑35基、ピット111基を検出した。

本報中において、遺構に付した名称は調査時に便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関係するものではない。また、図示できなかった遺物は認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を一個体とする形で、層位と遺構（各面一括）の出土箇所を分けて表18にまとめた。なお、各遺構の説明にあたっては図示できる出土遺物がある遺構を優先し、そのほかの遺構については概略として、各節中に表示した。

第１節　１面の遺構と遺物

地表面より40 ～ 60㎝掘り下げ、標高11.70 ～ 11.50ｍの位置に泥岩版築層が拡がる遺構面である。道路状遺構1基、溝2条、土坑2基、ピット11基を検出した（図7）。調査区中央から北側にかけて東西方向の道路状遺構と溝2条を確認している。南側では疎らに炭化物が混じり拡がる範囲と、土坑・ピットが掘り込まれている状況である。

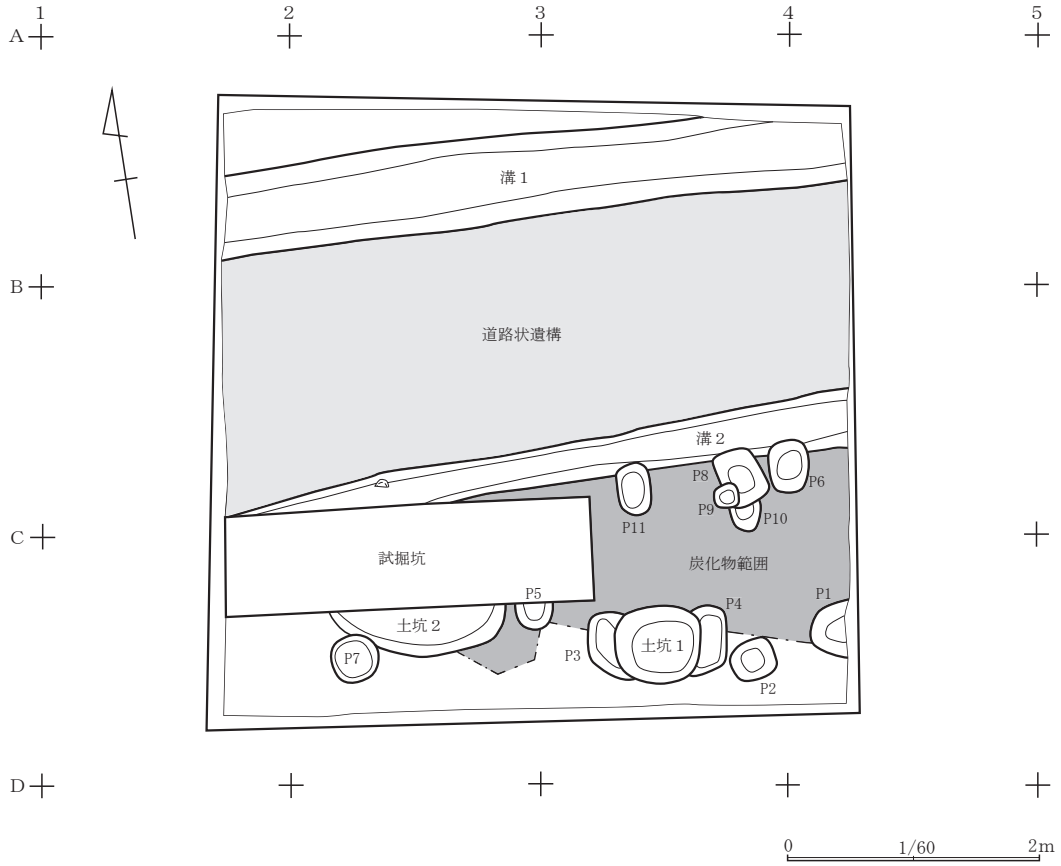


図６　１面全測図

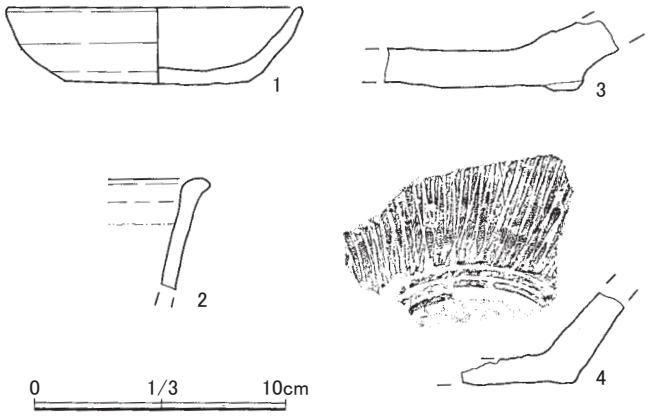


図７　試掘坑出土遺物

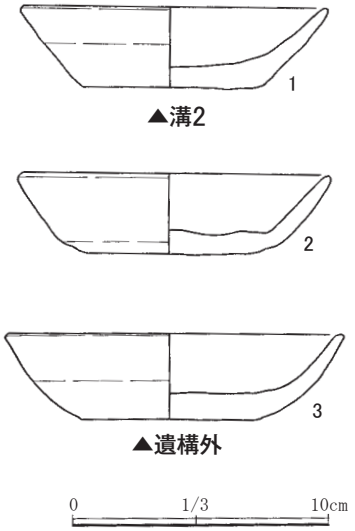


図８　１面溝２・遺構外出土遺物

表２　１面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	規模（cm）			備考／重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑1	隅丸方形	11.56	11.33	60	67	23	－
土坑2	不明	11.52	11.37	38	150	15	試掘坑により削平
P1	不明	11.59	11.51	44	26	8	調査区外に拡がる
P2	方形	11.58	11.48	29	36	10	－
P3	不明	11.53	11.45	57	22	8	土坑1により削平
P4	不明	11.56	11.47	54	21	9	土坑1により削平
P5	不明	11.52	11.37	23	23	15	試掘坑により削平
P6	不整円形	11.50	11.36	42	33	14	溝2を削平
P7	円形	11.48	11.38	38	38	10	土坑2を削平
P8	方形	11.47	11.37	46	34	10	P9により削平
P9	円形	11.50	11.43	21	19	7	P8を削平
P10	不明	11.52	11.43	25	20	9	P8により削平
P11	不整円形	11.52	11.48	41	27	4	溝2を削平

道路状遺構（図7、図版1）

Ｃラインから北側、東西は調査区外に拡がり、両脇に溝を伴う状況で検出した。主軸方位はN－90°－Wと真北に直交している。確認できた規模は、長さ500×幅164～198cm、検出標高は上面で北側11.65ｍ前後、南側では11.55ｍ前後、南側に向かいやや傾斜がある。図5－27・28・35層などの、5～20cm大の泥岩を主体に版築されており、土塁の基礎部分の可能性も考えられる。出土遺物は上面までが中世遺物包含層であったが、確認はできなかった。

溝１・２（図7、図版1）

両遺構は道路状遺構の北側に接して並行する。主軸方位は道路遺構と同じで、溝1の掘り方の規模は、長さ500×幅49～58×底面幅30～44×深さは10～15cmである。検出標高は11.65ｍ、底面標高は11.44～11.59ｍで東から西に向かい緩く傾斜する。覆土は2層に分けられ、茶褐色弱粘質土が主体である。図示できる遺物は認められなかった。

溝2は道路状遺構の南側で検出した。溝1と同じの主軸方位である。西端部は試掘坑に削平されているが、土層観察から延長がわかっている。また、ピット6・8・11にも削平を受けている。掘り方の規模は、長さ500×幅29～47㎝×底面幅15～28×深さ15～20㎝である。検出標高は11.52～11.60ｍ、底面標高は11.37～11.45ｍで溝1と同様に西に向かい緩い傾斜をもつ。覆土は2層で、茶褐色弱粘質土中に砂利や小石を含む。出土遺物は、轆轤かわらけ1点を図示した。

試掘坑・1面遺構外出土遺物（図6・8、表10、図版9）

試掘坑出土遺物は、一度埋め戻された中に含まれていた遺物である。合計33点とやや多い傾向があるが、試掘坑範囲外の遺物も混じっている可能性はある。1はかわらけ中皿の完形品、2は近代の瀬戸系植木鉢、3は常滑甕の底部片、4は内底部に周回する3条以上の擂目がある備前系擂鉢である。

1面遺構外は表土直下から1面上面までに出土した遺物を一括した。かわらけ、瀬戸、常滑、火鉢、銅銭など総数164点を数えた。いずれも小破片により図示し得るに至らなかったため、かわらけ大皿2点を図示した。

第2節　2面の遺構と遺物

1面より10㎝ほど掘り下げた段階で、道路状遺構の直下に同様の泥岩版築面を検出したため、これを2面として捉えた。調査・確認作業を行い、地表下70～80cm、標高11.50ｍ付近で検出した（図9）。2面までの掘り下げ段階中に出土した遺物は確認できなかった。また、当面に至るまで北・東壁から湧水を確認したため、試掘坑に流れるよう三方に水抜き側溝を設定した。

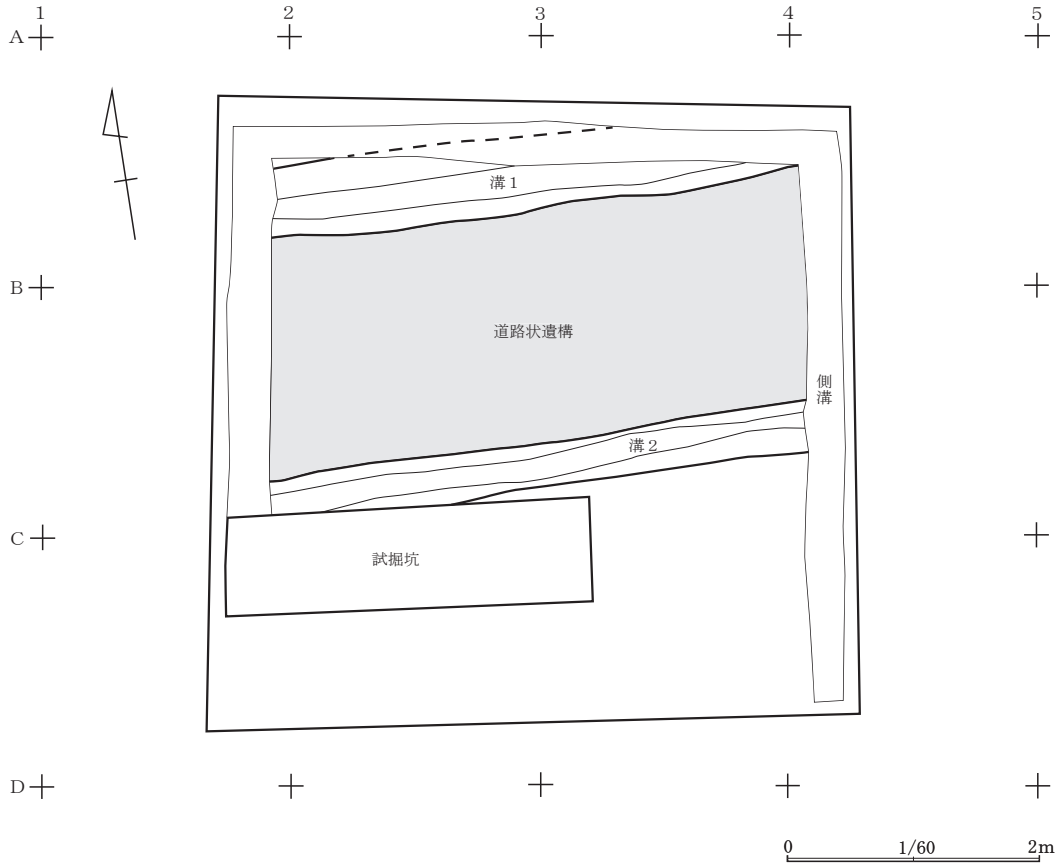
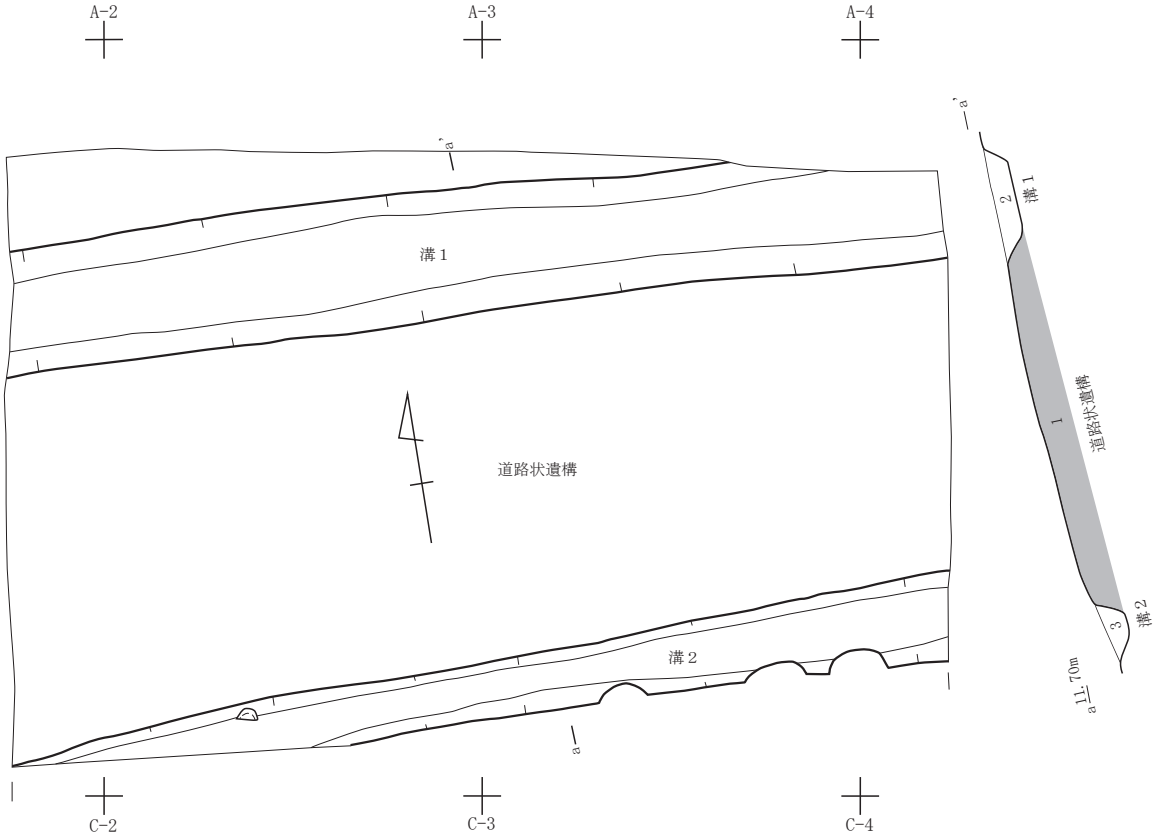


図9　2面全測図



道路状遺構　１．茶褐色弱粘質土：泥岩（15～20㎝）・泥岩粒多量、炭化物・かわらけ粒微量。締まりあり。
溝１　２．茶褐色弱粘質土：泥岩（3～5㎝）中量、炭化物・かわらけ粒少量、やや粗砂含み、締まりなし
溝２　３．茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物・かわらけ粒微量、締まりなし

0　1/40　2m

図10　２面道路状遺構、溝１・２

道路状遺構（図9・10）

Ｃラインから北側、東西は側溝により削平したが、調査区外に拡がる状況で検出した。両脇に溝を伴うことも上面の道路状遺構と同様である。確認できた規模は、長さ425×幅175～180㎝、全体に標高11.50ｍと平坦で溝際はやや傾斜がある。主軸方位も１面道路状遺構と変わらずＮ－90°－Ｗである。当遺構は溝も含め、１面時よりも全体的に30㎝ほど北に位置する。図5－41層が主体で構築されている。出土遺物は、かわらけ大皿3点が出土しているが、いずれも小破片のため図示し得るには至らなかった。

溝１・２（図9・10）

両遺構ともに上面で検出した同様の遺構である。溝1は道路状遺構の北側に接して並行する。掘り方の規模は、長さ450×幅55～60×底面幅20×深さは9～15㎝である。検出標高は11.55ｍ、底面標高11.40ｍ前後である。断面形は浅鉢形で底部平坦に掘られている。覆土は2層に分けられ、茶褐色弱粘質土と暗褐色粘質土が堆積する。出土遺物は、かわらけ大皿2点が出土しているが、小破片のため図示し得るには至らなかった。

溝2は道路状遺構の南側で検出し、西部は試掘坑に削平されている。掘り方の規模は、長さ432×幅34～40×底面幅10～20×深さは13～20㎝である。検出標高は11.40～11.50ｍ、底面標高は11.22～11.35ｍで西に向かい僅かに傾斜をもつ。断面形はＵ字状で、溝1に比べ、細く深く掘られている様相であり、道路状遺構の傾斜から推察すると水捌け要素が強かったと思われる。覆土は粗砂を多く含む茶褐色粘質土が堆積している状況であった。出土遺物は、かわらけ、常滑甕片などが出土しているが小破片のため、図示不可能であった。

第３節　３面の遺構と遺物

地表下約100cm、標高11.20ｍ付近に泥岩版築された比較的良好な遺構面に、溝１条、土坑７基、ピット27基を発見した。南側には溝が土坑等に削平されているため、少なくとも当遺構面は二時期の遺構が確認できた（図11）。

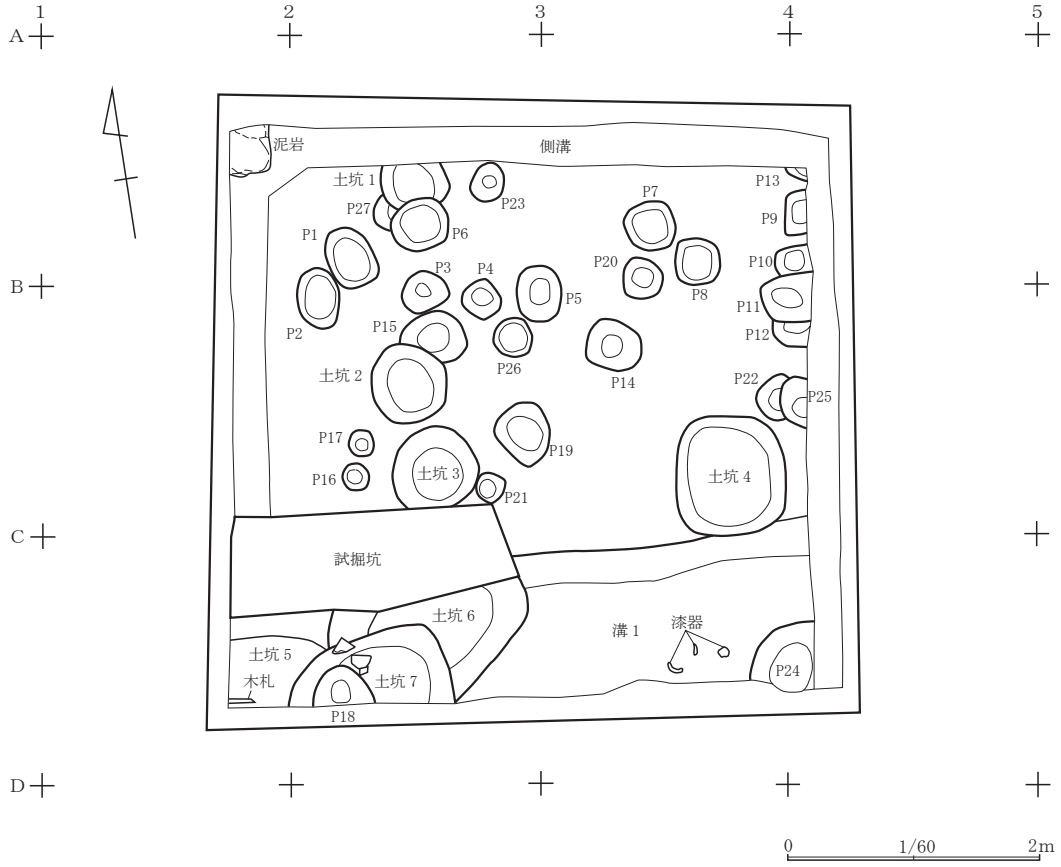


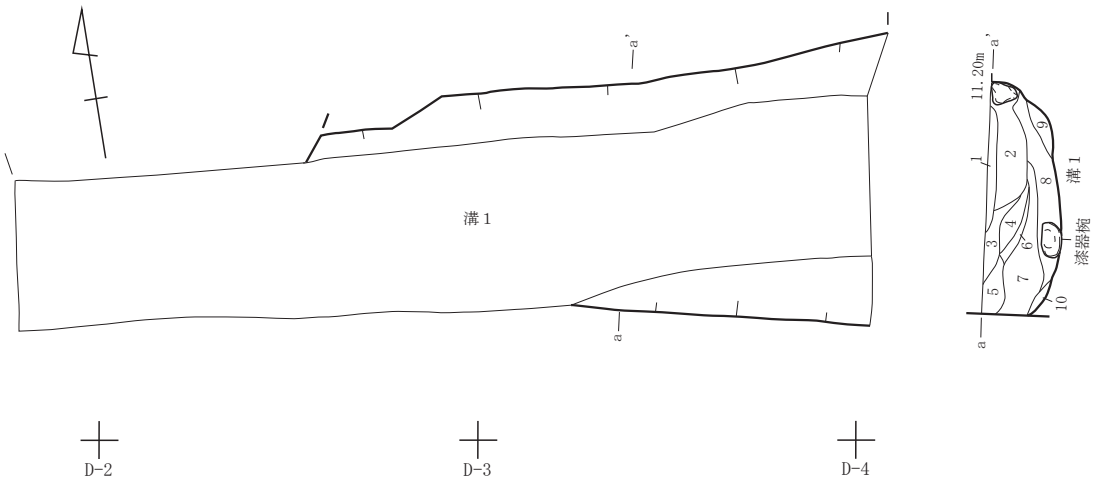
図11　３面全測図

溝１（図11・12・14、表10、図版２・９）

調査区南側、Ｃライン以南で検出した。南側の掘り込み部分は南東部で僅かに確認できたが、試掘坑、土坑５・６・７、ピット18・24による削平や大部分が調査区外に拡がることから詳細は不明瞭である。主軸方位はＮ－88°－Ｗと真北に直交した東西方向に掘られている。確認できた規模の掘り方は、長さ404×幅140以上×底面幅76～88×深さは40cmである。検出標高は11.20ｍ、底面標高は10.80ｍ前後で平坦に掘られている。覆土は図12に示した土層状況であり、木片や木端を含む暗褐色粘質土などが堆積していた。出土遺物は、轆轤かわらけの出土が多かったが小破片ばかりで図示し得るには至らなかった。１は外面に蓮弁文を施す青磁折縁鉢、２は褐釉壺、３は碁石（白）、４は元豊通寶、５・６は漆器椀、７は漆器皿、６・７共に内外面に朱漆の手描き文様が施されてあるが文様の詳細は不明である。

土坑４（図13・14、表10、図版９）

Ｂ－４グリッド南西側で検出した。溝１を僅かに削平している。規模は長径104×短径89×深さ13cmである。平面形状は方形、断面形浅鉢状を呈し、検出標高11.20ｍ、底面標高11.07ｍである。覆土は20cm大の泥岩と泥岩粒を少量、粗砂多く含む暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、８が常滑壺の口縁～頸部片を図示した。



１．明茶褐色粘質土：泥岩粒少量、炭化物多量、締まりなし
２．暗褐色弱粘質土：泥岩粒中量、炭化物少量、粗砂多く、締まり若干あり
３．暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物微量、締まり若干あり
４．暗褐色粘質土：木片・炭化物少量、締まりややあり
５．暗褐色粘質土：明茶褐色粘土ブロック多く、炭化物・かわらけ粒・泥岩粒少量、締まりややあり
６．暗褐色粘質土：粗砂ごく微量、締まり若干あり
７．暗褐色粘質土：泥岩粒・木片・炭化物微量、粗砂僅かに含み、締まりあり
８．暗褐色粘質土：木片僅か、漆器椀を含み、締まりあり
９．暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物少量、粗砂多量、締まりあり
10．暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物・玉石少量、粗砂多量、締まりあり

0　1/40　2m

図12　３面溝１

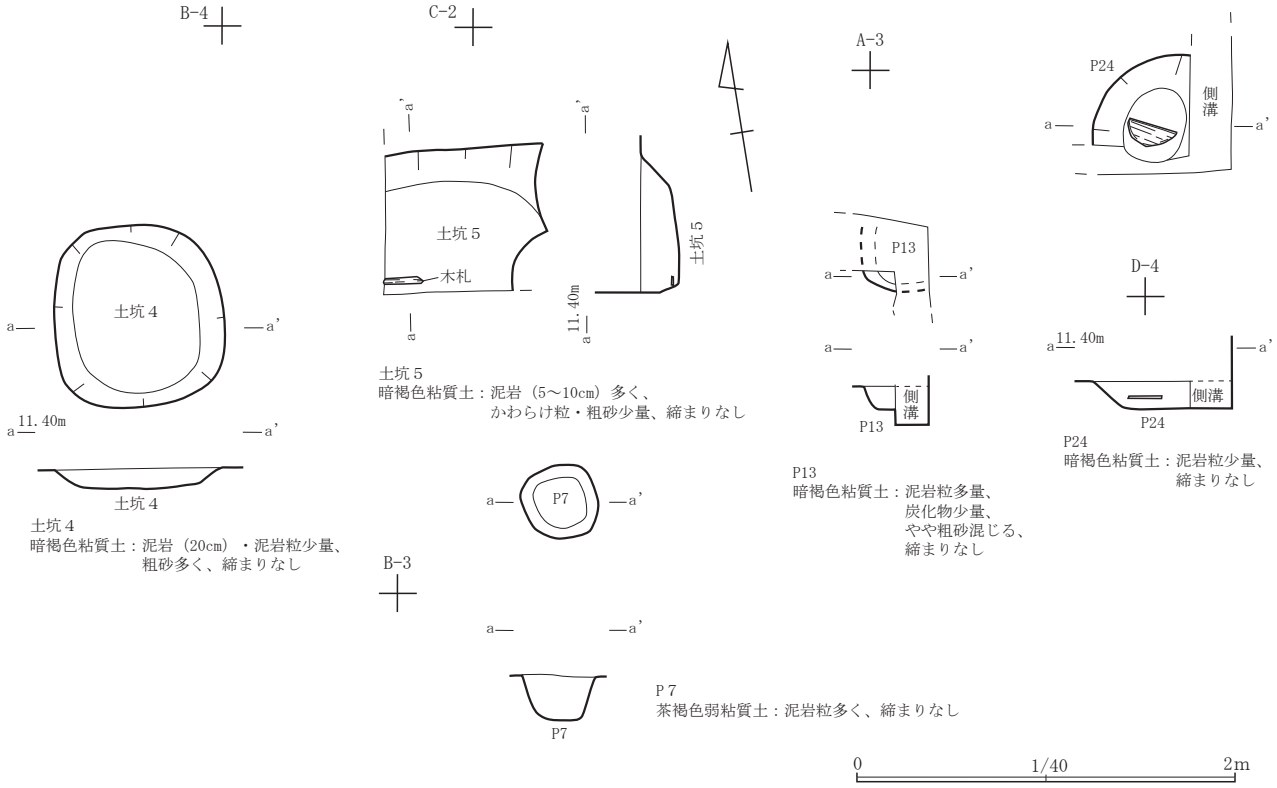


図13　３面土坑・柱穴

表３　３面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	規模（cm）			備考／重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑1	不明	11.17	11.03	52	(29)	14	P6により削平
土坑2	不整円形	11.16	11.03	65	60	13	P15を削平
土坑3	不整円形	11.19	11.01	70	58	18	試掘坑により削平
P1	楕円形	11.16	11.05	49	38	11	－
P2	楕円形	11.16	11.06	48	34	10	－
P3	不整形	11.18	10.94	37	31	24	－
P4	円形	11.19	10.94	31	28	20	－
P5	楕円形	11.22	10.93	45	36	29	－
P6	不整円形	11.16	11.02	46	40	14	土坑1・P23を削平
P8	不整形	11.18	11.05	37	35	13	－
P9	不明	11.20	11.10	35	(17)	10	側溝により削平
P10	不明	11.20	11.00	(28)	(21)	20	側溝により削平
P11	不明	11.22	11.01	(40)	35	21	側溝により削平
P12	不明	11.23	11.12	(31)	(19)	11	側溝により削平
P14	不整形	11.22	11.05	44	38	17	－
P15	不明	11.18	10.95	51	(36)	23	土坑2により削平
P16	円形	11.16	10.99	21	21	17	－
P17	円形	11.18	11.05	20	20	13	－
P18	不明	11.17	10.84	49	(28)	33	土坑7を削平
P19	不整形	11.21	11.09	51	41	12	－
P20	不整形	11.18	11.06	34	33	12	－
P21	不整形	11.19	11.15	27	22	4	－
P22	不明	11.23	11.08	37	(20)	15	P25により削平
P23	不整円形	11.21	11.09	32	25	12	－
P25	不明	11.25	11.14	39	(22)	11	側溝により削平
P26	不整円形	11.21	10.97	31	30	24	－
P27	不明	11.15	10.99	(27)	(21)	16	－

土坑５（図13・14、表10、図版2・9）

Ｃ－２グリッド南側で検出した。土坑6･7、ピット18により削平され、調査区外に展開すると思われ、全体像は不明である。確認できた規模は、長径（84）×短径（75）×深さ26cmである。平面・断面形状は不明、検出標高11.15ｍ、底面標高10.89ｍである。覆土は５～10cm大の泥岩多く、かわらけ粒・粗砂少量含む暗褐色粘質土の堆積を観察した。出土遺物は、9が両面に墨書された木札を図示した。当資料に関しては、第四章にて後述する。

ピット７（図13・14、表10、図版9）

Ｂ－３～４グリッド北側で検出した。規模は、長径41×短径39×深さ23cmである。平面形状は不整円形、断面形状はＵ字状、検出標高11.17ｍ、底面標高10.94ｍである。覆土は泥岩粒多く含む茶褐色弱粘質土である。出土遺物は、10の轆轤かわらけ大皿のみ図示した。

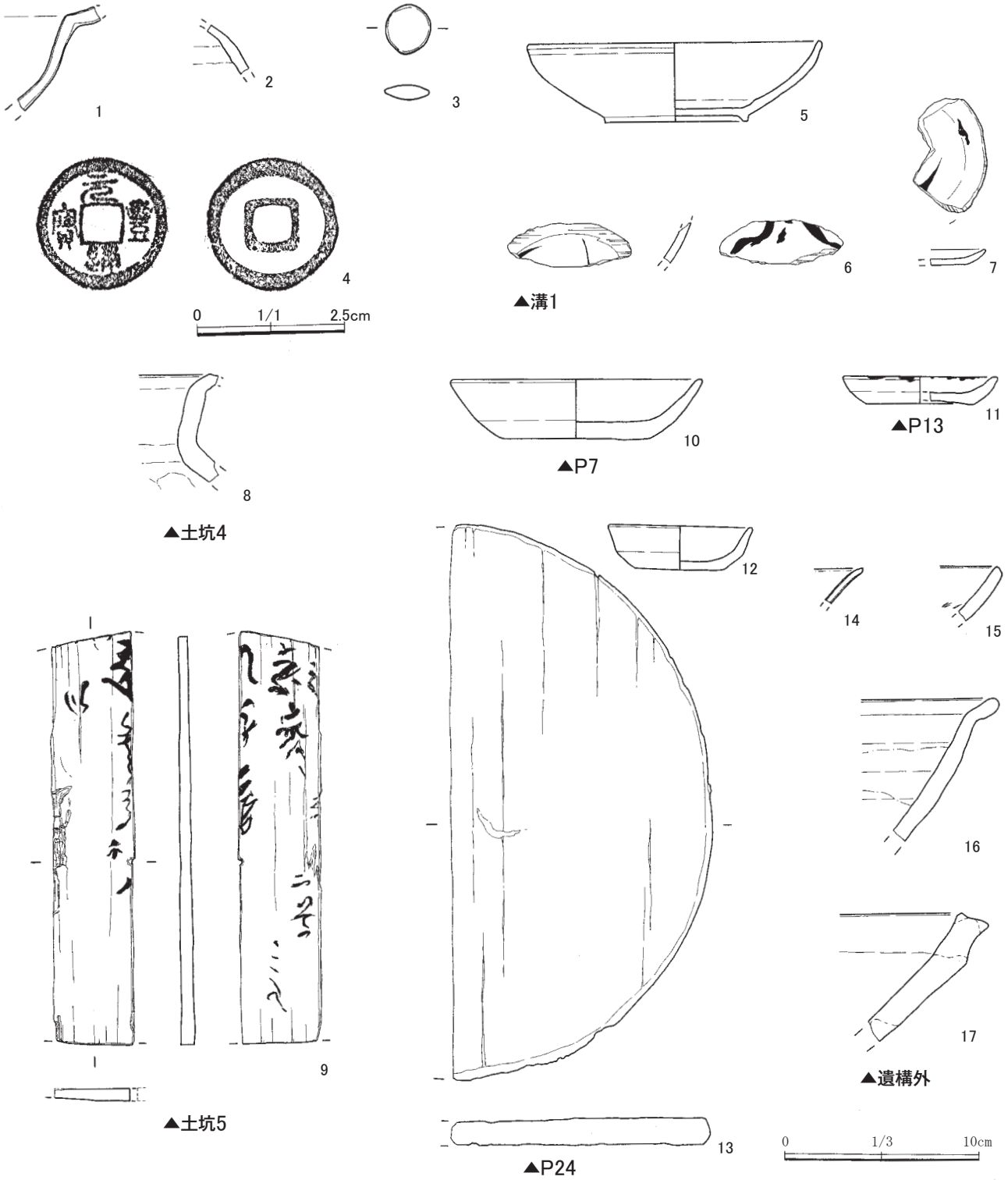


図14　３面各遺構・遺構外出土遺物

ピット13（図13・14、表10、図版9）

調査区北東隅、A－3グリッドの南側で検出した。側溝により削平してしまい、南西部僅かな範囲を確認した。確認できた規模は、長径（16）×短径（10）×深さ15cmである。検出標高11.23ｍ、底面標高11.08ｍである。覆土は泥岩粒多量、炭化物少量、やや粗砂混じる暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、11の轆轤かわらけ小皿のみ図示した。

ピット24（図13・14、表10、図版9）

調査区南東隅、D－4グリッドの北側で検出した。側溝により削平してしいるが、溝1より新しい。確認できた規模は、長径56×短径（52）×深さ19cmである。検出標高11.26cm、底面11.07cmである。覆土は泥岩粒少量含む暗褐色粘質土で、曲物の底板1/2程が廃棄されていた。出土遺物は、12が轆轤かわらけ小皿、13は曲物の底板を図示した。

3面遺構外出土遺物（図14、表10、図版9）

2面から掘り下げ3面検出までに出土した遺物を図示した。総数468点中、轆轤かわらけ大皿が9割近くを占める。図示できた遺物は、14が白磁口はげ皿の口縁部小片、15は瀬戸おろし皿の口縁部小片、16は瀬戸折縁深皿の口縁～胴部片、17は常滑片口鉢Ⅱ類の口縁～胴部片である。

第4節　4a・b面の遺構と遺物

当面から地下水の影響か全体に青味がかった様相になる。当面では基盤となる4b面があり、その廃絶後、部分的に地業を行っており、その遺構確認面を4a面（図15）、基盤層を4b面（図17）とした。前者は地表下約120cm、標高11.00 m、後者は標高10.85 m付近で確認した。4a面には試掘坑北側一部に炭層の拡がりを確認した。4a面の発見した遺構は土坑7基、ピット27基である。4b面は溝1条、溝状土坑1基、土坑4基、ピット8基を発見した。

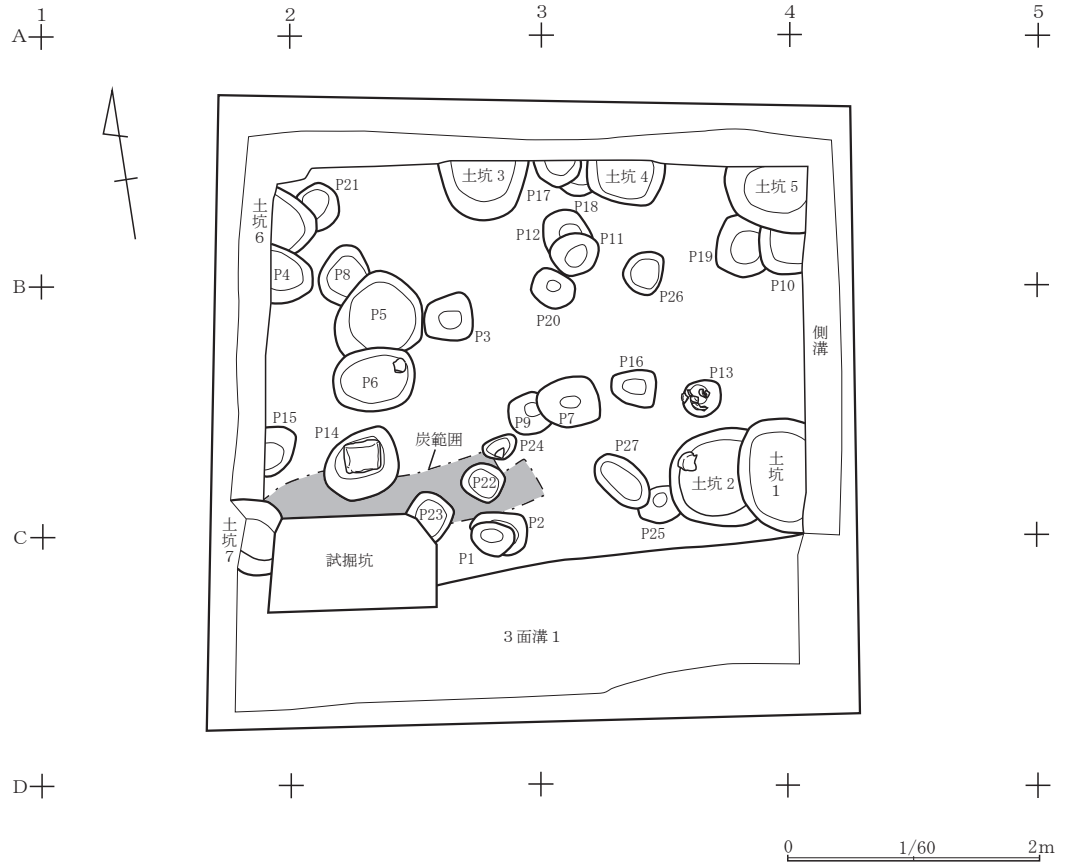


図15　4a面全測図

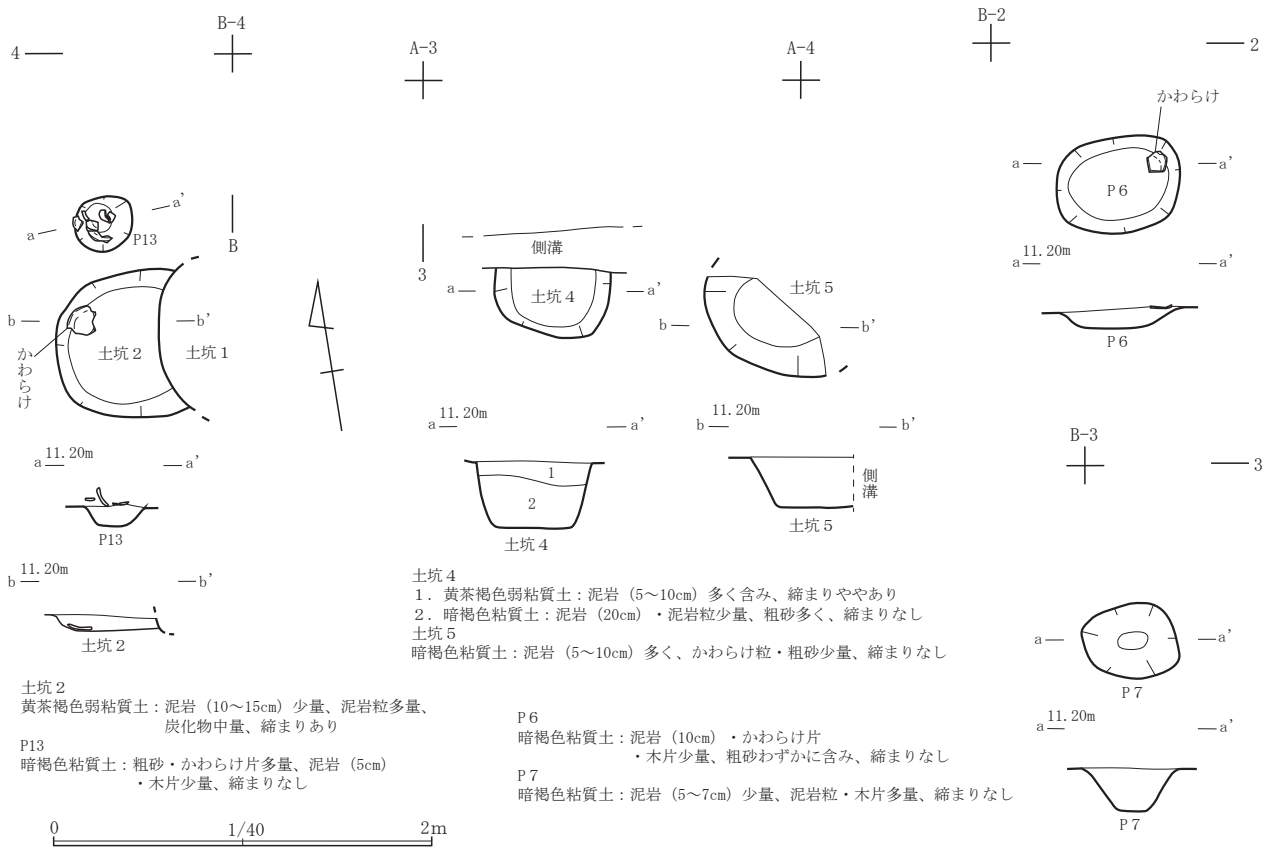


図16　4a面土坑

4a面土坑2（図15・16・20、表10、図版10）

B－4グリッドから南西の位置で検出した。土坑1により削平されている。確認できた規模は、長径77×短径（55）×深さ5cmである。検出標高11.00 m、底面標高10.95 mである。覆土は黄茶褐色弱粘質土の堆積を確認しており、出土遺物は、1の轆轤かわらけ大皿を1点、図示した。

4a面土坑4（図15・16・20、表10、図版10）

A－3グリッドから南東の位置、側溝により削平してしまっている。確認できた規模は、長径（61）×短径（33）×深さ12cmである。検出標高11.01 m、底面標高10.89 mである。覆土は2層に分けられ、粗砂多く含む暗褐色粘質土と5～10cm大の泥岩を含む黄茶褐色弱粘質土の堆積を観察した。出土遺物は、2の轆轤かわらけ、1点のみ図示した。

4a面ピット6（図15・16・20、表10、図版10）

B－2グリッド南東の位置で検出した。北側のピット5を削平している状況である。規模は、長径55cm×短径50×深さ14cmである。平面形状は楕円形、断面浅皿状を呈す。検出標高は10.99 m、底面標高は10.85 mである。覆土は泥岩やかわらけ片、木片を少量含む締まりのない暗褐色粘質土が堆積しており、上面にかわらけが廃棄されていた。出土遺物は、3の轆轤かわらけ大皿のみ図示した。

4a面ピット7（図15・16・20、表10、図版10）

B－3グリッド南東、ピット9を削平している状況で検出した。規模は、長径50×短径42×深さ20cmである。平面形状は不整円形、断面すり鉢状を呈す。検出標高は10.97 m、底面標高は10.77 mである。覆土は5～7cm大の泥岩少量と泥岩粒・木片を多量に含む暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、4の朱漆で内面に植物文が描かれた漆器の皿のみである。

表４　４ａ面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	規模（cm）			備考／重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑1	長円形	11.05	10.96	91	(54)	9	側溝により削平
土坑3	不明	11.02	10.96	(73)	(48)	6	側溝により削平
土坑5	不明	11.03	10.77	(67)	(39)	26	側溝により削平
土坑6	不明	11.01	10.92	(41)	(37)	9	P4により削平
土坑7	不明	10.92	10.73	(59)	(24)	19	試掘坑により削平
P1	不整形	10.94	10.82	35	26	12	P2を削平
P2	不整形	10.97	10.89	46	(43)	8	P1により削平
P3	隅丸方形	10.98	10.84	48	40	14	—
P4	不明	11.01	10.91	47	(34)	10	側溝により削平
P5	不整形	11.01	10.91	71	(61)	10	P6により削平
P8	不整形	11.01	10.93	49	(42)	8	P5により削平
P9	不整円形	10.97	10.82	34	(25)	15	P7により削平
P10	不明	11.02	10.96	36	33	6	土坑5により削平
P11	不整円形	11.02	10.86	38	37	16	P12を削平
P12	不明	11.02	10.84	35	(19)	18	P11により削平
P14	不整形	10.94	10.84	58	51	10	30×24×17cmの泥岩含む
P15	不明	10.93	10.81	39	28	12	側溝により削平
P16	隅丸方形	10.99	10.85	36	27	14	—
P17	不明	11.02	10.89	(37)	(22)	13	側溝により削平
P18	不明	11.01	10.83	(28)	(26)	18	土坑4・P17により削平
P19	不整円形	11.04	10.95	49	(36)	9	土坑5・P10により削平
P20	長円形	10.99	10.88	34	28	11	—
P21	不整円形	11.03	10.95	35	24	8	土坑6により削平
P22	隅丸方形	10.95	10.91	35	31	4	—
P23	方形	10.95	10.91	35	(26)	4	試掘坑により削平
P24	隅丸三角形	10.97	10.91	29	18	6	—
P25	長円形	11.00	10.76	33	28	24	—
P26	不整形	11.00	10.95	35	34	5	—
P27	楕円形	11.00	10.93	53	31	7	—

4a面ピット13（図15・16・20、表10、図版10）

Ｂ－４グリッドから南西の位置、土坑２の北側に隣接する。規模は長径31×短径30×深さ11cmである。平面形状は円形、断面すり鉢状を呈す。検出標高は11.00ｍ、底面標高は10.89ｍである。覆土は粗砂多く、5cm大の泥岩と木片を少量含む暗褐色粘質土で上面に３個体ほどのかわらけが廃棄されていた。出土遺物は、５～７の轆轤かわらけ大皿、３点を図示した。

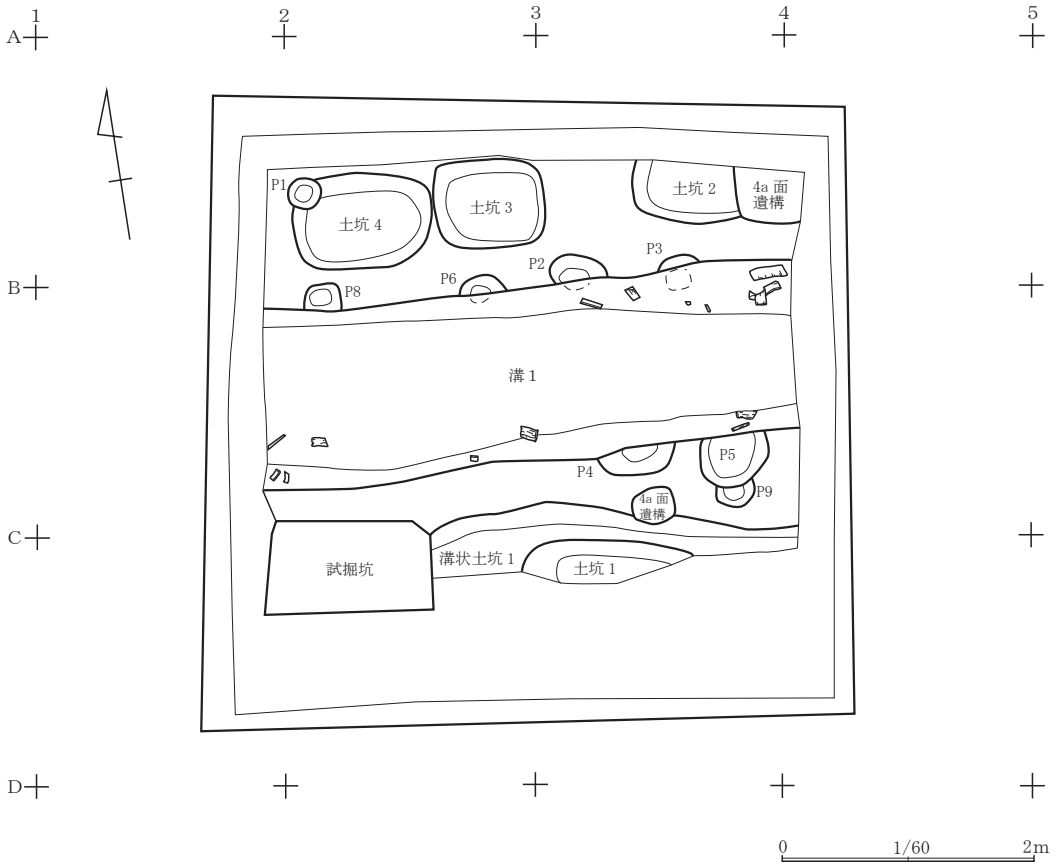
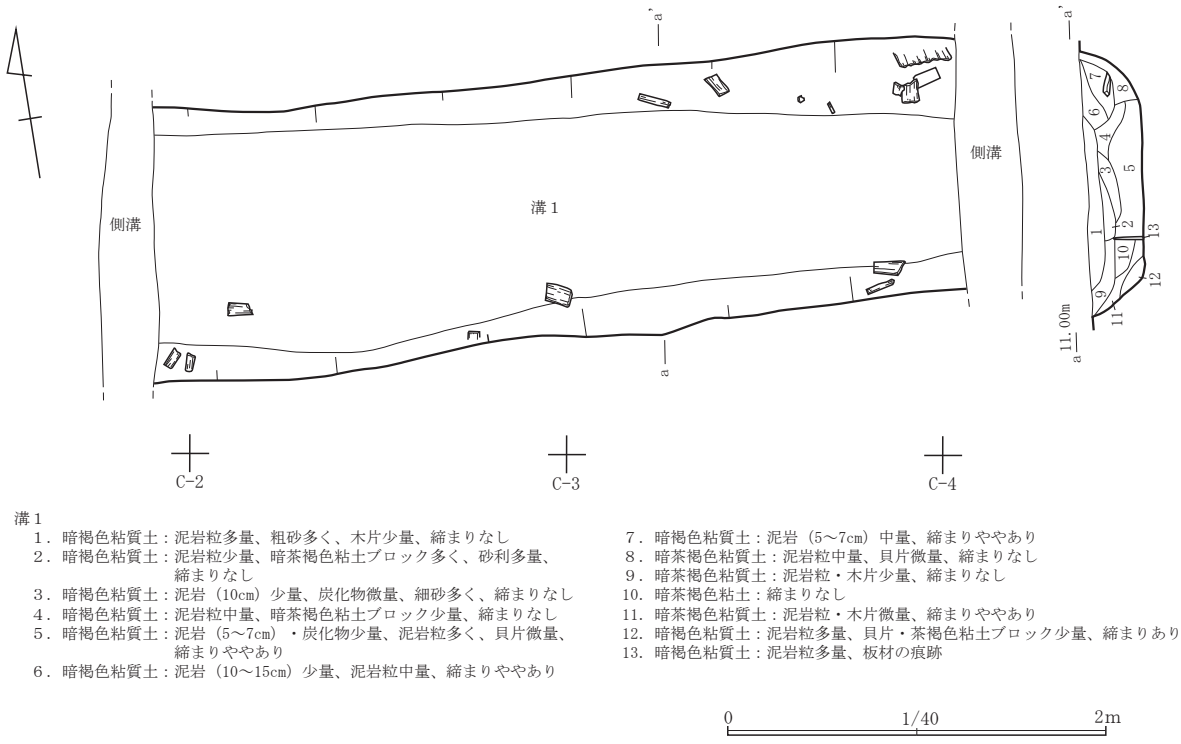


図17　4b面全測図



溝１
1．暗褐色粘質土：泥岩粒多量、粗砂多く、木片少量、締まりなし
2．暗褐色粘質土：泥岩粒少量、暗茶褐色粘土ブロック多く、砂利多量、締まりなし
3．暗褐色粘質土：泥岩（10cm）少量、炭化物微量、細砂多く、締まりなし
4．暗褐色粘質土：泥岩粒中量、暗茶褐色粘土ブロック少量、締まりなし
5．暗褐色粘質土：泥岩（5～7cm）・炭化物少量、泥岩粒多く、貝片微量、締まりややあり
6．暗褐色粘質土：泥岩（10～15cm）少量、泥岩粒中量、締まりややあり
7．暗褐色粘質土：泥岩（5～7cm）中量、締まりややあり
8．暗茶褐色粘質土：泥岩粒中量、貝片微量、締まりなし
9．暗茶褐色粘質土：泥岩粒・木片少量、締まりなし
10．暗茶褐色粘土：締まりなし
11．暗茶褐色粘質土：泥岩粒・木片微量、締まりややあり
12．暗褐色粘質土：泥岩粒多量、貝片・茶褐色粘土ブロック少量、締まりあり
13．暗褐色粘質土：泥岩粒多量、板材の痕跡

図18　4b面溝1

4a面遺構外出土遺物（図21、表11、図版10）

3面構成土から4a面上にかけて出土した遺物を図示した。図21－1は復元口径7.4cmを測る轆轤かわらけ小皿、2は復元口径11.6cmを測る轆轤かわらけ中皿、3は白磁口はげ皿の口縁部小片、4は青磁碗底部片、5は青白磁梅瓶、6は肩部に扇状の押印がある常滑甕、7は常滑甕の胴～底部片、8・9は常滑片口鉢Ⅰ類、10・11は常滑片口鉢Ⅱ類、12は滑石鍋の口縁部片である。

4b面溝1（図17・18・20、表10・11、図版3・10）

調査区中央、B～Cラインにかけて検出した。東・西部は調査区外に拡がり、周辺の遺構を削平している状況である。主軸方位はN－85°－Wと真北に直交する近い角度で掘られている。掘り方の規模は、長さ430×幅138～146×底面幅73～112×深さ33cmである。検出標高は10.95ｍ、底面標高は10.62ｍで底部平坦に掘られている。覆土は図18に示した通り、13層観察した。土層の観察から、板材を用いた木組みの溝の可能性が考えられ、検出状況からも本遺構に使用されたであろう板材が所々残存していた。また、本来の溝幅は70cmほどであったと想定される。出土遺物は、検出作業中に上層、下層、裏込め北側、裏込め南側と分けて取り上げた。図20－8は轆轤かわらけ小皿、9は青磁折縁鉢、10は轆轤かわらけ小皿、11は青磁蓮弁文碗、12は中野編年6a～6b型式の口縁形態をもつ常滑甕、13は肩部に押印がある常滑甕、14は轆轤かわらけ小皿、15は常滑甕の口縁部、16は轆轤かわらけ小皿、17は褐釉双耳壺の胴部片、18は常滑片口鉢Ⅰ類、19は常滑鳶口壺胴部片である。

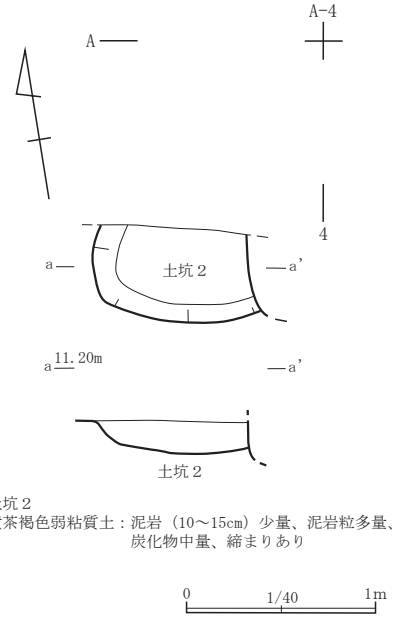


図19　4b面土坑2

4b面土坑2（図17・19・20、表11、図版10）

A－4グリッド南西の位置、4a面土坑5と側溝により削平された状況で検出したが、全体像は不明である。確認できた規模は、長径（82）×短径（50）×深さ17cmである。検出標高10.92ｍ、底面標高は10.75ｍである。覆土は10～15cm大の泥岩や泥岩粒を含む黄茶褐色弱粘質土である。出土遺物は、図20－20・21の轆轤かわらけ大皿2点を図示した。

表5　4b面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	規模（cm）			備考／重複関係など
				長径	短径	深さ	
溝状土坑1	不明	10.95	10.81	(296)	(18～48)	14	土坑1により削平
土坑1	不明	10.93	10.83	(39)	(38)	10	側溝により削平
土坑4	隅丸方形	10.92	10.78	111	76	14	P1により削平
P1	円形	10.95	10.86	27	26	9	土坑4を削平
P2	不明	10.94	10.75	(42)	(25)	19	溝1により削平
P3	不明	10.95	10.78	(35)	(22)	17	溝1により削平
P4	不明	10.94	10.55	63	(23)	39	溝1により削平
P5	不整形	10.93	10.83	55	(40)	10	溝1により削平
P6	不明	10.92	10.82	(38)	(19)	10	溝1により削平
P7	不整円形	10.94	10.87	31	(20)	7	P5により削平
P8	方形	10.90	10.66	29	(21)	24	溝1により削平

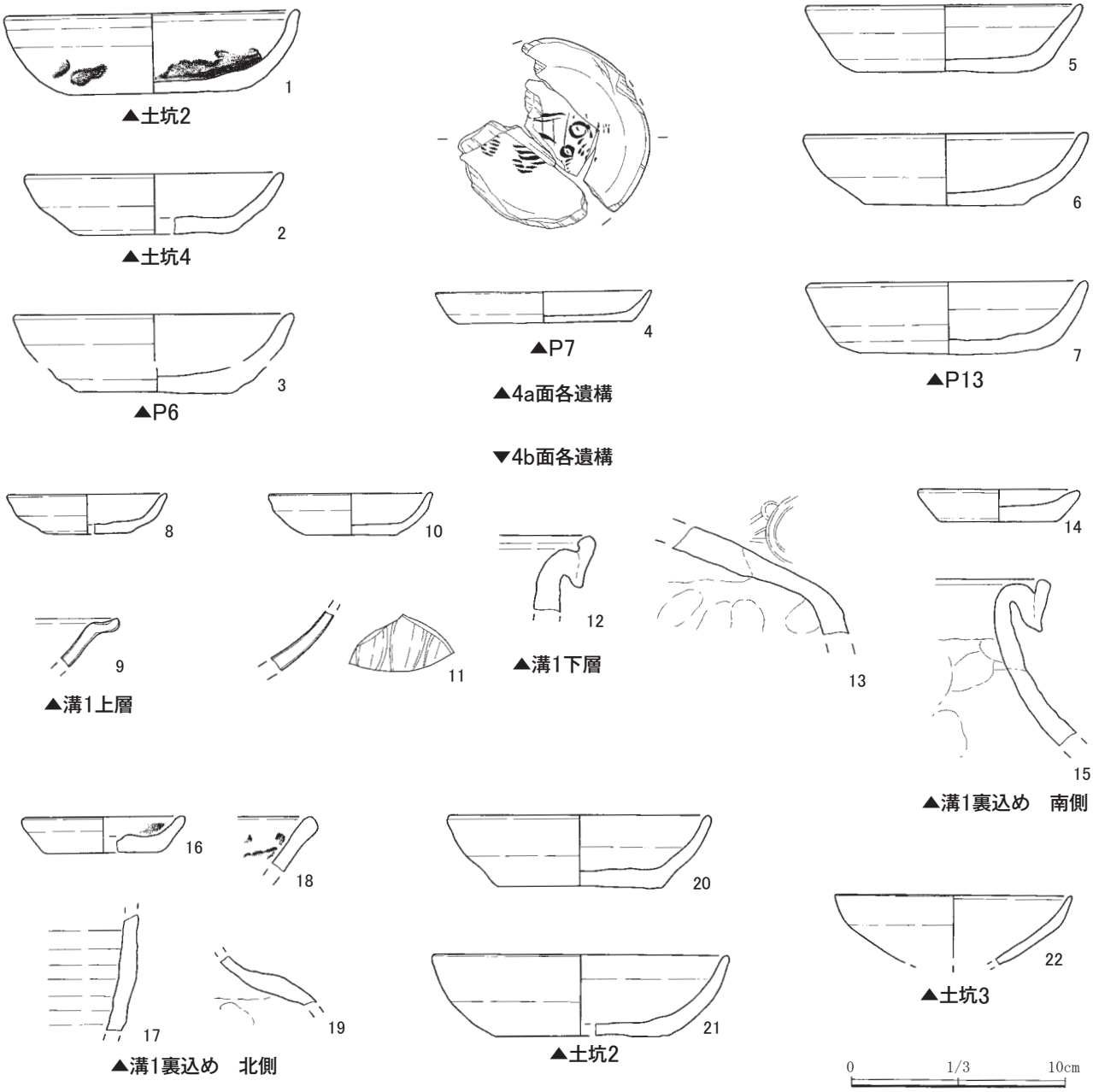


図20　4a・b面各遺構出土遺物

4b面土坑3（図17・19・20、表11、図版10）

A－3グリッドより南の位置で検出した。規模は、長径88×71×深さ13cmである。平面形状は方形、断面形は皿状を呈す。検出標高は10.92 m、底面標高は10.79 mである。覆土は15～20cm大の泥岩中量、泥岩粒多量、褐色粘質土ブロック多く、粗砂僅かに含む暗褐色弱粘質土の堆積を観察した。出土遺物は、図20－22の吉備系土器口縁部片を図示した。

4b面遺構外出土遺物（図21、表11、図版10・11）

4a面構成土中から出土した遺物、総数31点中7点を図21に図示した。13は瀬戸輪花型入子で、推定8弁になると思われ、内底部に墨痕が残る。文字なのかは不明である。14は中野編年6a型式の口縁形態に似る常滑甕、15は中野編年6b型式と思われる常滑甕、16は内面磨滅している常滑片口鉢1類、17は滑石鍋を転用したスタンプで両面に植物文が陰刻されている。18は両端丸味を帯び、円筒状に加工してある骨角製品だが、用途は不明である。栓として使用した可能性が考えられるが、その場合、水注の注口部などが想像できる。19は篆書で鋳造された治平元寶である。

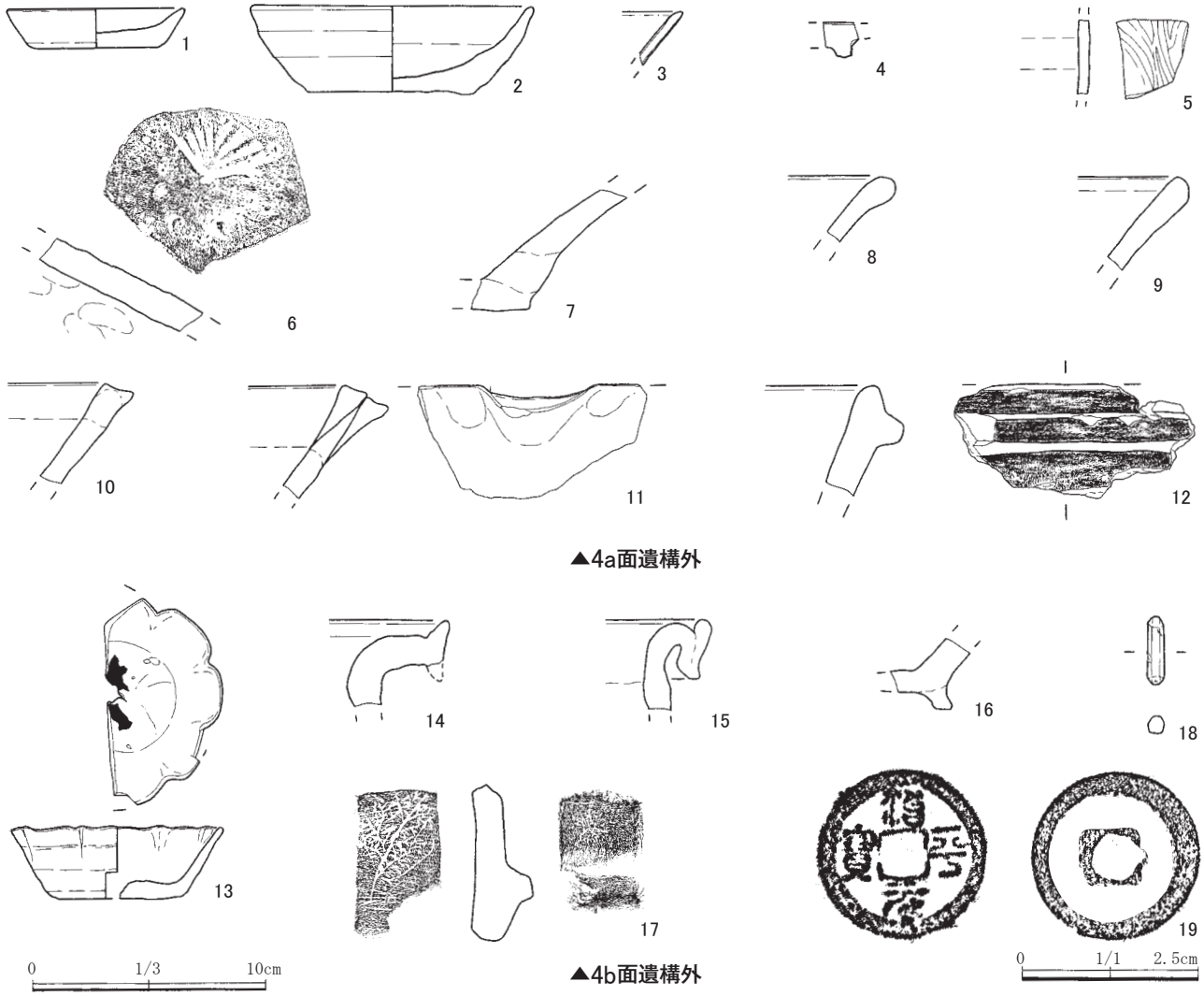


図21　4a・b面遺構外出土遺物

第5節　5面の遺構と遺物

地表下140㎝、標高10.80～10.85ｍ前後で確認した（図22）。当遺構面から残土置場の状況や今後の排出量を踏まえ、西側70㎝を未調査部分として残した。また、中央部に上面で検出した溝で削平されているため、遺構の全体像は不明瞭に近い状況であった。発見した遺構は、方形土坑4基、囲炉裏1基、土坑2基、ピット6基である。

方形土坑1（図22・23・25、表11、図版11）

調査区南東隅、C－4グリッドで検出した。土坑1、ピット1・2に削平され、調査区外に拡がる。確認できた規模は、長径（112）×短径（110）×深さ22㎝である。検出標高10.86ｍ、底面標高10.64ｍである。覆土は2層に分けられ、暗褐色粘質土が堆積していた。図示した出土遺物は、1が内面朱漆で文様が描かれた漆器皿、2が内外面に鶯、梅花、木の枝のスタンプを組み合わせた文様をもつ漆器椀である。

方形土坑2（図22・23・25、表11・12、図版11）

調査区南側、C－3グリッド付近で検出した。試掘坑、側溝などの削平や調査区外への拡がりのため、全体の規模は不明瞭である。確認できた規模は、長径（235）×短径（96）×深さ21㎝である。検出標高は10.82ｍ、底面標高は10.61ｍである。覆土は3層に分けられ、方形土坑1と同様の暗褐色粘質土と暗灰色粘質土が堆積していた。出土遺物は、3が轆轤かわらけ小皿、4は轆轤かわらけ大皿、5は青磁蓮弁

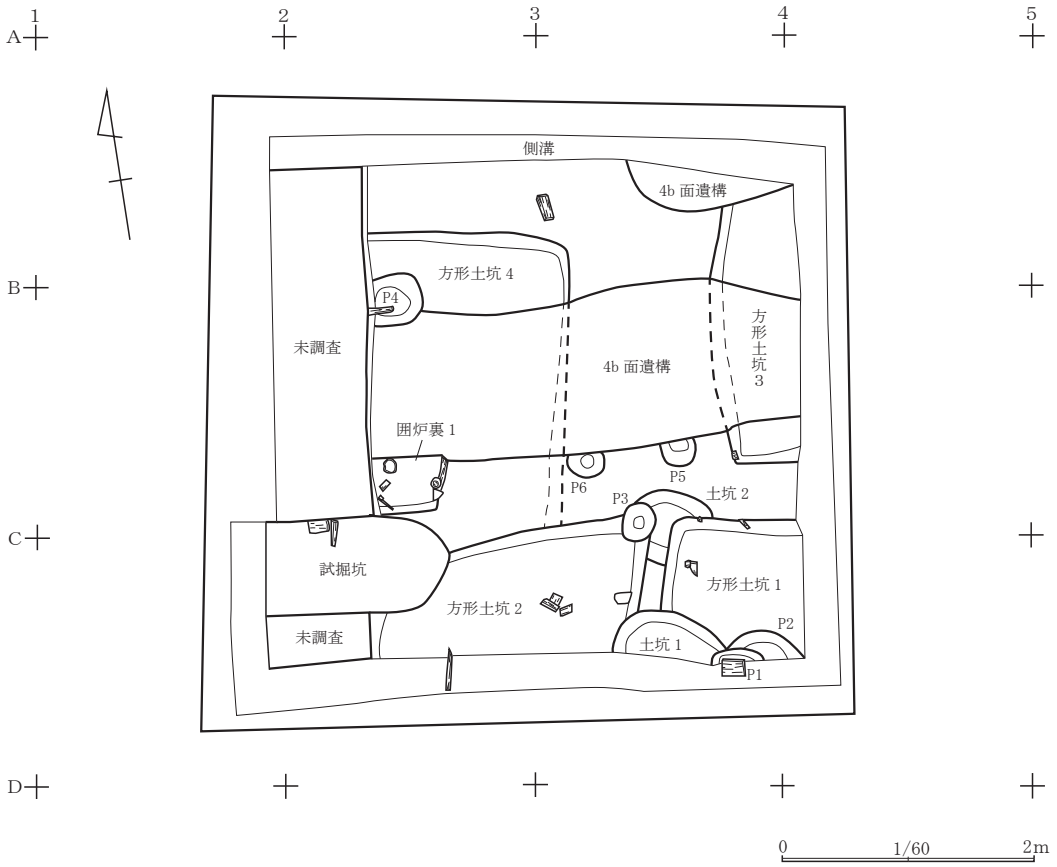


図22　５面全測図

文碗、6は中野編年7型式の口縁形態を呈す常滑甕、7は6b型式の常滑甕、8は6と同一個体の可能性がある常滑甕、9・10は常滑甕の底部片、11・12は常滑片口鉢Ⅰ類の口縁部、13は開元通寶、14は元豊通寶などが図示できた。

方形土坑４（図22・23・25、表12、図版11）

Ｂ－２グリッドの東、Ｄ－３グリッドの南側にあり、4b面溝1により半分以上が削平されていると思われる。南側にも同一遺構の延長と思われる落ち込みを検出したが範囲のみを確認した。確認できた規模は、長径（158）×短径（56 ～ 64）×深さ14cmである。検出標高は10.81 m、底面標高は10.67 mである。覆土は泥岩粒多量で粗砂多く含む暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、15・16の轆轤かわらけ小皿を図示した。

囲炉裏１（図22・24・25、表12、図版11）

Ｃ－２～３グリッド間北側で検出した。北側は4b面溝1、東側は未調査部分に拡がっている様相である。確認できた規模は、長径（52）×短径（44）×深さ最大22cmである。検出標高は10.74 ～ 10.86 m、底面標高は10.64 mである。東側には長さ45cmの横板、その内側、当遺構の南東隅には高さ17cmの縦板が一部残存していた。覆土は3層に分けられた。最下層には暗褐色砂質土中に炭化物と灰が多量に含まれており、木組み状の痕跡と灰の堆積から囲炉裏とした。当遺構内の最上層中には完形の木製の枡や火葬骨を含むかわらけが出土しているが、どのような関係をもつ遺構なのかは想像し難いところである。出土遺物は、17・18が轆轤かわらけ小皿、19は内部に火葬骨を含む轆轤かわらけ中皿である。21は長い板状に孔が４箇所不均等な間隔で穿たれているが、両端部欠損している状態であり、用途不明の木製品である。

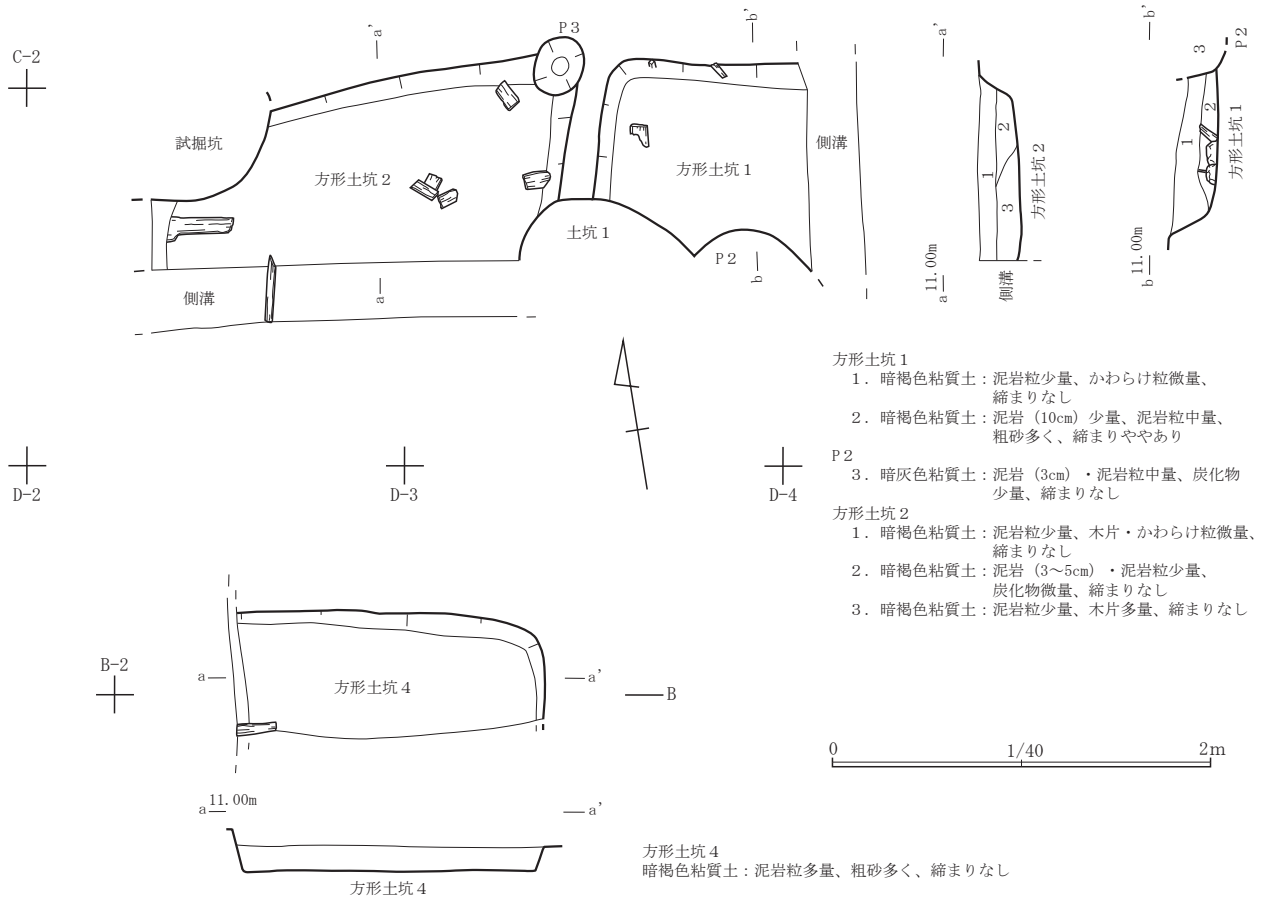


図23　５面方形土坑１・２・４

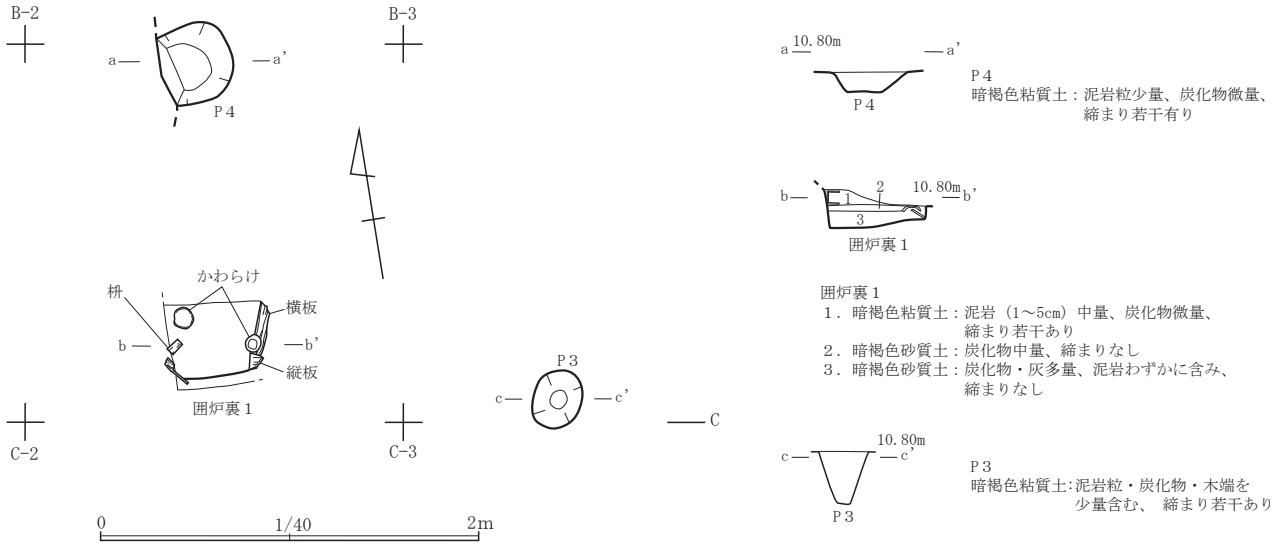


図24　５面各遺構

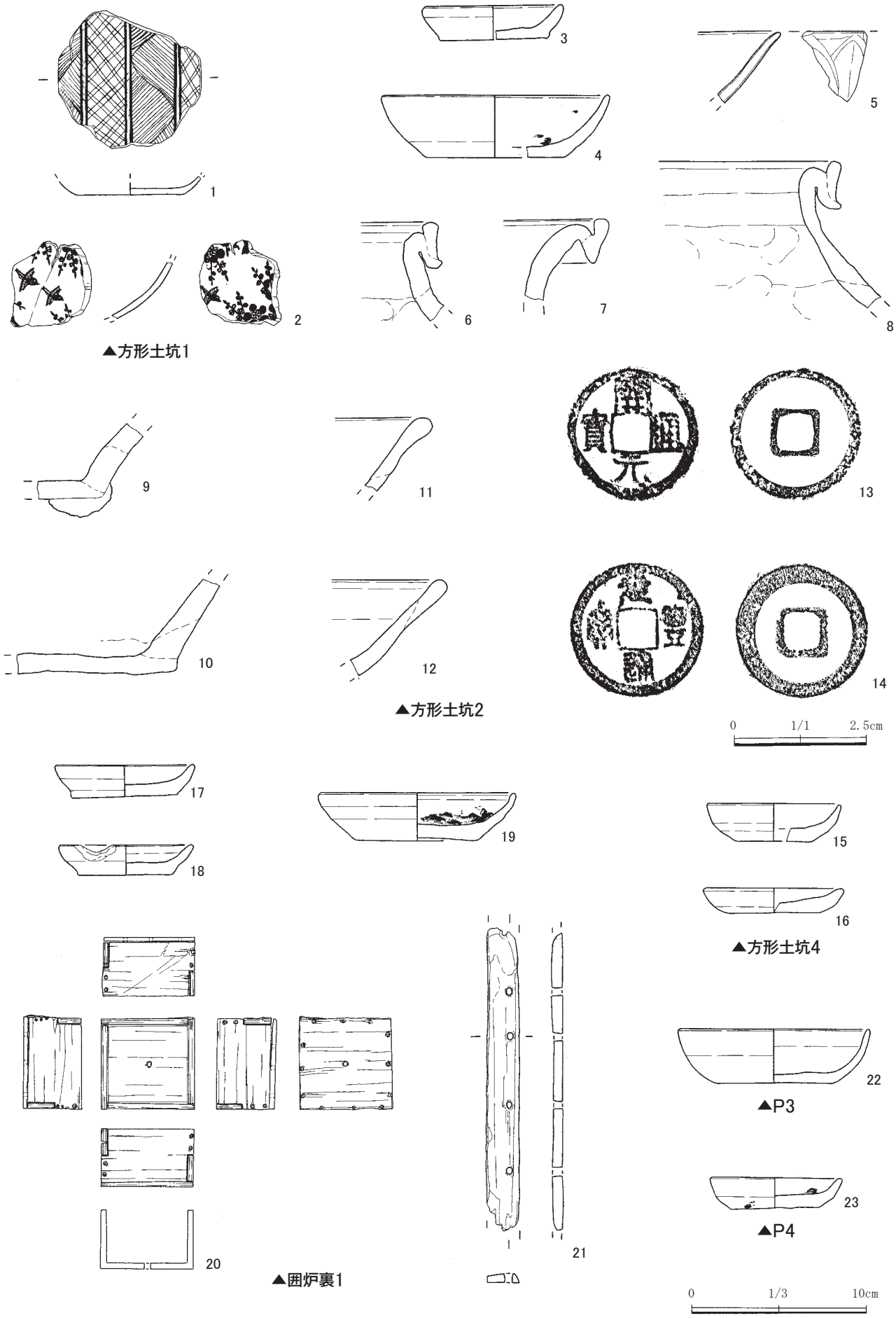


図25　5面各遺構出土遺物

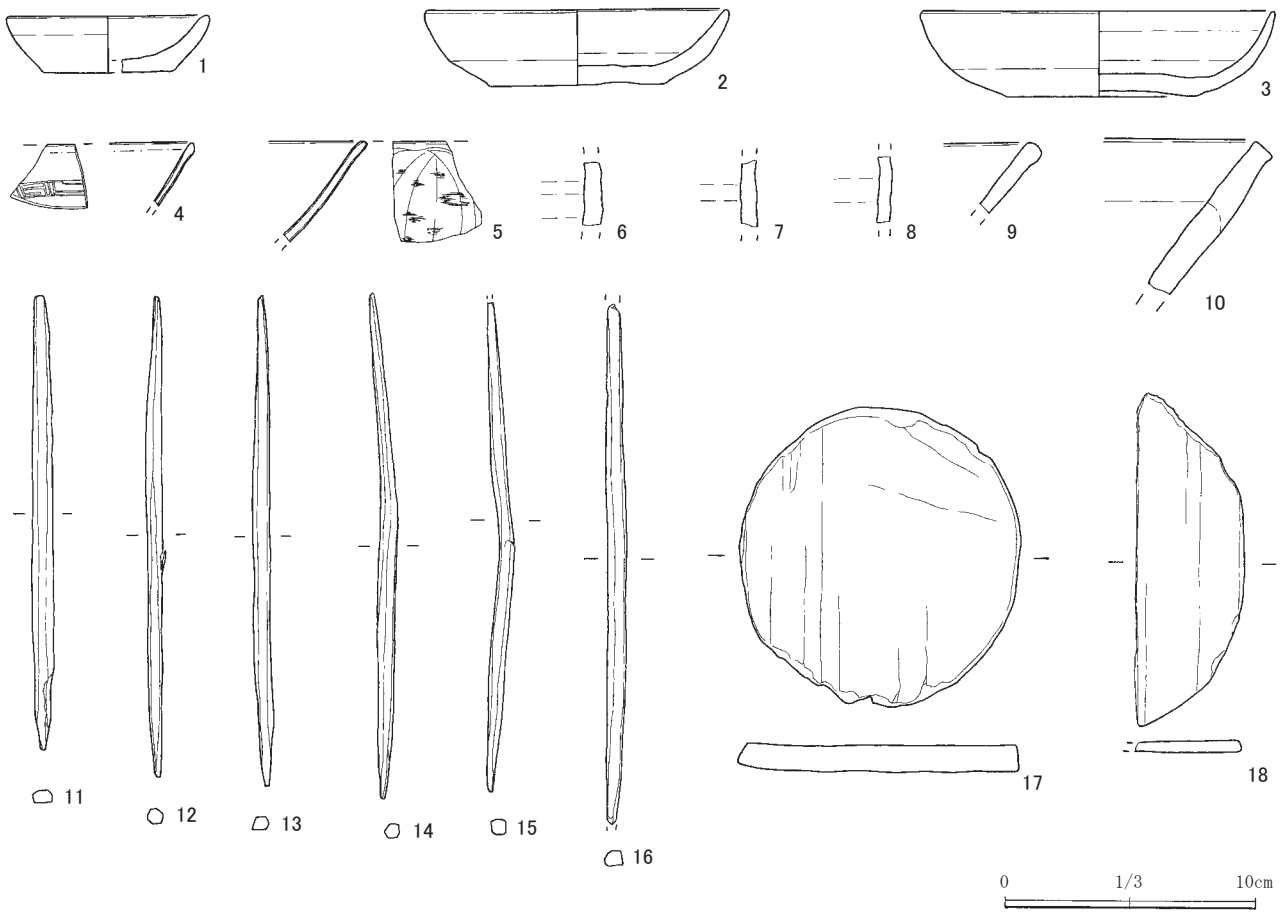


図26　５面遺構外出土遺物

表６　５面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	規模（cm）			備考／重複関係など
				長径	短径	深さ	
方形土坑3	方形	10.87	10.68	(223)	(57～60)	19	側溝により削平
P1	不明	10.77	10.64	(42)	(21)	13	長17×幅12×厚3cmの礎板あり
P2	不明	10.64	10.62	(65)	(24)	2	P1により削平
P5	不明	10.77	10.63	27	24	14	4b面溝1により削平
P6	円形	10.77	10.63	29	24	14	—
土坑1	不明	10.75	10.57	(91)	(36)	18	P1により削平
土坑2	隅丸円形	10.79	10.66	69	59	13	—

20は木製の枡である。長方形の板材の両短辺対角に切り込みを入れ、方形に組み合わせて、組み合わせた部分と 底面から木釘で固定している。長さ5.1×幅5.2×高さ3.3cmで内部の体積は60.75cm³を測る。一合枡の3分の1以下であり、中世期の枡の規格にはみられない。また、底板中央には釘で打ちつけたような穿孔がある。このことから祭祀や神事に使用された可能性も考えられるが、用途としては不明である。

ピット３（図22・24・25、表12、図版11）

Ｃ－３グリッド東側、方形土坑2の北東隅を削平する状況で検出した。規模は、長径30×短径28×深さ30cmである。平面形状は不整円形、断面Ｕ字形、検出標高は10.83ｍ、底面標高10.53ｍである。覆土は泥岩粒、炭化物、木端を少量含む暗褐色粘質土の堆積を観察した。出土遺物は、22の轆轤かわらけ中皿1点を図示した。

ピット４（図22・24・25、表12、図版11）

Ｂ－２～３グリッドの間中央、方形土坑4を削平している状況で検出した。方形土坑4の掘削中に発見

したため、検出標高は低い位置である。また、未調査部分の土層堆積から新旧関係を決定した。確認した規模は、長径41×短径（30）×深さ9cmだが本来は20cmほどだろう。平面形は推定円形状、断面は鉢型を呈す。検出標高は10.68ｍ、底面標高は10.59ｍである。覆土は、泥岩粒少量、炭化物微量を含む暗褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、23の内外面に煤が付着している轆轤かわらけ小皿1点のみ図示した。

5面遺構外出土遺物（図26、表12、図版11・12）

4面から5面検出時に出土した遺物、総数197点中18点を図示した。図26－1は轆轤かわらけ小皿、2は轆轤かわらけ中皿、3は轆轤かわらけ大皿、4は内面に文様のある白磁口はげ皿、5は青磁蓮弁文碗、6～8は褐釉壺の胴部片で、おそらく3点共に同一個体であろう。9は常滑片口鉢Ⅰ類、10は常滑片口鉢Ⅱ類、11～16は多角形状に削り加工した木製箸、17・18は曲物底板、共に柾目材を用いて端部を斜めに削り加工している。

第6節　6面の遺構と遺物

5面より20cmほど掘り下げた段階で粗雑な暗青灰色の泥岩版築を確認したので、これを6面として捉えた。地表下160cm、標高10.60ｍ付近の位置で確認し、ほぼ平坦な遺構面である（図27）。発見した遺構は方形土坑1基、土坑8基、ピット24基である

方形土坑1（図27・28、図版5）

調査区中央北側、B－2～3グリッド間の位置で検出した。西側は調査区外に展開する。確認した規模は、長径（164）×短径155×深さ最大45cmである。検出標高は10.60ｍ、底面標高は10.15～10.26ｍである。覆土は6層を観察したが、2層に大別でき、上層に暗茶褐色粘質土、下層に暗灰色粘質土が堆積してい

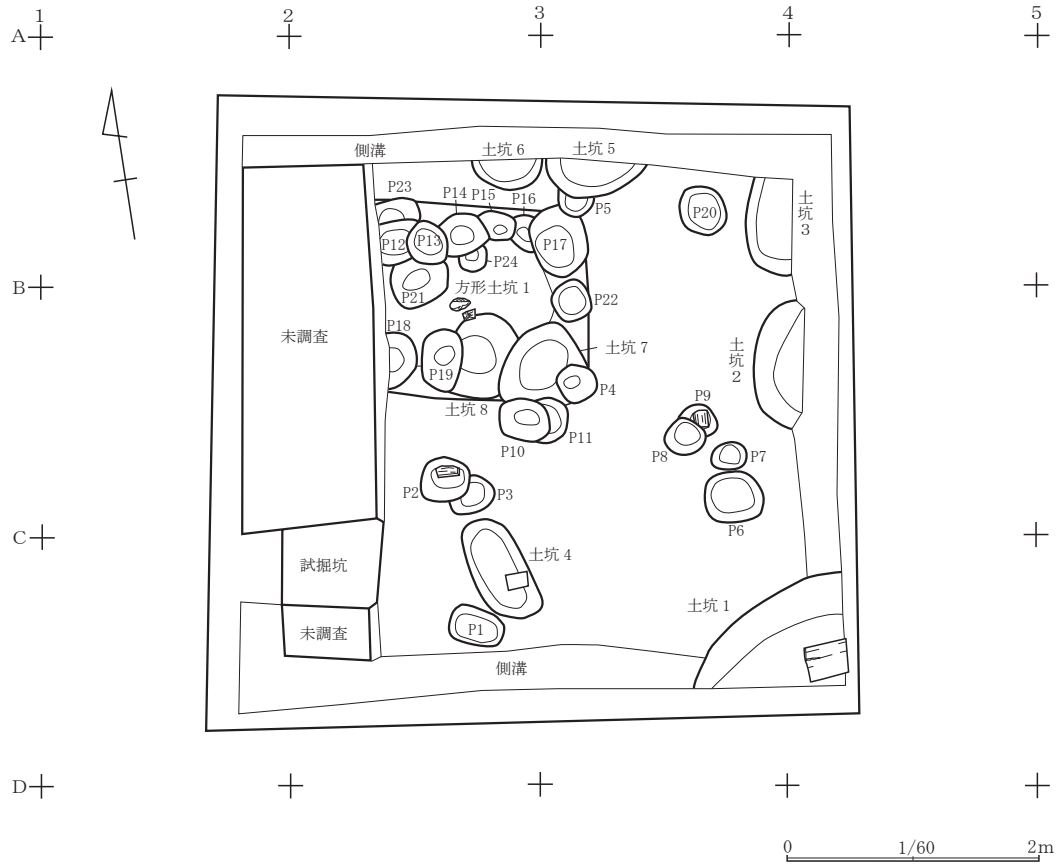


図27　6面全測図

るのを観察した。本遺構の内周には、土坑やピットが多数掘られている状況で、新旧関係ではピット23を除き、一番古い遺構である。特筆すべきは、確認範囲内の中央底面に犬頭骨が東向きで置かれ、さらに南隣には約8cm角の柱状木材がセットとなるような様相で置かれていたことである。どのような意図があるかは想像し難いが、「墓」のような性格をもつ可能性も考えられるだろうか。出土遺物は、轆轤かわらけ大皿や常滑甕片が少量出土しているが、いずれも図示し得るには至らなかった。

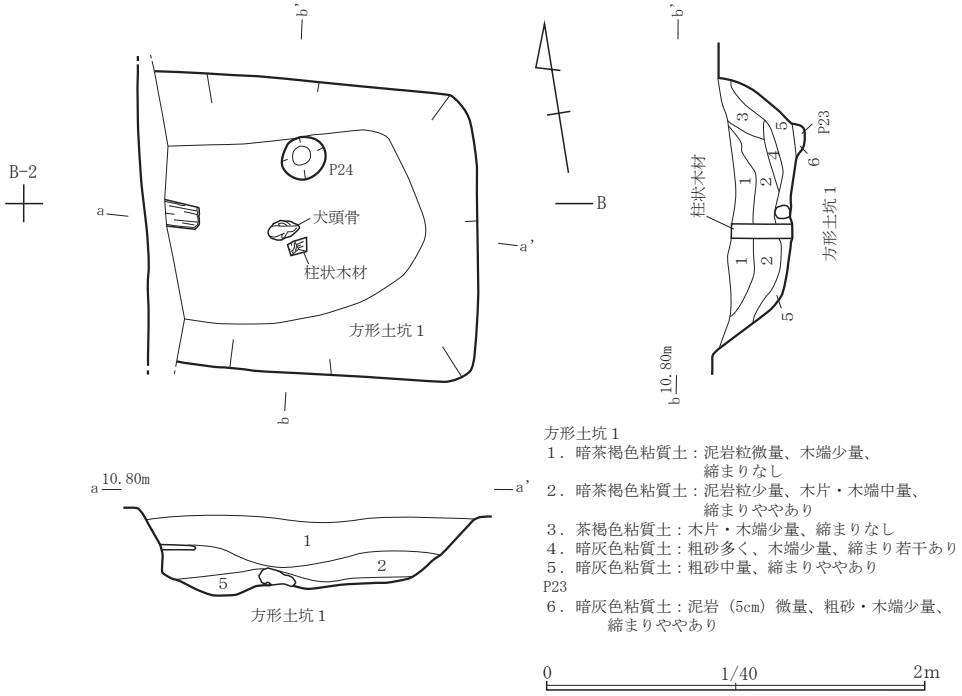


図28　６面方形土坑１

土坑１（図27・29・30、表12・13、図版12）

調査区南東隅、C－４グリッド南の位置で検出した。確認時には側溝により削平しており、大半は調査区外に展開しているため、全体は不明である。底面直上には俎板状の木材が廃棄されていた。確認できた規模は、長径（127）×（79）×深さ35cmである。検出標高は10.57ｍ、底面標高は10.22ｍである。覆土は３～5cm大の泥岩少量と泥岩粒中量、粗砂多量に含む締まりのない暗青灰色粘質土を観察した。出土遺物は、図30－１が口縁部に一部煤が付着している轆轤かわらけ大皿、２・３共に轆轤かわらけ大皿である。

土坑２（図27・29・30、表13、図版12）

調査区中央東端、B－４グリッド南側で検出した、大半は側溝の削平や調査区外に展開すると思われる。確認できた規模は、長径（99）×短径（38）×深さ24cmである。検出標高は10.58ｍ、底面標高は10.34ｍである。覆土は15～20cm大の泥岩を中量、貝砂や常滑片多く含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、４が轆轤かわらけ小皿、５が中野編年７型式の常滑甕、６は８型式の常滑甕、７は降灰多量で不鮮明だが、押印がある常滑甕の肩部片である。

ピット６（図27・29・30、表13、図版12）

調査区南東部、C－４グリッドから北西の位置で検出した。規模は、長径47×短径41×深さ7cmである。平面形状は楕円形、断面浅皿型で、検出標高は10.60ｍ、底面標高は10.53ｍである。覆土は泥岩粒少量、炭化物僅かに含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、常滑片口鉢Ｉ類１点のみ図示した。

ピット14（図27・29・30、表13、図版12）

B－３グリッドより北西の位置で検出した。方形土坑１やピット15・23を削平しているが、ピット13により削平されている。確認した規模は、長径33×短径（32）×深さ21cmである。断面形はＵ字形、検出標高10.58ｍ、底面標高10.37ｍである。覆土は泥岩粒多量、粗砂少量含む暗褐色粘質土を観察した。出土遺物は、９が青磁蓮弁文碗、10が褐釉壷の底部片である。

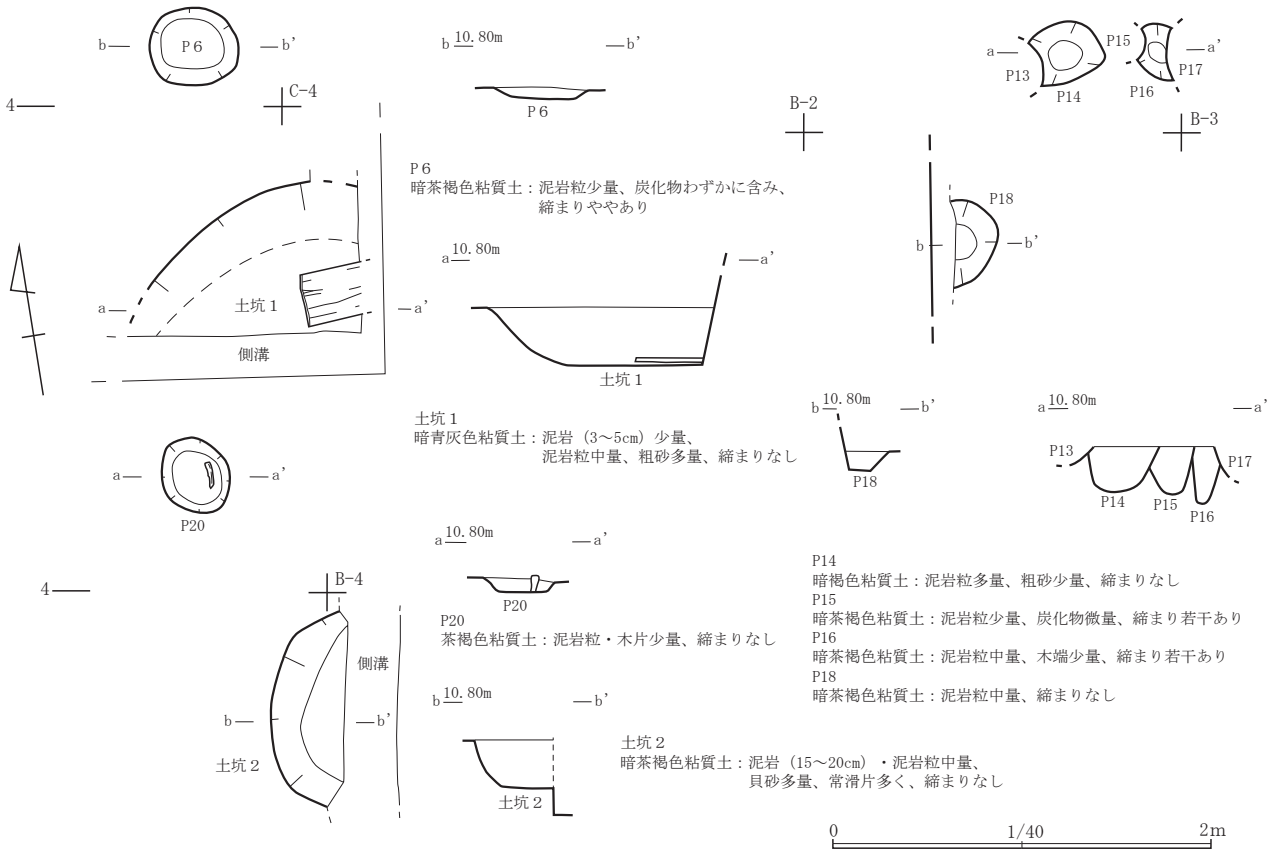


図29　6面土坑・柱穴

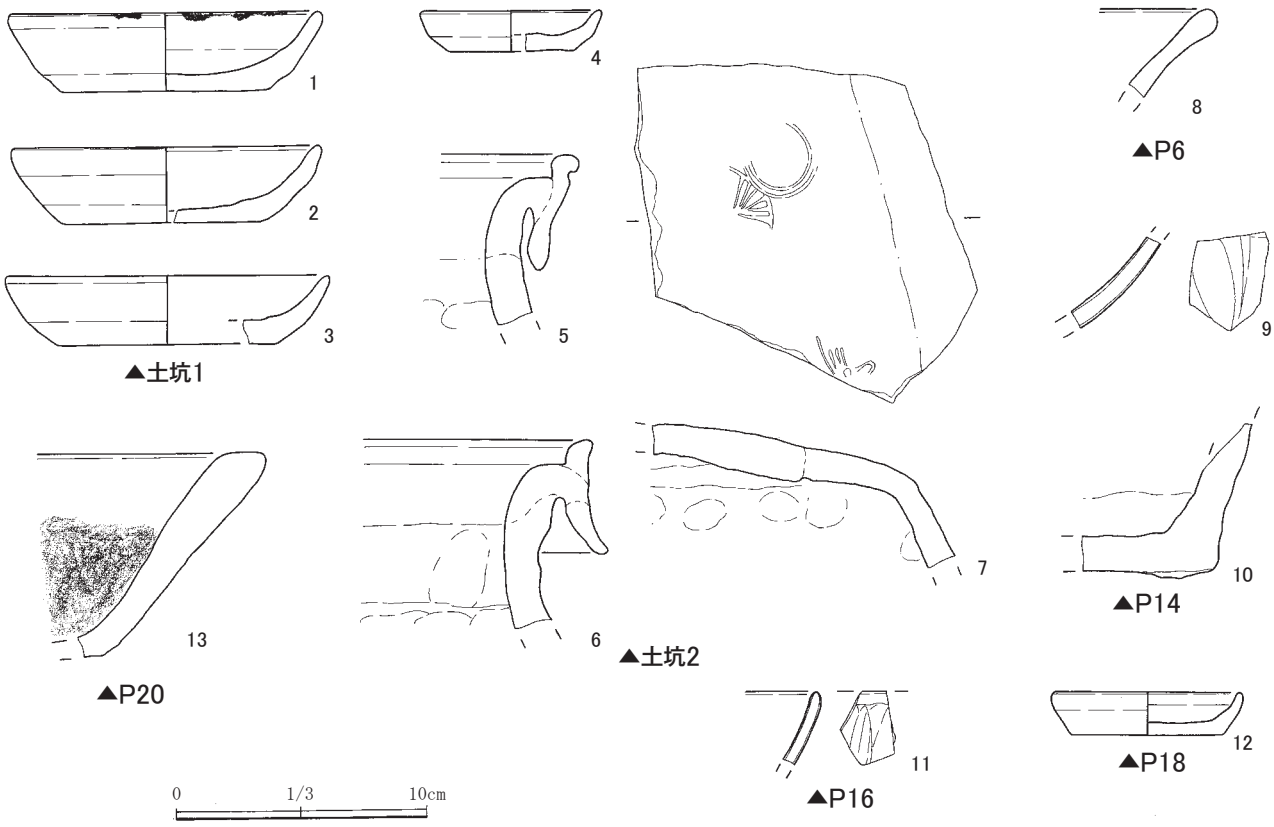


図30　6面各遺構外出土遺物

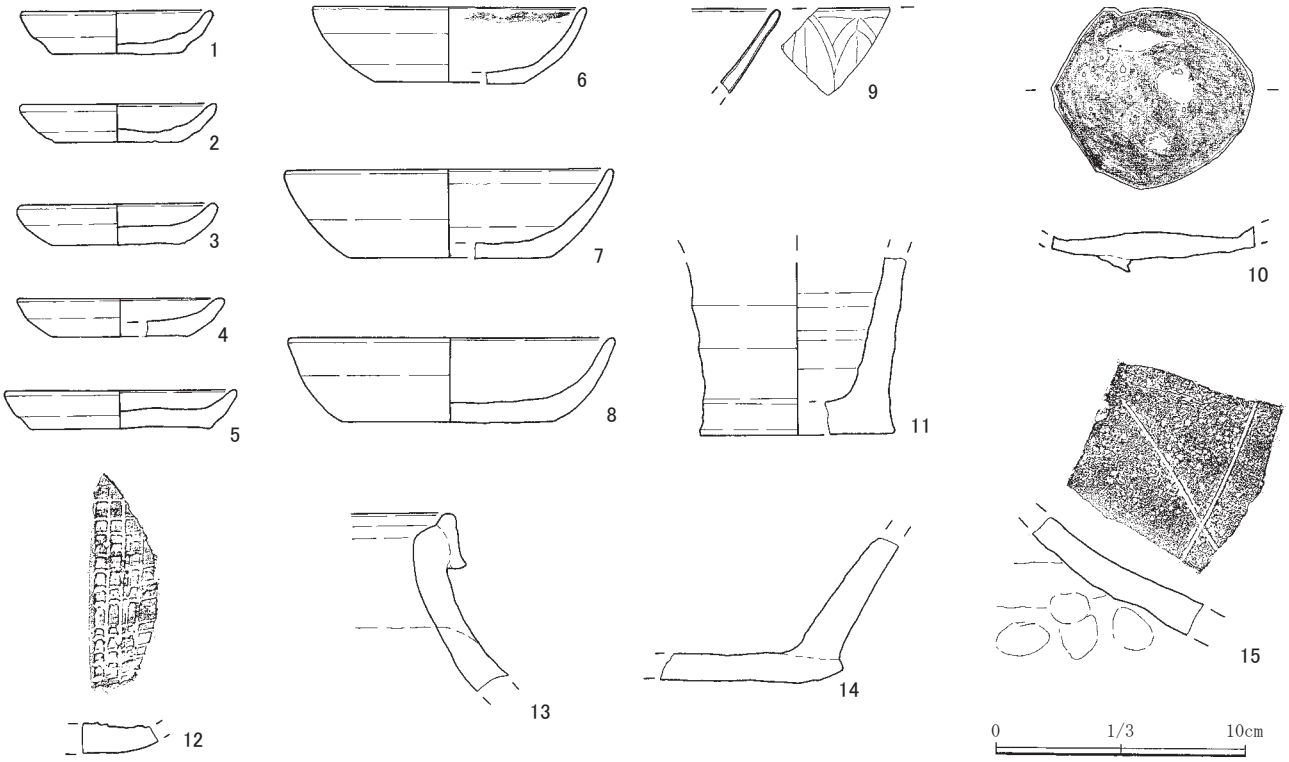


図31　6面遺構外出土遺物

ピット16（図27・29・30、表13、図版12）

B－3グリッドより北側の位置で検出した。ピット15・17により東西を削平されている。確認した規模は、長径23×短径（23）×深さ25cmである。断面V字状を呈し、検出標高は10.60 m、底面標高は10.35 mである。覆土は泥岩粒中量、木端少量含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、11が青磁蓮弁文碗1点のみ図化できた。

ピット18（図27・29・30、表13、図版12）

B－2グリッド東側に位置し、調査区外に展開する。方形土坑1を削平している。確認できた規模は、長径（45）×短径（24）×深さ12cmである。検出標高は10.60 m、底面標高は10.48 mである。覆土は泥岩粒中量含む暗茶褐色粘質土である。出土遺物は、12の轆轤かわらけ小皿1点のみ図化した。

ピット20（図27・29・30、表13、図版12）

B－4グリッド北西の位置で検出した。規模は、長径41×短径37×深さ7cmである。平面形状は不整円形、断面浅皿型、検出標高は10.61 m、底面標高は10.54 mである。覆土は泥岩粒・木片少量含む茶褐色粘質土でが堆積していた。出土遺物は、13が河野分類ⅠB類に値すると思われる火鉢で、二次焼成により器壁などの状態が悪い。

6面遺構外出土遺物（図31、表13、図版13）

5面以下6面検出までに出土した遺物を図31に15点図示した。自然遺物も含め、総数200点を数えた中で、轆轤かわらけ大皿と常滑甕片が比較的多く出土している結果であった。

1～4は轆轤かわらけ小皿、5は轆轤かわらけ中皿、6も中皿だが口縁部内面に煤が付着している。7・8は轆轤かわらけ大皿である。9は青磁蓮弁文碗、10は内底部全体に煤が付着している青白磁梅瓶、11は褐釉壺の底部片、12は瀬戸おろし皿、13は中野編年6a型式の形状をした常滑甕の口縁部片、14・15も常滑甕の底部、肩部片である。

表７　６面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	規模（cm）			備考／重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑３	不明	10.63	10.53	(75)	(37)	10	側溝により削平
土坑４	楕円形	10.56	10.46	89	44	10	長16×幅12×厚5cmの礎板あり
土坑５	不明	10.59	10.55	(81)	(32)	4	側溝により削平
土坑６	不明	10.63	10.58	(56)	(24)	5	側溝により削平
土坑７	不整形	10.57	10.31	74	64	26	P4・P10・P11により削平
土坑８	不整円形	10.58	10.35	70	(55)	23	土坑７・P19により削平
P1	隅丸長方形	10.56	10.45	44	27	11	―
P2	不整円形	10.56	10.35	40	35	21	長17×幅7×厚2.5cmの礎板あり
P3	長円形	10.56	10.46	35	(23)	10	P2により削平
P4	不整円形	10.58	10.35	32	30	23	土坑７を削平
P5	不明	10.59	10.57	28	14	2	土坑５により削平
P7	長円形	10.58	10.45	27	22	13	―
P8	不整円形	10.58	10.43	30	30	15	P9を削平
P9	不明	10.58	10.44	31	(15)	14	長11×幅11×厚3.5cmの礎板あり
P10	不整円形	10.57	10.36	44	33	21	土坑７・P11を削平
P11	不明	10.57	10.48	35	(15)	9	P10により削平
P12	不明	10.60	10.43	(33)	(20)	17	P13により削平
P13	不整円形	10.60	10.50	35	33	10	P12・P14・P21を削平
P15	長円形	10.60	10.35	23	(23)	25	P14により削平
P17	不整長円形	10.58	10.43	56	44	15	P5により削平
P19	楕円形	10.58	10.31	49	32	27	土坑８を削平
P21	不整円形	10.60	10.48	(48)	47	12	P12・P13により削平
P22	隅丸方形	10.56	10.40	31	31	16	―
P23	不明	10.60	10.45	(34)	(16)	15	P12により削平

第７節　７面の遺構と遺物

標高9.80ｍ前後で検出した。6面構成土は30～50cm大の泥岩層が70cmほど堆積しており、残土置場の都合上、調査区内で処理せざるを得なかった。このため7面に至るまでは土層堆積状況を一連に観察する目的として、調査区東壁から90cm、南壁から110cm幅でトレンチ状に調査区を設定した。また、南側で南北に走る溝を検出したので、その延長を確認するため北壁にトレンチを掘るに至った。発見した遺構は溝3条、土坑3基、ピット7基である。

溝１（図32・33・35、表13・14、図版6・13・14）

調査区南側中央、3ライン沿いの位置で検出した。南側で確認した結果、延長の確認と溝2との関係を明らかにするため、北壁側に確認トレンチを掘った。その結果、延長があることが分かり、溝2よりも新しい関係であることが 確認できた。南側では5本の杭が西際に打たれており、横板を留める杭列をもつ溝の可能性が強かったが、確認範囲内では横板はみられず、廃絶時に抜かれてしまった様相である。また、主軸方位はN－11°50′－Eである。断面形は逆台形状を呈す。掘り方の規模は、長さ（387）×幅80～90×底面幅40～50×深さcmである。検出標高は9.81ｍ、底面標高は北側で9.71ｍ、南側で9.49ｍと南に

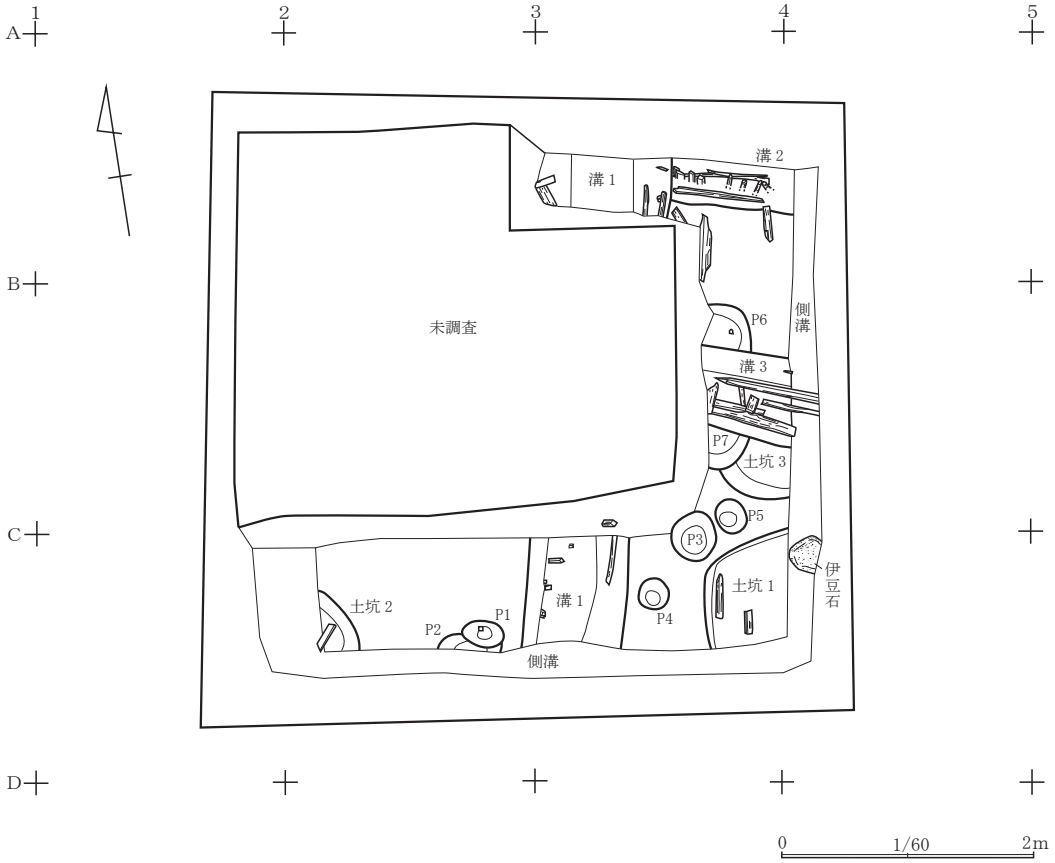


図32　7面全測図

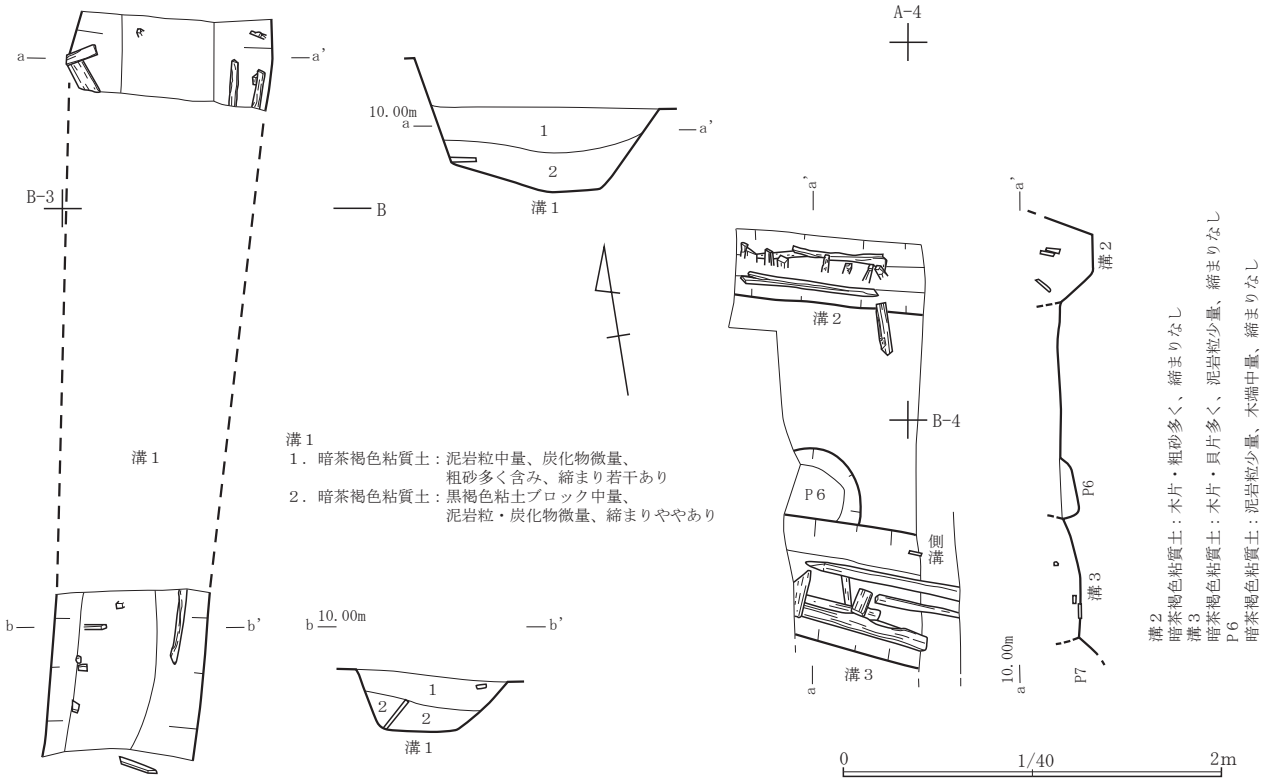


図33　7面溝1～3

向かい低くなっていく傾斜がみられた。残存している杭の頂部は標高9.60ｍ前後で全て20cm以上の長さであった。覆土は上下2層に分けられ、暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、上層・下層に分け取り上げ、図35に図示した。上層出土遺物は、1～7が轆轤かわらけ小皿、8は轆轤かわらけ中皿、9は手捏ねかわらけ小皿、10・11は手捏ねかわらけ中皿、12は白かわらけの口縁部片、13は白磁口はげ皿、14は内面に蓮弁文が施される青磁蓮弁文碗、15は輪花の形状になると思われる瓦器皿、16・17は永福寺Ⅰ期の平瓦である。下層出土遺物は、18～25が轆轤かわらけ小皿、26は轆轤かわらけ中皿、27は轆轤かわらけ大皿、28は平瓦、29は底面側面部分を削り加工してある打ち欠けかわらけ、30～32は木製箸である。

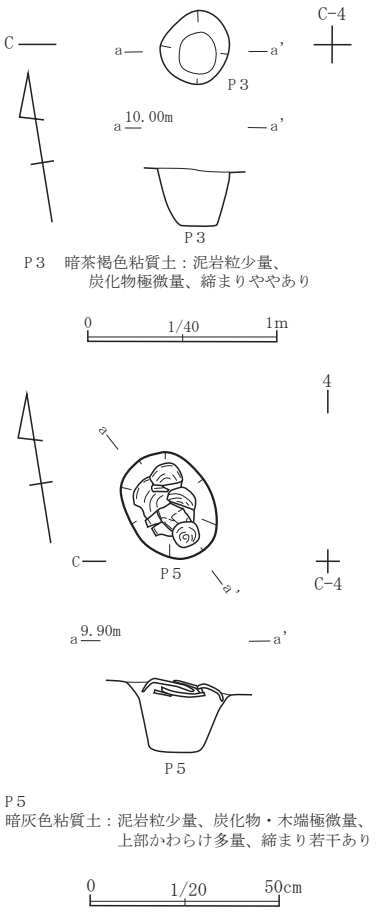


図34　7面Ｐ３・５

溝２（図32・33・36、表14、図版6・7）

調査区北東隅、Ｃ－４グリッド南の位置で検出した。溝1に削平され、調査区外に展開し全体は不明である。杭は検出面より10～15cmほど高く突出して残っており、横板を留めている状況であった。北側に並列している状況であり、当初は北側杭列として捉えていた。しかし、北側で検出した横板は廃棄時に移動してしまっている可能性や南側の杭列は抜かれてしまっていたか、元から設置されていないこともあり、当遺構に対して北側の杭列ではなく、南側の杭列の可能性も考えられる。また、溝1とは直交せずに、関係性は薄いと思われる。主軸方位は、N－78°－Wである。断面形は逆台形状を呈す。確認できた規模は、長さ109×幅（36）×底面幅（20）×深さ18cmである。検出標高は9.80ｍ、底面標高は9.62ｍで底部平坦に掘られている。北側には杭が打たれており、各杭の頂部標高は9.95ｍ前後で30cm以上の長さをもつ。出土遺物は、図36－1の轆轤かわらけ小皿1点を図示した。

溝３（図32・33・36、表14、図版6・14）

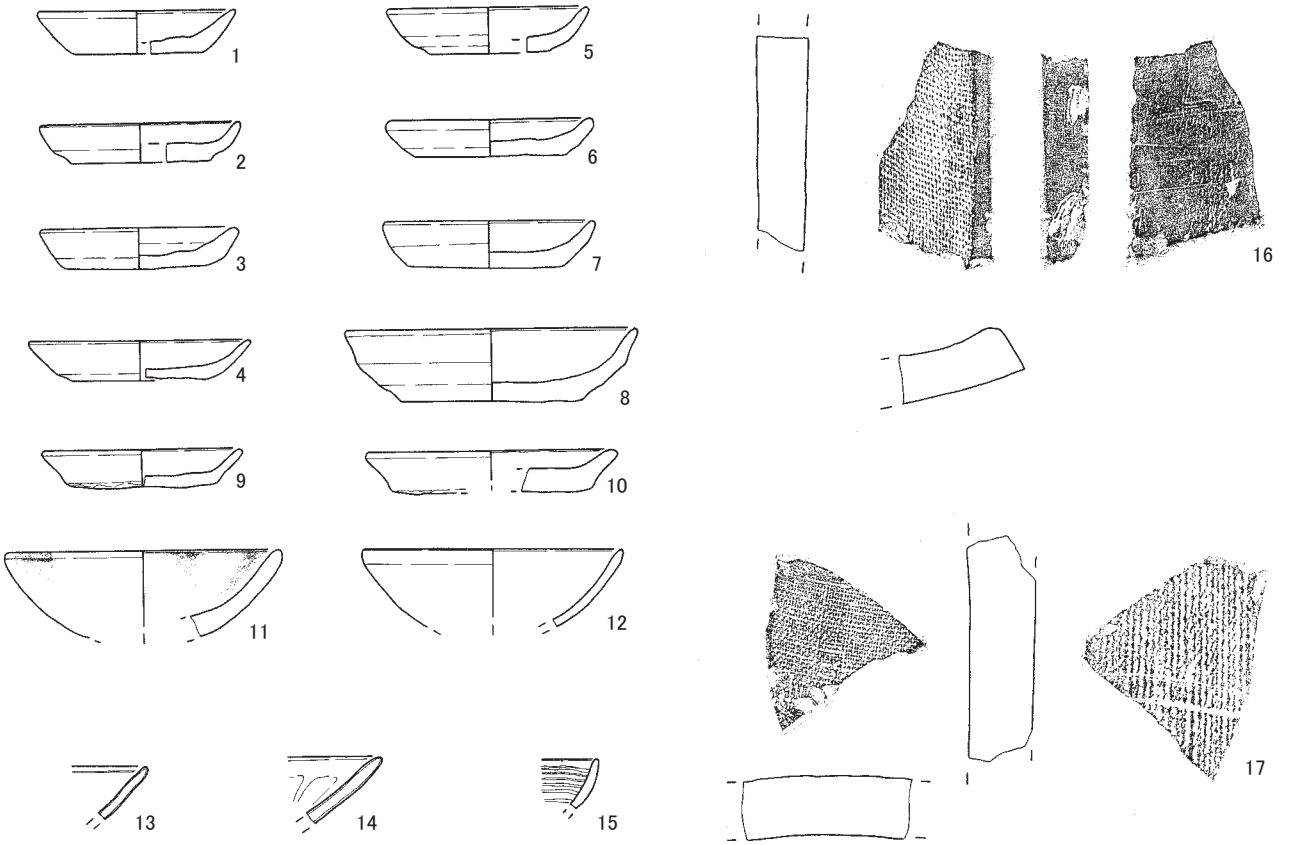
調査区東部、Ｂ～Ｃ－４グリッド間中央で検出した。側溝に削平され、調査区外に展開し全体は不明である。先端を尖るように加工した杭状の木材、そのほかは横板状の木材が廃棄されている状況であった。溝1との関係性は不明である。主軸方位は、N－70°－Wである。断面形は浅皿形を呈す。確認できた掘り方の規模は、長さ（68）×幅70×底面幅36×深さ10cmである。検出標高は9.80ｍ、底面標高は9.70ｍである。覆土は木片・粗砂を多く含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、2が轆轤かわらけ小皿、3は手捏ねかわらけ小皿、4はかわらけの側面を研磨して面取り加工してある加工品である。

ピット３（図32・34・36、表14）

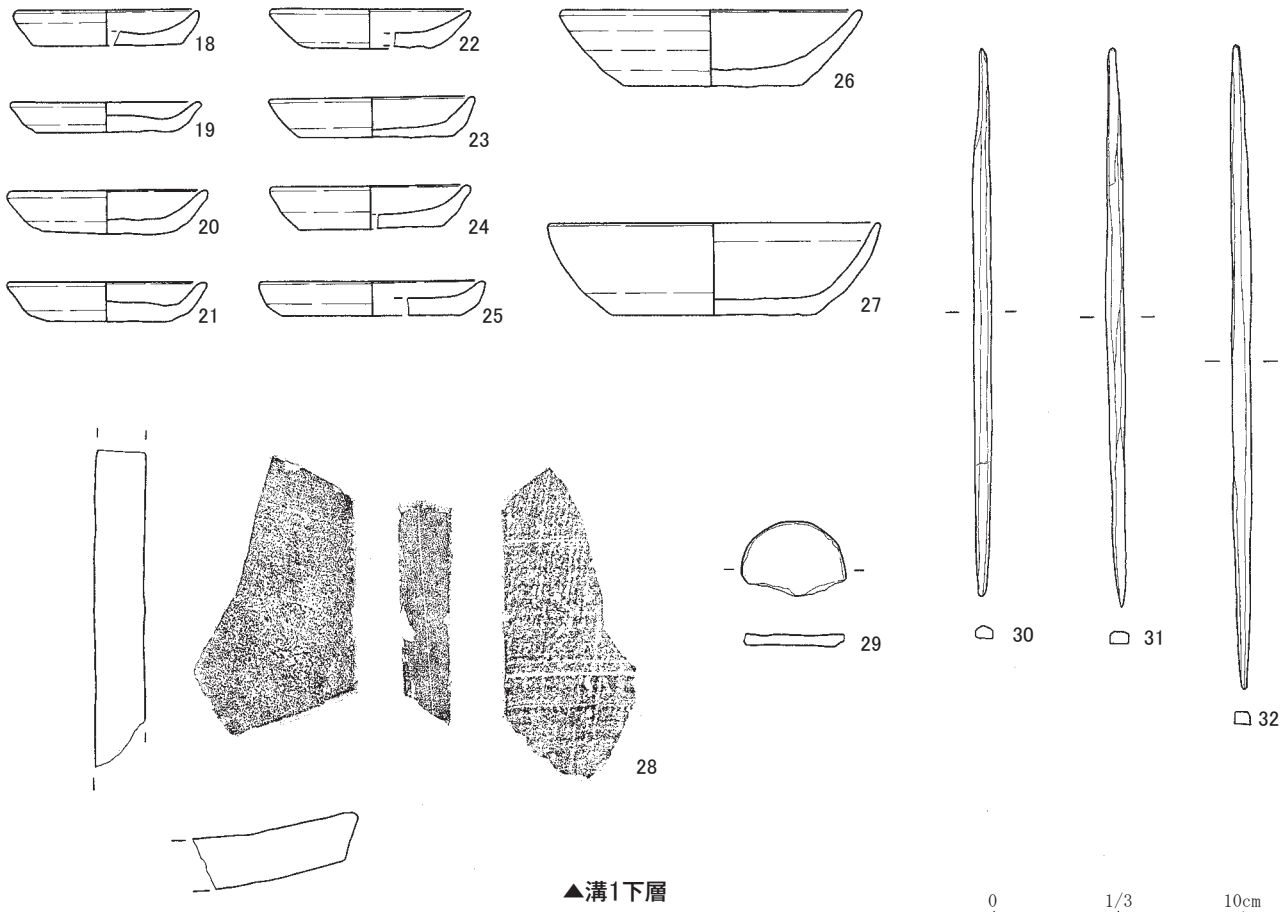
調査区南東部、Ｃ－４グリッド西側に位置する。規模は、長径41×短径37×深さ31cmである。平面形状は長円形、断面逆台形で、検出標高は9.79ｍ、底面標高は9.48ｍである。覆土は泥岩粒少量、炭化物極微量含む暗茶褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、5の轆轤かわらけ小皿1点を図示した。

ピット５（図32・34・36、表14・15、図版7・14）

調査区南東部、Ｃ－４グリッド西側に位置する。上面にはかわらけが5～6個体廃棄されている状況であった。規模は、長径27×短径27×深さ17cmである。平面形状は楕円形、断面逆台形で、検出標高は9.77ｍ、底面標高は9.60ｍである。覆土は泥岩粒少量、炭化物と木端を極微量に含む暗灰色粘質土で



▲溝1上層



▲溝1下層

0 1/3 10cm

図35　7面溝1出土遺物

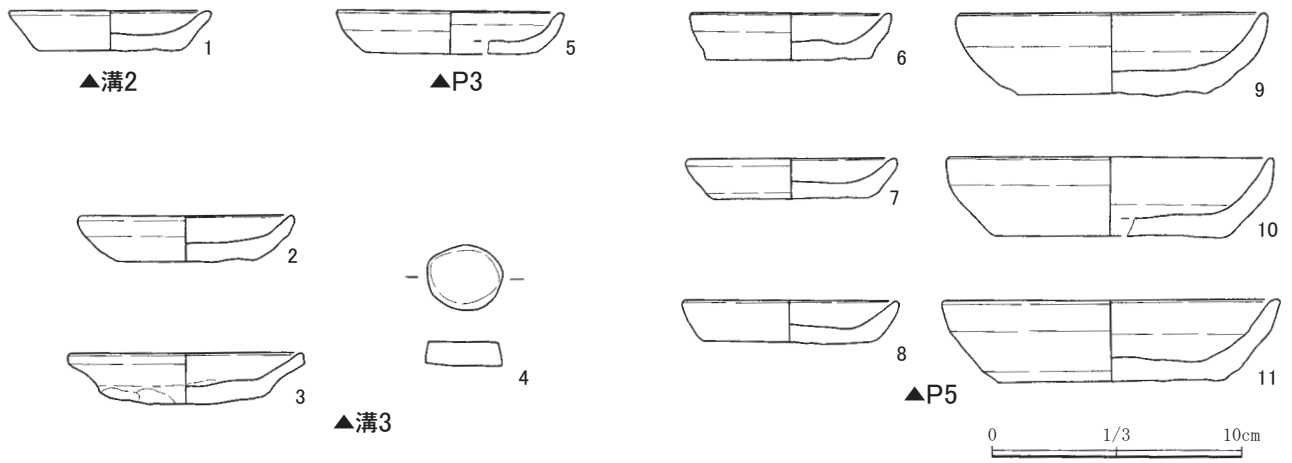


図36　7面各遺構出土遺物

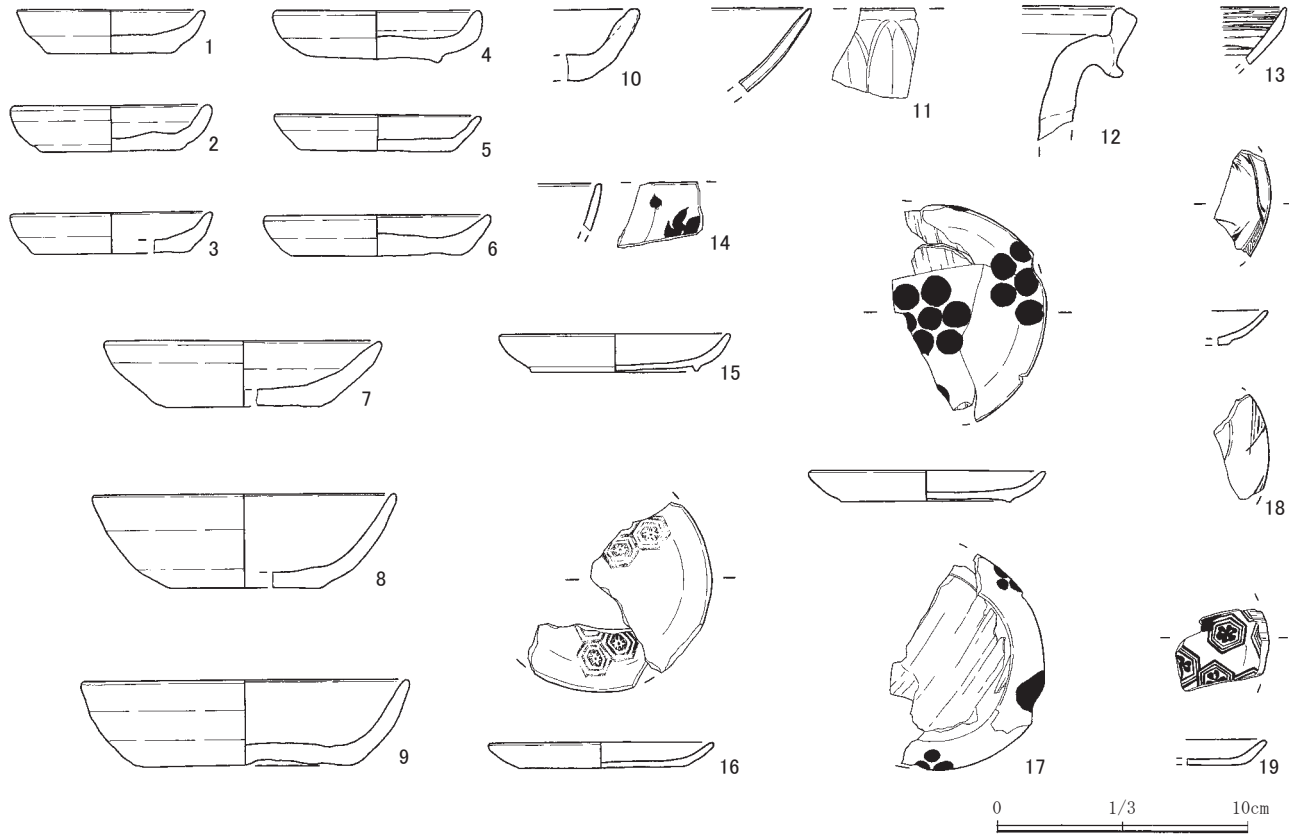


図37　7面木器層中出土遺物（1）

ある。出土遺物は、6～8が轆轤かわらけ小皿、9～11が轆轤かわらけ大皿を図示した。

7面木器層出土遺物（図37・38、表15・16、図版14・15）

6面から7面検出までの堆積層は30～50cm大の泥岩層であり、その層中からはかわらけや常滑片など極僅かの出土が認められたが図化し得るには至らなかった。泥岩層の直下、7面直上には全体に図5の102層である木器層が厚さ10～15cmほど堆積していた。本層中には多量の遺物が含まれており、これらを7面遺構外の出土遺物とし総数612点中46点を図化した。図37－1～6は轆轤かわらけ小皿、7・8は轆轤かわらけ中皿、9は轆轤かわらけ大皿、10はかわらけに熱で溶かされた不純物が付着しており「とりべ」として使用されたと思われる。11は青磁蓮弁文碗、12は中野編年6a型式の常滑甕口縁部、13は瓦器皿、14は外面に手描きの草花文を描く漆器椀、15は無文の漆器皿、16は亀甲文様のスタンプが捺

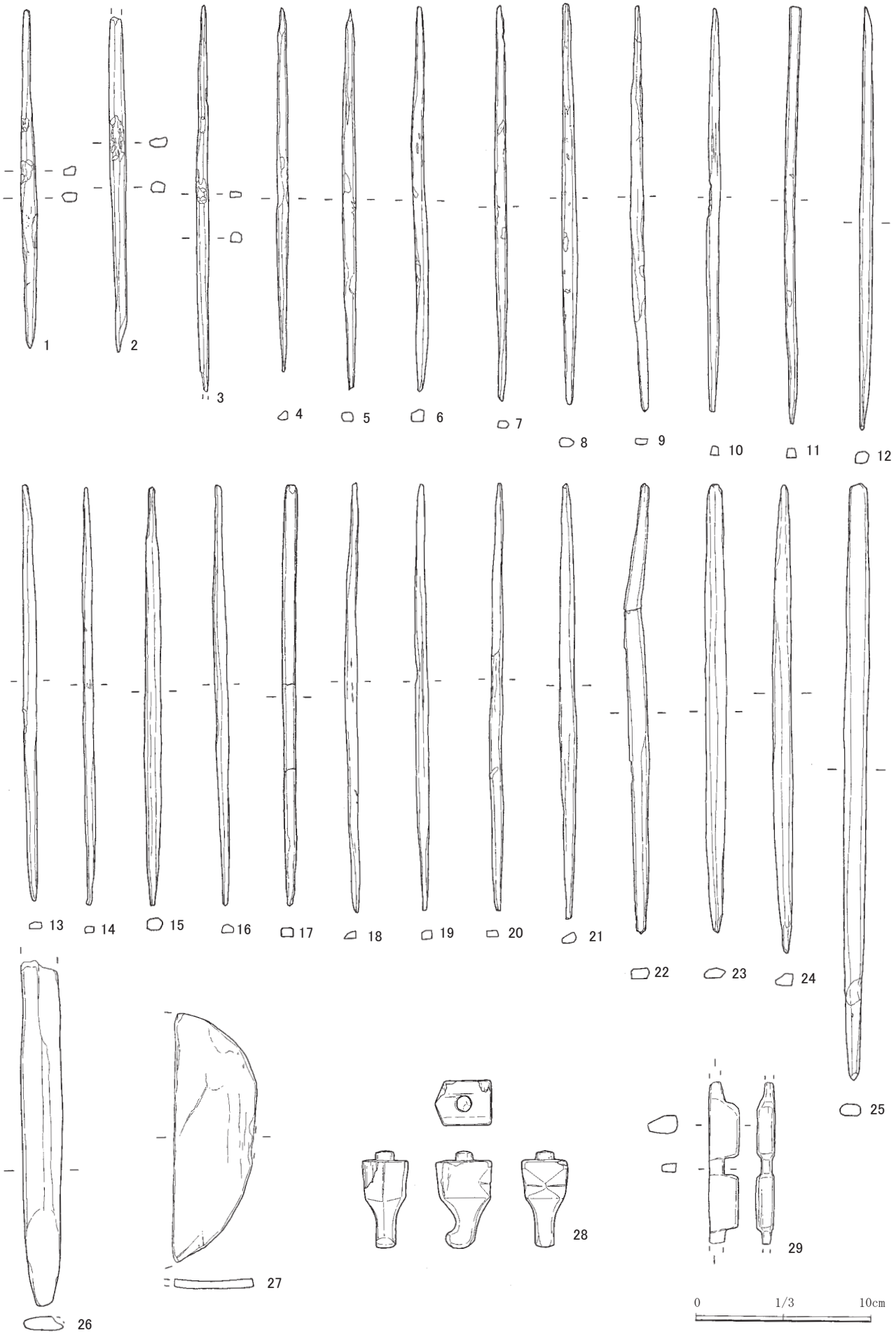


図38　７面木器層中出土遺物（２）

表８　７面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	規模（cm）			備考／重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑１	不明	9.78	9.70	(85)	(61)	8	側溝により削平
土坑２	不明	9.79	9.70	(51)	(28)	9	側溝により削平
土坑３	不明	9.80	9.68	(60)	(45)	12	P7により削平
P1	楕円形	9.78	9.66	32	21	12	P2を削平
P2	不明	9.78	9.55	(52)	(14)	23	P1により削平
P4	円形	9.75	9.53	24	23	22	―
P6	不明	9.79	9.69	(40)	(35)	10	溝3により削平
P7	不明	9.80	9.67	(37)	(35)	13	溝3により削平

されてある漆器皿、17は梅の花を描いた漆器皿、18は手描き文様不明の漆器皿、19は文様不明のスタンプが捺された漆器皿である。図38－１～21は木製箸である。１～３、10は一部に装飾のような加工がしてあり、何かの目印とする意図があるように思われる。22～25は木製の串と思われるが、もしくは菜箸の可能性も考えられる。26は先端部を箆状に加工してある箆状木製品、27は曲物の底板、28は黒漆を塗布してある膳脚、29は残存している中央部に凹状の加工がしてある用途不明木製品である。

第８節　８面の遺構と遺物

現地表下240cm、標高9.60ｍ、黒褐色粘質土の中世基盤層（図５－107層）で確認した遺構面である（図39）。７面ではＬ字状に調査区を設定したが、当遺構面ではさらに縮小し、南壁沿いの調査とした。発見した遺構は溝状遺構１基、土坑２基、ピット６基である。

溝状遺構１（図39・40・41、表16、図版７・15）

Ｃ－３グリッド西側の位置、南北に掘られていたが、７面溝１や周辺の遺構により削平が著しい。おそらく7面溝1の前身の溝と思われるが、確認範囲だけでは断定しづらいところである。確認できた規模は、長さ（84）×幅（90）×21cmである。検出標高は9.63ｍ、底面標高は9.41ｍである。覆土は泥岩粒と貝砂、炭化物と木端・木片を少量含む黒褐色粘質土が堆積していた。出土遺物は、検出作業時に上・下層に分けて取り上げた。堆積土は前述したように１層だが、上・下層として図示した。上層は図41－１が轆轤かわらけ小皿、２は轆轤かわらけ大皿、３は手捏ねかわらけ中皿、４・５は手捏ねかわらけ大皿、６は同安窯青磁劃花文皿である。下層は、７が完形の長さ11.5cmの鉄釘、８は刀子の形状を模した形代と思われる木製品である。

土坑２（図39・40・41、表16、図版７・15）

調査区南西隅、Ｃ－２グリッド東側で検出した。西端部は水抜き側溝により削平してしまい、土層から復元した。新旧関係では、東側に位置する溝状遺構１とピット２を削平している。確認できた規模は、長径（125）×短径長（89）×深さ35cmである。検出標高は9.63ｍ、底面標高は9.28ｍである。覆土は泥岩粒・貝砂・木片・木端少量、細砂多く含む黒褐色粘質土が堆積していた。上層には長さ35×幅9×厚さ3cmと長さ64×幅8×厚さ3cmの木材が含まれていた。出土遺物は、９が手捏ねかわらけ中皿、10は外底側面に切れ込みの痕跡がみられる手捏ねかわらけ、11は土師器坏の底部片だが、下層の遺物が混じってしまっていた可能性が考えられる。

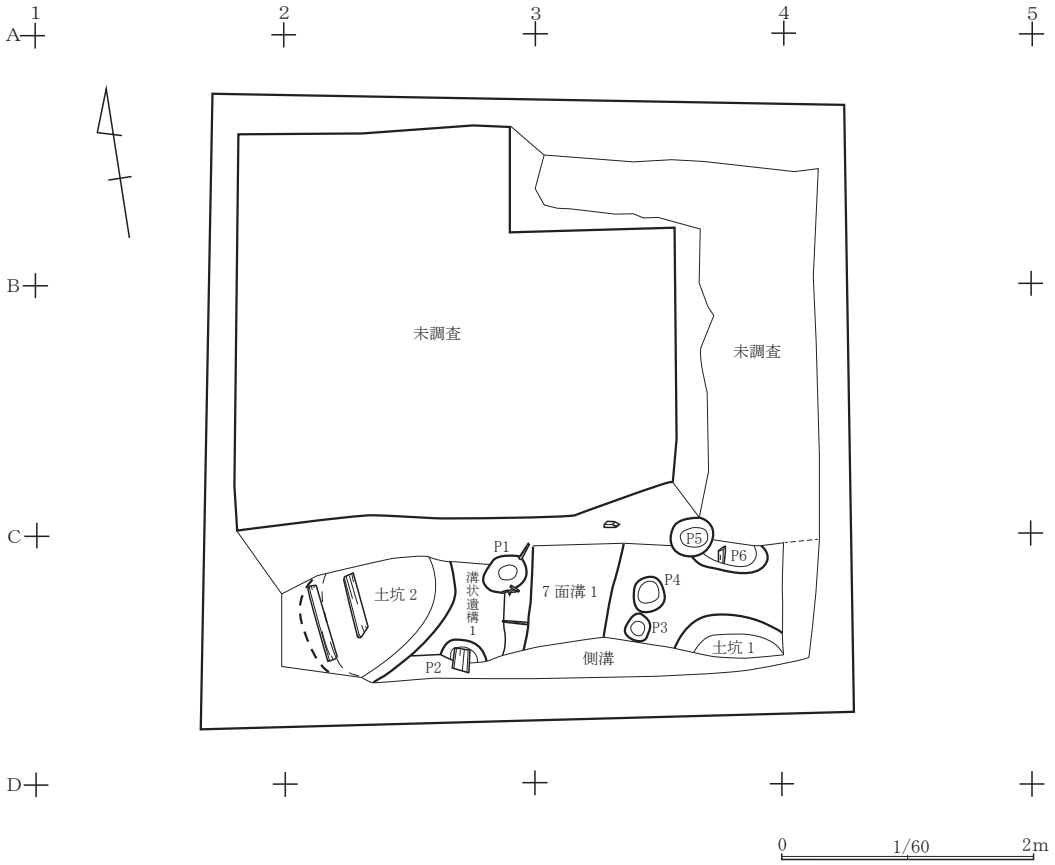
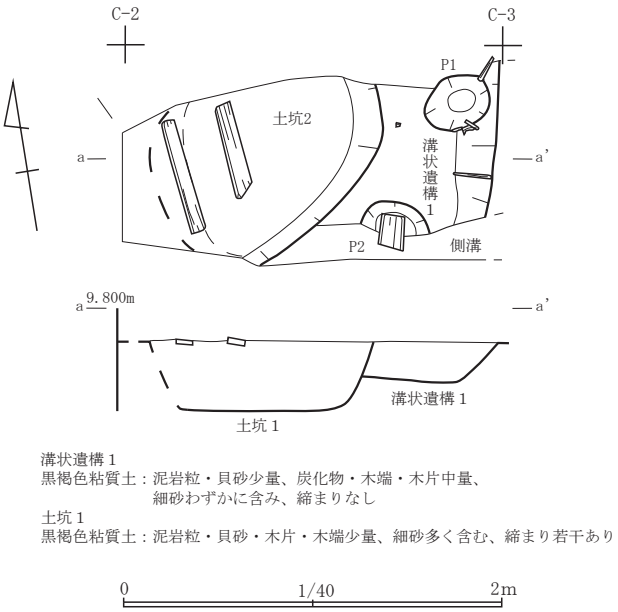


図39　8面全測図

8面遺構外出土遺物（図42、表16、図版16）

7面より掘り下げ、当面検出までに出土した遺物は185点を数え、内20点を図42に図示した。当面から手捏ねかわらけの出土が目立つようになり、中には土師器や須恵器など中世以前の遺物も僅かに含まれている。1～11はかわらけで1・2は手捏ねかわらけ、3～8は轆轤かわらけ小皿、9は轆轤かわらけ中皿、10・11は轆轤かわらけ大皿である。12は青磁碗、13は常滑甕、14は永福寺Ⅰ期の平瓦、15～18は木製箸、19は先端部篦状に削り加工をしている篦状木製品、20は須恵器甕である。



溝状遺構１
黒褐色粘質土：泥岩粒・貝砂少量、炭化物・木端・木片中量、
細砂わずかに含み、締まりなし
土坑１
黒褐色粘質土：泥岩粒・貝砂・木片・木端少量、細砂多く含む、締まり若干あり

図40　8面各遺構

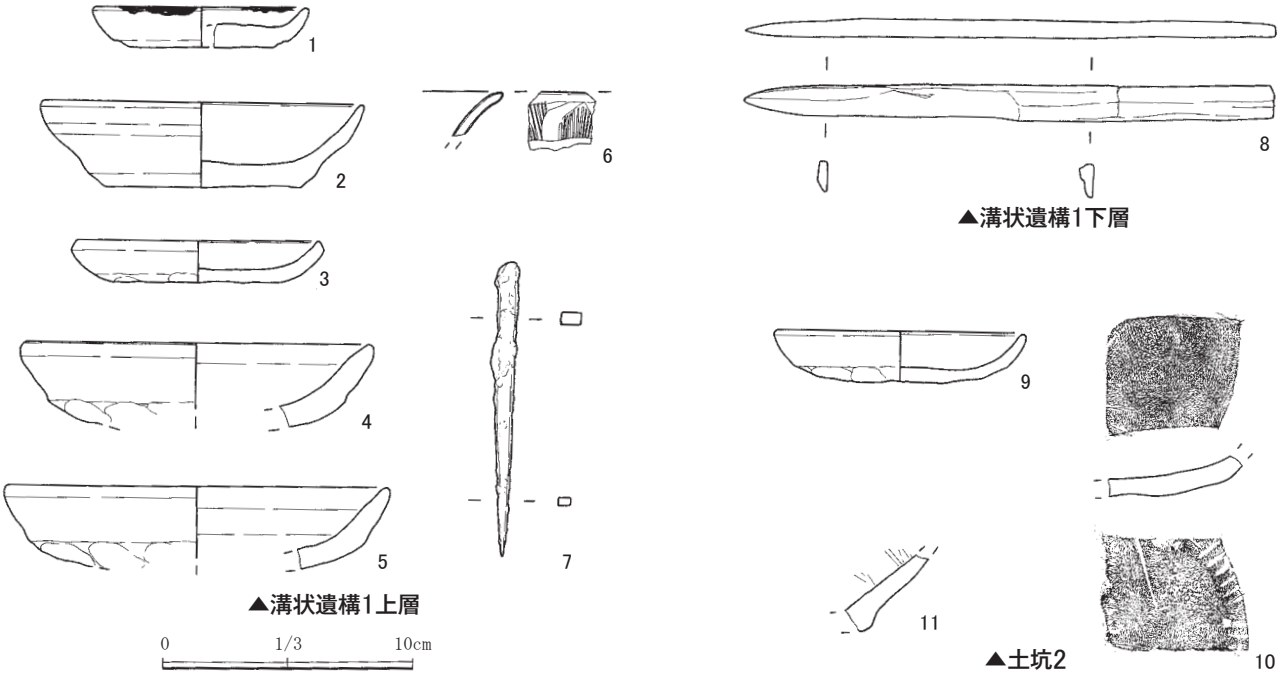


図41　８面各遺構出土遺物

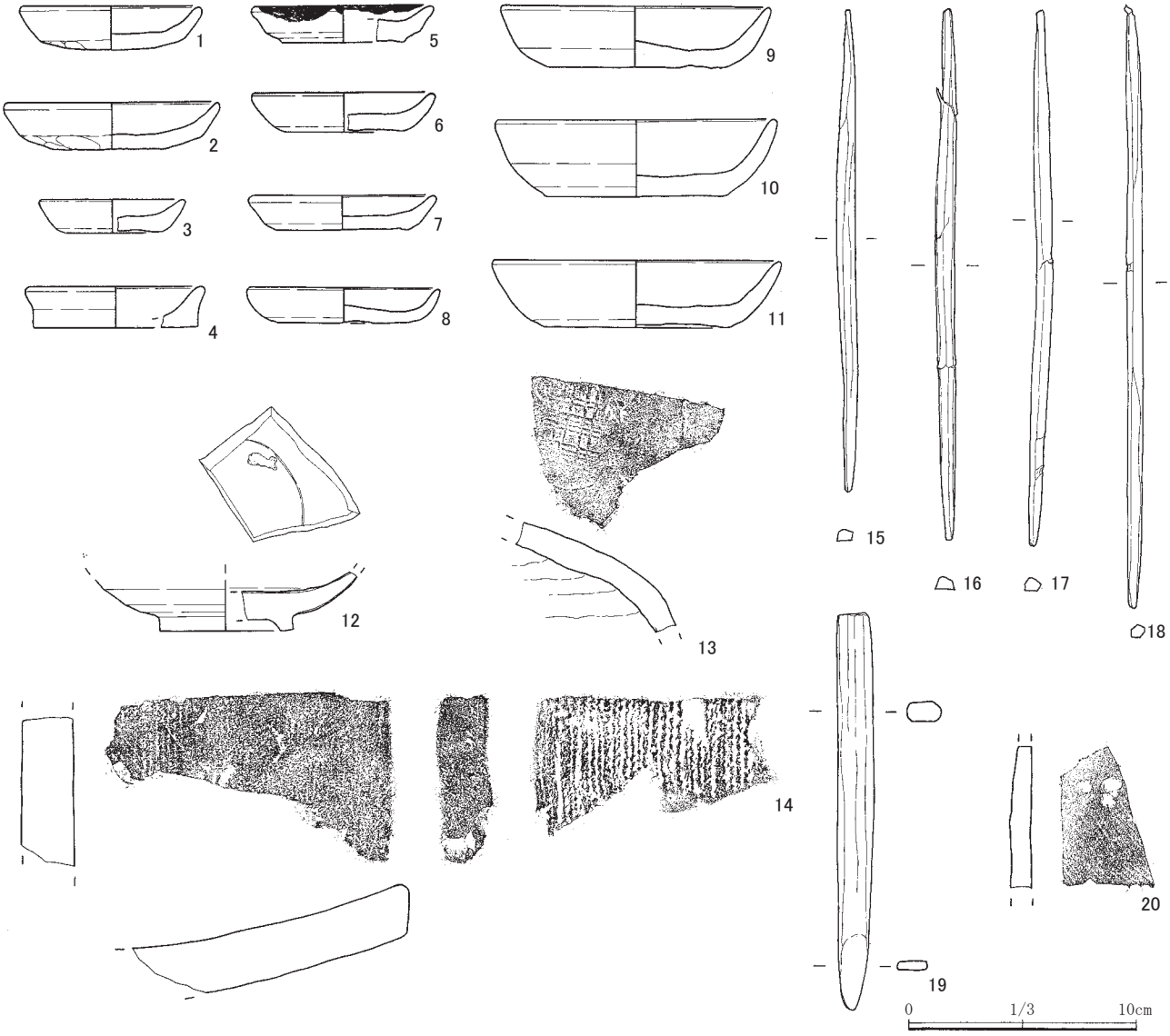


図42　８面遺構外出土遺物

表９　８面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	規模（cm）			備考／重複関係など
				長径	短径	深さ	
土坑１	不明	9.57	9.46	(86)	(35)	10	側溝により削平
P1	不整円形	9.50	9.29	35	27	21	溝状遺構１を削平
P2	不明	9.42	9.30	(36)	(25)	12	長13×幅19×厚3cmの礎板含む
P3	不整円形	9.61	9.50	24	20	11	―
P4	不整円形	9.60	9.45	29	26	15	―
P5	円形	9.78	9.47	34	31	31	P6を削平
P6	長円形	9.58	9.45	(48)	(24)	13	P5により削平

第９節　８面下トレンチの遺物

８面の調査を終了した時点で、掘削深度が地表から240cmほどの高さに達していたため、危険と判断された。試掘結果からも６面以下は確認していなかったので、下層に中世遺構面の有無を確認する目的のため調査区南西部にトレンチを設定した（図43）。８面遺構により検出標高から30～35cmは除去してしまっていたが、トレンチ周囲や内部からは中世遺物の出土は確認できず、８面が中世基盤層と判断した。

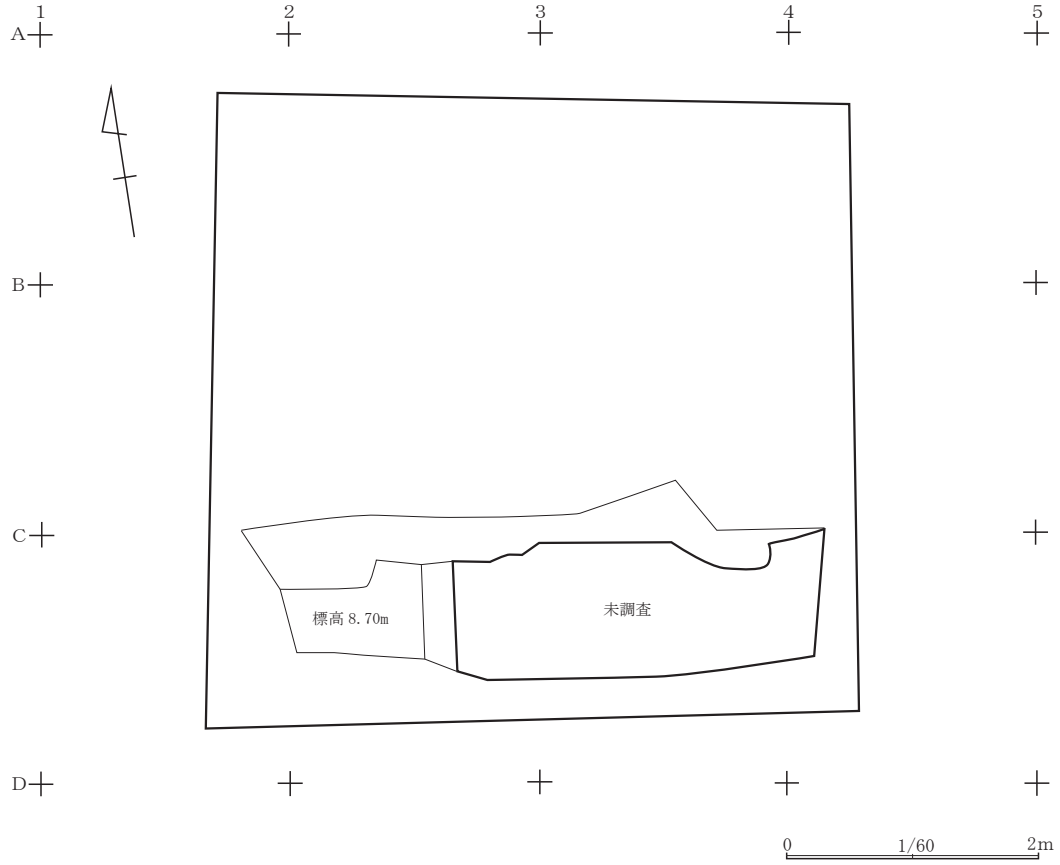


図43　８面下トレンチ

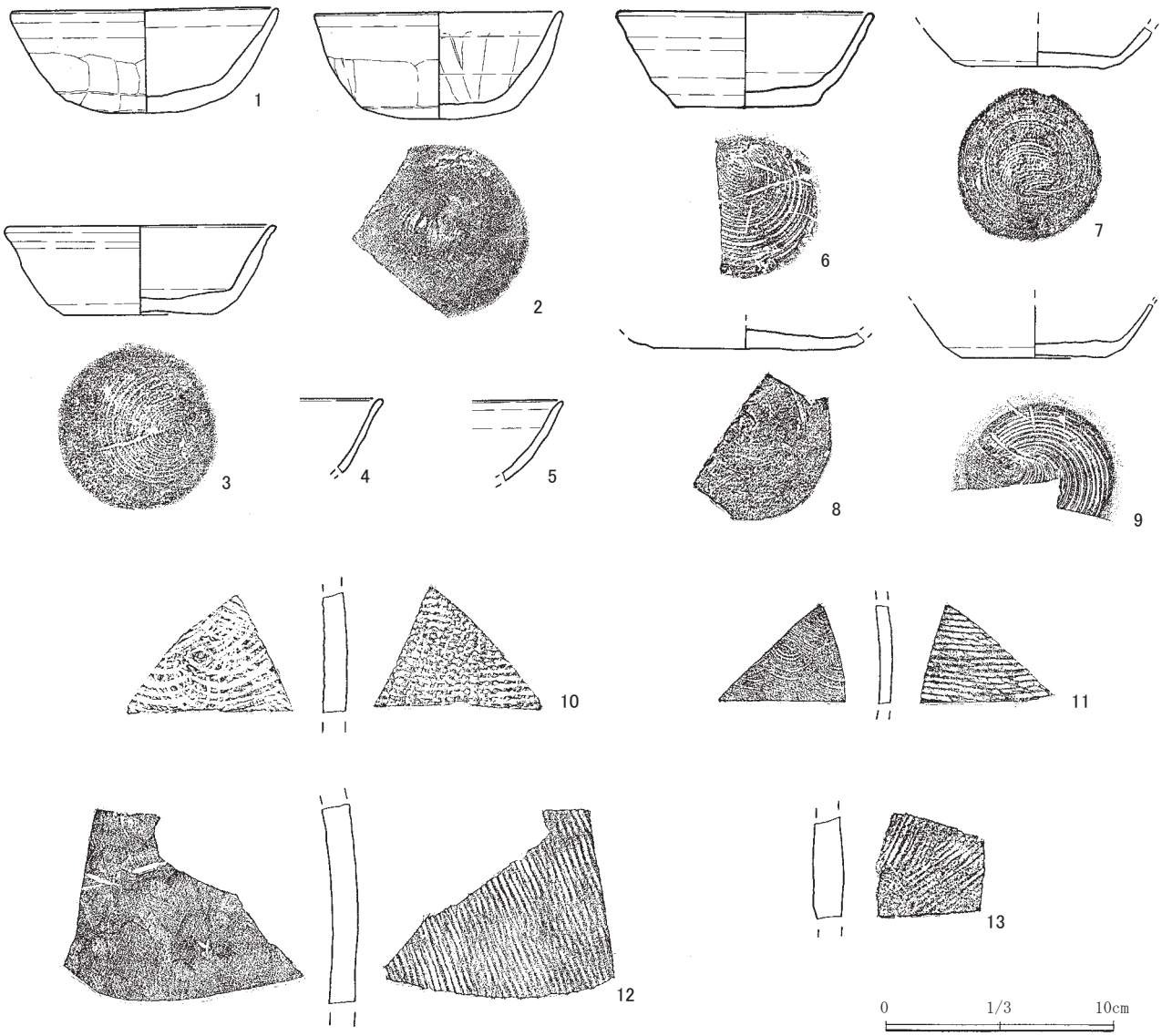


図44　８面下トレンチ出土遺物（１）

8面調査中にも中世以前の遺物が混じって出土していたので、標高8.70 mまで土層の確認を行った。8面直下の層位（図5－108・110層）から古代の遺物がまとまって出土した。古代の遺構面があったことは確実で、まとまった遺物の出土は何らかの遺構に関係すると思われたが、狭小な範囲と多量の湧水によって詳細は不明瞭になってしまい、以下、土層堆積の状況を観察した。

8面下トレンチ出土遺物（図44・45、表17、図版16・17）

出土した遺物は7～9世紀代の所産と考えられる。ほぼ同位置にまとまっており一括で出土したが、遺構内に含まれていたかは不明である。

図45－1・2は相模型の土師器坏、3は9世紀前半の所産で三浦半島が産地と思われる土師器坏、4～9は須恵器坏で4・5は南比企産と考えられる。10～13は須恵器甕である。図45－1は丸瓦、2～5は平瓦で、2は凸面に縦方位の叩き目がみられる小片、3・5は凸面縄目痕、4は斜方位の叩き目がみられる側端部片である。

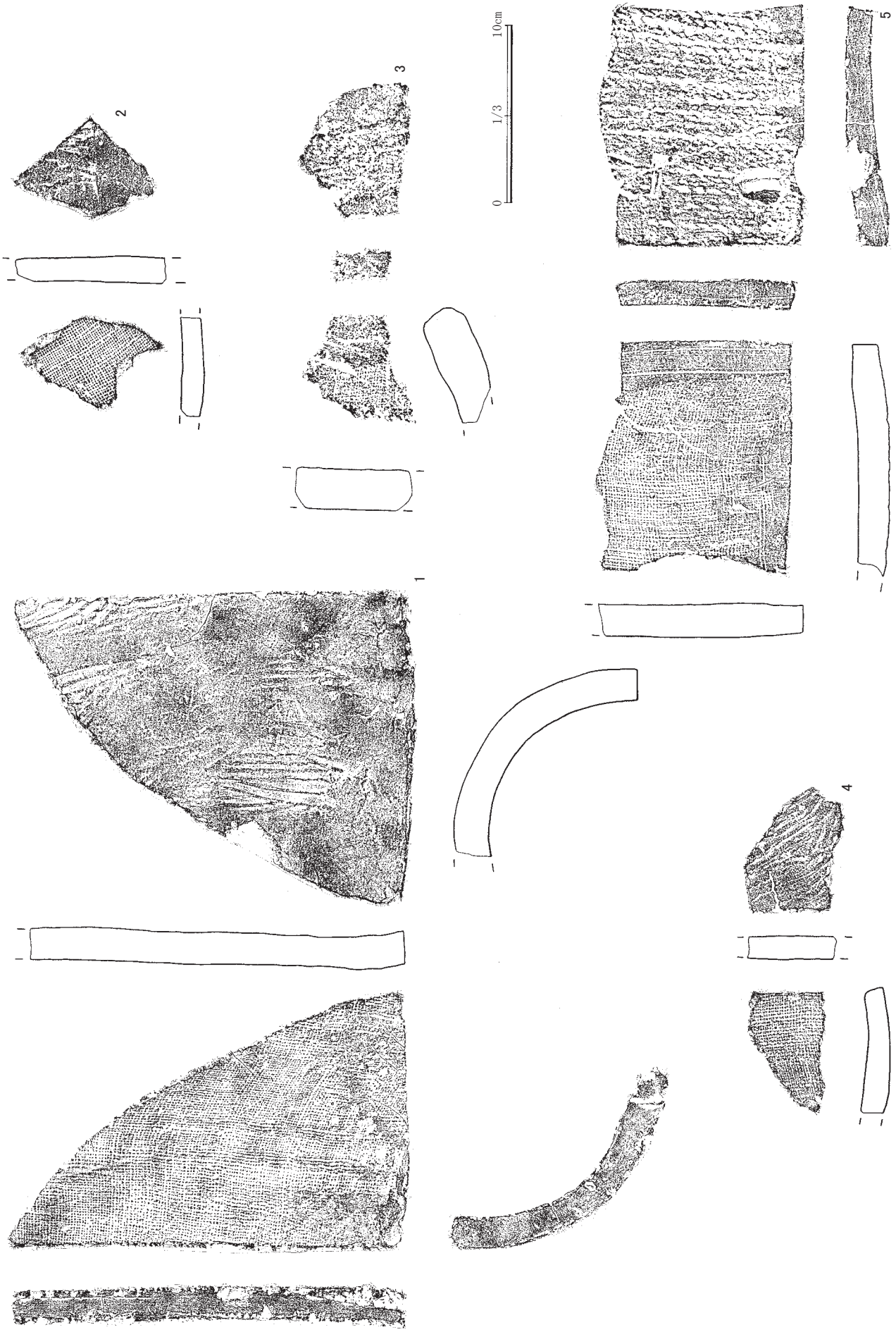


図45　8面下トレンチ出土遺物（2）

第四章　まとめ

本調査地点は、JR鎌倉駅の北600ｍほどの位置、扇ガ谷二丁目195番2地点に所在する。扇ガ谷の開口部東端、現在の切岸された丘陵と扇川に挟まれた20ｍ内の平地に立地する。また、東側には切岸に掘られたやぐらが近接している。本地点では古代1面と中世8面を確認し、古代Ⅰ期、中世Ⅶ期に分けられる。第3章では上層から下層に向かい検出した順に報告したが、ここでは各期古い順に整理しつつ、推測を兼ねながら考察していく。

古代Ⅰ期：8面下トレンチ内で出土した遺物は古代に帰属する遺物であり、瓦、土師器、須恵器がほぼ一括で出土した。中世以前の土層堆積確認トレンチとして調査を行った関係から狭小な範囲としたため、当該期の遺構等は確認できなかった。出土した遺物は、相模型の土師器坏や南比企産の須恵坏など、8世紀後半～9世紀前半所産と考えられる。扇ガ谷地区において現時点では中世以前の遺物の出土は僅かである。この時期の様相は推測の域を出ないが、当地より南の今小路西遺跡付辺には古代の郡衙があったとされ、JR鎌倉駅北西約250ｍに位置する今小路西遺跡－御成町171番1外地点では、7世紀中葉～9世紀以降の古代面が検出されていることもあり、その関連として当地域にも拡がりが及んでいたのではないかと考えている。

中世Ⅰ期：8面が該当する。Ⅰ期が途絶えた後に8面構築土である自然堆積上から始まり、これが中世基盤層になる。狭小な範囲の中、溝状遺構や土坑などの確認に終わり、全体像を把握するには至らなかった。さらに、上面に比べ遺物出土量も減る傾向がみてとれることは、本地点周辺の人の動向に比定できるのであろう。年代については、本調査地点の中で8面は手捏ねかわらけの出土が顕著であり、轆轤かわらけの器厚はやや厚く、口縁部が丸味を呈す一群が出土している（註1）。また、鎌倉時代初期に出土傾向がある龍泉窯系青磁碗や同安窯青磁劃花文碗が出土していることから、13世紀前葉の年代が考えられる。

中世Ⅱ期：7面に移行すると、調査区中央を南北に溝1が掘られる。この溝1がどういった区画を持っているか定かではないが、松谷寺跡－佐助一丁目516－1外4筆地点で確認されている木組み溝のように、おそらく尾根沿いに造られた溝の可能性がある。また、溝2・3と溝1の関係は、報文中で土層の新旧関係上、後者が新しいとしたが、溝1西部の状況を確認していないことから、溝1と溝2ないしは溝3は合流していたことも推察される。7面直上には大量の木器層が堆積しており、調査区外一帯に拡がっていたと思われる。主に木端や木片が混じっていることから、当時の廃棄場所か扇川の氾濫・洪水などにより溜まった層位なのではないかと考えている。

当面の遺構からは手捏ねかわらけの出土が減少する。さらに、轆轤かわらけの底径は幅が広くなり、器形はやや内湾し、器高も低いことから廃絶時期は上面との関係もあり、13世紀第中葉頃としたい。また、木器層中からのかわらけは、7面の遺構から出土するタイプとは違う様相である。出土遺物は木製品が主体であったが、かわらけも多量に含まれ、出土量は表18の通り各期通して最多である。轆轤かわらけも薄手傾向と器形の湾曲がやや顕著になる。また、中皿の出現と、図示できなかったが手捏ねかわらけも出土しており、13世紀中～後半頃と思われる。

中世Ⅲ期：6面が該当する。7面木器層の上面には30～50㎝大の泥岩層が70㎝堆積している。この泥岩層中にはほぼ遺物の出土は認められなかった。また、地業した形跡とは考えられず、切岸ややぐらの造成時に排出した泥岩を調査地点一帯に地業したか、もしくは扇川の氾濫・洪水を治めるための治水工事として行ったか、憶測の域を出ないが僅かな可能性として提示したい。当該期では上述した泥岩層上に土坑・ピットを確認した。P2・P9には板が入っており、芯々距離約210㎝で建物の柱間寸法に合う距離であったが、調査区内での建物の検出には至らなかった。年代は概ね13世紀後半としたい。

中世Ⅳ期：6面廃絶後、5面が構築され、土坑群が主体となる。方形土坑は掘り方も大きいが意図は不明である。扇ガ谷内には板壁建物が検出されており、掘り方の規模や深さなどから建物跡ではないかと思っている。その根拠は囲炉裏にある。囲炉裏は板壁建物に付属することが多い（註2）。武蔵大路周辺遺跡（図1－1・6地点）の調査でも板壁建物と囲炉裏が検出されている。本地点の囲炉裏は建物に付属していない状況で検出したが、おそらく方形土坑4内に含まれると思われる。そういった視点から考察すると、方形土坑の性格としては板壁建物の可能性も考慮しておかねばならない。遺物はやはり轆轤かわらけが最多であり、僅かに手捏ねかわらけが出土している。轆轤かわらけは全体的に薄手丸深タイプも含まれてくる。年代は鎌倉時代後期、13世紀後葉～14世紀前葉と考えている。

中世Ⅴ期：4a・b面が該当する。4b面の溝を埋めた後に4a面が成立する。当該期における4b面溝1の軸方位が後世にも引き継がれていくようである。本地点では当時期が一つの転換（移行）期になると考えられる。年代は、出土遺物の組成から14世紀前葉～中頃に比定できると思われる。

中世Ⅵ期：3面には調査区南部に東西溝が走る。Ⅴ期で確認した溝が時期を経てやや南側に移動している。この土地の区画に大幅な変化がないことがみてとれる。溝が廃棄され埋められた後に土坑などが掘られているため、少なくとも二時期に亘る遺構群がある。各遺構からの出土遺物には差異はなく、溝・土坑群と同時期の遺構は分けられなかった。出土遺物からは判断できる資料は乏しいが、Ⅴ・Ⅶ期との前後関係により年代は14世紀中頃としたい。

土坑５で出土した木札について

各方面から所見を頂いたので、ここで少し触れておきたい。墨書木札は上部斜めに削り落とし、形状は横長の五角形になると考えられる。ちょうど中央部分が縦に割れてしまっている。長さ20.9㎝、残存幅4.0㎝、厚さ0.5～0.7㎝が残っている。両面に墨書があるが、文字の中心部分から半分が欠けており、両面共に解読が困難である状態である。今回、この資料を調査・整理中に所見してもらった結果、表側は「梵字（キリーク？）文和三年午八（月？）」の左半分ではないかという指摘があった。裏側は梵字がいくつかあるが、解読不能である。文和年間（1352～1355年）であるとしたら14世紀中頃に帰属するⅥ期の推定年代と重なってくる。また、中央付近に孔径0.4㎝の釘穴の痕跡が見られることから、どこかに打ち付けていた可能性は高いがその用途は不明である。さらに、梵字が書かれていることから密教色が強いと思われるが、その真意も不明である。土地の歴史から上杉氏を連想させるが、推定年代から関係することは若干時期が合わないように思えるため、本資料についてはさらなる検討が必要であろう。

中世Ⅶ期：1・2面には二時期に亘る道路状遺構と溝を検出した。ほぼ同じ位置で造られており、おそらく道路状遺構を積み重ねたあとに1面が整地されたと思われ、成立から廃絶まで一連を通して継続した遺

構面であると考えられる。ただし、これらの遺構は東に延長すると5～6ｍほどで切岸に突き当たってしまう。山に沿うように道路もしくは通路のような主体となった道があったのかは明らかにされていないが、それに通じるやぐらへ続く道やあるいは土塁といった可能性も否定できないと思われる。出土遺物は図示不可能な小片の遺物ばかりで、年代比定しづらいところではあるが、概ね14世紀後半頃になる様相である。

以上、各期の様相について推察を交えて考察してみた。そこから浮かび上がった問題点を提示してみる。

一つはⅤ～Ⅶ期で検出した溝と道路状遺構である。先述したように調査地点は東側に丘陵、西側には扇川に挟まれた約20ｍの範囲内にある。溝と道路状遺構を延長したとして最大20ｍになるが、現況をみてもその幅で納まるような遺構とは考えられない。現地調査中に踏査した結果、現在の扇川の流路は大幅に変わっている印象が強かった。おそらくJR横須賀線線路建設の影響によるものであろう。近い将来これに係わる調査の進展は希薄であると思われるが、今後注目したい点である。

次に、中世Ⅱ期の木器層について、氾濫・洪水による水害が13世紀中～後半頃に帰属するとしたとき、その時期に鎌倉内で吾妻鏡の文献資料から水害関係の記事をみると、いくつかの記録がみられる。「洪水」という名称に限った記事では、文暦2(1235)年、嘉禎3(1237)年、寛元2(1244)年、建長3(1251)年、建長8(1256)年、正応4(1291)年の各条に書かれている（註3)。本調査地点付近では扇川が現在とは違う流路であった可能性は、本調査地点の南側、JR横須賀線踏切脇の扇川底に残る方形の木組みや木杭が指摘できる。扇ガ谷内を流れる扇川が多くの寺院があったであろうこの地域でどのような事象と位置づけがあったかは推測の域を出ないが、災害による生活の変容もあると思われる。そのような観点も踏まえつつ、上述した点についてもこれからの発掘調査の成果と文献資料、多分野からの指摘により明らかになっていくことを期待したい。

文末ではありますが、墨書木札についてご教示して下さった大三輪龍哉氏、古田土俊一氏、高橋慎一朗氏には厚く感謝の意を表します。

【註】

1．鎌倉でのかわらけ編年案は、河野眞知郎氏、馬淵和雄氏、宗臺秀明氏、田代郁夫氏などが提示してきた。ある程度の出土傾向はみてとれるものの、それぞれ年代比定に差異があり、確立している編年観ではない。したがって、ここではそれらを総合的に判断したうえで年代比定の参考にしているため、年代観に誤差がある。

2．山口正紀　2012「都市鎌倉における囲炉裏と建物－その機能と性格－」『第１期大三輪龍彦研究基金研究報告』特定非営利法人鎌倉考古学研究所

3．2013年に鎌倉考古学研究所第3回シンポジウム「考古学からみた鎌倉の災害」発表資料集において、松吉大樹氏が鎌倉の災害記事を略年表としてまとめ、参考とした。また、「大雨」などの名称も出てくるが、洪水などの現象が起こったかは定かではないので、ここでは省略した。
松吉大樹　2013「災害略年表」『鎌倉考古学研究所 第3回シンポジウム「考古学からみた鎌倉の災害」－発表資料集－』特定非営利法人鎌倉考古学研究所

【引用・参考文献】

菊川英政ほか　2008「今小路西遺跡（№201）発掘調査報告書―御成町171番１外地点―」株式会社　斉藤建設（文化財事業部）

斎木秀雄　2013「武蔵大路周辺遺跡の発掘調査」『第23回鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉教育委員会

宮田眞・滝澤晶子・安藤龍馬　2011「松谷寺跡（№205）発掘調査報告書（神奈川県鎌倉市佐助一丁目516－１外４筆）」株式会社 斉藤建設・博通

表10　遺物観察表（1）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
7-1	試掘坑	かわらけ	完形	11.4	7.0	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒多 海綿骨針 小石粒 やや粗胎　c.淡橙色　d.良好
7-2	試掘坑	瀬戸系 植木鉢	口縁部～胴部小片	—	—	［4.5］	a.轆轤　b.砂粒 白色粒 やや粗胎　d.淡白色不透明 内面口縁部下～外面施釉　d.良好　f.近代以降所産
7-3	試掘坑	常滑　甕	底部破片	—	—	2.7	a.輪積み　b.灰褐色 砂粒 白色粒 やや粗胎　c.灰黒色～橙褐色　d.良好
7-4	試掘坑	備前系　擂鉢	底部片	—	—	［4.5］	a.内底部周回する3条以上の擂目 内面胴部乱雑な擂目 外底指ナデ痕　b.砂粒 白色粒 小石粒多 粗胎　c.茶褐色　d.良好　f.近代以降所産
8-1	1面溝2	かわらけ	口縁部1/5～底部1/2	(11.8)	(7.0)	3.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒多 海綿骨針 小石粒 やや粗胎　c.淡橙色　d.良好
8-2	1面遺構外	かわらけ	口縁部4/5～底部完形	12.0	6.8	3.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色　d.良好
8-3	1面遺構外	かわらけ	口縁部1/10～底部完形	(13.0)	7.0	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色　d.やや良好　f.内底に指頭痕
14-1	3面溝1	青磁 蓮弁文折縁鉢	銅部小片	—	—	［4.8}	a.外面蓮弁文　b.灰色 精良緻密　d.灰緑色半透明 内外面施釉 釉層やや厚い　e.良好
14-2	3面溝1	褐釉　壷	肩～胴部小片	—	—	［2.3］	b.灰黄色 砂粒 赤色粒 やや粗胎 粘質　d.褐色不透明 外面施釉 内面露胎 e.良好
14-3	3面溝1	碁石　（白）	完形	径2.2　厚さ0.2～0.7			a.円形状　c.乳白色
14-4	3面溝1	銅銭	完形	外径2.25　内径1.85 孔径0.65 厚0.1			f.元豊通寶 北宋 1078年 篆書
14-5	3面溝1	漆器　椀	口縁部1/2～底部完形	15.0	7.3	4.4	f.内外面黒漆塗り 無文
14-6	3面溝1	漆器　椀	胴部片	—	—	［2.2］	f.内外面黒漆塗り 内外面に朱漆の手描き文様
14-7	3面溝1	漆器　皿	口縁部1/3～底部1/3	—	［2.0］	［0.8］	f.内外面黒漆塗り 内面に朱漆の手描き文様
14-8	3面土坑4	常滑　壷	口縁～頸部片	—	—	［5.4］	a.輪積み　b.暗灰色 砂粒 白色粒 小石粒 良胎　c.灰緑色～茶褐色　e.良好
14-9	3面土坑5	墨書木札	中央部片	長20.9 幅［4.0］厚0.5～0.7 孔径0.4			f.表裏墨書あり、判読不明 中央に釘穴あり
14-10	3面P7	かわらけ	口縁部1/3～底部完形	(12.6)	7.5	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 良胎 c.淡橙色　e.良好　f.内面ほぼ全体に茶褐色の付着物
14-11	3面P13	かわらけ	口縁部1/2～底部1/2	(7.6)	(5.5)	1.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 良胎 c.橙色　e.良好　f.灯明皿
14-12	3面P24	かわらけ	口縁部1/3～底部1/2	(7.3)	(4.6)	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 海綿骨針 良胎　c.黄灰色 e.良好
14-13	3面P24	木製品　曲物	円形部1/2	長28.3 幅［13.3］厚1.2～1.4 推定直径28.0			f.柾目材 容器の底板
14-14	3面遺構外	白磁　口はげ皿	口縁部小片	—	—	［1.8］	b.灰色 白色粒 精良緻密　d.灰緑色不透明 内外面施釉 口唇部露胎　e.良好
14-15	3面遺構外	瀬戸　おろし皿	口縁部小片	—	—	［2.8］	a.灰釉ハケ塗り 内底面格子状のヘラ描き　b.灰白色 白色粒 良胎　d.灰緑色～淡褐色　e.良好
14-16	3面遺構外	瀬戸　折縁深皿	口縁部～胴部片	—	—	［7.1］	b.灰白色 砂粒 白色粒 良胎　d.灰緑色透明　e.良好　f.口縁部及び胴部所々釉が剥げている
14-17	3面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部～胴部片	—	—	［6.5］	a.輪積み　b.赤橙色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや粗胎　c.赤褐色～黄橙色 e.良好
20-1	4a面土坑2	かわらけ	口縁部1/5～底部完形	(13.4)	8.2	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.黄橙色～褐色　e.良好　f.内外面底部に煤付着
20-2	4a面土坑4	かわらけ	口縁部1/3～底部1/3	(11.7)	(7.0)	2.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好
20-3	4a面P6	かわらけ	口縁部1/5～底部完形	(12.8)	7.0	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
20-4	4a面P7	漆器　皿	口縁部1/2～底部1/3	(10.0)	8.0	［1.5］	f.内外面黒漆塗り 内面に朱漆の手描き文様（草花か）
20-5	4a面P13	かわらけ	口縁～底部1/4	(12.5)	(8.0)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色　e.良好
20-6	4a面P13	かわらけ	口縁部1/4～底部完形	13.0	7.4	3.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色　e.良好
20-7	4a面P13	かわらけ	口縁部3/2～底部完形	12.8	8.0	3.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎　c.黄橙色　e.やや不良
20-8	4b面溝1上層	かわらけ	口縁部1/4～底部1/2	(7.2)	(4.0)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.暗橙色　e.良好
20-9	4b面溝1上層	青磁　折縁鉢	口縁部2/3～底部完形	—	—	［2.2］	b.灰白色 精良緻密　d.青緑色半透明 内外面施釉　e.良好
20-10	4b面溝1下層	かわらけ	口縁部1/3～底部1/2	(7.4)	(4.2)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好　f.内面成形時についたと思われる傷有り
20-11	4b面溝1下層	青磁　蓮弁文碗	胴部小片	—	—	［2.5］	b.灰色 精良緻密　d.淡茶色透明 内外面施釉　e.良好

表11　遺物観察表（2）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
20-12	4b面溝1下層	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅2.4		［3.3］	a.輪積み　b.暗灰色 砂粒 白色粒 小石粒 粗胎　c.黒褐色　e.良好　f.中野編年6a型式～6b型式
20-13	4b面溝1下層	常滑　甕	肩部片	—	—	［5.0］	a.輪積み 肩部にスタンプ　b.暗灰色　白色粒　小石粒　粗胎　c.淡緑色～明褐色　e.良好
20-14	4b面溝1 裏込め南側	かわらけ	口縁部1/5～底部1/2	(7.4)	(5.4)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.赤橙色～茶褐色　e.良好　f.二次焼成により変色
20-15	4b面溝1 裏込め南側	常滑　甕	口縁部～肩部片	縁帯幅2.4～2.7		［7.8］	a.輪積み　b.灰黄色 白色粒 赤色粒 小石粒 粗胎　d.外面自然釉降灰 灰緑色 e.良好
20-16	4b面溝1 裏込め北側	かわらけ	口縁部1/4～底部1/4	(7.3)	(5.6)	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.内面黒褐色 外面灰橙色　e.良好　f.二次焼成により変色
20-17	4b面溝1 裏込め北側	褐釉　双耳壷	胴部片	—	—	［5.5］	b.灰黄色 砂粒 黒色粒 良胎 緻密　c.灰緑色　e.良好　f.二次焼成により釉剥離 内面露胎
20-18	4b面溝1 裏込め北側	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［2.6］	a.輪積み　b.灰白色 砂粒 白色粒 小石粒 やや粗胎　e.良好　f.二次焼成により一部変色
20-19	4b面溝1 裏込め北側	常滑　鳶口壷	胴部小片	—	—	［2.2］	a.輪積み 肩部外周に細い沈線　b.暗褐色 砂粒 白色粒 良胎 粘質　c.外面降灰暗褐色～灰濃緑色 内面黒褐色　e.良好
20-20	4b面土坑2	かわらけ	口縁部2/3～底部完形	(12.0)	7.5	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
20-21	4b面土坑2	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(13.5)	(8.0)	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好
20-22	4b面土坑3	吉備系土器	口縁部1/4	(10.9)	—	［3.2］	b.砂質 白色粒 小石粒 赤色粒 良胎　c.灰色～淡黄白色　e.良好
21-1	4a面遺構外	かわらけ	口縁部1/2～底部1/2	(7.4)	(5.2)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 良胎 c.橙色～茶褐色　e.良好　f.二次焼成により変色
21-2	4a面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/3	(11.6)	(7.0)	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色　e.良好
21-3	4a面遺構外	白磁　口はげ皿	口縁部小片	—	—	［2.1］	b.白色 黒色粒 精良緻密　d.灰白色半透明　e.良好　f.口縁部淡茶色～茶色の付着物
21-4	4a面遺構外	青磁　碗	底部小片	—	—	［1.4］	b.灰白色 精良緻密　d.暗灰緑色半透明 内外面施釉 釉層薄い　e.良好　f.高台部露胎
21-5	4a面遺構外	青白磁　梅瓶	胴部小片	—	—	［2.9］	b.白色 黒色粒 精良緻密　d.淡灰緑色半透明　e.良好
21-6	4a面遺構外	常滑　甕	肩部片	—	—	［3.8］	a.輪積み 外面肩部扇状の押印　b.淡灰色～淡褐色 砂粒 白色粒多 黒色粒 小石粒 粗胎　c.外面淡灰緑色 内面褐色　e.やや不良 焼成ムラあり　f.外面自然釉付着
21-7	4a面遺構外	常滑　甕	胴部～底部片	—	—	［5.0］	a.輪積み　b.淡褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 石英粒 粗胎　c.内面赤褐色降灰多量 外面淡褐色　e.良好
21-8	4a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［2.9］	a.輪積み　b.灰白色 白色粒 小石粒 良胎　c.灰白色　e.良好
21-9	4a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［4.0］	a.輪積み　b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 やや粗胎　c.明灰白色 e.良好　f.内面自然釉付着
21-10	4a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	［4.3］	a.輪積み　b.暗灰色 砂粒 白色粒多 黒色粒 小石粒 粗胎　c.赤褐色　e.良好 f.内外面自然釉
21-11	4a面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	［4.8］	a.輪積み　b.赤褐色 白色粒 黒色粒 小石粒 粗胎　c.赤褐色　e.やや不良
21-12	4a面遺構外	滑石　鍋	口縁部片	—	—	［4.8］	c.銀灰～黒色　f.内面傷多 口縁部及び鍔の欠損部多 二次焼成の為全体が焼けている
21-13	4b面遺構外	瀬戸 輪花型入子	口縁部1/2～底部1/2	(9.0)	(5.6)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 外底一部ヘラ削り　b.灰色 黒色粒 良胎　c.明灰色　e.良好　f.内面淡緑色灰釉 内底面灰釉無し 内底面墨痕有り 推定8弁の輪花
21-14	4b面遺構外	常滑　甕	口縁部片	縁帯幅1.8		［3.5］	a.輪積み　b.灰黒色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎　c.赤褐色　e.良好　f.中野編年6a型式か
21-15	4b面遺構外	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅2.6		［3.8］	a.輪積み　b.淡灰色～灰黄色 砂粒 白色粒 黒色粒 赤色粒 粗胎　c.灰褐色～淡緑褐色　e.良好　f.中野編年6b型式
21-16	4b面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	［3.0］	a.輪積み 貼付高台　b.灰色 白色粒 黒色粒 小石 良胎　c.灰褐色 内面灰黒色(煤か)　f.内面磨滅
21-17	4b面遺構外	滑石鍋転用スタンプ	一部欠損	長6.5 幅3.6 厚1.2～2.4			d.灰白色　f.滑石鍋転用 側面切りだし加工 両面に植物文を陰刻
21-18	4b面遺構外	骨角製用途不明品	完形	長2.9 幅0.7 厚0.7			a.円筒状に近いが表面僅かに角形に削り加工 研磨痕有り　c.乳白色　f.両端部ともに面取り、丸く加工
21-19	4b面遺構外	銅銭	完形	外径2.4　内径2.0 孔径0.75　厚0.1			f.治平元寶 北宋1064年 篆書
25-1	5面方形土坑1	漆器　皿	底部1/3	—	6.0	［1.0］	f.内外面黒漆塗布 内面朱漆の手描きの文様
25-2	5面方形土坑1	漆器　椀	胴部片	—	—	［3.0］	f.内外面黒漆塗布 内外面朱漆による鶯、梅花、木の枝の三種類のスタンプ文様
25-3	5面方形土坑2	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.7)	(6.0)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎　c.灰白色～赤褐色　e.良好　f.二次焼成により変色
25-4	5面方形土坑2	かわらけ	口縁部1/4～底部1/4	(12.7)	(7.8)	3.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好　f.内面一部煤付着

表12　遺物観察表（3）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
25-5	5面方形土坑2	青磁　蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	［3.7］	b.灰白色 砂粒 精良緻密　d.灰緑色半透明 内外面施釉　e.良好
25-6	5面方形土坑2	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅2.7		［5.0］	a.輪積み　b.灰橙色～淡橙色 白色粒 赤色粒 小石粒 粗胎　c.内面茶褐色 外面灰緑色～茶褐色　e.良好　f.中野編年7型式 図25-8と同一個体の可能性有り
25-7	5面方形土坑2	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅2.6		［4.4］	a.輪積み　b.赤褐色 白色粒 小石粒　c.暗褐色　e.良好　f.中野編年6b型式
25-8	5面方形土坑2	常滑　甕	口縁部片	縁帯幅2.8		［8.3］	a.輪積み　b.灰橙色～淡橙色 白色粒 赤色粒 小石粒 粗胎　c.内面茶褐色 外面灰緑色　e.良好　f.中野編年7形式 図25-6と同一個体の可能性有り
25-9	5面方形土坑2	常滑　甕	底部片	—	—	［4.2］	a.輪積み　b.灰褐色 白色粒 小石粒 粗胎　c.灰茶褐色　e.良好　f.焼成時粘土塊の付着有り
25-10	5面方形土坑2	常滑　甕	底部片	—	—	［5.2］	a.輪積み　b.暗褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎　c.茶褐色　e.良好　f.内面自然釉付着
25-11	5面方形土坑2	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［4.2］	a.輪積み　b.灰白色 白色粒 小石粒 粗胎　c.灰白色　e.良好
25-12	5面方形土坑2	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片	—	—	［5.5］	a.輪積み　b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 粗胎　c.灰色～灰緑色　e.良好 f.内面自然釉付着
25-13	5面方形土坑2	銅銭	完形	外径2.5 内径2.15 孔径0.7 厚0.15			f.開元通寶 南唐 960年
25-14	5面方形土坑2	銅銭	完形	外径2.55 内径2.15 孔径0.7 厚0.1			f.元豊通寶 北宋 1078年 篆書
25-15	5面方形土坑4	かわらけ	口縁～底部1/5	(7.4)	(4.1)	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 海綿骨針 粗胎　c.黄橙色 e.やや不良
25-16	5面方形土坑4	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.6)	(5.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.黄褐色 e.良好
25-17	5面囲炉裏1	かわらけ	口縁部1/2 ～底部完形	7.7	6.0	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄灰色　e.ややあまい
25-18	5面囲炉裏1	かわらけ	口縁部3/4 ～底部完形	7.4	5.4	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好　f.口縁部注口状に欠け
25-19	5面囲炉裏1	かわらけ	口縁部2/3 ～底部完形	10.8	6.8	2.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 黒色粒 海綿骨針 良胎　c.赤褐色～淡橙色　e.良好　f.かわらけ内火葬骨含む
25-20	5面囲炉裏1	木製　枡	完形	長5.1 幅5.2 高3.3 板材厚0.3 孔径0.3 木釘径0.2			a.長方形の板材の両短辺対角に切り込みを入れ、方形に組み合わせ状態を木釘で固定 底板を木釘で打ち付ける　残存木釘底板12本、側板20本　底板中央に孔　f.長4.5cm×幅4.5cm×高3.0cm＝60.75㎤
25-21	5面囲炉裏1	用途不明木製品	両端部欠損	長(17.2) 幅1.8 厚0.4～0.6 孔径0.4～0.5			f.板目材 表裏共仕上げ加工 縦長の中心部より側面寄りに4箇所不均等な間隔で孔が穿たれている 板目加工の為所々年輪の剥がれている箇所有り
25-22	5面P3	かわらけ	口縁部1/4 ～底部完形	(10.6)	6.4	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒多 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.淡橙色　e.良好
25-23	5面P4	かわらけ	完形	7.3	5.0	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好　f.内外面に煤付着
26-1	5面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(5.2)	2.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 粗胎　c.黄橙色～茶褐色　e.良好　f.二次焼成を受けているため損傷著しい
26-2	5面遺構外	かわらけ	口縁部1/5 ～底部完形	(11.7)	7.0	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎 c.黄橙色　e.良好
26-3	5面遺構外	かわらけ	口縁部1/8 ～底部完形	(13.8)	7.5	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 泥岩粒 粗胎　c.淡橙色　e.良好
26-4	5面遺構外	白磁　口はげ皿	口縁部小片	—	—	［2.5］	b.白色 精良緻密　d.灰白色半透明 内外面施釉　e.良好　f.内面に浮き文有り
26-5	5面遺構外	青磁　蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	［4.0］	b.白色 砂粒 黒色粒 やや粗胎　d.淡灰緑色 内外面施釉 釉層薄い
26-6	5面遺構外	褐釉　壷	胴部小片	—	—	［2.5］	b.暗褐色 白色粒 小石粒 良胎緻密　c.外面黒褐色 内面灰白色　e.良好
26-7	5面遺構外	褐釉　壷	胴部小片	—	—	［2.6］	b.茶褐色 白色粒 黒色粒 良胎緻密　c.外面褐色 内面灰白色　e.良好
26-8	5面遺構外	褐釉　壷	胴部小片	—	—	［2.5］	b.茶褐色 白色粒 黒色粒 良胎緻密　c.外面褐色 内面灰白色　e.良好
26-9	5面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［2.8］	a.輪積み　b.灰白色 砂粒 白色粒 小石粒 粗胎　c.灰白色　e.良好
26-10	5面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	［6.1］	a.輪積み　b.灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 粗胎　c.灰褐色　e.良好
26-11	5面遺構外	木製　箸	完形	長18.0 幅0.8 厚0.5			a.多角形状に削り加工
26-12	5面遺構外	木製　箸	完形	長19.1 幅0.6 厚0.6			a.多角形状に削り加工
26-13	5面遺構外	木製　箸	完形	長19.5 幅0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
26-14	5面遺構外	木製　箸	完形	長20.0 幅0.7 厚0.6			a.多角形状に削り加工
26-15	5面遺構外	木製　箸	上端部欠損	長［19.3］幅0.6 厚0.6			a.多角形状に削り加工
26-16	5面遺構外	木製　箸	両端部欠損	長［20.5］幅0.7 厚0.6			a.多角形状に削り加工
26-17	5面遺構外	木製　曲物	底板ほぼ完形	長12.0 幅11.0 厚1.0 径12.0			a.端部外周が薄く斜めに削り加工 断面形はやや台形に近い　b.柾目材
26-18	5面遺構外	木製　曲物	底板残存度1/3	縦13.3 横［4.3］厚0.4～0.5			a.端部の外周には斜めに削られた痕跡が残る　b.柾目材
30-1	6面土坑1	かわらけ	口縁部1/3 ～底部完形	(12.1)	(8.4)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 小石粒 粗胎　c.橙色 e.良好　f.口縁部一部煤付着

表13　遺物観察表（4）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
30-2	6面土坑1	かわらけ	口縁部2/3～底部1/3	(12.0)	(8.0)	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色　e.良好
30-3	6面土坑1	かわらけ	口縁～底部1/4	(12.5)	(8.5)	2.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎　c.黄橙色　e.不良
30-4	6面土坑2	かわらけ	口縁部1/5～底部1/2	(6.9)	(4.8)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.不良
30-5	6面土坑2	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅4.7		[6.6]	a.輪積み　b.灰色～茶褐色 白色粒多 黒色粒 小石粒 粗胎　c.茶褐色　e.良好　f.中野編年7型式
30-6	6面土坑2	常滑　甕	口縁部片	縁帯幅4.5		[7.5]	a.輪積み　b.灰色～茶褐色 白色粒多 小石粒 粗胎　c.深緑色～赤褐色 内面茶褐色　e.良好　f.中野編年8型式
30-7	6面土坑2	常滑　甕	肩～胴部片	—	—	[8.4]	a.輪積み　b.灰色～灰褐色 白色粒多 黒色粒 小石粒 粗胎　c.茶色～茶褐色 自然釉部分暗緑色　e.良好　f.降灰多量により押印不鮮明
30-8	6面P6	常滑　片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	[3.5]	a.輪積み　b.灰褐色 白色粒多 黒色粒 粗胎　c.灰褐色　e.良好
30-9	6面P14	青磁　蓮弁文碗	胴部小片	—	—	[3.6]	b.淡黄白色 小石粒 細かな気泡 良胎　d.黄茶色半透明 内外面施釉　e.良好
30-10	6面P14	褐釉　壷	底部片	—	—	[5.8]	a.輪積み　b.淡茶灰色 白色粒 赤色粒 黒色粒 小石粒 粗胎　d.茶褐色不透明 釉ダレ黒褐色 内外面施釉　e.良好 やや軟質
30-11	6面P16	青磁　蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[3.6]	b.灰白色 黒色粒 精良堅緻　d.淡緑色半透明 内外面施釉　e.良好
30-12	6面P18	かわらけ	口縁部1/2～底部2/3	(7.4)	(6.0)	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 白色粒 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや多 粗胎　c.橙色～橙褐色　e.良好
30-13	6面P20	火鉢	口縁～胴部片	—	—	8.0	b.茶褐色　e.良好　f.二次焼成を受けている為著しく状態が悪い 河野分類ⅠB類
31-1	6面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.4)	(5.1)	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色 e.良好
31-2	6面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.6)	(5.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好
31-3	6面遺構外	かわらけ	口縁～底部2/3	7.2	5.3	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 小石粒 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
31-4	6面遺構外	かわらけ	口縁部1/5～底部1/4	(8.0)	(5.2)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c.茶褐色　e.良好　f.全体に二次焼成を受け、変色
31-5	6面遺構外	かわらけ	口縁～底部2/3	(9.0)	(7.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好
31-6	6面遺構外	かわらけ	口縁部1/3～底部1/4	(10.6)	(5.8)	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色 e.良好 やや硬質　f.口縁部内面に煤付着
31-7	6面遺構外	かわらけ	口縁部1/3～底部1/4	(12.7)	(7.9)	3.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
31-8	6面遺構外	かわらけ	ほぼ完形	12.8	8.5	3.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.明橙色　e.良好
31-9	6面遺構外	青磁　蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[3.4]	b.灰色 黒色粒 精良　d.灰緑色半透明 内外面施釉 釉調薄い　e.良好
31-10	6面遺構外	青白磁　梅瓶	底部片	—	8.0	[1.1]	a.轆轤　b.灰白色 白色粒 精良緻密　d.外底乳白色半透明 所々橙～褐色 e.良好　f.外底所々釉付着 内底部全体に煤付着
31-11	6面遺構外	褐釉　壷	底部片	—	(7.6)	[7.0]	b.灰色～暗灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 緻密　d.外面青灰色 内面灰白色　e.良好 硬質　f.二次焼成を受けたため釉の残り悪い
31-12	6面遺構外	瀬戸　おろし皿	底部片	—	—	[1.2]	a.内底にヘラ状工具による格子描き　b.灰白色 白色粒 黒色粒 良胎　d.灰緑色透明 外面施釉　e.良好　f.内外面一部煤付着
31-13	6面遺構外	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅2.1		[7.0]	a.輪積み　b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎　c.赤褐色　e.良好　f.中野編年6a型式
31-14	6面遺構外	常滑　甕	底部片	—	—	[5.7]	a.輪積み 外面縦位ヘラ削り 外底砂目痕　b.茶褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒　c.茶褐色　e.良好　f.内面自然降灰
31-15	6面遺構外	常滑　甕	肩部	—	—	[4.7]	a.輪積み　b.灰褐色 砂粒 白色粒多 小石粒 粗胎　e.良好
35-1	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.5)	(5.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色 e.やや不良
35-2	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	5.5	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.灰黄色 e.ややあまい
35-3	7面溝1上層	かわらけ	完形	7.8	6.0	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕 見込みナデ調整無し　b.砂粒 黒色粒 赤色粒 小石粒 泥岩粒 粗胎　c.茶褐色　e.不良
35-4	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.6)	(5.4)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.黄橙色 e.良好 硬質
35-5	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(4.6)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.淡橙色　e.良好
35-6	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部2/3	(7.8)	(6.0)	1.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 泥岩粒 海綿骨針 粗胎　c.橙色 e.良好
35-7	7面溝1上層	かわらけ	口縁部3/4～底部4/5	8.2	6.0	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好

表14　遺物観察表（5）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
35-8	7面溝1上層	かわらけ	口縁部1/5～底部完形	(11.4)	7.1	2.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 小石粒 泥岩粒 粗胎　c.橙色～茶褐色　e.良好
35-9	7面溝1上層	かわらけ	口縁部2/3～底部1/2	(7.8)	(4.0)～(6.0)	1.5	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 白色粒 赤色粒 良胎　c.橙色　e.良好
35-10	7面溝1上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(9.7)	[(6.0)]～(8.0)	1.6	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 赤色粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
35-11	7面溝1上層	かわらけ	口縁部2/3	(11.8)	—	[3.4]	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 白色粒 黒色粒 赤色粒 泥岩粒 粗胎　c.橙色 e.良好 硬質　f.内外面、口縁部～胴部煤付着
35-12	7面溝1上層	白かわらけ	口縁部1/4	(10.3)	—	[3.0]	b.砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎　c.明白灰色　e.良好 やや軟質
35-13	7面溝1上層	白磁　口はげ皿	口縁部小片	—	—	[2.1]	b.灰白色 白色粒 精良緻密　d.内面灰白色 外面淡黄灰色 釉層薄い　e.良好 f.焼成時の調整ミスか口縁部に釉が残っている
35-14	7面溝1上層	青磁　蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	[2.7]	a.内面に蓮弁文 外面無文　d.灰白色 白色粒 精良緻密 釉層若干厚い　e.良好　f.高台付き皿か 内面蓮弁文
35-15	7面溝1上層	瓦器　皿	口縁部小片	—	—	[2.0]	b.灰白色 黒色粒 良胎　c.内外面共黒褐色　f.輪花皿か 内面横方向に調整痕有り
35-16	7面溝1上層	平瓦	側端部小片	長[8.6] 幅[5.2] 厚1.9			a.凹面布目痕 凸面工具類で調整 側端部ヘラ削り　b.灰緑色～灰褐色 白色粒 黒色粒 良胎　c.茶褐色　e.良好　f.丸瓦の可能性もあり 永福寺Ⅰ期 水殿窯か
35-17	7面溝1上層	平瓦	小片	長[9.0] 幅[6.7] 厚2.5			a.凹面布目痕 凸面縄目痕　b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎　c.灰色～灰褐色　f.永福寺Ⅰ期 水殿窯か
35-18	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.2)	(5.9)	1.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 海綿骨針 小石粒 粗胎　c.灰黄色 e.ややあまい
35-19	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.4)	(5.6)	1.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色　e.やや良好
35-20	7面溝1下層	かわらけ	口縁部4/5～底部完形	7.8	4.9	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
35-21	7面溝1下層	かわらけ	口縁部3/4～底部完形	7.8	0.5	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.淡橙色　e.良好
35-22	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(4.9)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄灰色　e.ややあまい
35-23	7面溝1下層	かわらけ	口縁部4/5～底部完形	8.0	6.1	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好
35-24	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.8)	(5.7)	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色 e.良好
35-25	7面溝1下層	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.8)	(7.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
35-26	7面溝1下層	かわらけ	口縁部1/2～底部4/5	(11.8)	7.0	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石粒 粗胎　c.黄橙色　e.やや良好
35-27	7面溝1下層	かわらけ	口縁部1/8～底部2/3	(13.0)	(8.0)	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 泥岩粒 良胎　c.橙色　e.良好 硬質
35-28	7面溝1下層	平瓦	側端部小片	長[13.0] 幅[6.1] 厚2.0			a.凹面離れ砂 糸切り痕 凸面縄目痕 側端部ヘラ削り　b.灰色～茶褐色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎　c.茶褐色～褐色　e.良好
35-29	7面溝1下層	打ち欠きかわらけ	底部2/3	—	—	[0.5]	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 小石粒 良胎　c.橙色　e.良好　f.底部側面部分を加工
35-30	7面溝1下層	木製品　箸	完形	長22.0 幅0.7 厚0.5			a.やや楕円状に面取り加工
35-31	7面溝1下層	木製品　箸	完形	長22.3 幅0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
35-32	7面溝1下層	木製品　箸	完形	長25.3 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に削り加工
36-1	7面溝2	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.8)	(5.8)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.灰黄色 e.良好
36-2	7面溝3	かわらけ	口縁部1/2～底部2/3	(8.4)	(5.6)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒多 海綿骨針 小石粒 粗胎　c.灰黄色 e.ややあまい
36-3	7面溝3	かわらけ	口縁～底部2/3	(9.2)	[(3.4)]～(7.0)	2.0	a.手捏ね 底部指頭痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.黄橙色 e.良好
36-4	7面溝3	かわらけ加工品	完形	縦2.6 横3.0 厚0.9			a.轆轤 外底糸切痕　b.砂粒 赤色粒 小石粒 粗胎　c.橙色　e.良好　f.側面研磨して面取り加工
36-5	7面P3	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.8)	(6.8)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.淡橙色　e.良好
36-6	7面P5	かわらけ	口縁部2/3～底部完形	7.8	6.4	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 泥岩粒 小石粒 海綿骨針 粗胎　c.橙色　e.やや不良
36-7	7面P5	かわらけ	口縁～底部1/2	(8.3)	(6.1)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 粗胎　c.橙色　e.良好
36-8	7面P5	かわらけ	口縁～底部3/4	8.2	7.0	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
36-9	7面P5	かわらけ	口縁～底部1/3	(12.0)	(7.3)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.濃橙色～茶褐色　e.やや不良

表15　遺物観察表（6）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
36-10	7面P5	かわらけ	口縁部1/4～底部1/2	(12.8)	(9.0)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.橙色　e.やや不良
36-11	7面P5	かわらけ	口縁部1/10～底部4/5	(13.0)	8.9	[3.2]	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.灰黄色　e.やや不良
37-1	7面 木器層中	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.3)	(5.0)	1.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 泥岩粒 粗胎　c.黄灰色　e.良好
37-2	7面 木器層中	かわらけ	口縁部1/3～底部1/2	(7.6)	(5.4)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎　c.橙色　e.良好
37-3	7面 木器層中	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(6.2)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.灰橙色　e.良好
37-4	7面 木器層中	かわらけ	完形	8.0	5.0	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.灰黄色　e.良好　f.ゆがみ激しい
37-5	7面 木器層中	かわらけ	口縁部1/5～底部1/4	(7.9)	(6.0)	1.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好 硬質
37-6	7面木器層中	かわらけ	口縁～底部1/3	(8.8)	(6.8)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.橙色　e.不良
37-7	7面木器層中	かわらけ	口縁～底部1/5	(10.7)	(6.0)	2.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.赤褐色　e.良好 やや硬質　f.二次焼成による変色
37-8	7面木器層中	かわらけ	口縁部1/5～底部1/3	(11.8)	(6.0)	3.7	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 粗胎　c.淡黄橙色　e.良好 硬質
37-9	7面木器層中	かわらけ	口縁部1/4～底部1/2	(12.7)	(8.2)	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.灰橙色　e.良好
37-10	7面木器層中	とりべ	口縁部～胴部片	—	—	[2.8]	b.かわらけ質　c.茶褐色　f.轆轤かわらけの口縁部（特に内面にかけて）に熱で溶かされた不純物が厚く付着している
37-11	7面木器層中	青磁　蓮弁文碗	口縁部片	—	—	[3.3]	b.灰白色 白色粒 黒色粒 緻密　d.灰緑色不透明 内外面施釉 釉層若干厚め　e.良好　f.外面蓮弁文
37-12	7面木器層中	常滑　甕	口縁部小片	縁帯幅2.5		[5.3]	a.輪積み　b.橙色～灰茶褐色 白色粒 黒色粒 小石粒 粗胎　c.自然釉黄緑色 内外面茶褐色　e.良好　f.中野編年6a型式
37-13	7面木器層中	瓦器　皿	口縁部小片	—	—	[2.3]	b.灰白色 黒色粒 良胎　c.黒灰色　e.良好
37-14	7面木器層中	漆器　椀	口縁部片	—	—	[1.9]	a.内外面黒漆塗布　f.外面朱漆の手描き草花文様
37-15	7面木器層中	漆器　皿	口縁部1/2～底部完形	9.2	6.8	1.5	a.削り出し高台　f.内外面黒漆塗布 無文
37-16	7面木器層中	漆器　皿	口縁部1/3～底部1/4	9.0	(6.5)	1.0	a.内外面黒漆塗布　f.内面亀甲文様の朱漆のスタンプ
37-17	7面木器層中	漆器　皿	口縁～底部1/2	(9.3)	(6.7)	[1.2]	a.内外面黒漆塗布　f.内外面朱漆の梅の花の手描き文様
37-18	7面木器層中	漆器　皿	口縁部片	—	—	[1.3]	a.内外面黒漆塗布　f.内外面朱漆の文様
37-19	7面木器層中	漆器　皿	口縁部片	—	—	[1.0]	a.内外面黒漆塗布　f.内面朱漆のスタンプ
38-1	7面木器層中	木製　箸	完形	長18.8 幅0.9 厚0.5			a.四角形状に削り加工　f.一部に装飾のような加工痕
38-2	7面木器層中	木製　箸	上端部欠損	長(18.5) 幅0.9 厚0.6			a.四角形状に削り加工　f.一部に装飾のような加工痕
38-3	7面木器層中	木製　箸	端部欠損	長(21.5) 幅0.7 厚0.6			a.四角形状に削り加工　f.一部に装飾のような加工痕
38-4	7面木器層中	木製　箸	完形	長20.2 幅0.5 厚0.5			a.台形状に削り加工
38-5	7面木器層中	木製　箸	完形	長21.2 幅0.5 厚0.7			a.楕円形状に削り加工
38-6	7面木器層中	木製　箸	完形	長21.3 幅0.7 厚0.7			a.四角形状に削り加工
38-7	7面木器層中	木製　箸	完形	長22.0 幅0.6 厚0.4			a.楕円形状に削り加工
38-8	7面木器層中	木製　箸	完形	長22.3 幅2.8 厚0.5			a.楕円形状に削り加工
38-9	7面木器層中	木製　箸	完形	長22.5 幅0.7 厚0.4			a.四角形状に削り加工
38-10	7面木器層中	木製　箸	完形	長22.5 幅0.5 厚0.5			a.台形状に削り加工　f.一部に装飾のような加工痕
38-11	7面木器層中	木製　箸	完形	長23.3 幅0.5 厚0.5			a.四角形状に削り加工　f.上端部垂直に切り落とされている
38-12	7面木器層中	木製　箸	完形	長23.6 幅0.8 厚0.6			a.多角形状に削り加工
38-13	7面木器層中	木製　箸	完形	長23.5 幅0.7 厚0.4			a.四角形状に削り加工
38-14	7面木器層中	木製　箸	完形	長23.6 幅0.6 厚0.4			a.四角形状に削り加工
38-15	7面木器層中	木製　箸	完形	長23.5 幅0.9 厚0.7			a.多角形状に削り加工
38-16	7面木器層中	木製　箸	完形	長23.8 幅0.7 厚0.5			a.多角形状に削り加工
38-17	7面木器層中	木製　箸	完形	長23.8 幅0.7 厚0.5			a.四角形状に削り加工　f.上端部切り落とされている
38-18	7面木器層中	木製　箸	完形	長24.3 幅0.6 厚0.5			a.三角形上に削り加工
38-19	7面木器層中	木製　箸	完形	長24.0 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に削り加工
38-20	7面木器層中	木製　箸	完形	長24.2 幅0.7 厚0.4			a.四角形状に削り加工
38-21	7面木器層中	木製　箸	完形	長24.7 幅0.7 厚0.6			a.三角形状に削り加工
38-22	7面木器層中	木製　串	完形	長25.3 幅1.1 厚0.6			a.四角形状に削り加工　f.もしくは菜箸か
38-23	7面木器層中	木製　串	完形	長25.4 幅1.1 厚0.6			a.多角形状に削り加工　f.もしくは菜箸か

表16　遺物観察表（7）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm) 口径	底径	器高	観察項目 a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
38-24	7面木器層中	木製　串	完形	長26.4 幅1.1 厚0.6			a.多角形状に削り加工　f.もしくは菜箸か
38-25	7面木器層中	木製　串	完形	長33.7 幅1.2 厚0.7			a.楕円形状に削り加工　f.もしくは菜箸か
38-26	7面木器層中	箆状木製品	端部欠損	長(19.5) 幅2.3 厚0.3～0.7			f.板目材 先端部箆状加工
38-27	7面木器層中	木製　曲物	残存度1/3	縦6.2 横(4.5) 厚0.4			f.板目材 底板
38-28	7面木器層中	木製　膳脚	ほぼ完形	長5.4 幅1.2～3.1 厚1.0～2.6			a.黒漆塗り 接合部は漆が塗られていない
38-29	7面木器層中	木製 用途不明品	両端部欠損	長(9.1) 幅0.6～1.0 厚0.5～1.0			f.格子状に組まれていたのか凹状の部分に圧迫痕
41-1	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁～底部1/2	(8.4)	(6.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 泥海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好　f.灯明皿か
41-2	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁部2/3～底部完形	(12.6)	7.8	3.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色　e.やや不良
41-3	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁～底部1/4	(10.0)	[(6.7)]～(8.1)	1.7	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎　c.黄橙色 e.不良
41-4	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁～胴部2/3	(13.7)	(11.6)	[3.2]	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.灰黄色 e.不良
41-5	8面溝状遺構1 上層	かわらけ	口縁～胴部1/3	(15.0)	(13.3)	[3.2]	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.灰黄色 e.不良
41-6	8面溝状遺構1 上層	同安窯 青磁劃花文皿	口縁部小片	—	—	[1.8]	b.灰色 精良緻密　d.緑黄色透明 釉層薄い　e.良好　f.外面に劃花文
41-7	8面溝状遺構1 上層	鉄釘	完形	長11.5 幅0.9 厚0.6			f.頭頂部丸味を帯び先端部非常に尖っている
41-8	8面溝状遺構1 下層	木製　形代か	完形	長20.9 幅1.3 厚0.6			f.刀形の形代か
41-9	8面土坑2	かわらけ	口縁～底部2/3	(9.8)	—	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.やや不良
41-10	8面土坑2	かわらけ	底部片	—	—	[1.8]	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 海綿骨針 粗胎　c.暗橙色　e.良好　f.内底面に布目痕 外底側面に切れ込み痕
41-11	8面土坑2	土師器　坏	底部片	—	—	[3.0]	b.砂粒 白色粒 小石粒 粗胎　c.橙色～淡灰黄色　e.不良
42-1	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/5～底部1/4	(7.8)	[(3.0)]～(6.2)	1.8	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 白色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.黄橙色 e.良好
42-2	8面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(9.2)	[(4.8)]～(8.1)	2.0	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや良胎　c.赤橙色 e.良好
42-3	8面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(6.2)	(4.4)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.明橙色 e.良好
42-4	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/10～底部1/8	(7.6)	(7.2)	1.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 海綿骨針 粗胎　c.赤橙色　e.良好
42-5	8面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.8)	(5.5)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色 e.やや不良　f.口縁部煤付着、灯明皿
42-6	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/5～底部1/4	(7.7)	(5.2)	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
42-7	8面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/3	(7.9)	(5.7)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石 粗胎　c.黄橙色　e.やや不良
42-8	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/2～底部2/3	(8.2)	(6.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.黄橙色　e.良好
42-9	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部2/3	(11.5)	(7.5)	2.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 粗胎　c.淡橙色　e.良好
42-10	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部完形	(12.0)	7.8	3.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 白色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.黄橙色　e.良好
42-11	8面遺構外	かわらけ	口縁部1/5～底部1/3	(12.4)	8.0	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 白色粒 赤色粒 海綿骨針 小石粒 泥岩粒 粗胎　c.灰橙色　e.良好
42-12	8面遺構外	青磁　碗	底部片	—	—	[2.5]	b.灰色 白色粒 黒色粒 精良　d.暗黄緑色透明 内外面施釉 釉層極薄い e.良好
42-13	8面遺構外	常滑　甕	肩部片	—	—	[4.8]	a.輪積み　b.褐色 白色粒 黒色粒 良胎　c.褐色　e.良好
42-14	8面遺構外	平瓦	端部片	長[6.3] 幅[12.4] 厚2.3			a.凹面布目痕 凸面縄目痕　b.灰色～灰褐色 白色粒 黒色粒 良胎　c.灰茶褐色　e.良好　f.永福寺Ⅰ期　水殿窯か
42-15	8面遺構外	木製　箸	完形	長20.6 幅0.6 厚0.5			a.四角形状に削り加工
42-16	8面遺構外	木製　箸	完形	長22.8 幅0.8 厚0.6			a.台形状に削り加工
42-17	8面遺構外	木製　箸	完形	長22.8 幅0.8 厚0.6			a.多角形状に削り加工
42-18	8面遺構外	木製　箸	完形	長25.5 幅0.6 厚0.5			a.多角形状に削り加工
42-19	8面遺構外	箆状木製品	完形	長17.4 幅1.5 厚0.4～0.8			a.先端部箆状に削り加工
42-20	8面遺構外	須恵　甕	胴部片	—	—	[6.1]	b.灰色 白色粒 小石粒 良胎　c.灰色　e.良好　f.内面自然釉 外面櫛描文か

表17　遺物観察表（8）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法(cm)			観察項目
				口径	底径	器高	a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
44-1	8面下トレンチ	土師器　坏	口縁部1/3～底部1/2	(11.8)	(6.0)	[4.2]	a.口縁部内外面横ナデ　体部～底部外面ヘラケズリ　b.橙色 白色粒 黒色粒多 小石粒 雲母 海綿骨針 粗胎　c.橙色　e.あまい　f.相模型
44-2	8面下トレンチ	土師器　坏	口縁部1/4～底部1/3	(10.8)	7.0	4.5	a.口縁部内外面横ナデ 外面体部～底部ヘラケズリ　b.黄橙色 赤色粒 黒色粒 雲母 海綿骨針 粗胎　c.黄橙色　e.ややあまい　f.相模型
44-3	8面下トレンチ	土師器　坏	口縁部1/3～底部完形	(11.8)	7.0	4.1	a.轆轤 外形糸切痕　b.淡橙色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 雲母 海綿骨針 粗胎　c.淡橙色～橙色　e.良好　f.底部一部摩耗 9世紀前半期の三浦半島が産地か
44-4	8面下トレンチ	須恵　坏	口縁部小片	—	—	[3.2]	b.茶褐色 白色粒 小石粒 石英 海綿骨針 良胎　c.口縁部褐色～赤褐色 体部茶褐色　e.良好　f.口縁部自然釉　8世紀後半～9世紀前半期の南比企産
44-5	8面下トレンチ	須恵　坏	口縁部小片	—	—	[3.5]	b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 雲母 海綿骨針 良胎　c.灰黒色　e.良好 f. 8世紀後半～9世紀前半期の南比企産
44-6	8面下トレンチ	須恵　坏	口縁部1/5～底部1/3	(11.3)	(6.0)	3.9	a.轆轤 外底糸切痕　b.灰黒色 白色粒 黒色粒 小石粒 石英粒 海綿骨針 良胎 c.灰黒色　e.良好　f.口縁部～内面自然釉
44-7	8面下トレンチ	須恵　坏	底部完形	—	6.2	[1.4]	a.轆轤 外底糸切 底部直上回転ヘラケズリ　b.白色粒 黒色粒 小石粒 海綿骨針 良胎　c.灰色　e.良好 硬質
44-8	8面下トレンチ	須恵　坏	底部片	—	(8.0)	[0.7]	a.轆轤 外底糸切　b.灰色 白色粒 黒色粒 雲母 海綿骨針 良胎　c.灰色　e.良好 硬質　f.底部摩耗
44-9	8面下トレンチ	須恵　坏	底部片	—	(6.4)	[2.2]	a.轆轤 外底糸切 底部直上外周回転ヘラケズリ　b.淡茶色 白色粒 黒色粒 海綿骨針多 良胎 硬質　c.淡茶色～灰色　e.ややあまい（胎土に焼ムラの変色有り）
44-10	8面下トレンチ	須恵　甕	胴部片	—	—	—	a.灰色 内面同心円のあて具痕 外面縄目叩き　b.灰青色 白色粒 小石粒 石英 良胎 c.灰色　e.良好 硬質
44-11	8面下トレンチ	須恵　甕	胴部片	—	—	—	a.灰色 内面同心円のあて具痕 外面平行叩き目　b.灰色 白色粒 石英 良胎 c.灰色　e.良好 硬質
44-12	8面下トレンチ	須恵　甕	胴部片	—	—	—	a.内面あて具痕 外面平行叩き目　b.灰淡褐色 白色粒 黒色粒 良胎　c.灰色 e.良好 硬質
44-13	8面下トレンチ	須恵　甕	胴部片	—	—	—	b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 石英 良胎　c.内面灰色 外面黒褐色　e.良好 硬質
45-1	8面下トレンチ	丸瓦	残存度1/2	長[21.0] 幅[16.0] 厚1.5～2.0			a.桶巻き作り　b.灰黒色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎　c.灰黒色　e.良好 f.側面部刃物で切り離した痕有り 7世紀第4四半期頃
45-2	8面下トレンチ	平瓦	小片	長[8.0] 幅[5.5] 厚1.2			a.凹面布目痕 凸面縦方位の叩き目　b.淡茶色 白色粒 黒色粒 粗胎　c.灰白色～淡茶色　e.あまい
45-3	8面下トレンチ	平瓦	側端部小片	長[6.7] 幅[6.5] 厚2.2～2.7			a.凹面布目痕 凸面縄目痕 側端部ヘラケズリ　b.濃橙色 白色粒 黒色粒 小石粒 粗胎　c.淡茶褐色　e.あまい
45-4	8面下トレンチ	平瓦	側端部小片	長[5.0] 幅[6.5] 厚1.3			a.凹面布目痕 凹面斜方位の叩き目 側端部ヘラケズリ　b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎　c.灰色　e.良好 硬質
45-5	8面下トレンチ	平瓦	側端部片	長[12.0] 幅[13,0] 厚1.4～1.9			a.凹面布目痕 凸面縄目痕 側端部ヘラケズリ　b.灰色 白色粒 黒色粒 小石粒 良胎　c.灰色　e.良好 硬質

表18　層位別出土遺物一覧表

種別	出土層位	試掘坑	1面遺構	1面遺構外	2面遺構	3面遺構	3面遺構外	4a面遺構	4a面遺構外	4b面遺構	4b面遺構外	5面遺構	5面遺構外	6面遺構	6面遺構外	7面遺構	7面遺構外	8面遺構	8面遺構外	8面下トレンチ内	合計
かわらけ	糸切りかわらけ	大22 小1	大179 中1小27	大90 小62	大32 小4	大241 小15	大399 小26	大99 小16	大361 小50	大440 小37	大24 小3	大232 中1小48	大143 小16	大48 小11	大77 小29	大267 小148	大229 小83	大22 小17	大12 小38		3560
	手捏ねかわらけ											大2				大24 小11	大34 小20	大40 小22	大57 小39		249
	白かわらけ						2									1					3
舶載陶磁器	青磁					折縁鉢1 不明1	折縁1		碗1	折縁碗1 碗1		碗1	碗1	鉢1 碗1	碗1	碗1	碗1	碗2	碗1		16
	白磁						皿1		皿1			壺1 碗1 皿1	碗1			皿1	皿1				8
	青白磁								梅瓶1						水注1						2
	黄釉													盤1							1
	褐釉					袋物1						壺3	壺6	壺9	壺15		壺1				35
国産陶磁器	瀬戸	折縁鉢1		折縁皿1 不明1		瓶子1	おろし1 不明1		入子1						おろし1		皿1		袋物1		10
	常滑	甕5	甕1	甕4 磨1	甕3	甕21 壺1	甕29	甕8	甕21	甕58 壺1	甕2	甕89 壺1	甕18	甕30	甕45 壺1	甕2	甕12	甕5	甕5		363
	片口Ⅰ類	1			1		1		4	5		7	3	10	2	1	1				36
	片口Ⅱ類			2					2	2		1	1		1						9
	渥美								甕1								甕1				2
	備前	擂鉢1	擂鉢1																		2
	亀山								甕1												1
	山茶碗					東濃型1 尾張型1 皿1									尾張型2	尾張型2					7
土製品	瓦	平瓦1	平瓦1													平瓦3			平瓦1	平瓦5	11
	瓦器															皿1	皿1				2
	火鉢		1	1	1	2	1		2	1				1	1	2					13
	その他				土錘1		不明1			吉備系1		吉備系1 ｺｰｽﾀｰ 1				かわらけ 転用品2					7
石製品	硯		1									3									4
	砥石									中1仕1		中1	中2								5
	滑石製品								鍋1 ｽﾀﾝﾌﾟ 1												2
	その他					碁石1		軽石1													2
金属製品	釘													1				1			2
	銭				1	1			1			1									4
	鉄滓			1		スラグ1	スラグ1														3
木製品	漆製品					椀1 皿2	皿1	皿1				皿1		皿1			椀1 皿5 脚1				14
	加工木製品					箸3 菜箸1 木札1 曲物1 折敷1		箸1 箆1 曲物2	箸1	箸8 菜箸1 曲物1 折敷2 草履5	草履1	箸42 曲物2 草履5 枡1 不明1		箸4 下駄1	箸2 曲物2 草履9 不明2	箸20 折敷1 注木1 草履4	箸167 菜箸5 箆2 曲物1 折敷1 注木1 草履4 糸具1 不明3	箸9 箆1 下駄2 草履1	箸7 菜箸1 箆1 草履1		335
自然遺物	骨	1			1		2	2	1	2			1	3	4	2	1				20
	貝			1		12						1	4	1	2	8	14		18		61
	種					2				3	1	2	1		1	1	19	9	1		40
	炭化物				1	1	1					2		1	2	2	1				11
織物製品												烏帽子1 布1									2
中世以前遺物	土師器																	1	1	坏25 壺6 甕4	37
	須恵器																	甕2 坏1	甕1	坏3 壺4	11
	合計	43	212	164	45	315	468	131	451	571	31	454	197	124	200	505	612	135	185	47	4890

図版１

▲１．調査地点近景（英勝寺方面から）

▲２．調査地点敷地裏（西から）

▲３．１面全景（東から）

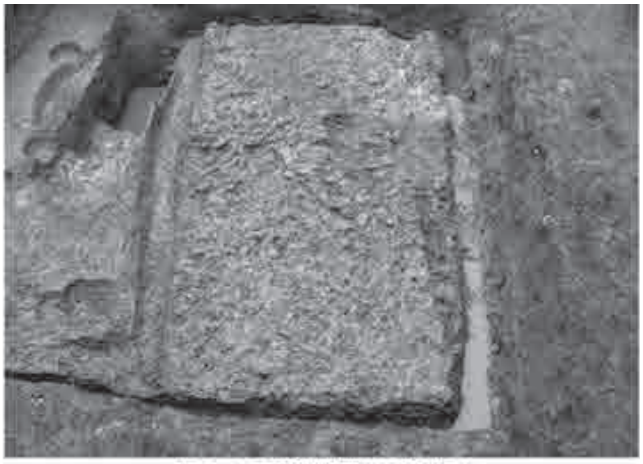
▲５．１面溝１南北土層堆積状況（東から）

▲６．１面溝２南北土層堆積状況（東から）

▲４．１面全景（西から）

７．道路状遺構の西方面（東から）▶

▲１．２面全景（東から）



▲２．２面道路状遺構（西から）

▲３．３面全景（東から）

▲４．３面全景（西から）

▲５．３面溝１（東から）

▲６．３面溝１土層堆積状況（東から）

▲７．３面土坑５内出土墨書木札（南から）

図版３

▲１．４a面全景（東から）

▲２．４a面全景（西から）

▲３．４b面全景（東から）

▲４．４b面全景（西から）

▲５．４b面溝１（東から）

▲６．４b面溝１（西から）

▲１．５面全景（東から）

▲２．５面方形土坑１・２（東から）

４．５面南側部分（東から）

▲３．５面方形土坑３（東から）

▲５．５面囲炉裏１（北から）

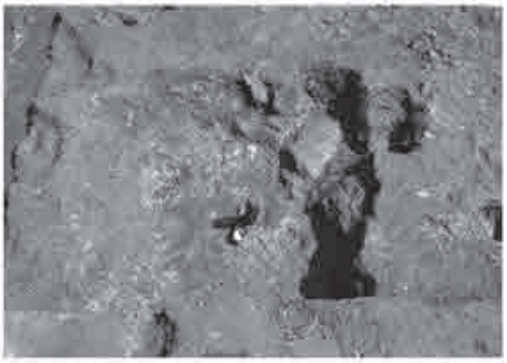
▲６．５面囲炉裏１（西から）

▲７．５面囲炉裏１東側壁板（西から）

▲８．５面囲炉裏１内出土
火葬骨を含むかわらけ（北から）

図版５

▲１．６面全景（東から）



▲３．６面方形土坑１（北から）

▼２．６面全景（西から）

▲４．６面方形土坑１内出土 犬頭骨

◀５．７面全景南側（東から）

▶６．７面全景東側（南から）

▲１．７面全景（南東から）

▲２．７面北側全景（東から）

▲３．７面溝１（南から）

▲４．７面溝１杭列（東から）

▲５．７面溝２・３（東から）

▲６．７面溝３（西から）

図版７

▲１．７面溝２（西から）

▲２．７面溝２杭列（南から）

▲３．７面Ｐ５出土かわらけ（東から）

▲５．８面全景（西から）

▲４．８面全景（東から）

▲６．８面西部遺構検出状況（南から）

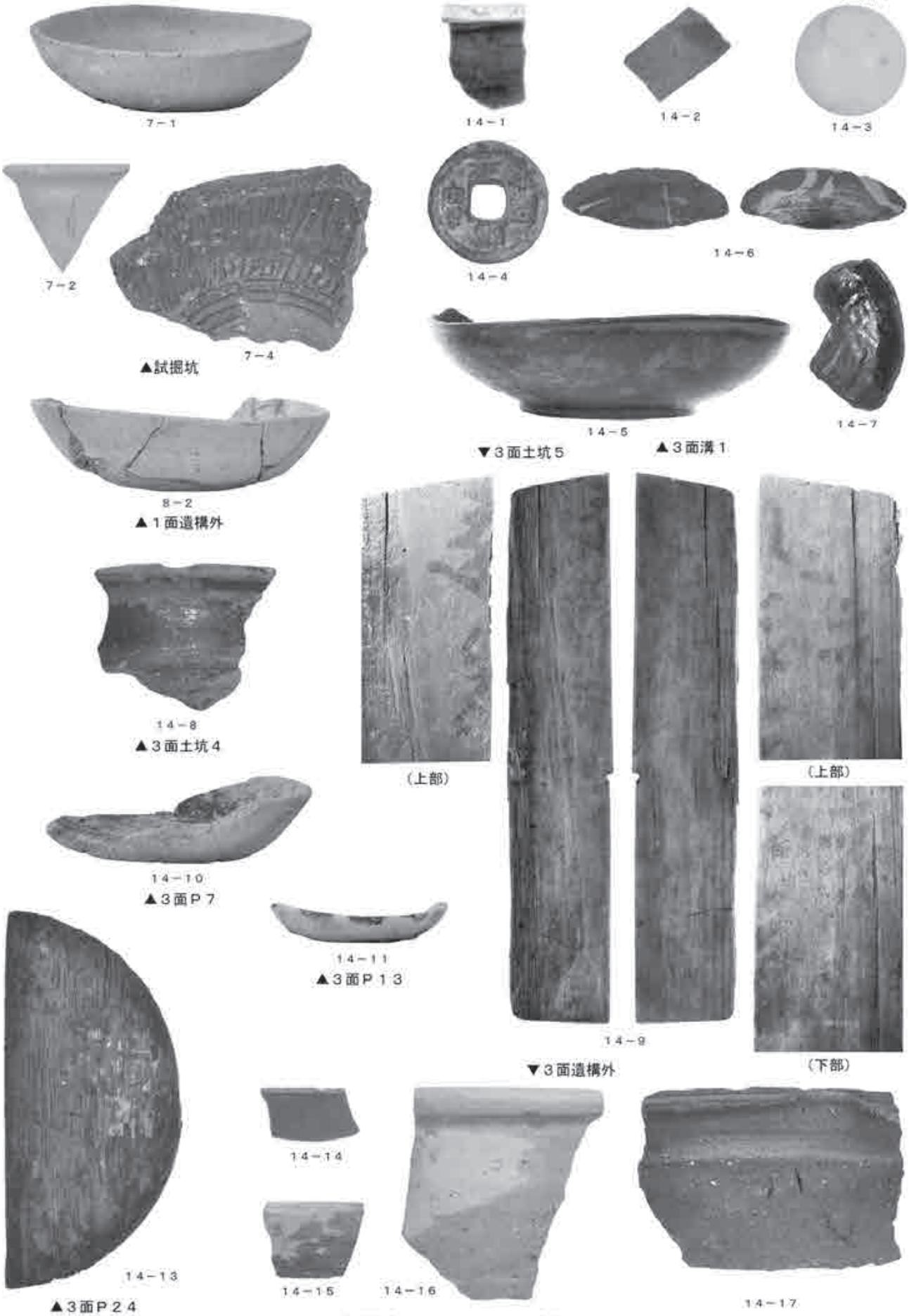
１．８面下トレンチ（北から）▶

◀２．調査区東壁土層堆積状況（西から）

３．調査区南壁土層堆積状況（北から）▶

◀４．調査区西壁土層堆積状況（東から）

図版９



試掘坑、１・３面出土遺物

20－1
▲4a面土坑2

20－3
▲4a面土坑4

20－9

20－11

20－12

20－13
▲4a面溝1下層

20－6
▲4a面P6

20－14

20－15
▲4a面溝1裏込め南側

20－17

20－19

20－18
▲4a面溝1裏込め北側

20－4
▲4a面P7

20－20
▲4b面土坑2

20－22
▲4b面土坑3

▼4a面遺構外

21－1

21－2

21－3

21－4

21－5

21－6

21－7

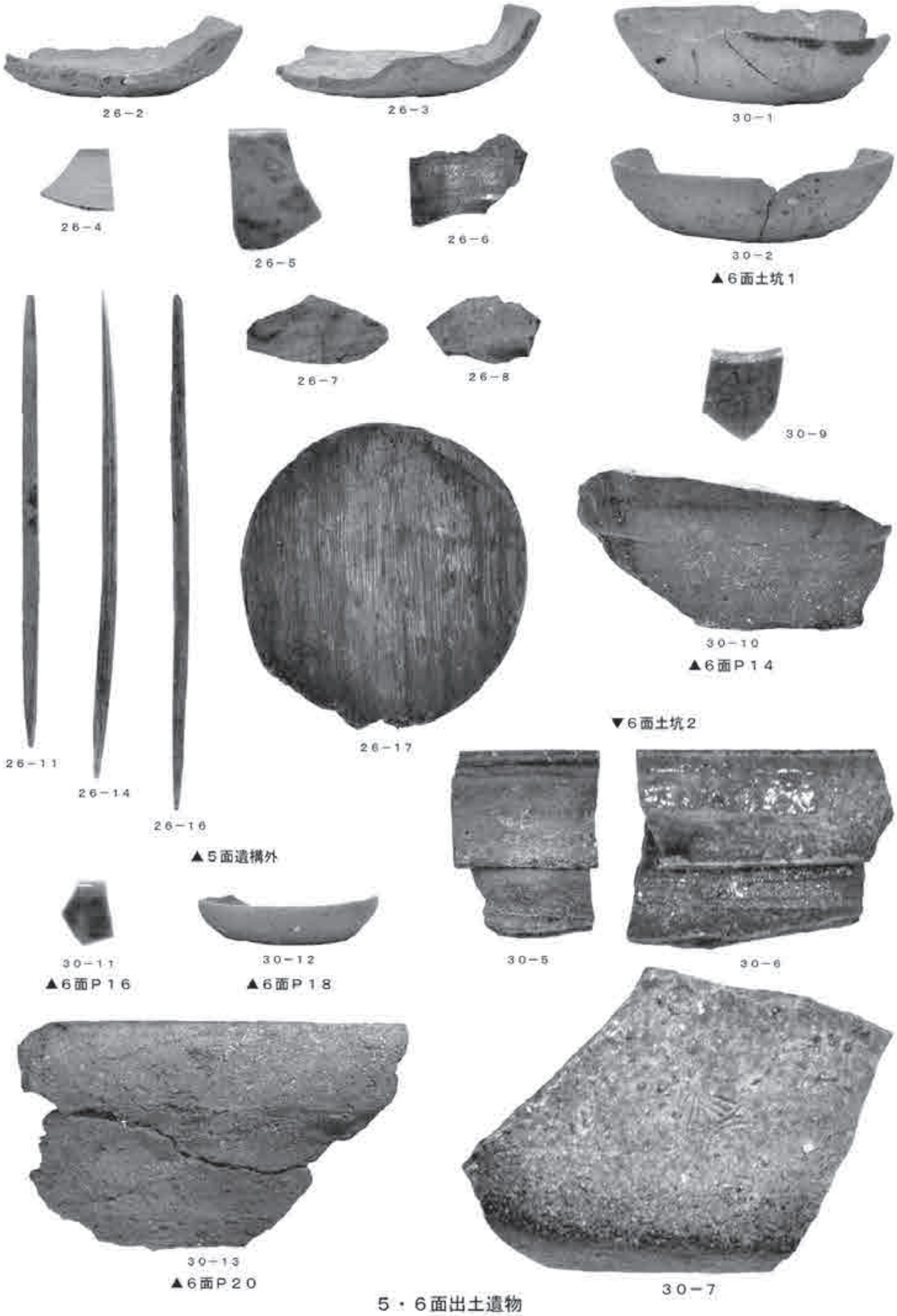
21－11

21－12

4a・b面出土遺物

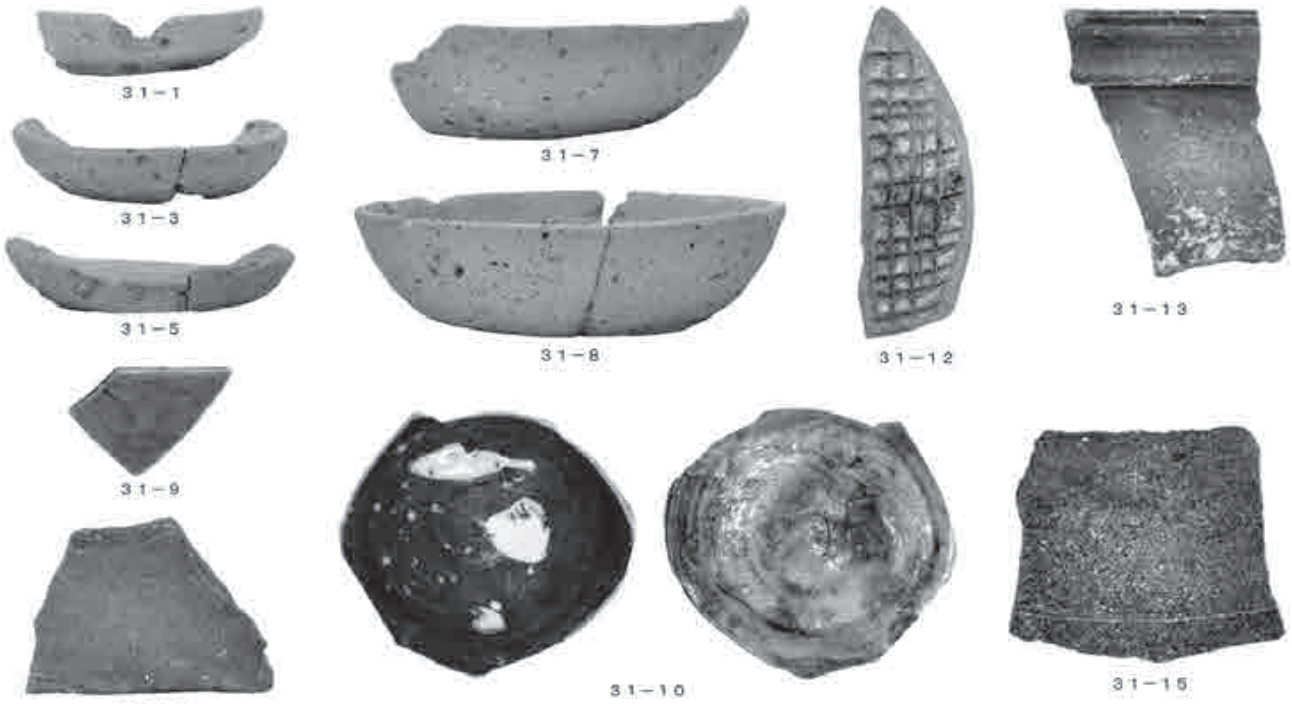
図版11

4b・5面出土遺物

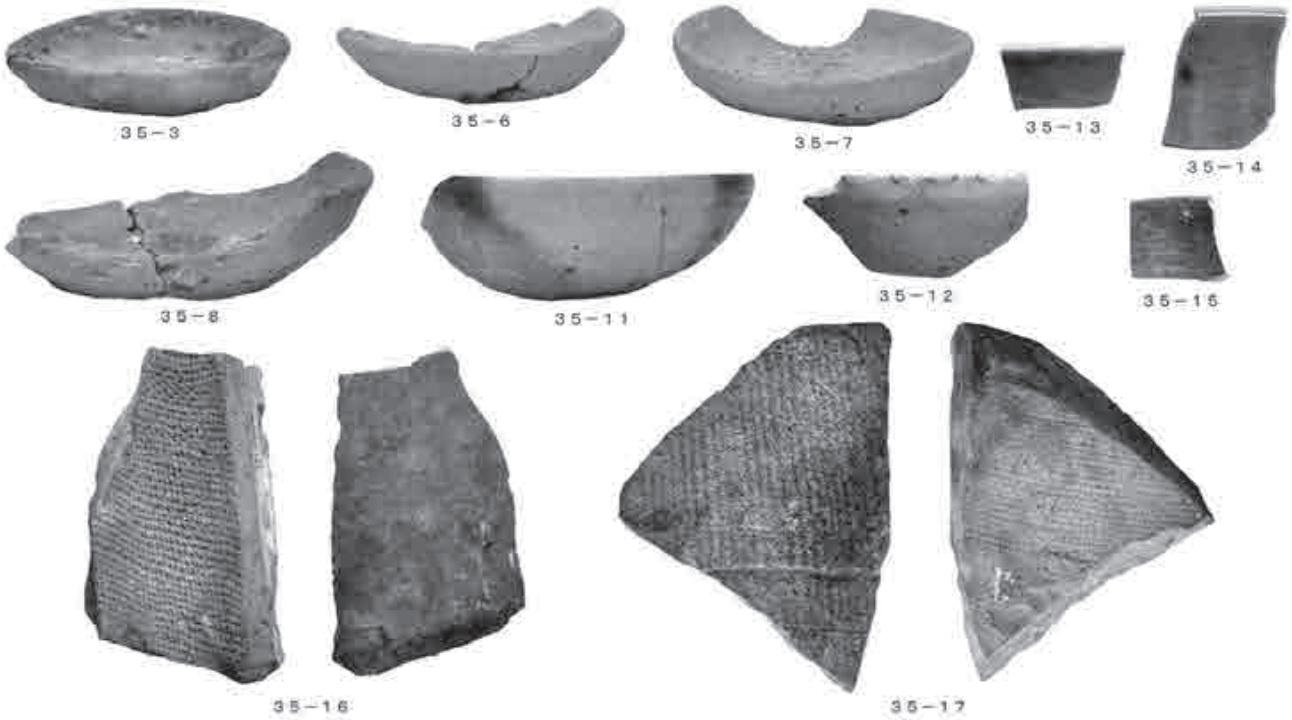

26－2
26－3
30－1
26－4
26－5
26－6
30－2
▲6面土坑1
26－7
26－8
30－9
26－11
26－14
26－16
▲5面遺構外
26－17
30－10
▲6面P14
▼6面土坑2
30－11
▲6面P16
30－12
▲6面P18
30－5
30－6
30－13
▲6面P20
30－7

5・6面出土遺物

図版13



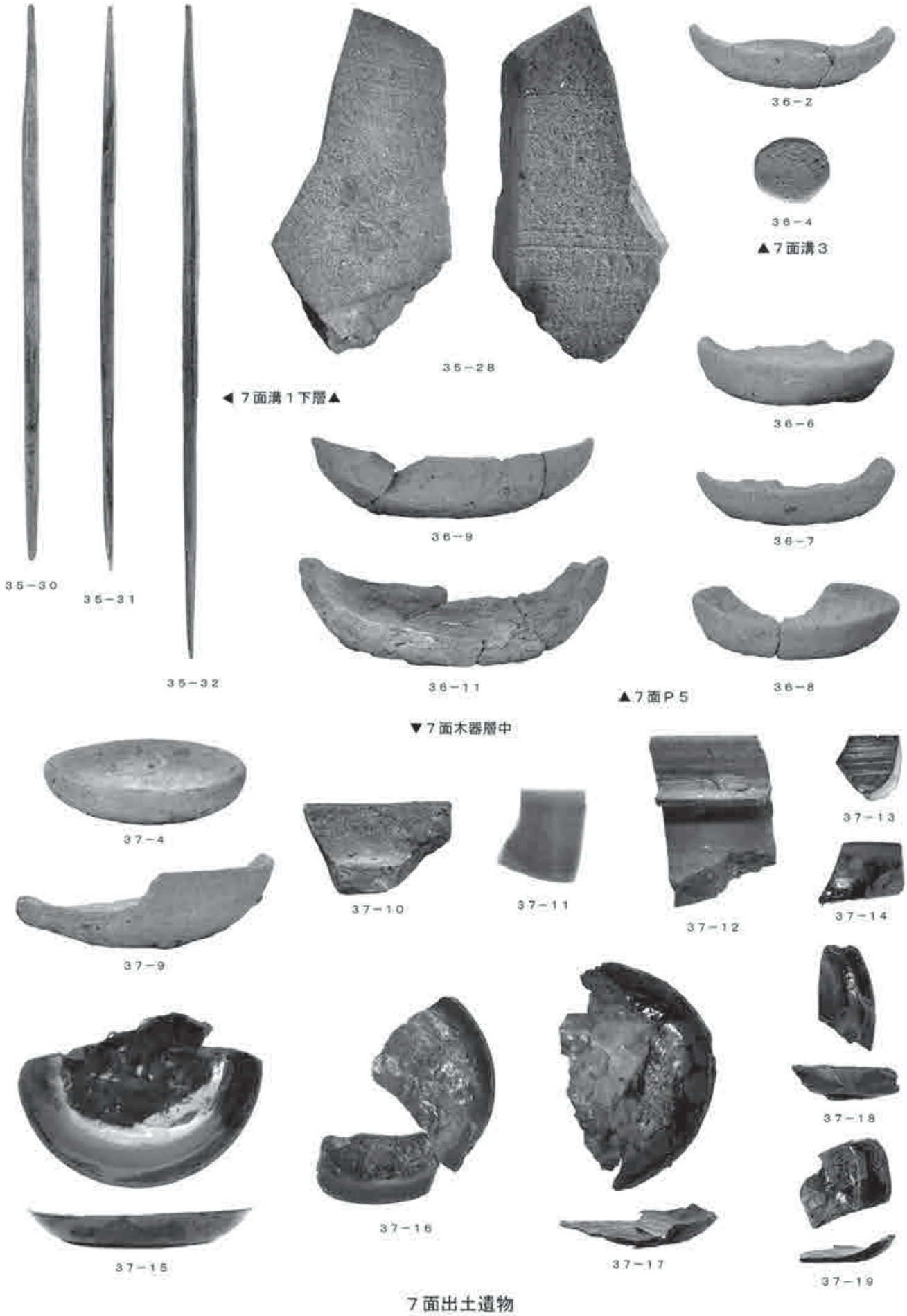
▲6面遺構外



▲7面溝1上層

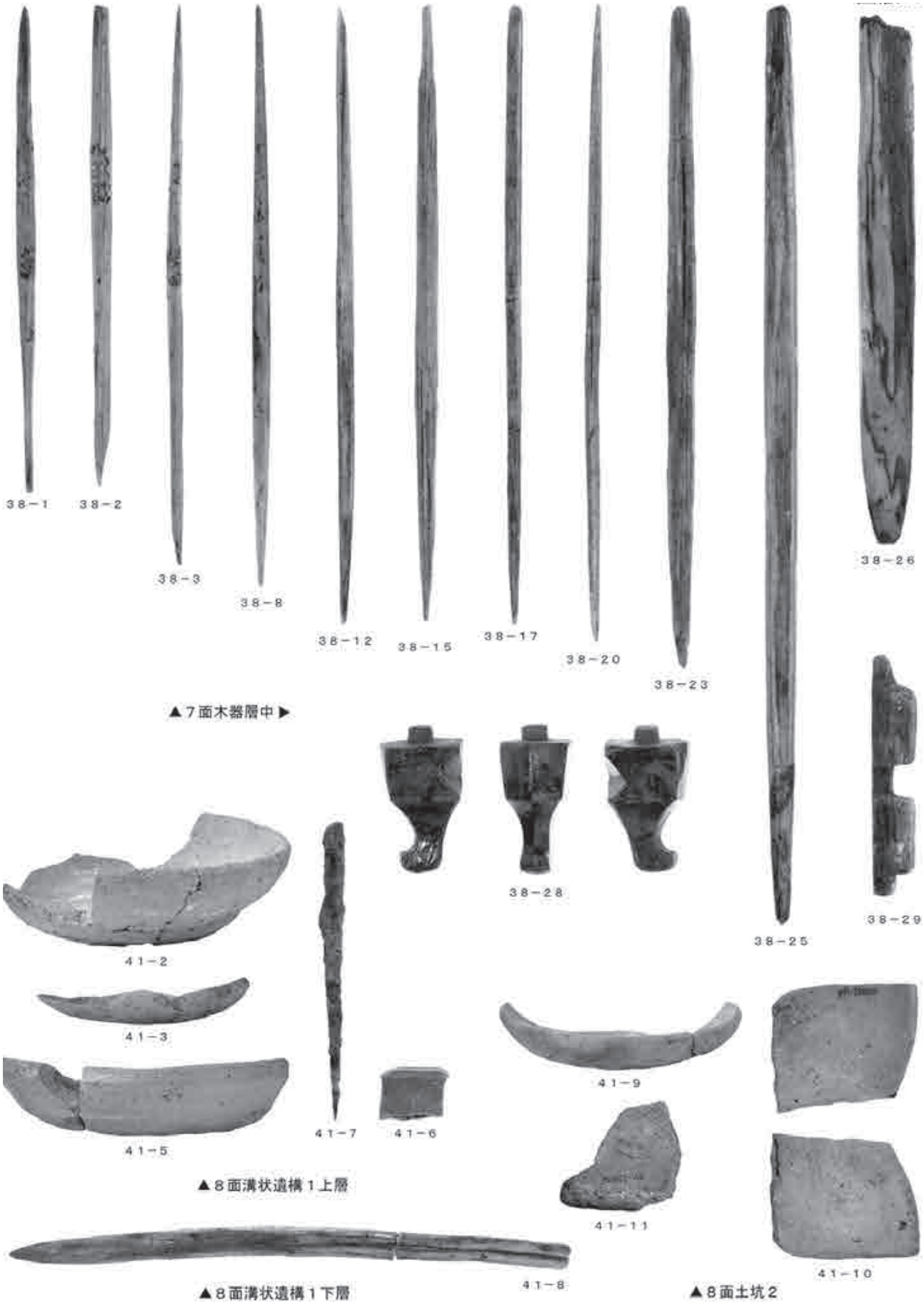
▲7面溝1下層

6・7面出土遺物

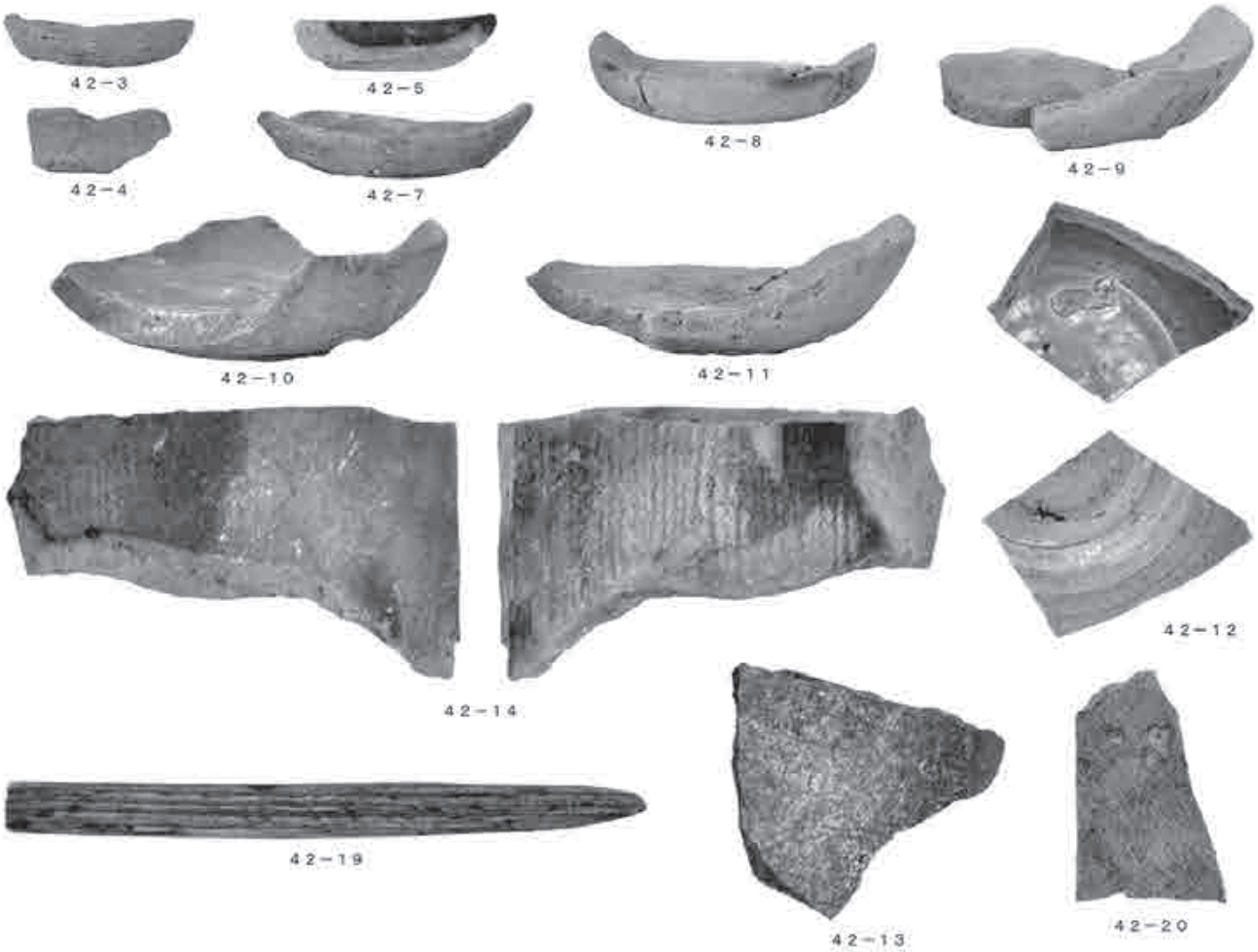

35−30
35−31
35−32
35−28
◀7面溝1下層▲
36−2
36−4
▲7面溝3
36−6
36−9
36−7
36−11
36−8
▲7面P5
▼7面木器層中
37−4
37−10
37−11
37−12
37−13
37−14
37−9
37−18
37−16
37−17
37−15
37−19

7面出土遺物

図版15

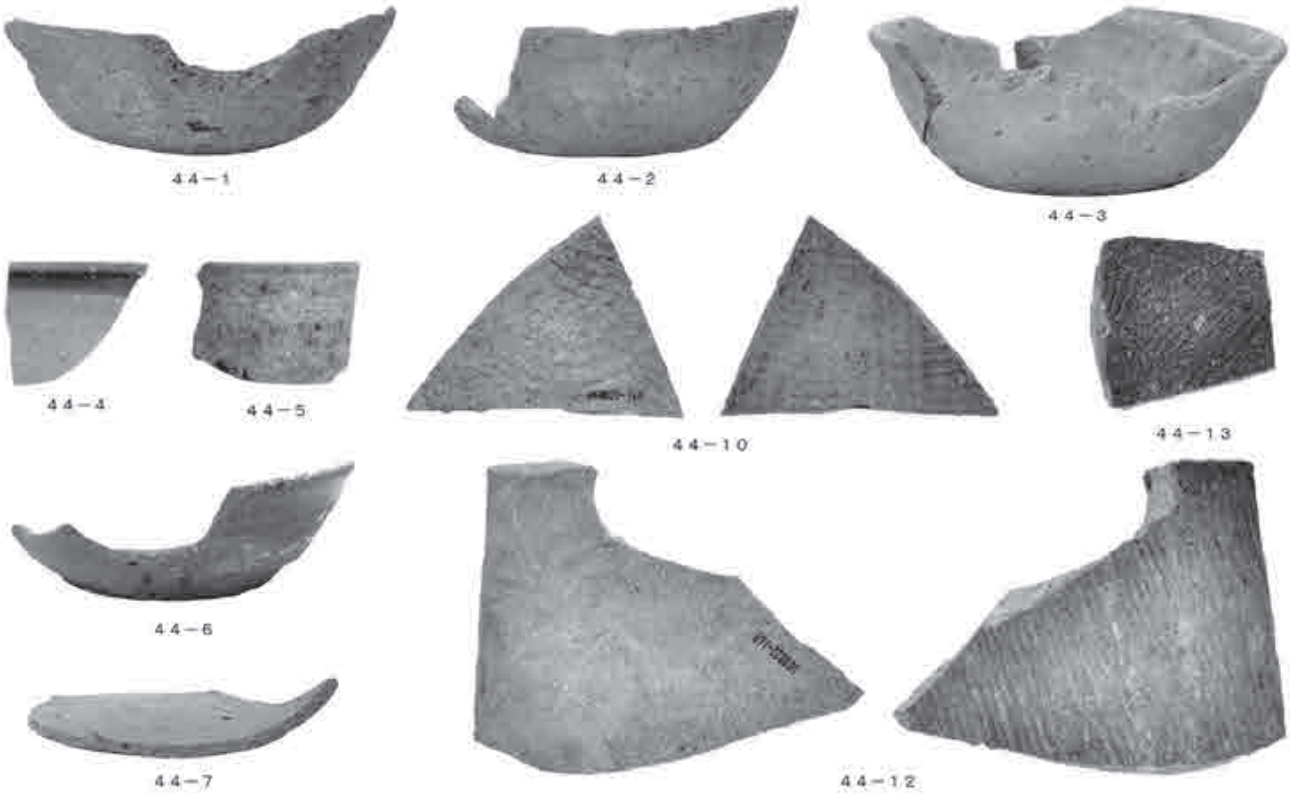


7・8面出土遺物



▲８面遺構外

▼８面下トレンチ



８面・８面下トレンチ出土遺物

図版17

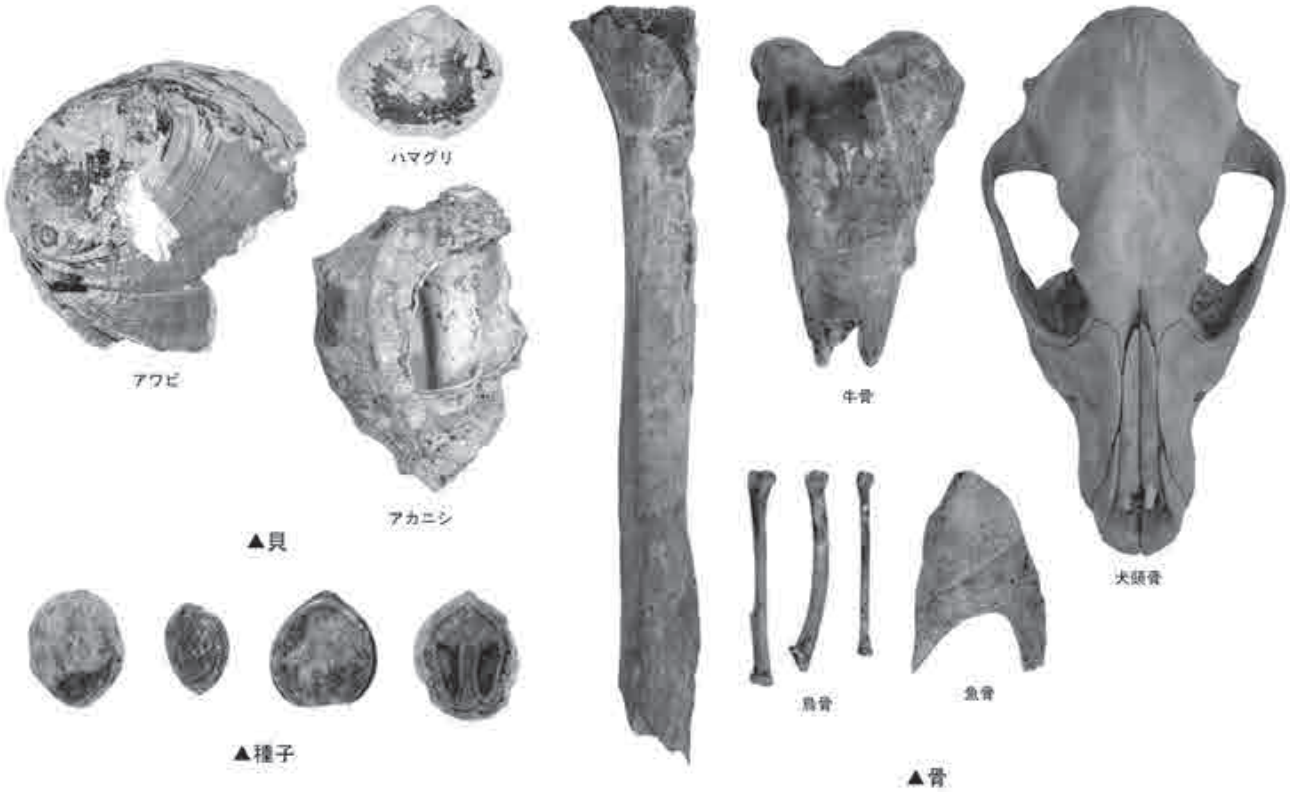
45－1

45－2

45－3

45－5

▲8面下トレンチ



▲貝

▲種子

▲骨

8面下トレンチ出土遺物・自然遺物

新善光寺跡（No.279）

材木座四丁目 579 番 4 地点

例　言

1．本報は、「新善光寺跡(№279)」内、材木座四丁目579番４における、埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成21（2009）年４月13日～同年６月５日にかけて行い、調査面積は約50㎡である。

3．発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当者：山口正紀（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）

調　査　員：小野夏菜・須佐仁和・栂岡ケイト・本城　裕（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）

作　業　員：浅香文保・金丸義一・杉浦永章・鈴木啓之・田島道夫・根市真古人（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

4．現地での写真撮影は山口・須佐が行った。

5．本報作成にあたっての資料整理参加者及び分担は以下のとおりである。

整理参加者：山口・岡田慶子（鎌倉市文化財課臨時的任用職員）

遺物洗浄・注記：埋蔵文化財発掘調査支援協同組合

遺物接合・分類：山口　　遺物実測：山口・岡田　　遺物／遺構トレース・図版作成：山口

観察表・写真図版作成・遺物写真撮影・原稿執筆：山口

6．本報告に係わる出土品及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7．本調査にかかる出土遺物の注記は「ＳＺＴ０９０２」と略して記した。

8．本報の凡例は以下のとおりである。

挿図縮尺　各図に縮尺を表記している。

遺構図版　水糸高は標高値を示す。

遺物図版　釉薬の範囲は•‐•‐•、加工・使用痕は←・→で範囲を示す。また、遺物にみられる煤痕は黒く塗りつぶし表現している。

遺物観察表　（　）は復元数値、［　］は遺存数値を示す。

写真図版　出土遺物は基本約１／２、大きさにより１／１、１／３に縮小している。

9．本報記載の「泥岩」は凝灰質泥岩を示す。

10．整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。

瀬戸：藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

常滑：愛知県　2012『愛知県史別編窯業３中世・近世常滑系』

火鉢：河野眞知郎　1993「中世鎌倉火鉢考―東国との関連において―」『考古論叢 神奈河　第２集』神奈川考古学会

11．現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

伊丹まどか、汐見一夫、玉林美男、原　廣志、福田　誠、社団法人鎌倉市シルバー人材センター

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡の概観 …… 107

第1節　遺跡の位置
第2節　地理的・歴史的環境
第3節　周辺遺跡の調査成果

第二章　調査の概要 …… 113

第1節　調査の経緯と経過
第2節　調査における測量方法
第3節　調査区内の堆積土層

第三章　検出遺構と出土遺物 …… 118

第1節　１面の遺構と遺物
第2節　２面の遺構と遺物
第3節　３面の遺構と遺物
第4節　４面の遺構と遺物
第5節　４面下の遺構と遺物

第四章　まとめ …… 130

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺遺跡 …… 108
図２　調査区と建築範囲 …… 113
図３　国土座標位置図 …… 114
図４　国土座標とグリッド配置図 …… 115
図５　調査区壁土層堆積図 …… 116
図６　１面全測図 …… 118
図７　２面全測図 …… 120
図８　２面土坑・柱穴 …… 120
図９　２面土坑・遺構外出土遺物 …… 122
図10　３面全測図 …… 123
図11　３面遺構外出土遺物 …… 124
図12　４面全測図 …… 125
図13　４面土坑・柱穴 …… 126
図14　４面土坑・柱穴出土遺物 …… 126
図15　４面遺構外出土遺物（１）…… 127
図16　４面遺構外出土遺物（２）…… 128
図17　４面下遺構外出土遺物 …… 129
図18　遺構変遷図 …… 131

表　目　次

表１　周辺の遺跡名称 …… 110
表２　１面遺構計測表 …… 119
表３　２面遺構計測表 …… 121
表４　３面遺構計測表 …… 123
表５　４面遺構計測表 …… 126
表６　遺物観察表（１）…… 133
表７　遺物観察表（２）…… 134
表８　層位別出土遺物一覧表 …… 135

図　版　目　次

図版１…… 136
１．１面全景（東から）
２．１面全景（西から）
３．２面全景（東から）
４．２面全景（西から）
図版２…… 137
１．２面遺構外出土球状金属製品
２．３面遺構外出土漆器椀
３．３面遺構外出土差歯下駄
４．３面全景（東から）
５．３面全景（西から）
図版３…… 138
１．４面全景（東から）
２．４面全景（北から）
３．４面下遺構外出土硯
４．４面下遺構外出土漆櫛
５．４面下遺構外出土漆器椀
図版４…… 139
１．調査区トレンチ１（南から）
２．トレンチ１北壁土層堆積状況（南東から）
３．調査区東壁土層堆積状況（西から）
４．崩落状況（南東から）
図版５…… 140
２・３面出土遺物
図版６…… 141
３・４面出土遺物
図版７…… 142
４面遺構外出土遺物（１）
図版８…… 143
４面遺構外出土遺物（２）
図版９…… 144
４面下出土遺物・自然遺物

第一章　遺跡の概観

第１節　遺跡の位置

本調査地点は、神奈川県遺跡台帳に登録されている新善光寺跡（鎌倉市№279遺跡）の範囲内、鎌倉市材木座四丁目579番４に所在する。平成25年度に刊行された鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29（第２分冊）内の平成20年度に調査実施された材木座四丁目579番８地点の東隣に位置する。

材木座五丁目に所在する浄土宗寺院の九品寺から逗子市に至る道路より東、材木座六丁目に所在する浄土宗寺院光明寺の北側に「弁ヶ谷」という谷戸がある。小さな谷戸が三つに分かれており、それらを含めた範囲を弁ヶ谷と呼称している。遺跡名となっている「新善光寺跡」は谷戸内の中央支谷が範囲に指定されており、谷戸最奥の崖際は「新善光寺やぐら」として1987年に調査されている。

第２節　地理的・歴史的環境

本調査地点一帯は弁ヶ谷と呼称されており、『新編相模国風土記稿』に掲載される嘉暦二（1327）年十月五日の崇寿寺鐘銘に「飯嶼之良、鎌倉之巽、弁谷霊区」とあるのが初見である。『玉舟和尚鎌倉記』によると紅ヶ谷・雪ノ下ヶ谷・亀ヶ谷・花ヶ谷とともに鎌倉七谷の一つと伝えられている。

東国廻国をした聖護院門跡の准三后、道興大僧正は、文明18（1486）年６月から10カ月の旅について記した紀行文として翌年に『廻国雑記』を著している。その中に鎌倉を来訪したことも詠じられ、「べにが谷をとほりて、化はひ坂を越ゆとて、俳諧、顔にぬる紅が谷よりうつりきて早くも越ゆるけはひ坂かな」とあり、弁ヶ谷を紅ヶ谷と称していたこともうかがえる。谷戸の名称と由来にはいくつか説があり、後三条源氏伊豆田代氏の略系図である『田代略系図』には、春庵玉の注記に「鎌倉別谷、別ノ谷ハ千葉殿ノ敷地ナリ、介ノ唐名別駕ト云間、別ノ谷ト云」と記すとある。『新編鎌倉志』でも、この地に千葉介の館があり、「介」の唐名「別駕」に由来する説があげられているが、『鎌倉攬勝考』は、常陸介や上総介を称することが多かった佐竹氏の屋敷が近くにあったことが地名の由来としている。

谷戸内には新善光寺、崇寿寺、最宝寺という寺院が所在していたことが分かっている。本調査地点の遺跡名にもなっている新善光寺は、浄土教を中心とした四宗兼学を標榜した寺院であったと云われている。創建・開山は未詳で、開基は北条泰時と伝えられている。建久８（1197）年、源頼朝は信濃善光寺の再建慶讃に参詣した折り、善光寺如来のご分身を請来、これを北条時政が鎌倉の名越山荘に祀っていた。頼朝が落馬により急死した原因を善光寺如来と結びつける声があったことから、時政の後を受けた名越朝時が一堂を建立、新善光寺と称したとされている。現在では廃寺となっているが、現在の葉山町上山口に所在する不捨山摂取院新善光寺が当谷戸から移転してきたと伝えられており、もとは弁ヶ谷の奥で松ヶ谷の長勝寺の裏にあたる場所に新善光寺があったとされている。その移転した経緯は不明だが、『新編相模国風土記稿』によると、関東官領上杉房顕は三浦介高明と養子縁組して三浦の地に勢力の安定を計り、当時の住持であった密道和尚は、住吉城の三浦介に窮状を訴えがあり、「中興の僧密道、天正18（1590）年７月朔日に寂すとなれば其の世代なるべし」などから、密道和尚が没した時期に移転があったとしている。いくつかの文献資料にも新善光寺の記述は確認されており、『北条九代記』仁治３（1242）年６月15日条では、「新善光寺智導上人為知識奉観念仏」とあり、新善光寺智導上人が北条泰時への念仏を勤めている。また、「宗顕（金沢貞顕）書状」元徳元（1329）年12月３日条には「関東大仏造営料唐船事、明春可渡宋候之間、大勧進名越善光寺長老御使道妙房、年内可上洛候」とあり、当寺の住持が鎌倉大仏造営の大勧進となっていることもあり、善光寺信仰が盛んであった鎌倉時代には鎌倉の地において少な

図１　調査地点と周辺遺跡

からずとも影響があったのであろう。

崇寿寺は山号を金剛山、元亨元（1321）年に北条高時が開創し、開山は南山士雲である。臨済宗寺院で現在は廃寺となっている。五山・十刹に次ぐ格式の寺として「諸山」の称号を北条高時が与えており、当寺が最古と言われている。『鹿山略志』に「中古遭災、寺宇廃絶、今存旧趾、古文書及鐘銘等、存鹿山伝宗庵、」とあることから、応永三十一（1424）年までは存在が明らかになっている。

最宝寺については、享徳元（1452）年11月９日の「京極持清書下」に「鎌倉弁谷高御蔵最宝寺寺領等事」とあり、享徳の頃まで弁ヶ谷高御蔵に最宝寺があったとことは確かであろう。寺伝では正慶二（1333）年の兵火で扇ガ谷にも最宝寺が移ったという。現在の横須賀市野比に兼帯所があり、小田原北条氏の真宗弾圧により野比に移り、寺地が継承されているとしている。大永元（1521）年に扇ガ谷の最宝寺は火災で焼失したと伝える。

先述したが、高御蔵というのは、北条氏が武蔵国の年貢を収納するために置いた「浜高御倉」といい、

現在でも「高御倉小路」など小字名が残っている。弁ヶ谷内にあったとされ、最宝寺が隣接していたとされることから谷戸の入口にあったのであろう。高橋氏は、「浜高御倉」を北条氏の管理する「幕府直轄領（関東御領）の倉庫群」としている（高橋1996）。

第３節　周辺遺跡の調査成果

新善光寺跡（№279）内では２地点の発掘調査が実施されている。図１－１地点は谷戸奥の最上段に位置する。中世３面時に玉砂利面や瓦溜りが検出され、海抜23.15～22.90ｍの位置に岩盤と中世基盤層が同時期に検出されている。２地点では池状遺構を検出しているが、本調査地点と近接しており、詳細は第４章で触れるとする。先述した谷戸最奥部の新善光寺跡内やぐら（№335）では、山裾の崖斜面をコの字状に掘り窪めた、上・中・下段の３時期に亘る遺構が検出されている。明徳二（1391）年から応永二十四（1417）年間の銘文が刻されている宝篋印塔がいくつか出土しており、法華経が写経された多量の写経石や白磁四耳壺を伴う格式のある火葬礼式とされる火葬墓が発見されている。概ね14世紀中葉頃を中心としたやぐら群であると推定され、谷戸内にそれ相応の寺院があったことが窺える。

弁ヶ谷遺跡（№249）内の１地点では13世紀末～15世紀代の中世６時期の遺構面が確認され、寺院的な様相をもつ。２・３地点の近隣調査では、13世紀前半～14世紀前半にかけて４期の遺構群が検出されている。４地点では13世紀中頃～15世紀頃の間に町屋空間の一画から寺院の一画に変化したのではないかと示唆される。５地点では井戸・石列・溝・土坑等が検出され、13世紀後半～15世紀代に亘り、５時期の生活面の中で寺院址の縁辺部であった可能性が報告されている。７地点では、鎌倉時代初期の溝・暗渠や豆腐川護岸、池などが検出され、寺院もしくは武家屋敷に伴う庭園の一角と考えられている遺構が検出された。その後、13世紀半ば～14世紀後半の３期に亘る掘立柱建物の検出もされている。

このように弁ヶ谷内の発掘調査成果から、13世紀前半～15世紀代の遺構群が確認されている。弁ヶ谷内は宗教空間として捉えることが文献等からも認識でき、鎌倉時代からあったとされる寺院は15世紀代には移転を含め全て廃寺となっている。15世紀代の遺跡が残存しているのは鎌倉遺跡群内でも薄く、貴重な資料であり、それまでに至る痕跡が残っている状況であることは調査成果からも少なからず明らかになってきている。

［引用・参考文献］

高橋慎一朗1996『中世の都市と武士』吉川弘文館
貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
原廣志、他 1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』新善光寺跡内やぐら発掘調査報告
福田誠 2004「新善光寺跡（No.279）材木座四丁目573番１外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第２分冊）』鎌倉市教育委員会
1991『佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら』佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団
2012『材木座（光明寺・小坪周辺を除く）を学ぶ　資料集』特定非営利活動法人　鎌倉考古学研究所

＜調査地点一覧概要＞

図１には神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称を番号のみ表記した。対応する名称は以下に表記する。調査地点番号は、その遺跡内における調査年月の古い順から番号を付し、そのため図の範囲外にある地点番号が欠如している場合や同一番号が重複している。また、発掘調査を対象としているため、確認（試掘）調査を含めていないことを前提とした。

表１　周辺の遺跡名称

遺跡№	遺跡名称	遺跡№	遺跡名称	遺跡№	遺跡名称
８５	弁ヶ谷やぐら群	２５４	弁ヶ谷奥遺跡	３１３	長勝寺遺跡
８７	鎌倉城	２５５	実相寺旧境内遺跡	３１４	能蔵寺跡
１６９	弁ヶ谷横穴	２６１	材木座町屋遺跡	３１６	光明寺旧境内遺跡
２２５	感応寺跡	２７９	新善光寺跡	３３５	新善光寺跡内やぐら
２４８	最宝寺跡	２８４	崇寿寺跡	３８０	長善寺やぐら群
２４９	弁ヶ谷遺跡	３０５	長勝寺やぐら	４５６	弁ヶ谷東やぐら群

弁ヶ谷やぐら群（№85）

１：1986年８月調査。坂口滋晧ほか　1986『鎌倉市材木座４丁目弁ヶ谷やぐら群』相武考古学研究所

２：1989年９月調査。継　実　1991「弁ヶ谷遺跡やぐら群　鎌倉市材木座４丁目594番」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』弁ヶ谷遺跡やぐら発掘調査団

３：2000年２月調査。上田薫・依田亮一　2000「平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査」『かながわ考古学財団調査報告98　弁ヶ谷やぐら群』財団法人 かながわ考古学財団

鎌倉城（№87）

１：1998年11月調査。長谷川厚・大塚健一　1999「平成10年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にともなう調査」『かながわ考古学財団調査報告74　鎌倉城（№87）所在やぐら群』財団法人かながわ考古学財団

感応寺跡（№225）

１．2002年11月調査。汐見一夫・小泉衣理　2005「感応寺跡（No.225）材木座六丁目722番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　平成16年度発掘調査報告（第２分冊）』鎌倉市教育委員会

弁ヶ谷遺跡（№249）

１：1999年６月調査。宮田眞・諸星真澄・滝沢晶子　2001「弁ヶ谷遺跡（No.249）材木座四丁目336番７地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会

２：2003年10月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子「弁ヶ谷遺跡（No.249）材木座六丁目643番５」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25　平成20年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会

３：2003年10月調査。馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子「弁ヶ谷遺跡（No.249）材木座六丁目643番４」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25　平成20年度発掘調査報告（第１分冊）』鎌倉市教育委員会

４：2004年９月調査。降矢順子・齋木秀雄　2004「弁ヶ谷遺跡（No.249）材木座六丁目643番４」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25　平成20年度発掘調査報告（第２分冊）』鎌倉市教育委員会

５：2006年８月調査。宮田眞・森孝子　2007『弁ヶ谷遺跡発掘調査報告書』株式会社 博通　―材木座四丁目332番１の一部外地点

６：2009年２月調査。未報告―材木座二丁目599番８

７：2009年６月調査。未報告―材木座六丁目640番２

根本志保　2010「弁ヶ谷遺跡（№249）の調査」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』

特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所

新善光寺跡（№279）

1：2002年1月調査。福田誠　2004「新善光寺跡（No.279）材木座四丁目573番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　平成15年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

2：2008年8月調査。山口正紀・平井里永子　2013「新善光寺（No.279）材木座四丁目579番8地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書29　平成24年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

3：本調査地点

材木座町屋遺跡（№261）

1：1988年9月調査。田代郁夫　1990「5．材木座町屋遺跡（No.261）材木座四曲260番1外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6　平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会

4：1995年6月調査。馬淵和雄　1997「材木座町屋遺跡（No.261）　材木座三丁目364番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13　平成8年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

6：2000年1月調査。大河内勉・伊丹まどか・押木弘巳　2001「材木座町屋遺跡（No.261）材木座六丁目760番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

8：2000年11月調査。汐見一夫　2002「材木座町屋遺跡（No.261）材木座四丁目256番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

9：2002年8月調査。齋木秀雄・根本睦子　2005「材木座町屋遺跡（No.261）材木座六丁目647番10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　平成16年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

10：2002年8月調査。齋木秀雄・根本睦子　2005「材木座町屋遺跡（No.261）材木座六丁目647番15」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　平成16年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

11：2002年10月調査。齋木秀雄・根本睦子　2005「材木座町屋遺跡（No.261）材木座六丁目647番8外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　平成16年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

12：2002年12月調査。齋木秀雄・根本睦子　2005「材木座町屋遺跡（No.261）材木座六丁目647番9」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　平成16年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

22：2008年6月調査。未報告―材木座六丁目653番1他

24：2009年7月調査。未報告―材木座六丁目742番4外

26：2010年1月調査。未報告―材木座六丁目725番11

長勝寺やぐら（№305）

1．1984年07月調査。田代郁夫・玉林美男　1985『長勝寺遺跡（やぐら）発掘調査報告書　昭和59年度鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業にともなう調査』長勝寺（やぐら）発掘調査団

長勝寺遺跡（№313）

1：1976年8月調査。大三輪龍彦・斉木秀雄ほか　1978『長勝寺遺跡　中世鎌倉の民衆生活を探る』長勝寺遺跡発掘調査

団　―材木座二丁目2162番2地点

2：1997年6月調査。土屋浩美・宗臺富貴子　1999「長勝寺遺跡（No.313）材木座二丁目2168番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15　平成10年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

能蔵寺跡（№314）

1：1971年11月調査。松尾宣方　1983「2.来迎寺北遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市

教育委員会

2：1993年7月調査。馬淵和雄　1995『能蔵寺跡　材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査』能蔵寺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会　―材木座二丁目274番4地点

3：2001年1月調査。伊丹まどか・川又隆央　2003「能蔵寺跡（No.314）材木座二丁目297番地1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19　平成14年度発掘調査報告』

4：2003年5月調査。原廣志　2007「能蔵寺跡（№314）材木座四丁目274番2の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23　平成18年度発掘調査報告（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

5：2004年7月調査。齋木秀雄・降矢順子　2007「能蔵寺跡（№314）材木座二丁目294番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23　平成18年度発掘調査報告（第2分冊）』

6：2006年8月調査。未報告―材木座二丁目293番2

光明寺旧境内遺跡（№316）

1：1977年12月調査。松尾宣方　1983「42.光明寺境内」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会　―材木座六丁目854番地点

2：1978年3月調査。松尾宣方　1983「48.光明寺裏遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』鎌倉市教育委員会　―材木座六丁目846番1地点

3：1978年11月調査。斎木秀雄・河野真知郎・手塚直樹　1980『光明寺裏遺跡　鎌倉市材木座所在北区立鎌倉学園用地内の中世遺跡発掘調査報告書』北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団・東京都北区教育委員会　―材木座六丁目846番1地点

4：1984年10月調査。斎木秀雄　1986『浄土宗大本山天照山蓮華院光明寺　開山記主良忠上人700年遠忌記念事業に伴う埋蔵文化財の調査』光明寺境内遺跡発掘調査団

5：2003年5月調査。福田誠・鈴木絵美　2006「光明寺旧境内遺跡（No.316）材木座六丁目855番21外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22　平成17年度発掘調査報告（第2分冊）』鎌倉市教育委員会

新善光寺跡内やぐら（№335）

1：1987年7月調査。原廣志・福田誠・田代郁夫　1988「昭和62年度鎌倉市材木座地区内急傾斜崩壊対策事業に伴う調査」『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書―中世墓の発掘調査―』新善光寺跡内やぐら発掘調査団

弁ヶ谷東やぐら群（№456）

1：1999年7月調査。鈴木庸一郎・木村吉行　2000「平成11年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策工事にともなう発掘調査」『かながわ考古学財団調査報告 94　弁ヶ谷東やぐら群』財団法人 かながわ考古学財団

第二章　調査の概要

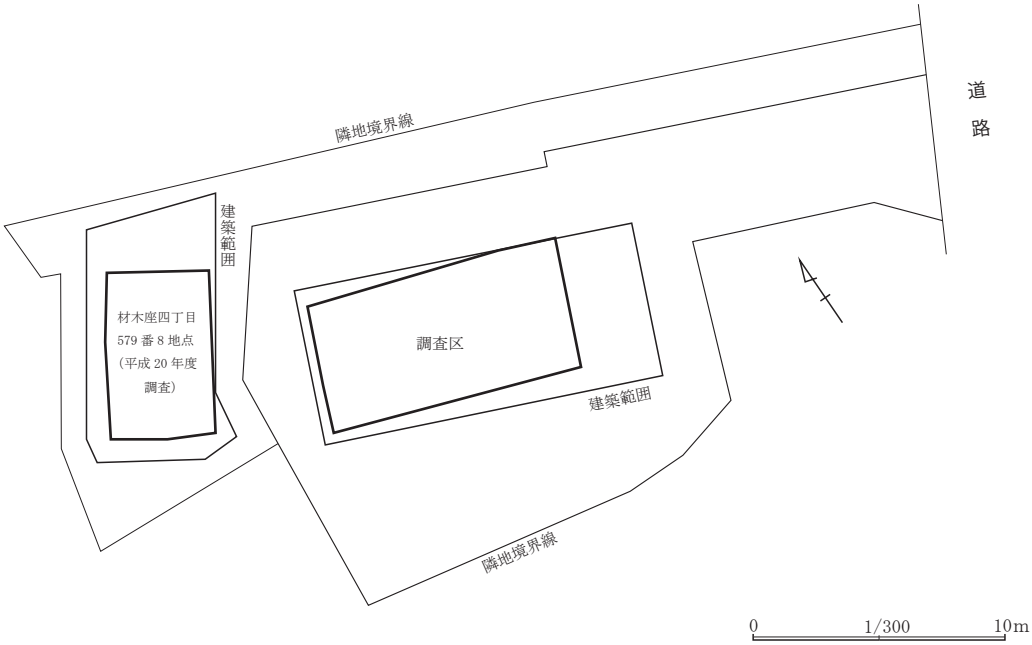


図２　調査区と建築範囲

第１節　調査の経緯と経過

本地点の発掘調査は、個人専用住宅建設における地盤の柱状改良工事を原因として、鎌倉市教育委員会が実施した。平成20年８月21日～同年９月12日にかけて、西側に近接する材木座四丁目579番８地点（図１－２地点）の発掘調査が実施された。その結果をもとに、同様の遺構面等が想定され、本調査実施の判断に至った。その後、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、３月下旬に施工者との工程調整に続き、平成21年４月13日から現地での発掘調査を開始した。本来の建築面積は108㎡であるが、鎌倉市教育委員会文化財課の判断で隣地境界線から安全距離をとり、建築範囲内50㎡を調査区に設定した（図２）。掘削残土置き場は敷地内で処理し、現地終了時には遺物天箱６箱分の遺物が出土した。

４月13日に担当者立会いのもと、工事業者により重機２機による表土掘削を行い、２地点よりやや深く、地表下130cm前後で同様の遺構面を確認した。翌日より人力による作業で調査を進行し、その結果として、４時期の中世遺構面を確認し、測量・写真撮影などの記録保存を行った。表土掘削段階から多量の湧水が確認され、その影響で崩落の危険性に対処しながら調査を進行していたが、５面調査段階に大雨の影響で調査区北東部の弛んだ地盤が崩落してしまい、鎌倉市教育委員会文化財課と協議のもと、調査を停止した。後日、必要とされる記録を行い、工事業者により埋め戻しが行われ、調査終了した。

以下、作業経過を抜粋する。

４月 13 日（月）　現地調査開始。重機による表土掘削。

４月 14 日（火）　機材搬入。調査区周辺環境整備。

４月 15 日（木）　調査区周囲に測量グリッドを設定。鎌倉市三級基準点及び４級基準点より標高値と国土座標値を測量点に移動。

○ 国土座標値（世界測地系）
C001 X-76913.554 Y-25219.498
C002 X-76914.928 Y-25247.656
A点 X-76915.164 Y-25176.776
B点 X-76895.985 Y-25170.652
A杭 X-76893.683 Y-25197.894
B杭 X-76897.965 Y-25186.686
Y-25200
X-76900
B点
A点
B杭
A杭
20.133m
77° 07' 40"
105° 33' 15"
27.339m
16° 05' 15"
12.000m
42.753m
184° 57' 10"
C001
C002
A
B
C
D
E
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
0
1/400
20m

図３　国土座標位置図

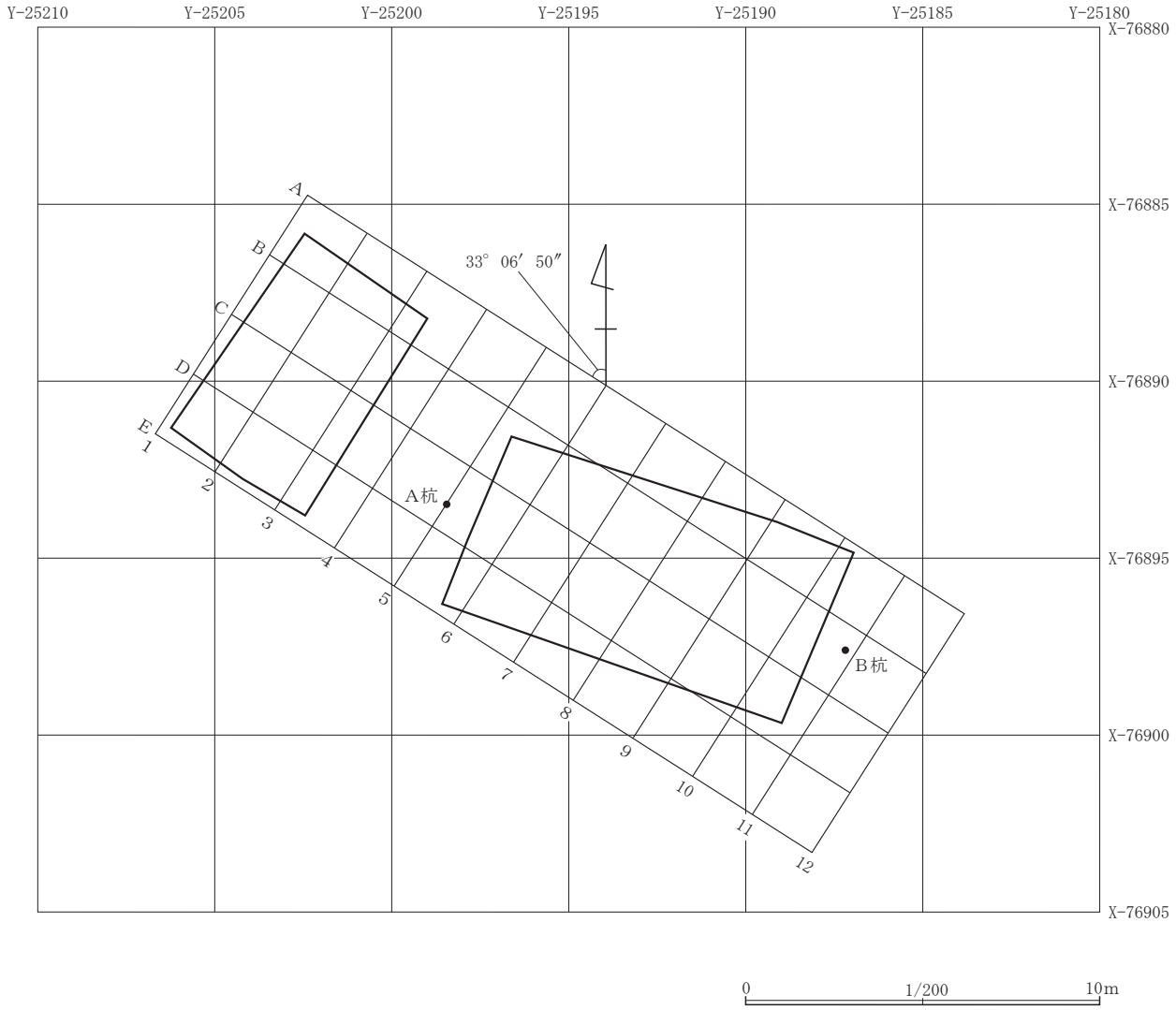
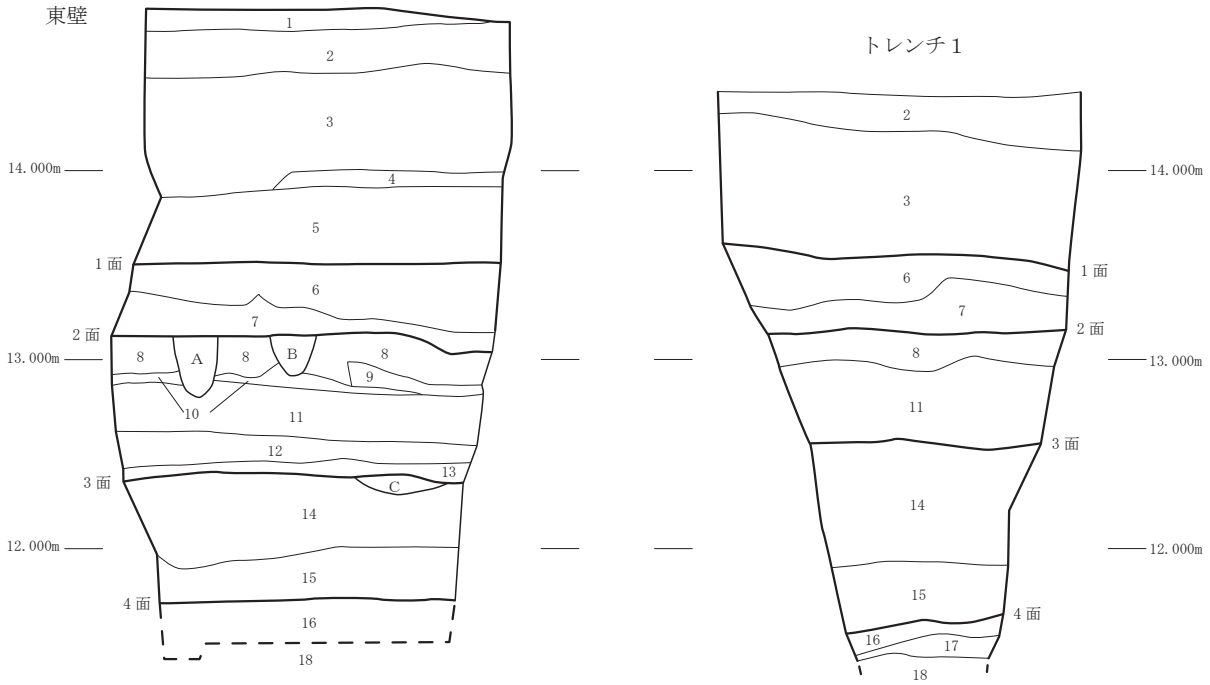


図４　国土座標とグリッド配置図

4 月 27 日（月）　１面全景写真撮影。全測図実測。
5 月 12 日（火）　２面全景・個別写真撮影。全測図実測。
5 月 25 日（月）　３面全景写真撮影。全測図実測。
5 月 27 日（水）　４面全景・個別写真撮影。全測図実測。
5 月 29 日（金）　調査区北東部崩落。調査停止。
6 月　2 日（火）　東壁土層堆積写真撮影及び実測。
6 月　3 日（水）　トレンチ１土層堆積写真撮影及び実測。撤収準備。
6 月　5 日（金）　現地調査終了。機材撤収。工事業者による掘削残土埋め戻し。



土層注記

１．茶色土：現代耕作土。
２．明赤茶色土：近現代耕作土。
３．茶褐色土：コンクリート片多数、近現代層。
４．灰褐色粘質土：近現代層。
５．褐色土：泥岩粒多量、近現代層。
６．暗青灰色弱粘質土：泥岩（５～10cm）多量、締まりなし
７．暗青灰色粘質土：泥岩粒多く、締まりややあり。
８．暗青灰色粘質土：泥岩粒多く、細砂少量。締まりあり
９．暗灰色弱粘質土：泥岩粒少量。細砂多く、木片少量。締まりややあり。
10．茶褐色粘質土：木片・木端多く、締まり若干あり。
11．暗灰色粘土：泥岩粒微量。木端少量。締まり若干あり。
12．暗茶灰色粘土：泥岩（3～5cm）・貝粒少量。締まりややあり。
13．暗茶灰色粘質土：泥岩（3～7cm）中量。貝粒・木端少量。締まりややあり。
14．暗灰色粘土：泥岩粒微量。木端少量。締まり若干あり。
15．暗青灰色粘土：泥岩粒やや多く、締まりあり。
16．暗青灰色粘質土：泥岩（５～10cm）・泥岩粒多量。
茶褐色粘土ブロック多く、締まりあり。
17．暗灰色粘質土：泥岩粒多量。貝粒・細砂多く、茶褐色粘土ブロック中量。
締まりあり。
18．青灰色粘質土：泥岩（10～20cm）多量。締まりあり。

遺構土層注記

Ａ．暗青灰色弱粘質土：泥岩粒少量。炭化物微量。締まりややあり。
Ｂ．暗青灰色弱粘質土：泥岩粒・木端少量。締まりややあり。
Ｃ．暗灰色粘質土：泥岩（5cm）・貝粒少量。締まりなし。

0　1/40　2m

図５　調査区壁土層堆積図

第２節　調査における測量方法

調査を進めていく上での記録に用いる測量は、隣接する図１－２地点の調査に用いた任意の方眼軸の続きを利用した。そのため、国土座標上の方眼軸とは一致していない。測量軸の設定には先行して調査区西側にＡ杭、東側にＢ杭を設定した（図３）。調査地南側を東西に走る道路に設置してある鎌倉市４級基準点C001とC002を用いて、調査測量基準点にあたるＡ杭とＢ杭に国土座標上の数値を移動した。２地点と同軸･方眼グリッドを使用しているため、南北軸線は変わらず北方からアルファベットＡ～Ｅ、東西軸線には西方から算用数字の５～12を付け足してグリッド設定を行った。グリッド南北軸線は真北からＮ－33°06′50″－Ｗの傾きを測る。また、本報では便宜上、調査区の北東側を北、南西側を南とする。国土座標値は、現地調査時において日本測地系（座標系AREA9）を用いて測量を行った。後に整理作業段階において国土地理院ホームページに設置されている座標変換ソフト『web版TKY2JGD』により世界測地系第Ⅸ系の座標数値へ変換したものを図３に記し、調査地点と国土座標系の詳しい位置関係は図４に示した。標高値は、２地点調査時に調査地点近辺に移動してあるので、それらを使用し移設した。なお、提示した地図は鎌倉市が所有する都市基本計画図（2004年発行）を使用している。

第３節　調査区内の堆積土層

調査区東壁とトレンチ１の土層観察を行った（図５）。現地表は東壁で標高14.8ｍ前後、トレンチ１の方では14.4ｍを測り、コンクリート片などを含む近・現代層（１～５層）が１面まで130cmほど堆積していた。標高13.4～13.6ｍにかけて、６層とした厚さ15～30cmの泥岩を多量に含む青灰色弱粘質土とその直下に泥岩粒を多く含む７層の堆積があり、両方が１面を構成する堆積土であった。２面の標高は13.1ｍ前後を測る。８・11層は全体に拡がりが見えたが、東側のみに木片を含む９・10層が確認された。また、トレンチ１では同様の混入物を含み、類似する12・13層の堆積は確認できなかった。３面は12.3～12.5ｍと東側に下る傾向がみえる。泥岩粒微量、木端少量を含む暗灰色粘土（14層）が40～70cm堆積し、３面の構成土となっている。その下に、30cmほどの堆積がみられた泥岩粒やや多く、締まりある暗青灰色粘質土（15層）を掘削後、４面を検出した。４面を構成する16層は５～10cm大の泥岩と泥岩粒を多量に含み、茶褐色粘土ブロックを多く含む層である。以下、17･18層の掘削を進行中、大規模に崩落してしまったため、中世基盤層までの堆積を確認できずに終えてしまった。

第三章　検出遺構と出土遺物

本調査では４期に亘る遺構面までを確認し、その中で土坑26基、柱穴54基を検出した。

本報では遺構に付した名称は調査時において便宜的に付したもので、遺構の新旧関係などに関係するものではない。また、図示できなかった遺物は認知できる範囲の個体数で、それ以外は破片数を一個体とする形で、層位と遺構を一括し出土箇所を分けて表４にまとめた。なお、各遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先し、そのほかの遺構については概略として、各節中に表示した。

第１節　１面の遺構と遺物

地表面から厚さ80～130cmの近～現代の堆積土を除去すると、標高13.3～13.5ｍの高さに５～10cm大の泥岩を多量に含む暗青灰色弱粘質土が拡がる１面を検出した（図６）。土坑15基、柱穴21口を検出したが、各遺構の深さは浅く、現代に至るまでに後世の撹乱により削平されている様相が想定できた。後述するが、２面の遺構では近世遺構を確認しているため、当遺構面は近世以降の年代となる。また、遺構からの出土遺物は確認できず、１面検出掘削時にかわらけ・火鉢が各１点ずつ出土した程度である。それらも、図示し得るには至らない小片であったため、ここでは特筆する遺構・遺物は省略させていただく。

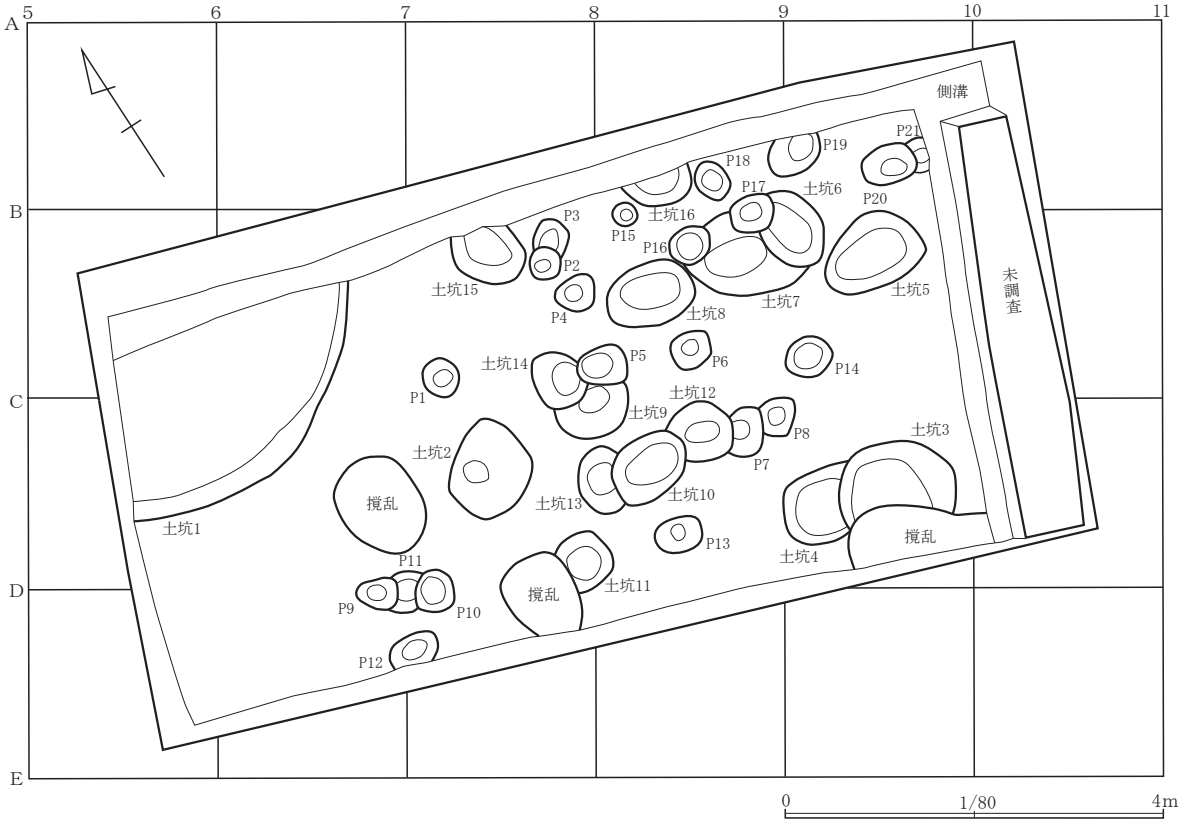


図６　１面全測図

表２　１面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
土坑１	不明	１３．３６	１３．０２	２４３以上	１８０以上	３４	調査区外に拡がる
土坑２	不整形	１３．４０	１３．１６	１４０	８３	２４	―
土坑３	不明	１３．４７	１３．１８	１２６	６７以上	２９	撹乱により削平
土坑４	不明	１３．４５	１３．２０	７６	６１	２５	―
土坑５	不整形	１３．５２	１３．３６	１１０	７４	１６	―
土坑６	楕円形	１３．５２	１３．３２	８９	６４	２０	―
土坑７	不明	１３．４８	１３．２４	９６	８２以上	２４	Ｐ16・17、土坑6により削平
土坑８	楕円形	１３．４７	１３．２１	９５	６６	２６	―
土坑９	不明	１３．４３	１３．１０	８１	５８	２３	土坑14・Ｐ５により削平
土坑10	楕円形	１３．４３	１３．２９	８９	６３	１４	―
土坑11	不整形	１３．４１	１３．２８	５８	４７以上	１３	撹乱により削平
土坑12	楕円形	１３．４１	１３．２５	６３	５６以上	１６	土坑10により削平
土坑13	楕円形	１３．４１	１３．１４	７２	３７以上	２７	土坑10により削平
土坑14	不整形	１３．４０	１３．２１	６５	５４	１９	Ｐ５により削平
土坑15	不明	１３，４２	１３．１７	７６	６２以上	２５	―
Ｐ１	円形	１３．４０	１３．２８	４２	３７	１２	―
Ｐ２	円形	１３．４１	１３．２０	３６	３５	２１	―
Ｐ３	楕円形	１３．４１	１３．２８	３６	３３以上	１３	Ｐ２により削平
Ｐ４	不整形	１３．４１	１３．２４	４７	４０	１７	―
Ｐ５	隅丸方形	１３．４０	１３．２６	５４	４０	１４	―
Ｐ６	隅丸方形	１３．４５	１３．３２	４３	３７	１３	―
Ｐ７	不明	１３．４３	１３．２３	５５	３４以上	２０	土坑12により削平
Ｐ８	不明	１３．４５	１３．３０	４７以上	３９	１５	Ｐ７により削平
Ｐ９	不整形	１３．３１	１３．１０	４５	３１	２１	―
Ｐ10	不整円形	１３．３８	１３．２３	４４	４１	１５	―
Ｐ11	不明	１３．３７	１３．２７	４４	１８以上	１０	Ｐ９・10により削平
Ｐ12	不整形	１３．３７	１３．１９	５５	３２以上	１８	調査区外に拡がる
Ｐ13	不整円形	１３．４１	１３．２３	５１	３６	１８	―
Ｐ14	円形	１３．４７	１３．３３	５１	４３	１４	―
Ｐ15	円形	１３．４６	１３．４０	２６	２５	6	―
Ｐ16	円形	１３．４７	１３．３８	４５	３９	9	―
Ｐ17	円形	１３．５１	１３．２６	４９	４０	２５	―
Ｐ18	楕円形	１３．４８	１３．３７	４４	３４	１１	―
Ｐ19	不明	１３．５０	１３．４１	６１	４７	9	側溝により削平
Ｐ20	楕円形	１３．５２	１３．３４	５９	４１	１８	―
Ｐ21	不明	１３．４９	１３．４１	３７	１４以上	8	Ｐ20により削平

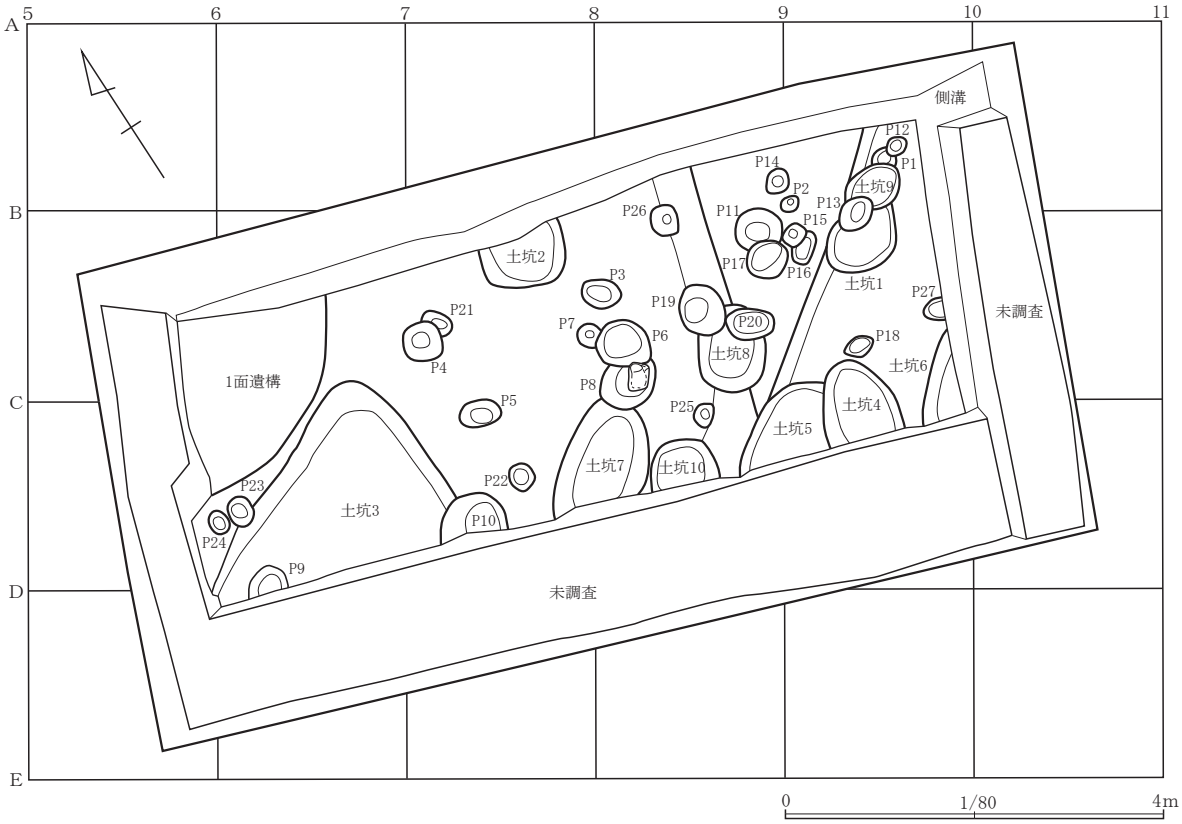


図７　２面全測図

第２節　２面の遺構と遺物

２面は１面を確認した標高から30 ～ 40cm下、標高13.10 m付近で検出した（図７）。泥岩粒と細砂を含む暗青灰色粘質土（図５ － ８層）で地業された生活面が拡がる。調査区東部には逆三角状の盛土（上面標高13.30 m）があり、東西に向かい緩く傾斜が付く。東西の下端の標高は、東側では13.20 m前後、西側は13.15 m前後であり、この盛土の意図等は不明である。検出した遺構は、土坑10基、柱穴24基である。

土坑１（図８・９）

Ｂ － ９～ 10グリッドの間に位置する。東部にある逆三角状の盛り土の斜面部分を削平して掘られている。北側は土坑９・Ｐ13により削平されており、形状は不明瞭である。検出時の標高は13.25 m前後、底面標高は13.12 m。規模は、長径88cm以上、短径71cm、深さ12cmである。覆土は１～３cm大の泥岩を多く、かわらけ粒・炭化物を微量に含む、暗青灰色粘質土の堆積がみられた。

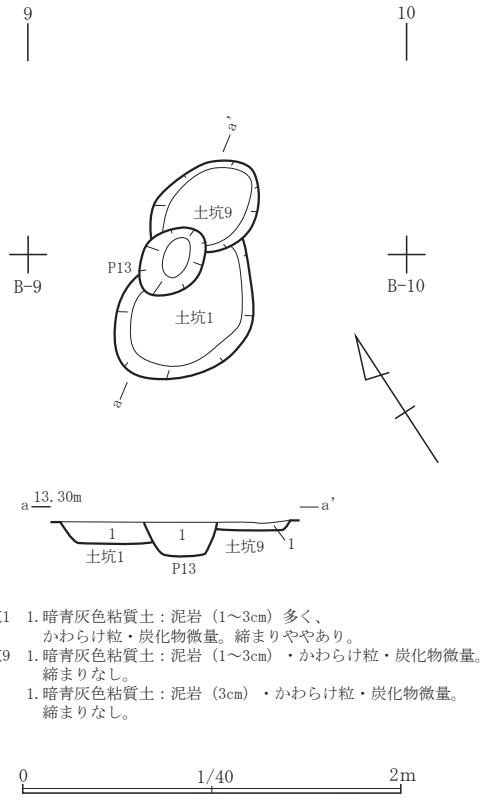


図８　２面土坑・柱穴

表３　２面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	備考
土坑２	不明	１３．１７	１２．９８	９２	５８以上	１９	側溝により削平
土坑３	不整形	１３．１８	１３．０１	２５１	１９２以上	１７	Ｐ９・10により削平
土坑４	不明	１３．２３	１３．１８	８５	８３以上	5	調査区外に拡がる
土坑５	不明	１３．２２	１３．１１	１３２	８２以上	１１	土坑４により削平
土坑６	不明	１３．２２	１３．０７	９０	５０	１５	調査区外に拡がる
土坑７	楕円形？	１３．１１	１３．００	９９以上	９４	１１	Ｐ８により削平
土坑８	不明	１３．２４	１３．１３	９０	７１	１１	Ｐ19・20により削平
土坑９	楕円形	１３．２４	１３．１８	６４	４６	6	Ｐ13により削平
土坑10	不明	１３．１２	１３．０８	７４	４８以上	4	調査区外に拡がる
Ｐ１	不明	１３．２２	１３．１８	２５	１８以上	4	土坑９・Ｐ12により削平
Ｐ２	不整円形	１３．２７	１３．２１	１８	１８	6	—
Ｐ３	楕円形	１３．１１	１３．０７	４２	３１	4	—
Ｐ４	円形	１３．０５	１２．９１	４２	４１	１４	Ｐ21を削平
Ｐ５	円形	１３．０２	１２．９５	２７	２７	7	—
Ｐ６	不明	１３，１３	１３．０２	５９	４８	１１	Ｐ７・８を削平
Ｐ７	円形	１３．０８	１３．０１	２６	２６	7	Ｐ６により削平
Ｐ８	円形	１３．１２	１２．９９	７０	５４以上	１３	鎌倉石（20cm）含む
Ｐ９	不明	１３．０８	１３．０３	４２	２７以上	5	土坑３を削平
Ｐ10	不明	１３．０３	１２．９６	７３	４０以上	7	土坑３を削平
Ｐ11	円形	１３．２６	１３．１８	５０	３７以上	8	Ｐ17により削平
Ｐ12	楕円形	１３．２１	１３．１６	２４	１８	5	Ｐ１を削平
Ｐ13	楕円形	１３．２６	１３．１８	４２	３２	２０	土坑１・９を削平
Ｐ14	不整円形	１３．２８	１３．２２	２８	２４	6	—
Ｐ15	不整円形	１３．２６	１３．１９	２４	２２	7	Ｐ15により削平
Ｐ16	楕円形	１３．２９	１３．２４	３５	２２	5	Ｐ16を削平
Ｐ17	不整円形	１３．２７	１３．２０	４４	４１	7	Ｐ11を削平
Ｐ18	不整形	１３．２２	１３．１３	３３	２１	9	調査区外に拡がる
Ｐ19	不整円形	１３．２６	１３．１０	５５	４７	１６	—
Ｐ20	楕円形	１３．２５	１３．１９	５１	３４	6	—
Ｐ21	不整形	１３．０８	１２．９８	３３	２５以上	１０	Ｐ４により削平
Ｐ22	円形	１３．４７	１３．３８	４５	３９	9	—
Ｐ23	不整円形	１３．１８	１３．０９	３２	２６	9	土坑３を削平
Ｐ24	楕円形	１３．１８	１３．１０	２６	２０	8	—
Ｐ25	不整形	１３．１６	１３．０４	２５	２０	１２	—
Ｐ26	不整円形	１３．１５	１３．０２	３３	２７	１３	—
Ｐ27	楕円形？	１３．２４	１３．１９	２１以上	２０	5	側溝により削平

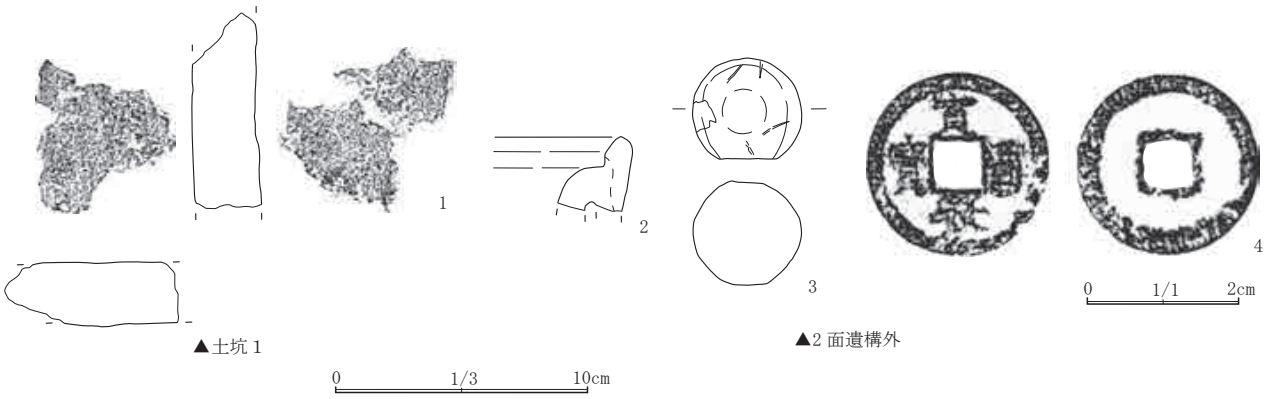


図９　２面土坑・遺構外出土遺物

出土遺物は、瀬戸おろし皿と平瓦が１点ずつ出土しているが、図示できたのは平瓦のみであった。

２面遺構外出土遺物（図９、図版５、表６）

１面下から当面検出までの掘削途中、２面構成土上に堆積する図５－６・７層中から出土した遺物、総数36点中３点を図９－２～３に示した。２は常滑窯甕の口縁部で縁帯下半部が欠損している。中野編年９型式､15世紀前半期の所産のものと思われる。3 は用途不明の金属製品。一部平坦になっているが、全体に丸味をもつ。当遺物は、金属同定分析を鶴見大学に分析してもらっており、詳細は後述する。４は寛永通寶（古寛永）。２面検出までの掘削中に出土しているので、２面廃絶後からは江戸時代以降の年代と考えられる。

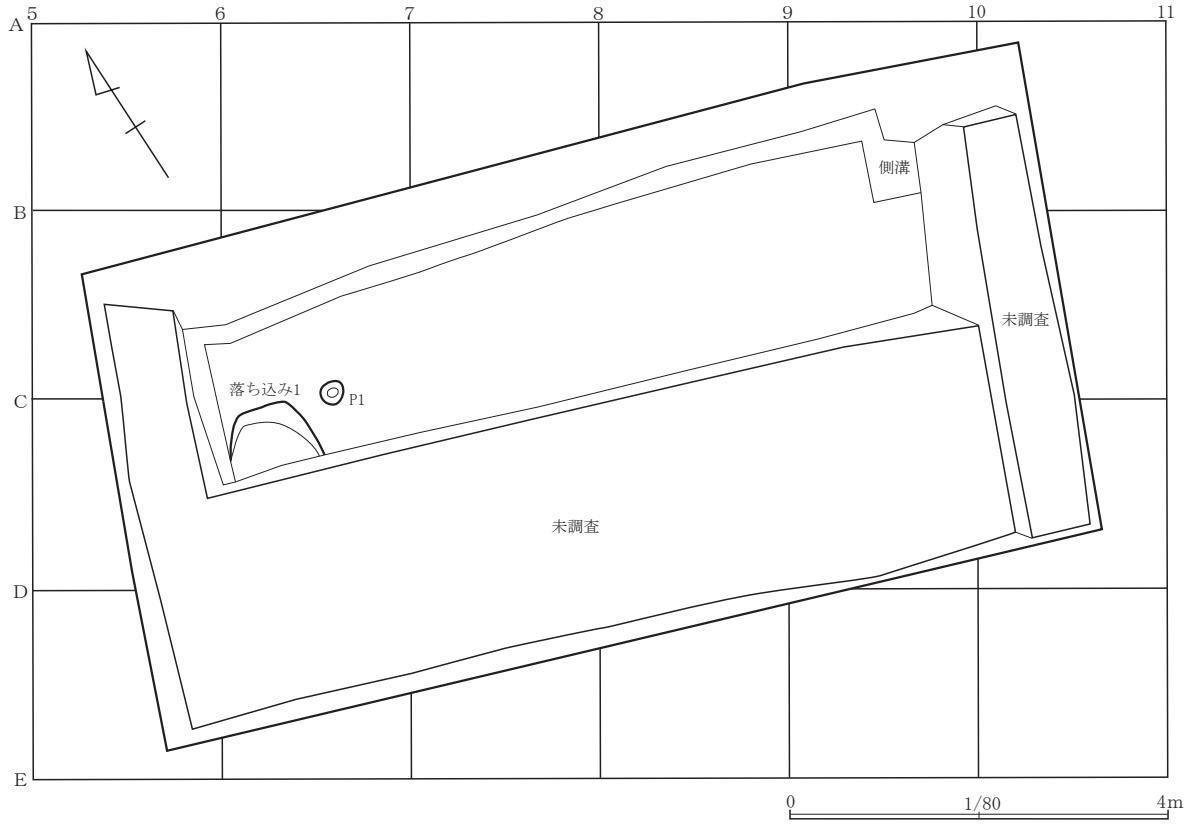


図10　３面全測図

第３節　３面の遺構と遺物

３面は２面から60 ～ 70cm掘り下げ、標高12.30 ～ 12.40ｍの高さで検出した。現地表から最大2.2ｍの深さに至ったため、調査区を大幅縮小し、北側半分に集中した。当遺構面は泥岩粒を僅か、木端を少量含む暗灰色粘土（図５－14層）が拡がり、地業としてはやや弱かったが、柱穴１基と落ち込みを確認したので遺構面として捉えた。柱穴からの出土遺物はなく、落ち込みから常滑窯甕小片１点が出土したが、図示し得るには至らなかった。

表４　３面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	備考
Ｐ１	不整円形	１２．３７	１２．２５	２５	２２	１２	―
落ち込み１	―	１２．３３	１２．２７	９６	６５以上	6	調査区外に拡がる

３面遺構外出土遺物（図11、図版５・６、表６）

２面から３面検出時までの掘り下げ段階で出土した遺物（図５－８～13層中）を３面遺構外として一括した。当面に至るまで遺物の出土量は上面より多くなり、自然遺物も含め総数237点を数えた。図示した遺物は29点である。１～12は糸切りかわらけ、13は瀬戸窯碗で端反碗になる器形か、14は常滑甕、15は片口鉢Ⅱ類の口縁部片、16･17は常滑窯製品の破片を転用した磨耗陶片、18は備前窯擂鉢、19は土錘、20は鳴滝･奥土産の仕上砥、21･22は丸瓦、23 ～ 26は平瓦、27は外面に紋章風の鶴を手描きした漆器椀、28・29は木製箸である。

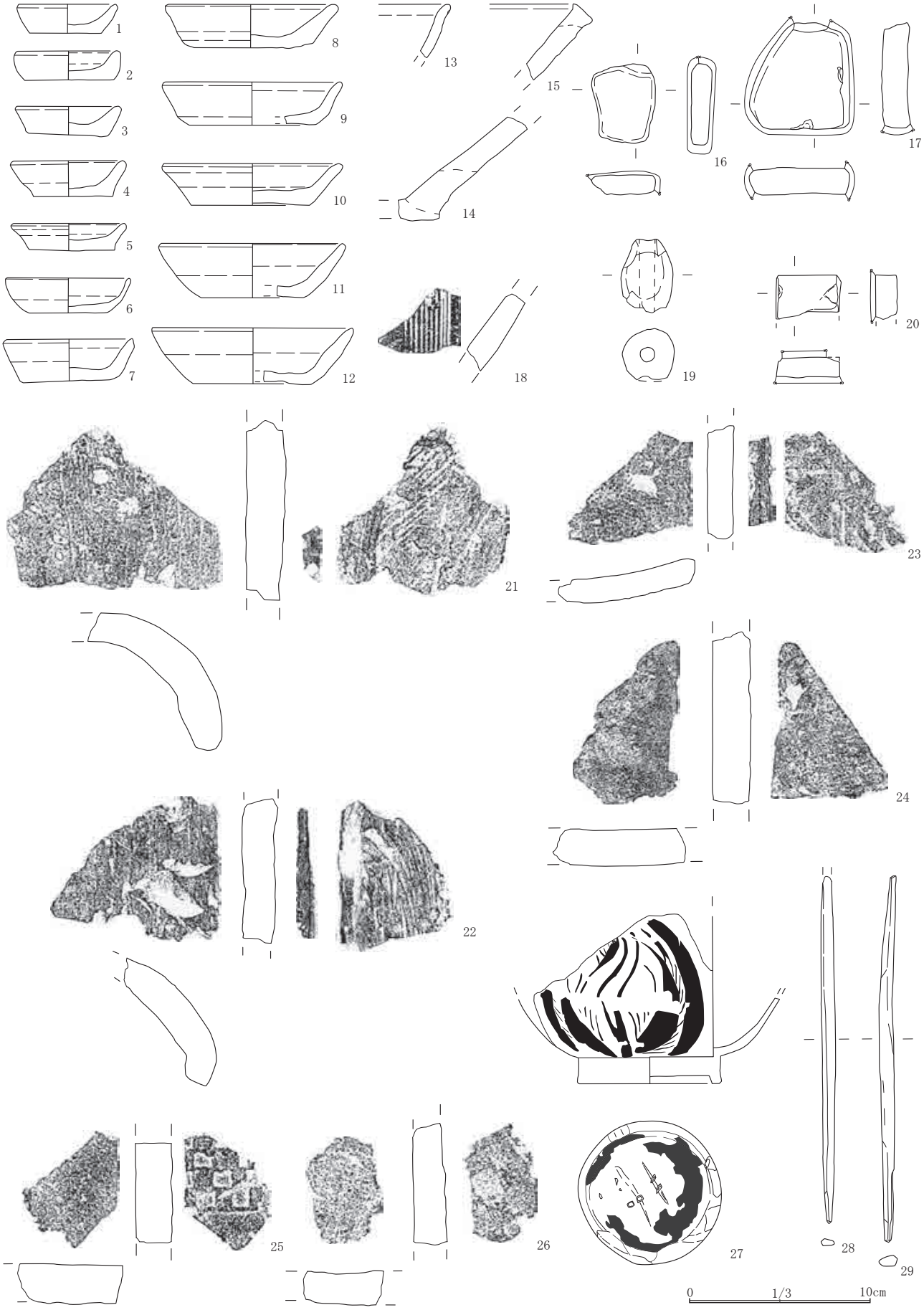


図11　３面遺構外出土遺物

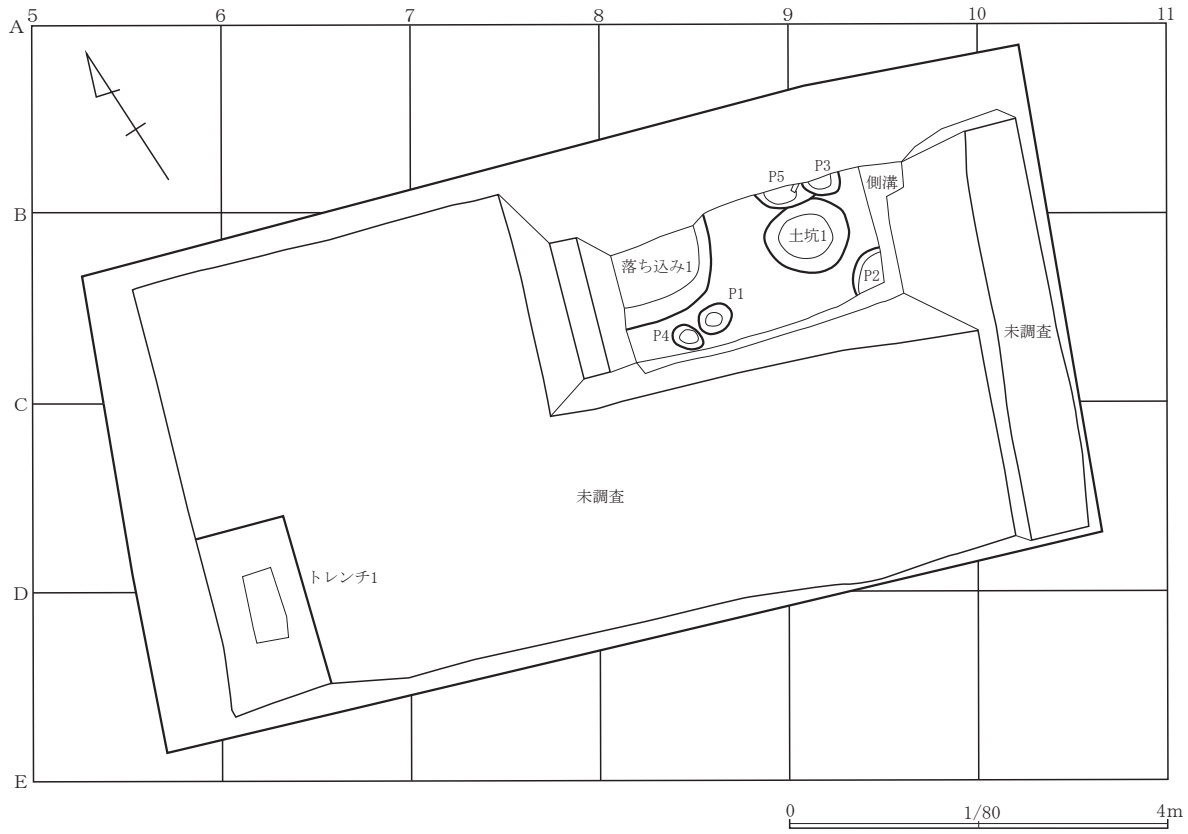


図12　４面全測図

第４節　４面の遺構と遺物

北東部をトレンチ状に設定し、地表下約３ｍ、標高11.60ｍ前後で検出した（図12）。５～10cm大の泥岩・泥岩粒多量、茶褐色粘土ブロックを多く含む締まりのある暗青灰色粘質土で地業された生活面である。検出した遺構は土坑１基、柱穴５基、落ち込み１基である。

また、対角の南西隅にトレンチ１として、標高11.40ｍ付近まで掘り下げ、その結果、北東部と同様の堆積を確認した。出土した遺物は僅かであるが、各面の遺構外出土遺物として数えている。

土坑１（図13・14、図版６、表６）

Ｂ－９グリッド付近で検出した。Ｐ５により北側を僅かに削平されている。検出標高は東側で11.74ｍ、西側で11.60ｍ、底面標高は11.48ｍである。平面形状は不整円形を呈し、規模は長軸91cm、短軸78cm、深さ22～26cmである。覆土は、１～３cm大の泥岩と炭化物を少量含む暗褐色粘質土が堆積していた。覆土中から、かわらけ小皿４点、褐釉壺１点、アサリ・バテイラが出土し、褐釉壺胴部小片を図示した。

Ｐ２（図13・14、図版６、表６）

Ｂ－９グリッドの南東域で検出した。水抜き用の側溝で意図的に削平しつつも、調査区外に拡がっていると思われる。検出標高は11.74ｍ、底面標高は11.64ｍ。平面・断面共に形状は不明、確認した規模は、長軸37cm、短軸33cm、深さ10cmである。覆土は、泥岩粒・炭化物少量を含む暗褐色粘質土が堆積しており、開元通寶１点が出土している。

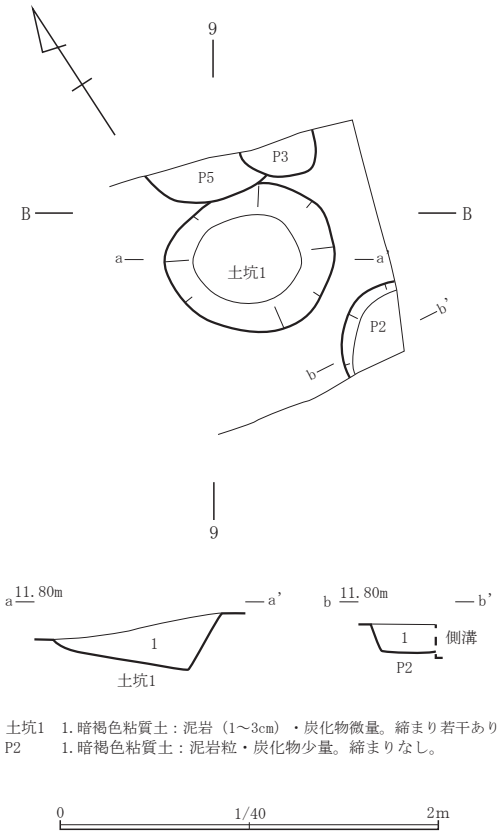


図13　４面土坑・柱穴

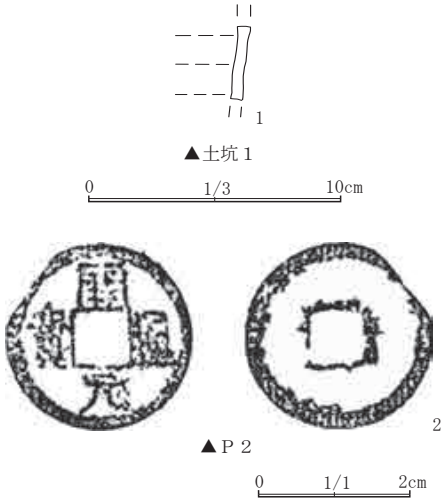


図14　４面土坑・柱穴出土遺物

表５　４面遺構計測表

遺構名	平面形	検出標高（ｍ）	底面標高（ｍ）	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
Ｐ１	不整円形	１１．６３	１１．５３	３７	２８	１０	—
Ｐ３	不明	１１．７４	１１．６３	４０	２０以上	１１	Ｐ５を削平
Ｐ４	楕円形	１１．６２	１１．５３	３５	２３	９	調査区外に拡がる
Ｐ５	不明	１１．６４	１１．５１	６５以上	２５以上	１３	—
落ち込み１	不明	１１．５９	１１．４９	１０６以上	８２以上	１０	調査区外に拡がる

４面遺構外出土遺物（図15・16、図版７・８、表６・７）

図５－14・15層より出土した遺物である。調査範囲が狭くなったにも関わらず、遺物出土量は各面を通して最多の296点を数える。かわらけ、常滑窯甕、木製箸、貝類の出土が目立つようになり、３面構成土である図５－14層中からの出土遺物が主体である。

図15の１～４は轆轤成形のかわらけ小皿、４は中皿、５は大皿、６は手捏ね成形のかわらけ大皿である。７は龍泉窯系青磁蓮弁文皿、８は瀬戸折縁深皿、９・10は常滑甕、前者は格子状の押印、後者は幾何学文の押印が捺してある。11～13は片口鉢、14は備前擂鉢、15は菊花文スタンプの痕跡がある瓦質火鉢、16は滑石鍋を転用し、温石等に加工しようとしたと思われる底部片。17～20は平瓦である。図16の１～９は木製箸、10は非常に丁寧な作りをした差歯下駄、11は遊戯具か、12は対角に斜めに削り加工したトンボの羽で、西隣の調査地点でも類似品が出土している。

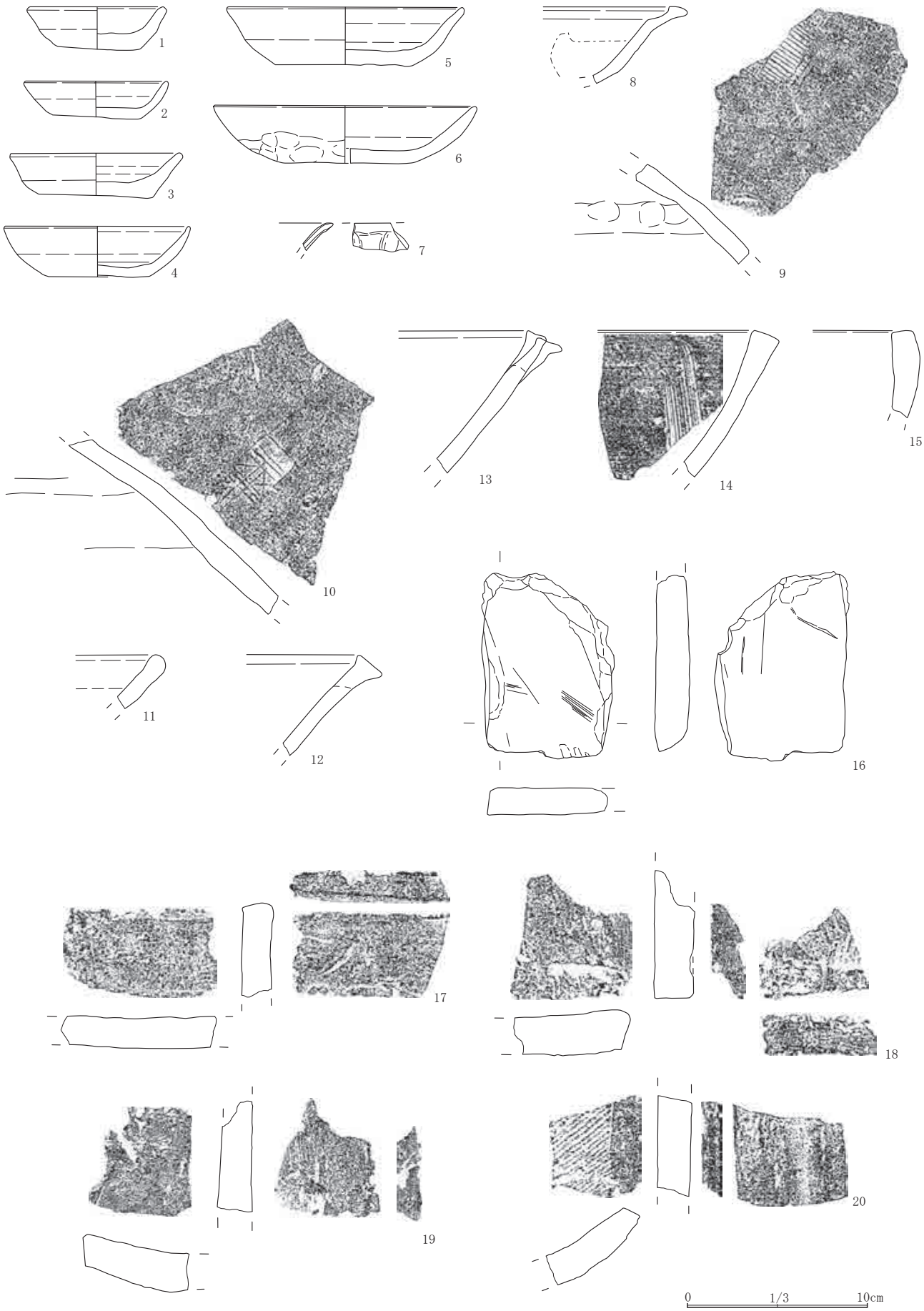


図15　４面遺構外出土遺物（１）

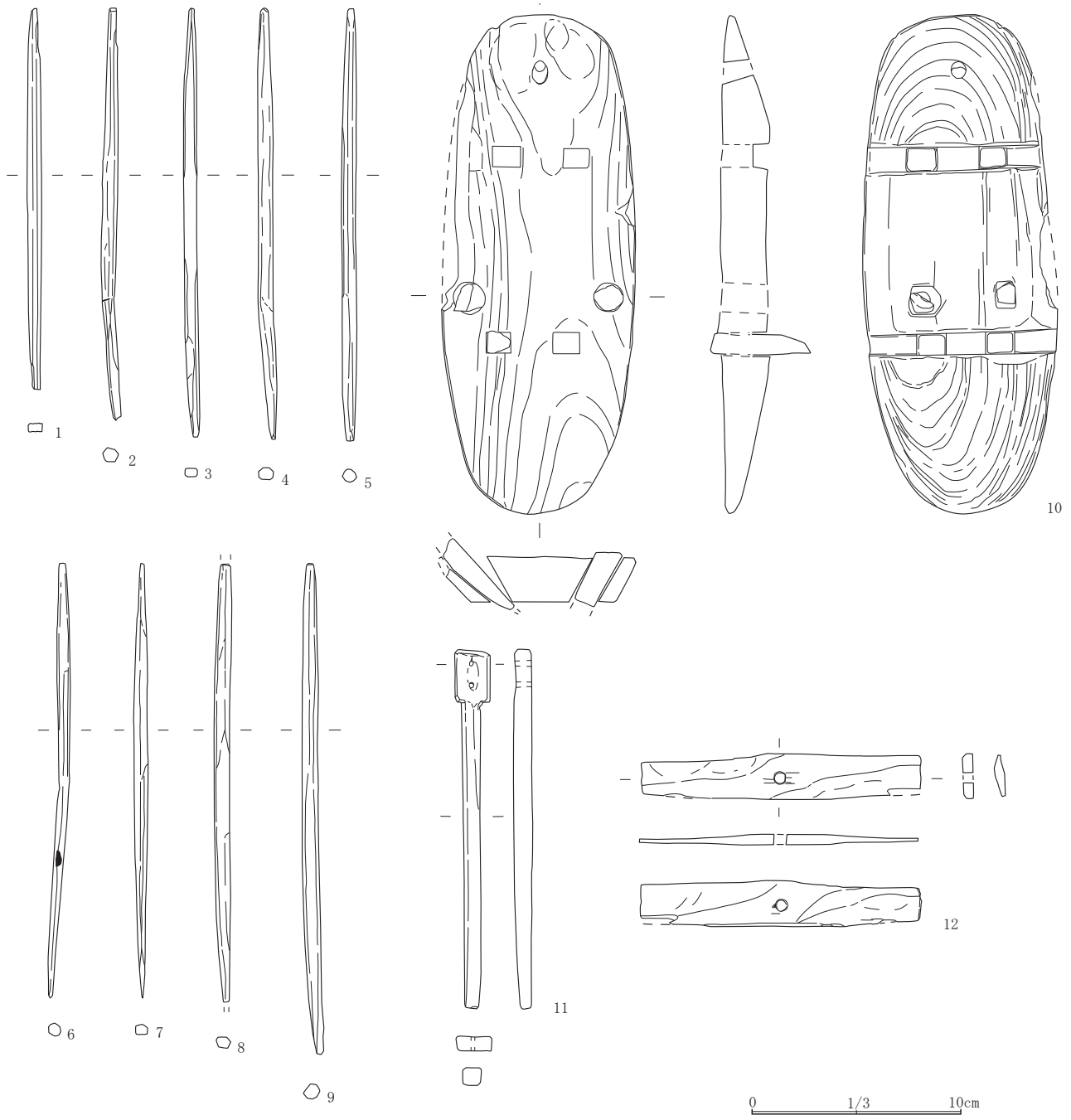


図16　４面遺構外出土遺物（２）

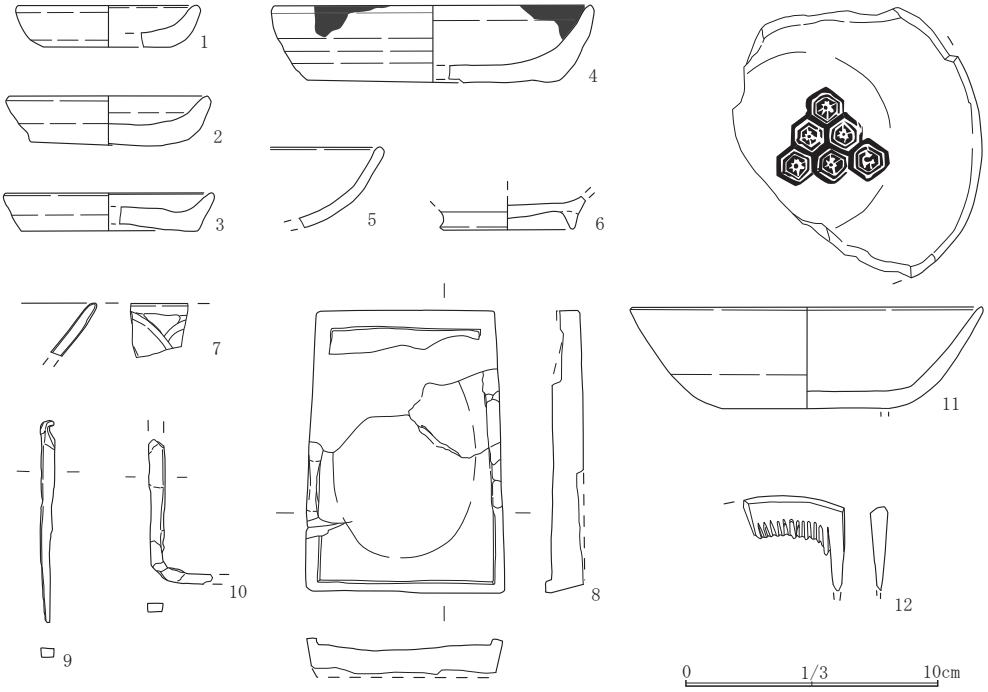


図17　４面下遺構外出土遺物

第５節　４面下の遺構と遺物

４面の調査終了後に、北壁側が崩落してしまったので調査をすることはできなかった。４面と同じ調査範囲で20cmほどの掘削した段階までに出土した遺物を図17に示した。総数149点、轆轤成形かわらけの出土が主体であった。

図17－１～３は轆轤成形のかわらけ小皿、４はかわらけ大皿、５・６は吉備系土器、７は龍泉窯系青磁蓮弁文碗、８は鳴滝産の硯、９・10は鉄製釘、11は内底面に亀甲と菊と思われる絵柄を組み合わせた文様スタンプを捺した漆器椀、12は黒漆を塗布した櫛である。

第四章　まとめ

本調査地点は、鎌倉市南東部、東に向かい拡がる谷戸、弁ヶ谷内の中央支谷入口に位置する。当谷戸には廃寺の記録が多く、宗教的空間地であったことは文献や寺伝によって明らかになっている。第１章３節でも僅かながら述べたが、周辺の調査成果からも13世紀前半から15世紀代の寺院の性格をもつ痕跡が成果となっている。

本調査において１～４面までの４時期の遺構群の検出と調査区南西隅のトレンチ内で土層観察をしたが､多量の湧水により調査区壁の崩落が起こってしまった。その規模から調査続行が困難であったため、中世基盤層までの確認をすることはできなかったが、西隣の材木座四丁目579番８地点の調査成果を含め、本調査地点の成果を考察してみる（図18)。以下、図１の調査地点番号に倣い、材木座四丁目579番８地点を「２地点」、本調査地点である材木座四丁目579番４地点を「３地点」と略称する。

～Ⅰ期

２地点の報告（山口・平井2013）では調査結果から２面下トレンチ内で確認した堆積層をⅠ期とした。単純に比べると両地点とも標高は11.50～60ｍと近いが、３地点で確認した４面が２地点の堆積層と同時期の可能性は低いと考えられる。本調査地点では４面下より遺物が出土しており、２地点では確認できなかった古い時期の遺物であることから、層位に違いはあるものの同時期ないしはそれ以前である可能性が考えられる。また、４面より下層からの出土遺物と中世基盤層の未検出から、Ⅰ期以前の痕跡があることは明瞭であり、ここでは現状を優先して４面をⅠ期に含め捉えておく。

年代は４面遺構外から手捏ねかわらけの出土が認められ、３面出土のかわらけと比較すると器厚が薄くなり、やや丸みをもつ形状がみられる。備前擂鉢も南北朝期の所産に相当すると思われ、年代比定をするのはやや困難であるが、概ね13世紀後半～14世紀前半頃の幅広い時期としたい。４面下遺構外からの遺物では、かわらけの器厚が厚く、形状は丸みを持つようになることから４面遺構外と比べてやや古くなっている様相や上面との関係から、13世紀後半と考えたい。

Ⅱ期

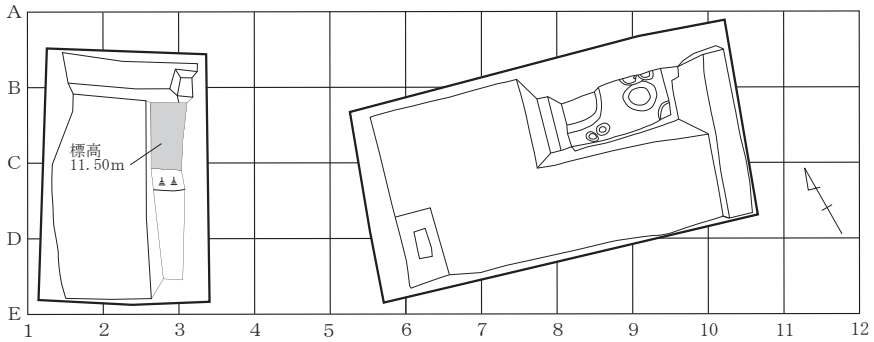
２地点では池状遺構が確認され、３地点ではその延長が期待されたが柱穴１基の確認となった。標高から池状遺構の底面部分と同一標高を測るが、３地点では２地点での泥岩版築層や池状遺構の下端ラインなども見えず、拡がりの状況は不明のままである。２面から３面までにかけての堆積層は図５－８～13層を確認しているが、８・11層を主体として調査区内に堆積している状況から、調査時の見解としては池状遺構の覆土を思わせるようであり、池状遺構の中の堆積ではないかと想定している。

年代については、３面遺構外から出土した遺物が、池状遺構出土遺物の様相と似ており、かわらけの器壁が直線的な形状になるため、15世紀代所産のかわらけに分類できると思われるが、やや内湾する形状のかわらけや永福寺Ⅲ期瓦などの出土が認められることから、概ね14世紀後半～15世紀前半頃と思われる。

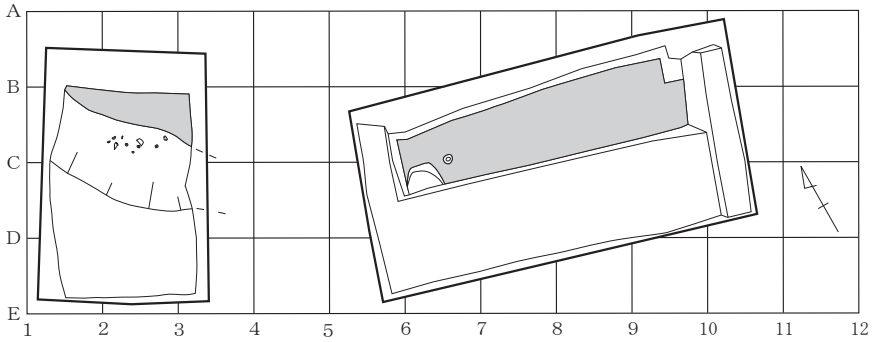
Ⅲ期

２地点の２ｂ・ａ面、３地点の２面が該当する。図18には２ａ面だけを図示した。遺構自体の深さは浅く、出土遺物も僅かであることから２・３地点共に同様の遺構面が拡がっている様相である。２地点での泥岩版築層の拡がりは､トレンチ１からも堆積を確認できなかった。土坑から中野編年９型式（15世紀前半）の常滑窯甕口縁部が出土しており、２地点との関係を踏まえ、15世紀前半～中頃とする時期にある。２面遺構外からは寛永通寶が出土しているので、当期以降は近世以降になるため。中世遺構面での確認はⅢ期までとなる。

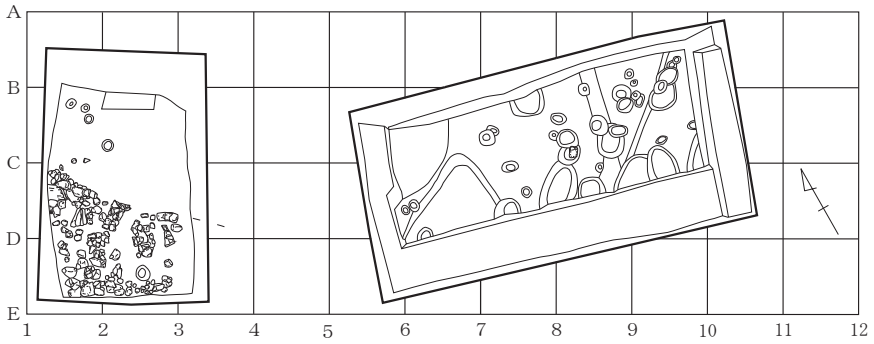
～Ⅰ期　２地点（－）／３地点（４面）



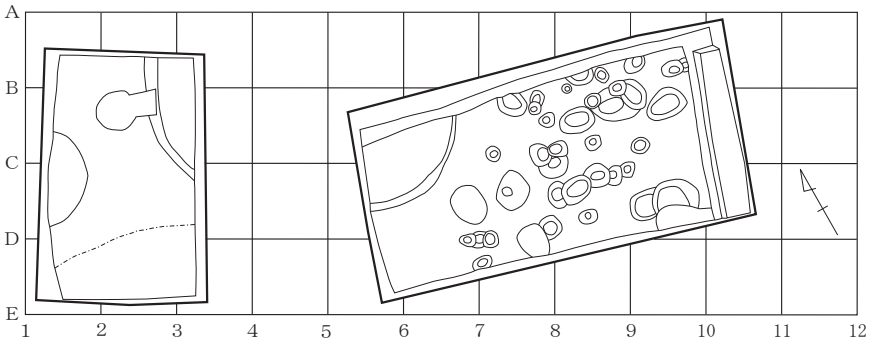
Ⅱ期　２地点（２c 面）／３地点（３面）



Ⅲ期　２地点（２a 面）／３地点（２面）



Ⅳ期　２地点（１面）／３地点（１面）



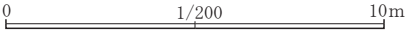


図18　遺構変遷図

Ⅳ期

両地点とも１面に相当し、２地点では出土遺物がないことから近世以降の遺構面の可能性を示した。前述したが、３地点での２面遺構外から寛永通寶が出土している。したがって、２面廃絶以降は近世期と考えられる。

先述した２面遺構外出土の金属製品についてだが、円形状を呈し、一部が平坦になっており、鋳造途中かと考えられる遺物である。層位的に近世以降の所産である可能性がある。鶴見大学文化財学科にて金属同定分析をしてもらった結果、鉛53.93％、スズ44.16％、鉄１.46％、銅0.44％の比率を持った金属であることが分かった。鉛とスズで合成された金属であるが、その用途は不明瞭のままである。

隣接した調査地点から、各遺構面の拡がりを確認できたが、その性格や時期に関しての追求は困難であった。Ⅰ期（13世紀後半）以前の様相は未確認のままに終わってしまったが、その時期は弁ヶ谷内に存在することは近隣の調査地点からも成果として挙がっていることは明確である。現時点での弁ヶ谷内では14～15世紀代の遺跡が主体になる様相は文献資料と符号するように思われ、その中で２・３地点の池状遺構の在り方も寺域内の要素が強いのではないかと考えられる。

表６　遺物観察表（１）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
9-1	2面土坑1	平瓦	小片	長［7.7］幅［6.9］厚2.5			a.凹面模骨痕 凸面縦位叩き目 離れ砂付着　b.白灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石 粗胎　c.凹面淡黄灰色 凸面灰黒色　e.良好
9-2	2面遺構外	常滑　甕	口縁部片	—	—	［2.9］	a.輪積み　b.明灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎　c.暗褐色　e.良好 硬質 f.中野編年9型式か
9-3	2面遺構外	用途不明 球状金属製品	完形？	長4.0 幅4.3 厚4.1			f.底部？平坦 円形状 鋳造途中か
9-4	2面遺構外	銅銭	完形	外径2.46 内径2.15 孔径0.6 厚0.11 ～ 0.13			f.寛永通寶 古寛永 万治二（1659）年以前鋳造
11-1	3面遺構外	かわらけ	完形	5.35	4.1	1.6	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎 c.橙色　e.良好
11-2	3面遺構外	かわらけ	完形	5.5	4.9	1.6	a.轆轤 外底糸切痕　b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎　c.黄橙色　e.良好
11-3	3面遺構外	かわらけ	完形	5.6	4.3	1.6	a.轆轤 外底糸切痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 やや粗胎　c.黄橙色　e.良好
11-4	3面遺構外	かわらけ	完形	6.0	4.3	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色　e.良好
11-5	3面遺構外	かわらけ	完形	6.15	4.7	1.5	a.轆轤 外底糸切痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎　c.橙色　e.良好
11-6	3面遺構外	かわらけ	口縁部 一部欠損	6.7	4.2	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 やや粗胎　c.淡黄橙色 e.良好
11-7	3面遺構外	かわらけ	口縁～胴部 一部欠損	6.9	4.7	2.3	a.轆轤 外底糸切痕　b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎　c.淡橙色　e.良好
11-8	3面遺構外	かわらけ	完形	9.2	6.7	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.淡橙色　e.良好
11-9	3面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(9.6)	(7.0)	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎　c.淡橙色 e.良好
11-10	3面遺構外	かわらけ	口縁～胴部1/3 底部完形	(9.6)	(6.4)	2.3	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.黄橙色　e.良好
11-11	3面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(10.0)	(5.6)	3.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎　c.灰黄色 e.やや不良
11-12	3面遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(11.0)	(6.6)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.胎芯黒色 砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色　e.やや不良
11-13	3面遺構外	瀬戸　碗	口縁部小片	—	—	［3.0］	b.灰白色 黒色粒 良胎　d.灰緑色半透明 内外面施釉　e.良好　f.口縁部やや外傾している 端反碗か
11-14	3面遺構外	常滑　甕	底部片	—	—	［5.7］	a.輪積み 外底砂目痕　b.橙黄色 砂粒 白色粒・黒色粒多い 石英粒 小石 粗胎　c.暗褐色　e.良好
11-15	3面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	［4.2］	a.輪積み　b.暗橙色 砂粒 白色粒 黒色粒 やや粗胎　c.暗赤褐色　e.良好
11-16	3面遺構外	常滑 転用磨耗陶片	完形	長4.5 幅2.8 ～ 3.5 厚1.0			b.灰褐色 砂粒 白色粒多い 小石 粗胎　c.灰色　e.良好　f.全面磨耗 片口鉢Ⅰ類を転用か
11-17	3面遺構外	常滑 転用磨耗陶片	完形	長5.9 幅5.5 厚1.4			b.灰～暗灰色 白色粒多い 小石 粗胎　c.褐色　e.良好　f.側端部磨耗
11-18	3面遺構外	備前　擂鉢	胴部小片	—	—	［4.3］	a.内面10条の櫛描き状擂り目　b.灰色 白色粒多い 黒色粒 粗胎　c.暗灰色 e.良好　f.内面磨滅強い
11-19	3面遺構外	土錘	1/3欠損	長［3.1］幅2.8 厚2.8			b.灰色 砂粒 雲母 気泡多い やや良胎　c.淡橙～灰色　e.良好
11-20	3面遺構外	砥石（仕上砥）	下部欠損	長［2.3］幅3.5 厚1.2			a.端面整形加工による切断痕　c.淡白色　f.鳴滝・奥土産 表面使用による擦痕、磨滅している 裏面使用により荒い
11-21	3面遺構外	丸瓦	側端部片	長［10.0］幅［7.4］厚1.8 ～ 2.5			a.凸面縄目叩きを縦位方向による指ナデ消し 凹面模骨痕 端部ヘラ削り b.白灰色 黒色粒多い 小石 粗胎　c.灰黒色　e.良好　f.永福寺Ⅲ期
11-22	3面遺構外	丸瓦	側端部片	長［8.1］幅［8.2］厚1.7			a.凸面縦位の叩き目 凹面模骨痕、縦位方向による指ナデ消し 端部ヘラ削り　b.淡灰黄色 砂粒 白色粒 黒色粒 橙色粒 小石 粗胎　c.灰黒色　e.良好
11-23	3面遺構外	平瓦	側端部片	長［6.3］幅［7.5］厚1.5			a.凹面離れ砂付着 凸面斜格子叩き目 端部ヘラ削り　b.明灰色 白色粒多い 小石 粗胎 粘質　c.凹面灰褐色 凸面暗灰色　e.良好 硬質
11-24	3面遺構外	平瓦	広端部側片	長［9.6］幅［6.4］厚2.0			a.凹面布目痕 下部ヘラ削り 凸面横位のナデ 僅かに離れ砂付着　b.灰色 白色粒 気泡多い やや粗胎　c.灰～灰黒色　e.良好
11-25	3面遺構外	平瓦	側端部片	長［5.5］幅［5.7］厚2.0 ～ 2.2			a.凹面模骨痕 凸面市松文様の叩き目 端部ヘラ削り　b.白灰色 黒色粒多い 小石 粗胎　c.明灰色　e.やや不良
11-26	3面遺構外	平瓦	小片	長［6.6］幅［4.8］厚1.5 ～ 1.9			a.凹面糸切？痕 凸面市松文様の叩き目　b.白灰色 黒色粒多い 小石 やや粗胎　c.明灰色　e.良好
11-27	3面遺構外	漆器　椀	胴部1/3 ～底部4/5	高台径7.6		［8.8］	a.削り出し輪高台 内面朱漆塗布 高台畳付木地露出 高台内黒漆が残る 外面黒漆地に朱漆で紋章風の鶴を手描き
11-28	3面遺構外	木製　箸	末端部欠損	長［19.2］幅0.8 厚0.4			a.扁平な多角形状に削り加工
11-29	3面遺構外	木製　箸	完形	長20.3 幅0.4 ～ 0.7 厚0.6			a.扁平な多角形状に削り加工
14-1	4面土坑1	褐釉　壺	胴部小片	—	—	［2.9］	b.灰色 白色粒 黒色粒 やや粗胎 堅緻　d.褐色不透明 外面施釉 内面露胎 e.良好
14-2	4面P2	銅銭	完形	外径2.51 内径2.21 孔径0.68 厚0.14			f.開元通寶 唐621年 篆書
15-1	4面遺構外	かわらけ	完形	7.3	4.5	2.4	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎　c.淡黄橙色　e.良好
15-2	4面遺構外	かわらけ	完形	7.9	4.9	2.0	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎　c.橙色　e.良好
15-3	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/2欠損	9.4	6.3	2.35	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.淡黄橙色　e.良好
15-4	4面遺構外	かわらけ	口縁約1/2 ～底部完形	(10.2)	5.4	2.8	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎　c.淡橙色　e.良好
15-5	4面遺構外	かわらけ	口縁部 一部欠損	12.9	7.6	3.2	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c.橙色　e.良好

表７　遺物観察表（２）

（　）＝復元値　　［　］＝遺存値

挿図番号	出土面・遺構	種　別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a:成形・整形 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
15-6	4面遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/5	(14.4)	(6.6～12.6)	3.2	a.手捏ね 外底指頭痕　b.砂粒 泥岩粒 やや良胎 粘質　c.淡黄橙色　e.良好
15-7	4面遺構外	青磁　蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	［1.5］	b.白灰色 精良堅緻　d.灰緑色不透明　f.外面蓮弁文
15-8	4面遺構外	瀬戸　折縁深皿	口縁～胴部1/5	—	—	［4.3］	b.黄白色 砂粒 良胎　d.暗黄色透明 内外面下部露胎　e.良好
15-9	4面遺構外	常滑　甕	肩部片	—	—	［3.0］	b.灰褐色 砂粒 白色粒 石英粒 小石 粗胎　c.暗褐色　e.良好　f.外面格子状の押印
15-10	4面遺構外	常滑　甕	肩部片	—	—	［9.7］	b.暗灰色 白色粒 長石粒 小石 粗胎　c.暗褐色　e.良好　f.外面幾何学文の押印
15-11	4面遺構外	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［3.0］	b.明灰色 白色粒 黒色粒 小石 粗胎 粘質　c.明灰色　e.良好　f.内面口縁下弱い磨滅
15-12	4面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	［5.6］	b.暗灰～茶褐色 白色粒 長石粒 小石 粗胎　c.赤褐色　e.良好　f.内面口縁下弱い磨滅
15-13	4面遺構外	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片	—	—	［7.9］	b.茶褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 粗胎　c.暗褐色　e.良好　f.内面口縁下弱い磨滅
15-14	4面遺構外	備前　擂鉢	口縁部片	—	—	［8.2］	a.内面10条の櫛描き状擂り目　b.淡赤灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石 やや粗胎　c.暗灰褐色　e.良好 硬質　f.内面非常に弱い磨滅
15-15	4面遺構外	瓦質　火鉢	口縁部小片	—	—	［4.8］	a.外面口縁下菊花文スタンプの痕跡あり　b.明灰色 白色粒 黒色粒 やや粗胎　c.灰黒色　e.良好　f.内面下部焼けて器壁やや粗い 河野分類ⅣA類
15-16	4面遺構外	滑石鍋転用品	鍋底部	長［10.0］幅［6.3～7.2］厚1.5～1.9			c.銀灰～灰黒色　f.温石に加工途中か
15-17	4面遺構外	平瓦	狭端部片	長［5.2］幅［8.2］厚1.6			a.凹面縦位のナデ 凸面格子状の叩き目？ 端部ヘラ削り　b.明灰色 雲母 白色粒 黒色粒 小石 粗胎　c.灰黒色 e.やや不良
15-18	4面遺構外	平瓦	広端部片	長［7.1］幅［6.4］厚2.2			a.凹面縦位のナデ 凸面不明瞭 端部ヘラ削り　b.明白色 白色粒 黒色粒 小石 粗胎　c.灰黒色　e.やや不良
15-19	4面遺構外	平瓦	左側端部片	長［6.2］幅［5.9］厚1.6～2.2			a.凹面縦位のナデ 凸面離れ砂付着 端部ヘラ削り　b.明灰色 白色粒 黒色粒 粗胎　c.灰黒色　e.やや不良
15-20	4面遺構外	平瓦	側端部片	長［5.1］幅［5.2］厚1.2～1.8			a.凹面糸切痕 端部側ヘラ削り 凸面縦位の叩き目 端部ヘラ削り　b.白灰色 黒色粒 小石 粗胎　c.明灰黒色　e.良好
16-1	4面遺構外	木製　箸	完形	長18.2 幅0.4～0.7 厚0.4			a.四角形状に削り加工
16-2	4面遺構外	木製　箸	完形	長19.7 幅0.4～0.7 厚0.7			a.多角形に削り加工
16-3	4面遺構外	木製　箸	完形	長20.5 幅0.2～0.6 厚0.4			a.四角形状に削り加工 両端角張る
16-4	4面遺構外	木製　箸	完形	長20.6 幅0.4～0.7 厚0.55			a.多角形に削り加工
16-5	4面遺構外	木製　箸	完形	長20.7 幅0.3～0.7 厚0.6			a.多角形に削り加工
16-6	4面遺構外	木製　箸	完形	長20.8 幅0.3～0.6 厚0.6			a.多角形に削り加工 先端やや尖り気味
16-7	4面遺構外	木製　箸	完形	長20.8 幅0.2～0.6 厚0.5			a.多角形に削り加工 先端鋭く尖る
16-8	4面遺構外	木製　箸	両端部欠損	長［21.0］幅0.3～0.7 厚0.5			a.多角形に削り加工
16-9	4面遺構外	木製　箸	完形	長23.5 幅0.4～0.75 厚0.7			a.多角形に削り加工
16-10	4面遺構外	木製　差歯下駄	台部側縁部所々欠損	長23.7 幅9.0 厚0.5～2.2			a.断面舟型を呈し、非常に丁寧な作り 前緒は前端部に、後緒は内側に向かい穿孔される 裏面前後歯用の差し込み溝と四角形の穿孔あり　b.板目材　f.前端部指頭痕 横緒２ヶ所と後歯１ヶ所に楔残る
16-11	4面遺構外	用途不明木製品	完形？	長17.2 幅0.8～1.7 厚0.7～0.85　孔径0.2			a.四角形状に全体を削り加工 上部穿孔２ヶ所あり 下部やや細くして棒状に削り加工 遊戯具か
16-12	4面遺構外	木製 トンボの羽	端部所々欠損	長13.4 幅1.6～2.2 厚0.2～0.5　孔径0.5			a.全体薄く平坦に削り加工 中央に穿孔 端部四角に面取りし中央に切れ込み加工
17-1	4面下遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(7.1)	(5.2)	1.65	a.轆轤 外底糸切痕　b.砂粒 雲母 泥岩粒 やや粗胎　c.淡黄橙色　e.良好
17-2	4面下遺構外	かわらけ	口縁部一部欠損	7.8	6.3	1.9	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 泥岩粒 粗胎　c.黄灰色　e.やや不良
17-3	4面下遺構外	かわらけ	口縁～底部1/4	(8.2)	(7.0)	1.5	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 赤色粒 泥岩粒 やや粗胎　c.淡黄灰色　e.やや不良
17-4	4面下遺構外	かわらけ	口縁部1/4～底部1/3	(12.6)	(10.0)	3.1	a.轆轤 外底糸切・板状圧痕　b.砂粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c.橙色　e.良好　f.内外面煤付着、燈明皿か
17-5	4面下遺構外	吉備系土器	口縁～胴部片	—	—	［3.2］	a.外面下部指頭痕　b.砂粒 小石粒 やや粗胎 粘質　c.淡黄白色　e.良好
17-6	4面下遺構外	吉備系土器	底部完形	—	5.1	［1.3］	a.貼付高台　b.灰色 砂粒 やや良胎　c.淡白色　e.良好　f.内底重ね焼き痕あり
17-7	4面下遺構外	青磁　蓮弁文碗	口縁部小片	—	—	［2.1］	b.灰色 黒色粒 精良堅緻　d.暗灰緑色透明 内外面薄い施釉　f.外面蓮弁文
17-8	4面下遺構外	硯	表裏面欠損	長11.2 幅7.1～7.9 厚0.7～1.5			a.側・後端面やや内側に切断 全体を黒色処理　b.貢岩 高島石　c.灰黒色　f.生産は京都、彫手は赤間の職人（汐見一夫氏の御教示による）
17-9	4面下遺構外	鉄製　釘	完形	長8.0 幅0.2～0.55 厚0.4			a.四角形状に鍛造　f.頭部叩かれ折れ曲がる
17-10	4面下遺構外	鉄製　釘	両端部欠損	長［5.7］幅0.5～0.7 厚0.35			a.四角形状に鍛造
17-11	4面下遺構外	漆器　椀	口縁部1/4～底部1/2	(13.8)	(6.8)	4.0	a.削り出し輪高台 高台部欠損 内外面黒漆塗布 内底面に朱漆で亀甲の中に菊？を組み合わせた文様をスタンプ　f.スタンプ箇所、中心からややズレる
17-12	4面下遺構外	漆櫛	約1/2	長［3.7］幅［4.0］厚0.25～0.7			a.全体に黒漆塗布

表８　層位別出土遺物一覧表

種別	出土層位	１面遺構外	２面遺構	２面遺構外	３面遺構	３面遺構外	４面遺構	４面遺構外	５面遺構外	合計
かわらけ	糸切り	小1	大5　小22	大1　小11		大17　中38 小53	小6	大8　中58(燈2)　小27	大26　中31　小69	373
	白かわらけ					1			3	4
舶載陶磁器	青磁					碗1		碗1	碗1	3
	褐釉		壺1	壺1			壺1			3
国産陶磁器	瀬戸		卸皿１不明1	皿1　花瓶1		碗1　皿2 折縁深皿4 花瓶1		碗1 折縁深皿1		14
	常滑		甕9	甕12　壺1	甕1	甕49　壺1 擦2	甕3	甕46　壺9	甕1　壺1	135
	常滑　片口鉢		Ⅰ類1	Ⅱ類2		Ⅱ類12	Ⅰ類1	Ⅰ類1　Ⅱ類3		20
	備前					擂鉢1		擂鉢1		2
土製品	瓦		平1			平14　丸1		平6		22
	火鉢	瓦質1	瓦質2	瓦質3		瓦質5		瓦質4		15
	その他					土錐1			吉備2　不明1	4
石製品	硯							赤間？1	鳴滝1	2
	砥石			仕1		鳴滝1				2
	滑石製品							鍋転用1		1
金属製品	銭			1			1			2
	その他			球状1						1
木製品	漆器					椀1			椀1　皿1　櫛1	4
	加工木製品					箸5　曲物1		箸35　下駄1 折敷3　草履1 トンボ1　円板1 不明1	箸4　円板1	54
自然遺物	骨					獣13		獣5		18
	貝					ハマグリ1 バイ8 不明3	アサリ2 バテイラ1 ハマグリ1	アワビ1ダンベイキサゴ1 ハマグリ6バイ43 バテイラ1ツメタガイ2 アカニシ4サザエ21	バテイラ1 ハマグリ2 バイ1	99
	種子							松1	1	2
合計		2	43	36	1	237	16	296	149	780

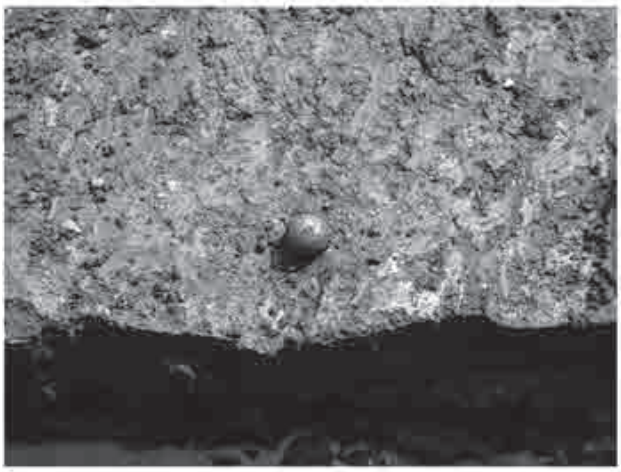
図版１

▲１．１面全景（東から）

▲２．１面全景（西から）

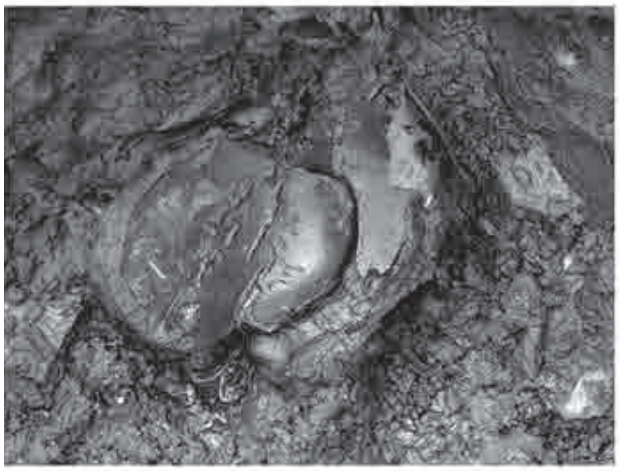
▲３．２面全景（東から）

▲４．２面全景（西から）



▲１．２面遺構外出土球状金属製品

▲３．３面遺構外出土差歯下駄



◀２．３面遺構外出土漆器椀

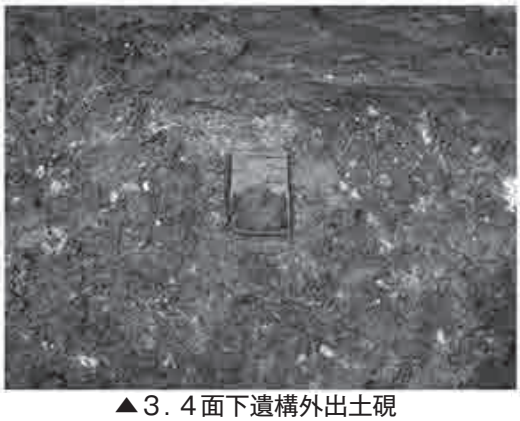
▲４．３面全景（東から）

▲５．３面全景（西から）

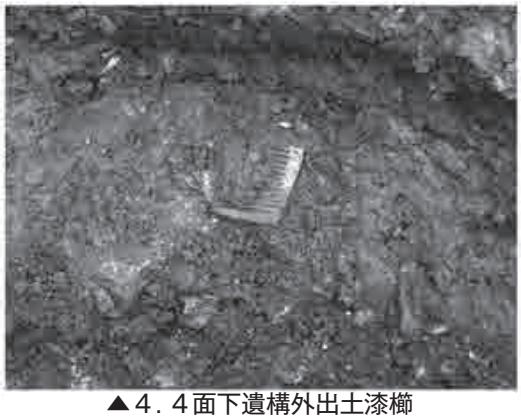
図版３

▲１．４面全景（東から）

▼２．４面全景（北から）



▲３．４面下遺構外出土硯



▲４．４面下遺構外出土漆櫛

▲５．４面下遺構外出土漆器椀

◀１．調査区トレンチ１（南から）

▲２．トレンチ１北壁土層堆積状況（南東から）

▲３．調査区東壁土層堆積状況（西から）

▲４．崩落状況（南東から）

図版５

9－1

▲２面土坑１

9－2

▼３面遺構外

9－3

9－4

▲２面遺構外

11－1

11－2

11－3

11－4

11－5

11－6

11－7

11－8

11－9

11－10

11－11

11－12

11－13

11－14

11－21

11－15

11－16

11－19

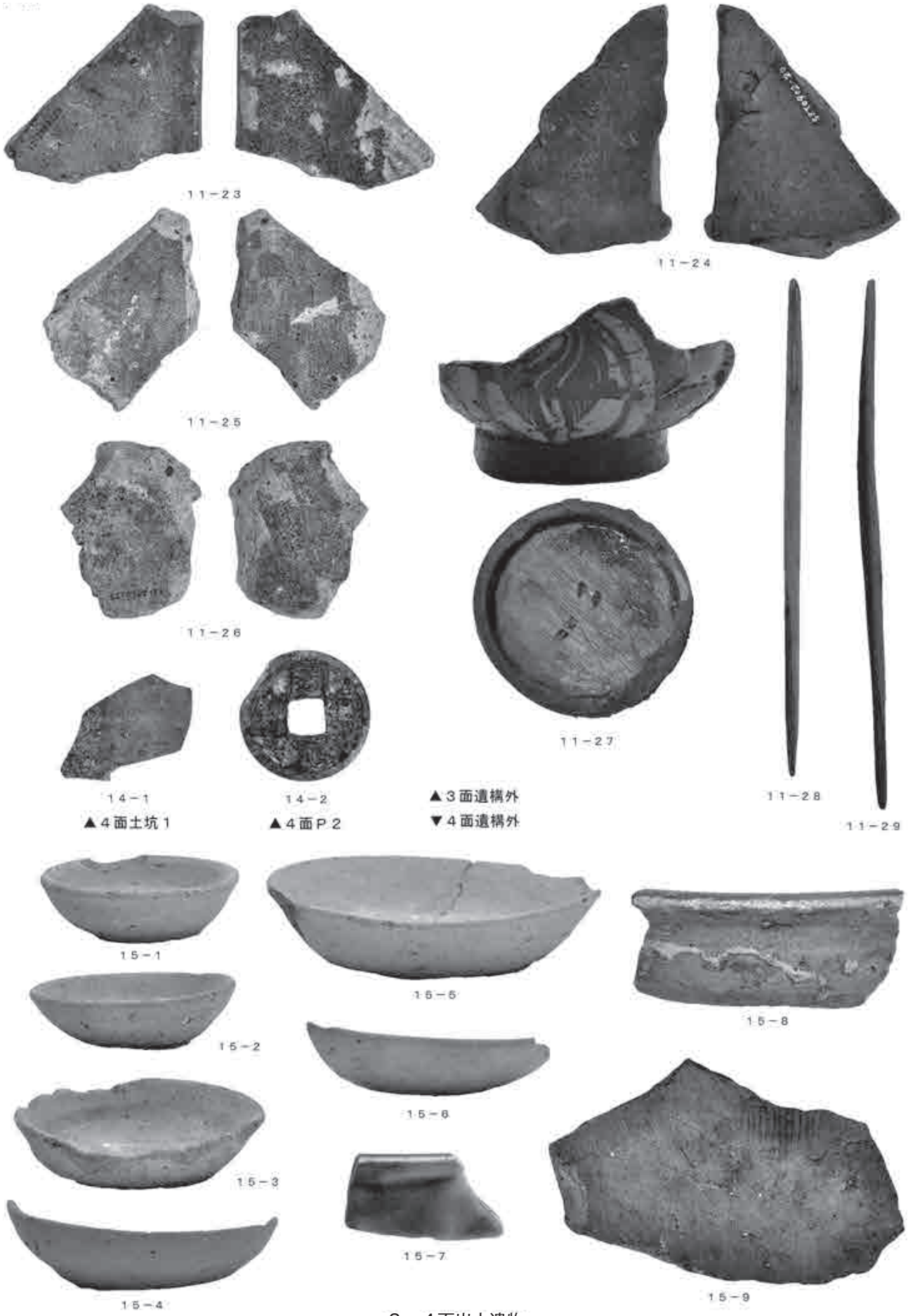
11－17

11－18

11－20

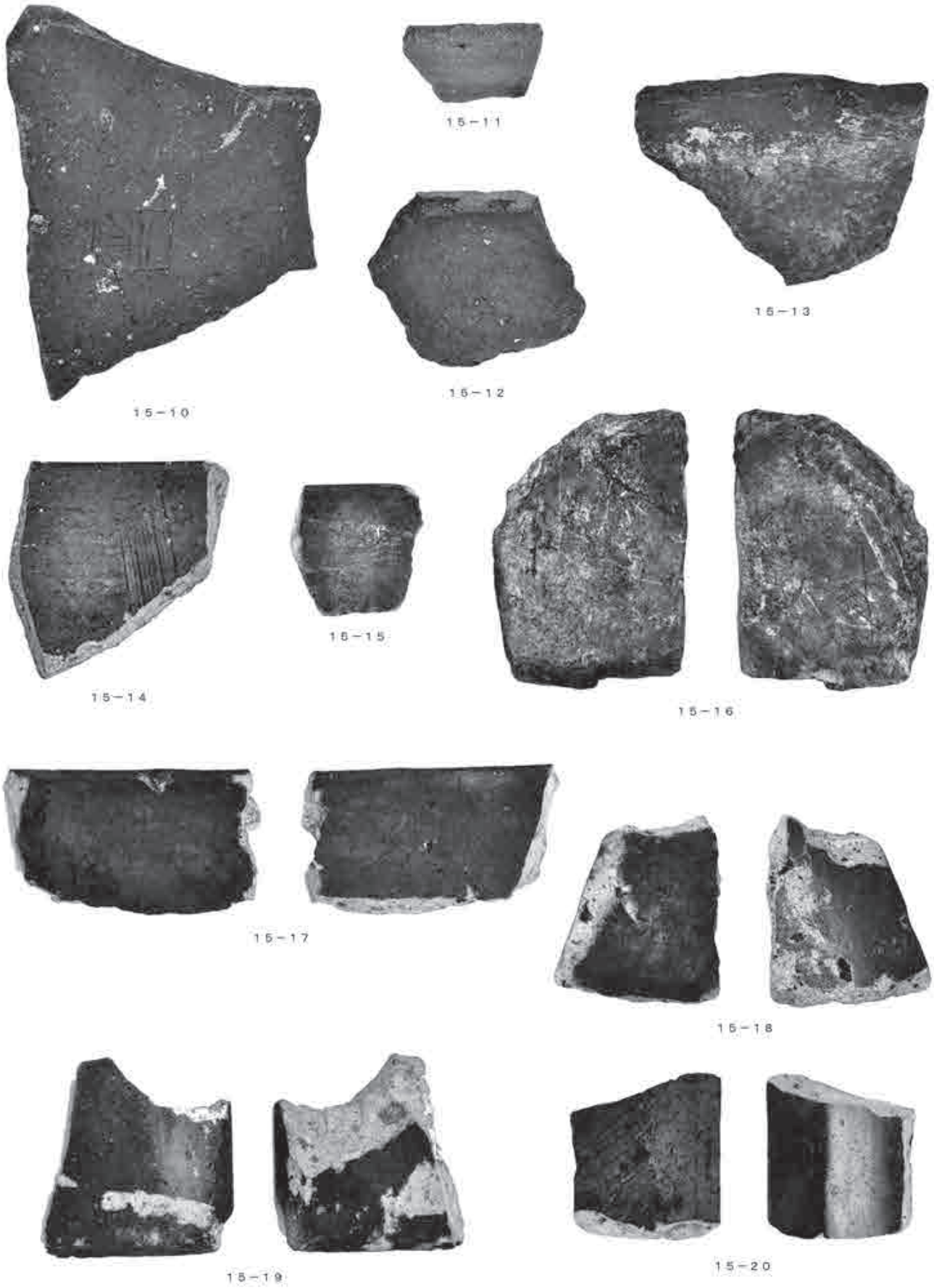
11－22

２・３面出土遺物

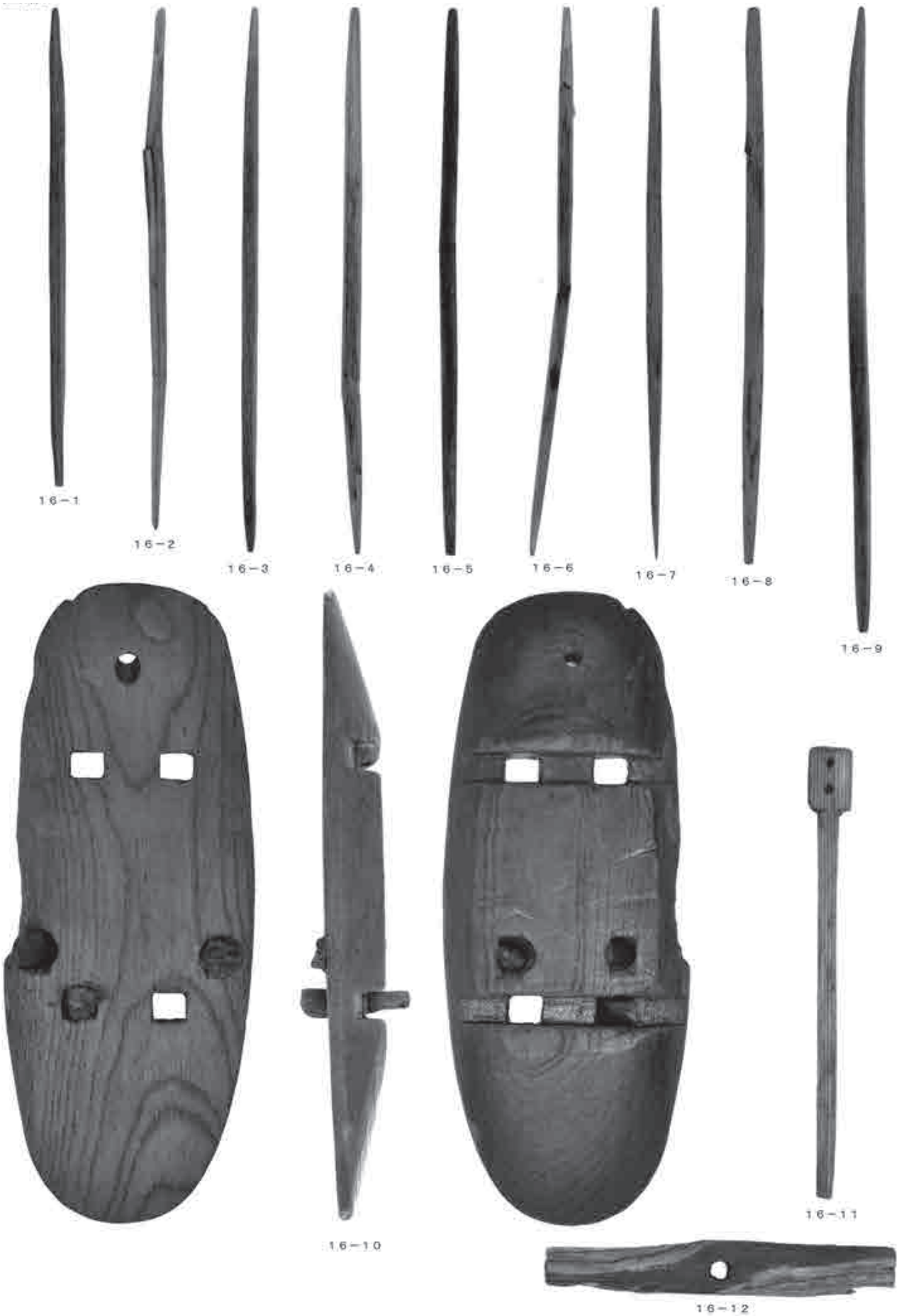

11－23
11－24
11－25
11－26
11－27
11－28
11－29
14－1
14－2
▲４面土坑１
▲４面Ｐ２
▲３面遺構外
▼４面遺構外
15－1
15－2
15－3
15－4
15－5
15－6
15－7
15－8
15－9

３・４面出土遺物

図版７

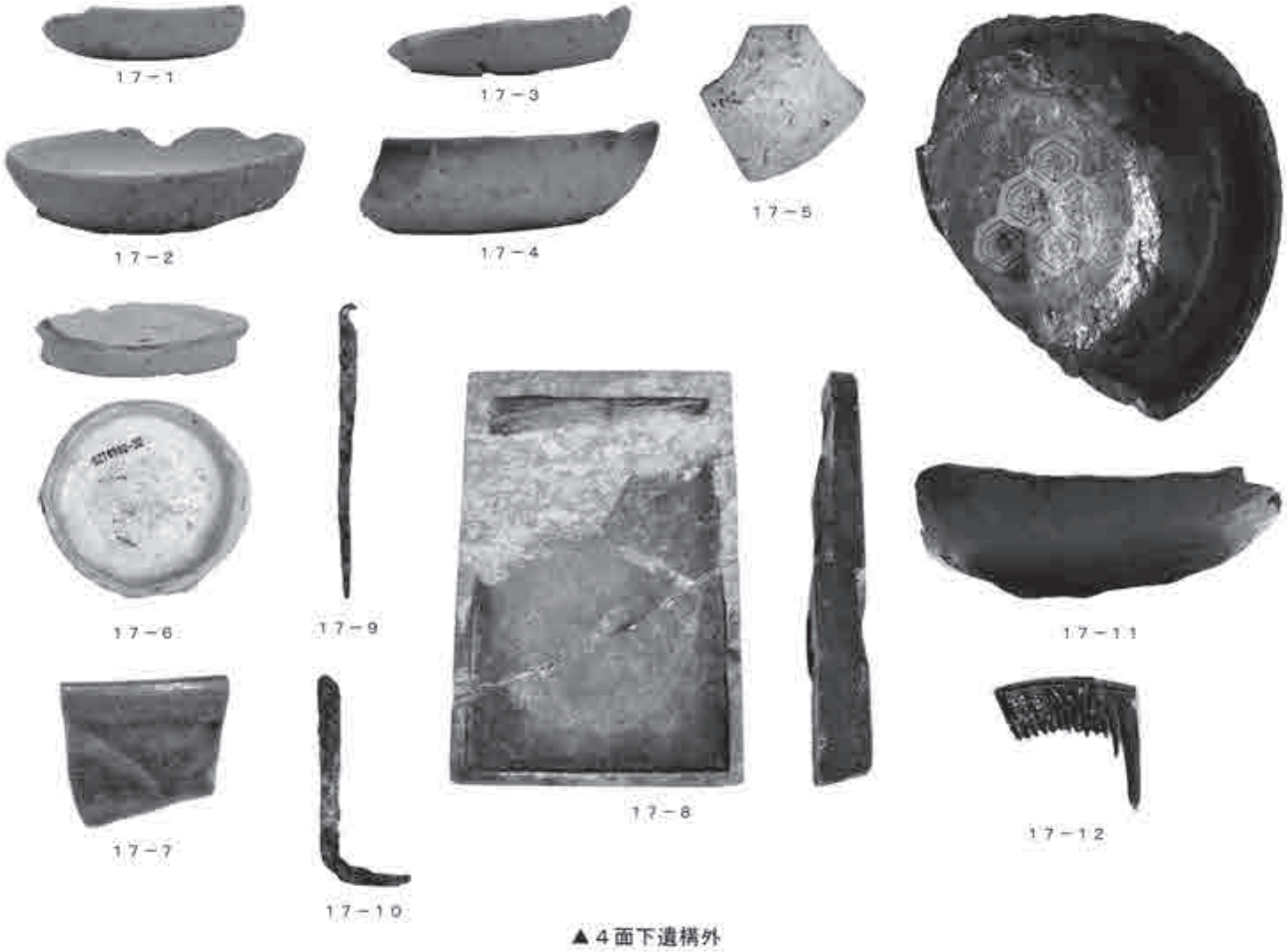


４面遺構外出土遺物（１）



４面遺構外出土遺物（２）

図版９



▲４面下遺構外

▲獣骨

▲貝

▲魚骨

４面下出土遺物・自然遺物